

源氏物語

けう風ゆるく吹てとうじつおをそかに輝やき、春雨なゝめにそゝいでせいゑん花を粧ひす。今此時かや  
 四つの夷八つのすみ春も閑に立浪の、後白河の法皇こそ、ヲロシ別て目出度き、賢王なれ、あまつ御國を  
 二條の院に譲りあたへおはし、玉體安く仙洞に通れおりさせ給ひながら、萬機を後見まつりごち聞  
 えさせ給へば、道ある御代と百敷や、袂豊に初きしき治まる、國の兆なる、既に平治二年正月七日、武  
 臣安藝守平の清盛院參し、先新春の御慶を奏し、別て當年は目出たき事のみ候べき、御悅のへうじ御座  
 ひ其故は、源氏の大將左馬頭義朝藤原の信賴に與し、天下を傾けんとせし所に、舊冬清盛待賢門の戰に  
 打勝、義朝は野間の内海長田を頼み罷下り候所に、長田譜代の下人なれども勅命を重んじ當月三日に遂  
 に義朝並に婿の鎌田を討取ひ段神妙に存じ長田の庄司忠致、同じく太郎忠澄召連れ參上仕る、義朝が首  
 は穢を憚り、源氏重代の太刀物具白旗を切取て、この清盛が御年玉國安全に治まるも、一ちやうの弓の  
 いきはひたり、東南西北の敵を易く平げん法皇大きに御感あり、清盛を中納言長田は六位のじゆしやう  
 に補せられ、重ねての院宣には、義朝が事は先祖滿仲より累代忠勤の功厚しと雖も此度思はずも朝敵信  
 頼に與し、不覺の最期不感なり、内大臣正二位を贈官し、朱雀の寺に標をたて追善有べしとの御氣色に  
 て、猶も長田を御階近く召れ、汝朕が命を重んずと雖も、正しく主人と婿を討事天爵輕きにあらず、其  
 罪を償はんには義朝が思ひ者、常盤の前と云ふ女幼き子供有りと聞く尋ね出し守育てせめての恩を報じ  
 なば、妻子を勞るこゝろさしくさの陰なる義朝も、あだを忘れて自ら汝が冥加となるべきぞと、漏る方

なき院宣の恵は賤が伏屋まで。實に明王の盛徳に。譬へて云はば此春の民こそ。御代の三重心なれ。つま木には。取残されてありながら憂はかはらで常盤木の。浮世の力落葉ふる。下の醍醐にしろよしして。忘れかたみの泪の種。義朝公の俤は三人の子に慰籍み。今若は九つ乙若は六才扱牛若は三才にて。まだ乳離れぬ懐に包む泪の世も狭く。宿もむぐらに埋れり。いたはしや今若父の別れの泪の隙。竹馬取て打乗り。歎き給ふな母上様。おつつけ某平家追討の院宣を蒙り。まづ此如く馬に乗り大軍を引卒し。父の敵清盛を討取は今の事。源氏の大將今若が武者振御覽ひへと。庭の面を二三遍乗廻して立給へば。乙若小弓に小矢をはげ赤きぎぬを細枝に掛け。彼こそ平家餘さじとよつ引てひやうを放ち。嬉しや平家を射留しと勇み給へば牛若は。母の膝より這下りて彼赤きぎぬを。すんく引さき喰さき兄弟三人打悦び。平家の赤旗討取たり。勝鬨揚よるい。おうと手を拍いてぞ笑はる。此人々の二葉よりかう成こそ道理なれ。成人の後六十余州を靡かせ源氏の光を輝かせし。右大將頼朝滿の冠者範朝。九郎判官義経とは此兄弟のおひさきなり。常盤夢ともわきまへすなふ恐しや壁に耳。左手も右手も平家方源氏の一家は皆亡び。あるに甲斐なき世の中に若も平家へ漏聞え。如何なる憂さか重ぬべき。今日より左様の悪戯せばコレ。つめくするぞとたいじよだて牛若を擁抱さ。今若も乙若も今日は何とて手習せぬ。未だ手本はあげざるかはやく寺へとの給へば。あつと答へてしほくと編笠被さ手を取かはし。立出で給ふ後姿常盤御前は見送りて。可憐の有様やかうの殿の在まして。世が世ならば供人よ馬よ興よと云ふべきに。一僕をだに伴させぬ彼が源氏の惣領の。成る果かと計りにて伏沈み。てぞ歎かる。然る所へ長田親子大勢引ぐしとつと入り。夫こそ常盤余すなど牛若諸共引立る。常盤御前は聲を上げ長田とは己れが事か主を殺し婿を討つ非がく非道の罪人よ。汝は鬼畜か木石か妾は命惜からず。子供を助け得させよや

一つは其身の祈禱ぞと前後不覺に泣給ふ。長田打笑ひ。尤も帝より妻子は宥免との仰なれども。清盛公より根葉を枯せよとの御意を蒙る。サア今若乙若を出せ。さなくば命を取ぞといふ。ヲ、己れが心に引當てさもしくも云ふたりな。みづからも牛若も殺さば殺せ。今若や乙若が行衛はいはじと叫ばれるれを聞入れもせず搦め行く。神や佛も無き世かとあさまし。くこそ。三重見込にけれ。是は扱置。爰に比企の藤九郎盛長とて源氏重代の勇士なりしが。去ぬる保元の軍に父を討せ。幼少より流浪して北國に漂へしが。力強く背高く今年既に十九歳。源氏亡びぬと聞よりも夜を日に次で都に上り。七條朱雀義朝の御墓所に参らる。向ふを見れば我年ばいなる若者の。直垂袴に太刀佩て編笠傾け盛長を。じろりくと熟視る。盛長不思議とよく見れば。古への寺友達義朝の膝元去す。澁谷の金王丸幼顔疑ひなし。彼奴は義朝の御最期まで御供と聞けるが。長田を討ずして逃來る卑怯者。詞をかくるも無益なりと見ぬ顔して御墓に花奉り水手向。生たる人に云ふごとく口惜き御有様や。人らしき侍が切て一人御供せば。斯くやみくとは成給はじ。金王丸と云ふ粕丁稚憶病者の腰抜の人でなしと知り給はず頼みに召連れ給ふ故。不覺の御最期是非もなしと堪忍ならぬ當言し。尻目に睨む眼より涙を流し申ける。金王丸むつとせしがさあらぬ體にて香花を捧げ。卒都婆に向つて口惜の御有様や。某が諫を御承引なく長田に心を許し給ひ。果敢なく討れ給ひしよな。當座に腹切て冥途の御供と存せしかども。いやく死は易し存らへて今一度源氏の御代と翻へし。御耻辱をすくかんと斯の體にはひへども。若君達は御幼少御家人ごもは散々になり。有る甲斐もなき藤九郎盛長と云ふ素丁稚浪人して魂くだり。口先の廣言ばかりにて憶病者の大腰抜。何の役にも立申さず。源氏の御運の拙さよと。同じく尻目に睨付く詞をあらし申けり。盛長また御墓に向ひ。石塔に耳なく卒都婆もの言ねばとて。拔ぬ太刀の高名腕なしのふりすんばい。草の

蔭にてさこそ可笑しく覺されん。死を易しと申せども命を捨る程ならば。長田奴に羽はあらじ討にうた  
 れぬ事や有る。さりながら武士と思へば恨も有る。牛馬に劣りたる人外と思し召せ。本意は某遂げ申さ  
 ん未來の忘執晴れ給へ。ア、南無阿彌陀佛と云ひければ金王又御墓に向ひ。玉子の中にも巢もりあるは  
 尤かなく。親兄弟の兵に似たる方なきそんはづれ。夫は心剛ならば。去ぬる軍に今の口ほどな  
 ぞ高名はせざりしぞ。軍と言は逃足早く。いさかひ過ての棒ちざり木後の廣言腹の皮。逃吠の犬侍憤病  
 や々ぞぞ笑ひける。盛長今は堪へかね犬侍とは誰が事ぞ。金王聞も敢ず。又最前より其方が人外とは誰  
 が事ぞ。ヲ、澁谷の金王が事よ。ヲ、犬侍とは御分盛長が事よ。盛長腹に据かね。侍を捉へて犬侍とは  
 如何に。今一言云ふて見よと太刀に手をかけ言ければヤア侍とは人がまし。無益の太刀を抜んより犬に  
 似合た尾を振れと云ふ。ヤイサおのれ。侍ならばなご主の敵長田は討ぬ。五穀つぶしの娑婆婆。末を  
 大事に思はずはおのれと爰で死ぬべきに命が二つほしいなヲ、我も源氏の御末を貢ぐ者の有るならば。  
 御分と爰で死ぬべきに。命がも一つ欲しいな。イヤせがれめ美事我と死ぬべきか。ヲ、死にかねふかヤア  
 討かねふか。誰かうぬめを。討たいな切たいな。無念さよ口惜やと。兩方りきむ居合腰太刀の柄も掛け  
 よと。握りひしぎ身を慄はし。互の心探りあひ兩眼に血筋をはり。齒を鳴して睨み合ふ擬勢の程ぞ頼も  
 しき。盛長かちらくと笑ひ。ア、言甲斐なき狼狽者ぞ死して益なし。名將の御墓を腰抜共に回向させ。  
 勿體なしと云ふ儘に一丈有餘の高卒都婆。押取て出でければ金王續いて飛掛り。君の首は渡さじと確と  
 取て引とむる。日本中古兵揃へに選ばれて大力と名にふれし。藤九郎盛長博多王の怒をなせば。源平  
 の其中に強力の聞えある。澁谷の金王昌俊獅子王の力を出しゑい。と捨あへば腕骨膝骨腰の骨。  
 つがいくは唐紅血はしつて節あがり。額の筋は脛へ下り脛の筋は頭へのばり。五百五十の力瘤九重の

藤葛。松をからんで苦むせる巖に生し如くにて。二人踏だる足の下土五六寸くばみ入り左手もちり右手  
 違ひうんと云ふて捨ければ。四方八寸の角卒都婆中よりふつと捨切て。こをざりしてばつと退き。  
 方院んで立たるは人間業とは見えざりけり。しばし詞もなかりしが一度に涙をはらくと流し。ヲ、母  
 母しし金王丸。心底現れたり嬉しく。疑ひし口惜さよ。許してくれよといひければ。そちが心も見  
 届けたり頼母し。最前の難言も忠節のあまり。免せ。此上は心を合せ平家を亡ぼし。頭の殿の  
 鬱憤を休め申さんが。思へば拙き源氏の御運口惜くは思はぬか。無念には思はずや口惜や無念やと。卒  
 都婆投捨てつと寄り袖とに紐り付。怒れる顔容引かへて悲嘆の。涙は堰あへぬ。まことの姿ぞ真  
 れなる。然る所に六波羅の方より雜式警固あたりを拂ひ。囚人なりと罵り来る人々木蔭に立隠れ。能く  
 見ればこは如何に常盤御前に牛若抱かせ。敷草に引据へ武士四方を取廻し。長田の太郎は太刀取にて湖  
 尾の七郎檢使と見えて。コレ。常盤最早期は極つたり。さりながら清盛公の御心に従ひ給は。三  
 人の若を助け御身の望も叶ふべし。一生の思案所いかに。といひければ。常盤涙の隙よりも。ヤア自  
 らは女なれども義朝の妻なるぞ。狼狽とばしいはずとも。早く首打て彼長田めに喰付て。本望を達せ  
 んと。あてに氣高きまなじりにてはつたと睨みはら。と涙は。玉を貫けり。今は是非なし首打て長  
 田承るも慄ひ聲。膝わなくと後に廻り。太刀振上らせし所を盛長金王飛で出で。長田が胸板蹴倒し  
 主君の冥罰思ひ知れと。首搦落せば磐固も狼藉者と立騒ぐ。鎗長刀をおつとり。朱雀の。野邊の草  
 の原露を亂して。三重切結び切ほさ追むすび。數十人に手を負せ八方へ追散し。立返てさあ。くさ  
 あ常盤御前は子供を俱し大和路へ落給へ。日本國は平家方此金王は姿をかへ。土佐坊昌俊と名乗り密に  
 勢を集むべし。出来た。某は關東へ馳下り。武藏相模伊豆駿河上野下野安房上總。源氏譜代の兵ども

それにては叶はずば、八丈大鳥蝦夷松前鬼が島へ押渡り、猛虎猛威の鬼を集めて軍勢とし平家を易く亡ぼさんヲ、尤々と約束堅き石塔にいとま申て立歸る風神、雷神厄神も取ひしぐべきいさきはひは、錦旗大臣獅子王の暴たる、姿もかくやらん

第二

さきの安藝守清盛の御前には、嫡子重盛宗盛を始め一門残らず伺候有り、未だ源氏の末類ども方々に忍び居て、常盤親子を奪ひ行き剩さへ、長田の太郎をうち取る事、如何なる大事か仕出さんと評定、肩をぞ繋めらる。時に重盛申さるゝは、たとへ源氏の末類神にもせよ、大將義朝を亡ぼす上は日蔭者ども寄集まり、たやすく平家を亡ぼす事及びがたし、されば易に曰く、亢龍悔有り滿れば欠く、此殘黨を討れんこと事を好むに似て、只義朝が三人の子供を密に捜し出されて、流罪せらるゝまでにはいと穩便に宜へども、清盛怒甚だしく常盤の前は女なり、子供は幼少遠くはゆかじと難波妹尾を大將にて、三百餘騎の追手を方々へこそ差向らる、扱また彌平兵衛宗清に仰せ付、不思議の者を搦捕れと在々郷々町小路、殘なく觸ければ當時平家の威勢に、靡く草葉の蔭にだに隠るゝ、方は 三重なかりけり

とれしれせんしめ

頃は正月の、末つ方、春めきながら牙かへり、袂の水柱とき知らぬ常盤御前は常盤木の、木の下間に踏迷ふ、夜深き空や世にあらば、今ぞ妹背の寝入ばな、今朝はつれなくむく起に、抱き睡して、牛若の夢をば母がふところ、なまねいりせし、いとさよ、今若はおとなしく、あづま藤げにはばき締め

乙若の手を引て、先にたちたるあゆみぶり、小大刀はいたる腰つきも、さながら父のみるいかど、涙にのみだ、はてしなく、しのびつけたる顔くせやいとど、かたよく笠の雪、打はらひつゝ見渡せば、賤が門田に着摘む、東寺よつ塚鳥羽繩手諸國の秋を積のせて、御世の貢の牛車京の、なごりに、とるかは我が心も、打のせて送れ、見おくれ、よびかへせ、返らぬ水のうたかたに、初歌うたふ、初蛙梅に、年とるうぐひすの、つばさは雪に、たふまれて、まだ片言の初音鳴く、己がさま、春なれや、人の姿も若縁、竹田の里に来て見れば、わらやが、軒もかざり繩はなが、ゆづりは、るぼしにわけて門松、かげのこつみや、ありけう有ける新玉の、年も若やぐあしたより、水は和ぐ柳は芽ぐむ、里も榮えまします萬歳、鳥追どり、に、春はにぎはふ、折からの、厄神まあり厄除ひ、まるる氏は二つ三つ、まだ一つ身の縫あげにそめん、しやうらい子孫繁昌神かたかれと、石の華表の二柱、二人の親の、家土や、小弓に添へし八幡山みちすがらの參詣を、今若は御覽じて、是ぞ源氏の氏神に我門いで吉相と、御手を合せ給ひければ、兄を見まねに乙若も牛若も、母君の乳房の上に手をあはせ、ささうと愛らしき父義朝のましますば、いかに悦び、給ひなん、たぐひなき若共を、母が袂の下にのみ、埋れきたすべきか昔を慕ひ行末を、思へばつきぬうさなみだ、我身一つの雨ぞかし、いにしへの人の浮名たつ、戀の百夜の深草山あまざる、雪に雲くらくまだ朝あけの心地して、三里にたらぬ玉銚も草鞋こほり足こいへ雪にも、おなじ墨染のさくらの寺のいりあひに、宿はなけれを里の名は伏見に、行くれ 三層、給ひけり「ふる雪の、おと聞く程に静かなる、竹よりおくの、一つ庵猫の通路あを付し、たゞ一筋の道細く、あぶら火ほのかに揺立て、女のわざかしなげなき、引き紙を結びつき、なかばあげたる伊豫麻、あらしぞ雪を、もて来る、常盤御前はともし火の影をたよりに尋ねより、大和へ下る女なるが、幼き者を召具

して雪に道を失ふたり。一夜の情とありければ。十八九なる女房の紙燭かゝりて様に出で。親子の人をつくく打まもり。いたはしの有様やお宿申たうはひへども。此頃平家の沙汰として義朝のゆかりをつよく詮議のひが。人々の有様符めんは必定なり。自は白妙とて藤九郎盛長が妹源氏譜代の者なれども。ふしぎの縁にて平家の侍。彌平兵衛宗清の忍び妻になりひ。今にも夫の宗清殿来り給は。愛目こそを見給はんなきけなしと。思召そよ。妻かつらきはいとさゆへいづくへなりともおち給へ。いとねんごろの詞の色しそく。吹消し入りにけり。常盤も今は頼みきれ。力も落てささへも行れず。あとへては戻られず。こても此上は運にまかせて兎も角も。今宵は爰に明さんと少し風よく軒陰に。小袖の袖のうはがへを敷寝の床とかたしかせ。笠をならべて屏風としむかしは翠帳紅圍に。すさまの風も寒かりし。身はならはしと身を捨て兄弟に降るゆきを打拂ひ。あはれとぶらふ小夜千鳥ないて。其夜を更さる。まなくひまなく。心なく。雪はこぼすが如くにて。寒風さつくとはげしくて。人の肌骨にしみ渡り肌を刺す事するとき刃の如くなり。いたはしや母上は。つかれたる身を寒気に破られ。悪寒五體を苦むれば。ア、堪がたやとふしまろび前後。不覺に見え給ふ。今若乙若おごろきなふ如何にせん悲しやと。ひたいを押へ手をさすり。いかに乙若母上のさむからんに。物きせません尤と兄弟帯解き身挟なる。小袖をぬいで母上の。すそや枕に取重ね打重ね。我は厭はで埋もる。雪のはだかみあはれなり。母は苦き。枕を上げ。扱いたはしの子供やなり。かばかり母を大切にいかに孝行なればとて。和御前達をこへさせ。親も冥加につくるぞとよ子は息才に生立て見するぞふかき孝行なれ。かせばしひくな衣若よと着すればぬいで母に着せ。いや我々は寒からず。侍のならひには如何なる雪にもいくさして。能くさきと組ん時寒し冷たしなんどとて。敵にうしろを見すべさか。寒いと云ふな乙若よ。寒いと思すな兄上と

甲斐ぐしげにいふ聲に。牛若目さまし這いで見るを見まねに衣をぬぎ。同く母に着せまわらせ。手足もふるひ凍ゆれと其色見せず齒切し。拳を握りこたゆる體母は氣もたへ目も眩み。ア、なきけなやあさましや。百萬餘騎の大將軍ともあふがるべき若共。一重の衣を着せかぬるは如何なる神のどがめぞや。いとをしの人達や御身たちがこゝろさし。綾錦よりあつければ母は着ねごもあたゝかなり。ふびんの者よこち寄れと三人一所にかき寄せて抱き伏してぞ泣給ふことばりとこそ聞えけれ。月も夜はんに更行ば彌平兵衛宗清。女の庵に忍びしが雪にうつるふ人影は。何者か怪しやと傘かざしよく見れば。常盤親子にまがひなし。綱代の魚ごさんなれあまさじと身づくるひ。なほも事をうかひふにぞ慈母のあはれみ孝子の振舞。さすが源氏の根ざしなりいたはしさよあはれさよ。今人々を助けしとて。源氏の運の末ならば終には捜し出さるべし。たごへ搦捕たりとて。盡んず平家の御果報の長久にもよもならじ。なまけ知ぬは匹夫のよう。殊に我妻の爲には主君なり。彼是助けて落さんと思ひしがいや待てしばし。主君清盛の御めがねを以て仰を蒙ふり。助けては道たす。搦め捕ては情なしととつ。舞つ思案して。さあらぬ體にて戸を叩けば。女房待かねしばの戸の。雪打拂ひ草鞋もどくく。庵へ伴ひける。今宵は殊なふ冷さふらふ先盃とあたゝめて。暫くさいつさくれしが女房申けるは。なふ宗清殿。みづからは源氏御身様は平家。もし只今にも義朝の所縁とならば。如何し給はんとよそながらこそうらごひけれ。宗清扱こそと思ひ。ア、云ふまでもなし主君清盛の仰なればいかに汝が主なりとて用捨はならず。眼にかゝらば搦め取て六波羅殿へ引立る。只何事も見ぬが佛聞ぬが花と答へしが。親子の人々物ごしの手に取るやうに聞えしを。女房はつと思ふ顔宗清氣をつけ。やれ小鳥共の軒にやごりてかしましきに。あれ追拂へど云ひければ。なふ情なやふくら雀の羽をなやみ。雪に折れ伏す篠竹の笹に一夜のかりの宿。さのみ

いたくな宣ひそ。はや夜も更ぬと寒し音せでお寝れとすゝめける。いや〜某は殺生好の鳥の聲を聞  
 ばどらではおかす。是非追拂へと云ひけれども女房更に合點せず。夜なくとまる小鳥なれば追ても打  
 てもたぬといふ。宗清しんきを沸しエ、不合點な。いで某が追退んと弓矢取てかけ出る。女房は人々  
 の影隠さんと引とむる。振放し突退て空矢四五本さしつめ〜射る音に。常盤驚き兄弟をまへうしるに  
 扱抱き。はふ〜遁退さ給ひける。宗清とつくと見送りて。あれ見よ女房雀共が通つるは。其儘おきて  
 某が殺生し。あの雀を殺させて汝が忠節立つべきか。只何事も見ぬが佛聞ぬが花今合點いたかといへば  
 女房どかうのこともなく。あら頼母しやとばかりにて袂に縫り歎きしが。扱過分なる御心どかう詞に  
 及ばれず。連添ふ男に目がくれて主殺しと云はれんも一門の名をりなり。又おの様に逆ひても本望にも  
 ひはず。如何と案じくづ折しに有難き御了簡。斯ばかり深き御恩賞親にも子にも兄弟にも七萬ほうの寶  
 にも。男一人はかへぬぞや。若君達も常盤様も此恩忘れ給はじといへばア、〜暫く。常盤と云る名を  
 聞ては。清盛公の御前にて某が誓文立す。いつまでもすいめ〜見ぬが佛聞ぬが花と。うなづき合し弓  
 取の妹春のわけを頼母しき。藤九郎盛長は人々に行逢しが。宗清が放つ矢は妹が二心かいぶかしと庵に  
 立ち事のやうを聞届け。横手を打て涙をばら〜と流し。爰明け給へ宗清殿。是は白妙が兄源氏の郎等  
 藤九郎盛長にてい。心底によつて妹を刺殺し。御邊と勝負を決せんため是までは来りしが只今の志生  
 々世々に忘れがたし。一體のため對面せんと云は宗清から〜と笑ひ。又斑替の雀が来てよしなき事を  
 囁るよな。某平家の扶持を蒙りながら。源氏方の禮をうけ此宗清が立べきか。エ、狼狽たる羽拔鳥。ゆ  
 んでもめても狩人のおひ鳥狩の綱高し。鷹にとらるな餌差にさゝれな。古柄の雛を飼育て初音揚よと云  
 ひければ盛長悦び合點しラ、頼母し、田の面の雁。春は越路に立歸り源氏一味の友千鳥。大將軍の羽翼

第三

の下揚たる旗は白鷺や。群居る鳥の翼を鳴し會稽の巢立して。上見ぬ雀の聲を見せん。ム、急げや急げ  
 山鳥の尾のしだりをの。長居は恐れお暇と夕告の鳥が啼く。あづま路指して飛ぶ鳥の飛が如くに下りけ  
 る心はさすが大鵬の。千里一翔源氏の運末たの。もしうぞ聞えける

實や三百六十日こよみ〜と巻盡し。既に承安三年と移る月日は程もなし。平家の驕奢日に榮え。清盛  
 既に太政大臣を経て入道し淨海と法名ある。嫡子重盛内大臣。二男宗盛中納言右大將。其外末子末葉殘  
 らず稀有の官職。攝家華族にことならず。爰に三條鳥丸鳥帽子屋五郎太夫とて。鳥帽子折の上手を召し  
 くらぬ〜の鳥帽子冠いひつければ。則ち出來致せしと西八條に持參する。一門よるこび若し給ひ御  
 喜悅事終り。五郎太夫に祿給はり清盛入道仰せけるは。先年義朝が子供討て捨へかりしを。池の禪尼の  
 申に依て命を助け。今若を伊豆の國蛭が小島に流せしが。密に元服し右兵衛佐頼朝と名のり。當家追討  
 の院宣を乞ひ望むよし風聞す。又弟牛若も成人し。京近邊に忍び居て院宣を望むと聞く然らば頼朝も牛  
 若も法皇より。密に位を賜り鳥帽子冠求めんは必定なり。隨分氣を付見なれ者鳥帽子かはんと云ふな  
 らば。早速に注進せよと宣へば長田の庄司進み出で。これ五郎太夫かりそめの事ならず油断なくせんさ  
 くし某まで知らされよ。此者共を注進せば御褒美にあづかり一代浮み上る事。長者になるぞせい出せ。  
 エ、何が扱〜身の爲とてい御奉公油断は致さずい。御請を申罷立宿所に。こそは。三郎立歸れ春の  
 光を。鳥帽子折。五郎太夫がひとり娘にしのとめて十五歳。職人なれど鳥帽子屋はお公家交はり上び  
 たる。しよさいに連て氣もいたり都は戀の名所とて。おのづからなる伊達心町にはをしき姿なり。今日

は吉日あきなひよし棚飾らせて賣物に細工の仕初祝儀すぎ乳母下女を招き寄せ。春の遊びも今すこし今日  
 は羽子突あそばんと。腰元呼びて遣羽子や。彼方此方へつくばねの峰より落る。瀧の白玉ひとふたみ  
 よう舞ふ小羽子。外へさるゝなり。それゆゑなり。羽子さへも。袖にとまりて情は。厚き羽子板の云にし  
 に似たる我中よ。夏瘦もせず蚊もくわぬ年の數々面白や。すむ甲斐もなき夜はつらし牛若君十余年の霜  
 雪を。鞍馬の山にふみわけて十六歳になり給ふ。秀衡を頼み奥州へ下らんと覺せしが。わつばとあらば  
 平家より翫めとれとの沙汰さびし。元服して男になり下らばやとおぼしめし。都三條鳥丸。太夫が店に  
 立寄りて烏帽子買ふ。なふ烏帽子買んと仰せける。女子共聞もあへず。かざりたる烏帽子の内何れか所  
 望ひぞ。よきもあしきも空價なし。望次第に召れよとしほも無く答ゆるにぞ。はやしのめは牛若に引  
 れて廻る戀車。わりなき思色に出でなふぎごつなの人々や。商賣といふものは買にも品ぞ有。御  
 用あらば妾にとちよことおそばにより。烏帽子は何が御所望ぞや御容色はよし風はよし。見る人が  
 をや折烏帽子戀に意氣地を立烏帽子。此おすがたにわけ知ぬ我も心を懸烏帽子と。春中をどんどうつ  
 なや。しんきとばかりいひさして顔さし入る襟深し。牛若君も色なれぬ鞍馬の山のみやまぎの。花めづ  
 らしくむづをれにくわつとあからむ顔をあげ。誠にやさしき詞の縁今日が情の初冠り。あはれ人目のす  
 き額風折烏帽子折もがなど手を取り給へばしの。めも魂も揉烏帽子。かけ緒の紐のもる結び解ぬ思ひと  
 なりにけり。かゝる所へ五郎太夫立歸り。こは何事と問ひければ娘は慌て。うるゝと。烏帽子召れよ  
 父上と太夫が頭にかつがせて。うるたへまわるをかしさよ。太夫牛若を一目見て。してやつたりと腹を  
 も立すにつこと笑ひ。ム、お若衆は烏帽子が御望みか。好はなきかと問ひければ。牛若聞き給ひ扱は御  
 亭主ひな。此童が着ようする烏帽子は。大鐘の顆を荒らかに一くせみくせませ。ひながたにあひをあら

せくしがたをいかく。雙眉つけて左折が所望と有る。太夫案にたがはずと思ひながら。猶もためし  
 みんと思ひ。あら似合ぬ好事や。當代左折を召れふする人は。ひとせ野間の内海にて失給ひし左馬頭  
 義朝か。其御子源太義平。二男朝長三男頼朝。扱は鞍馬におはします牛若殿とやらんこそ。左折は召  
 れふすれ平人は及びなし。但し少人は由緒ばしひか牛若をかしく思召し。身には系圖のなけれども若も  
 答ひる人あらば。都の宿に古き烏帽子の有つるを。所望して着したり。左折も右折も。此冠者は知らぬ  
 なりと。ぬぎ捨て。通るならば。御身の難も有るまじ。童が科も。のがるべしひらに。所望と仰せける  
 五郎太夫はしすましたり。牛若に紛ひなしと心の内に悦び。其義ならば出来合はひはす。今宵の内に  
 折立させん一夜は是にと云ひけれども。いや只明日参らんと。立出で給ふをしのめ袂を引留て。父も  
 お宿と申さるゝこそ幸なれ。烏帽子も折て御祝儀も取はやして参らせん。是非にとあれば牛若も。なさ  
 けの糸に繋がれて岩木に有らぬ風情なり。太夫いよく。笑を含み。でかいたしのめ年の始の商且那  
 随分御馳走申せやと口には云ひて心には。たつた今搦捕り牛若殺して牛のした。大判小判の掴みどり  
 。山も見えぬ胸算用六波羅さしてぞ。三重急ぎける。いつの間にかは。たが掛橋の思川。はや宵の淵に  
 深くなり。もらさぬ水はあひぼれの淵も。磯とぞちぎらるゝ。其夜もふけてしのめは左折に小結をゆ  
 ひ。御烏帽子出来たりみづからは殿始。おの様は烏帽子始目出度く圍にて御祝儀あれと。瓶子に盃取を  
 へて御前にこそ直しけれ。牛若御覽じ扱やうれしき情のほど。今は何をかつゝみ申さん某は。左馬頭義  
 朝が八男牛若丸。平家をほろぼし源氏の代となし此恩は報すべし。さりとて世にあらば日本國の諸大  
 名。悦びの色をなすべきに。口惜の次第やと御落涙まします。扱は左様にみか。御いたはしうこそぞ  
 計りにて共に袖をぞしぼりける。牛若重ねて我先祖義家は。八幡にて元服あり八幡太郎と名のり給ふ

我も是をかたごつて烏帽子親は正八幡。鞍馬の大慈多門天。太刀と刀を八幡多門とくわん念し。床の柱に立置て我と烏帽子を取て戴き。太刀の前にも三々九度刀の前にも三々九度。直に土器頂戴し。扱名は何と付べきぞ。ヲ、九郎冠者源の義經と付申さん。源氏の御代は千秋樂萬歳樂とくりかへし。ひとりととして言る、御有様こそあはれなれ。



しのめつくと見参らせ。御元服を祝はんと奥の一間につくと入り。かねて用意やしたりけんあまたの烏帽子掛に様々の烏帽子を着せ。色々の装束を打掛。人の如くに拵らへて御前にならべさせ。なふお目出度や關八州の諸大名御味方申さんとて。手勢を引くして御祝に参りたり。末繁昌の其しるし御酒一つとぞ祝ひける。牛若ほとんど御悦喜あり。實にめづらしや面白や。頼もしやあづまぢは。源氏よしみの梓弓。取傳はりし武士のひみやうは如何にどのたまへば。姫は烏帽子を打かづき。是は伊豆國北條の四郎時政。一門榮え類ひろし。數ならねども某が御味方と申さんに凡そ近國に残る武士はひまじ。手勢は限り知られずと。謹んでこそ申けれ。次に座せしは梨打烏帽子。直垂着流し太刀佩て。さもおほやうに見えしは如何に。さんひ某は。畠山のなにかし秩父の庄司重忠。若武者の昔より力業を好んで。大船を跳返し龍車を留むるいきはひ有り。四相を悟る自然智は我さへいさやしらつゆを。玉どむさむく。はかりごと。みながら萬里の敵を察し。戦はずして勝利を得。天地を動しきじんを感せしむるなる。文武を雙の翼の臣。手勢合せて六萬余騎御先手とぞ答へける。續いてなみ居し人々は。懸烏帽子に大紋の袖たよ。とどかき合せ。さもゆしげに揃ひしこそ土肥か小山か梶原か。其名懐しどの給へ

ばこそ。是は。宇多天皇の後胤佐々木の太郎。おなじく次郎三郎盛綱。四郎高綱五郎吉清ひなり。次に伺候す風折烏帽子。後高に着なしたる。本國家名はいかに。これこそ三浦のはた頭。和田の左衛門義盛年つもつて六十六。軍に逢ふ事十五ケ度。一度も不覺の名をとらず老木の。枝はたゆめども。心の。櫻はなやかに。榮えん君の御出世を。千代萬年と壽きて九十三騎の類ども召具し參上仕る。末座に扣えし懸烏帽子。素袍袴に大太刀佩き。殊にすぐれて見えたるは。是も三浦の一黨ならめ實に能御覽じひひし。我義盛が三男朝比奈の三郎義秀。色黒く手足あれ。疊さはりの荒男茶の湯連歌はふねてなれども朝比奈がくせとして。敵と見ていさむ事。荒鷹が雉子を見てとやを。潜るにことならず。たごへ平家くろがねの。城を搦へ石門に籠るとも。片手に捕て押破り。清盛父子を始めとし撫斬。胴斬。拂ひ斬しやうぎ倒しにせめほろぼし。源氏の御代となし申さんと辨舌によさみなく。それく。に答へしはいさぎ。よくこそ聞えけれ。爰に長田は五郎太夫が注進にて其小冠者何事かあらん。拔駈して討取んといさりさつて來りしが。障子の隙よりはるかに見れば。烏帽子直垂着流して大の男數十人。和田よ佐々木よ朝比奈よと云ふ聲に長田の庄司はつとわななき氣を失ひ。空おそろしく胸慄足も腰もわなくと前後をばうするばかりなり。太夫さつとみおくれ給ふか庄司殿。踏込で一討に遊ばせといへば。あれを見よ鎌倉勢が雲霞の如し。こちらが細工にならぬと云ふ。太夫驚き覗きて見れば。案のどく兵士數多列座せり。あつと言ふよりふるひ出し。二人はひよろくうろくとふるひて何の噂もなし。いづくにてか金王丸此よしを聞出し。飛が如くに駈付案内まうと呼はつて二王立にぞ立たりける。長田味方と心得駈出で見れば金王なり。ハア南無阿彌陀佛と地に俯ふし穴へも入たき風情なり。太夫奥にうろ付しを飛掛てしつかと捕れば。長田表へ逃んとす同く取て伏する間に。牛若姫諸共奥より立出で給ひける。太夫聲

をあげ我等は何も科は無し。烏帽子が御用にひはらおまけ申さん召ませひと慄ひくひひけるを。ア、サ某が烏帽子は、黒鐵の五枚兜鍪形うつて龍頭、銀の付たる烏帽子が所望ぞ。己れ助くる者ならねど娘が心を察し命ばかりは助くるを。腰骨どうど踏をれば泣やめざりたすかりぬ。是長田某は今法體し土佐坊昌俊と名乗ども。金王丸といつし時うぬめをもらせし無念さに其時の姿を殘し四十になるまで此前髪今こそ落せ是見よと。附髪かつらを取しより土佐坊とこそなりにけれ。今殺すはあつたらもの關東へつれくんだり。頼朝の御前にて弄殺にすべしとて高手小手にからめつけ。扱源氏御出世今日の御祈禱に。千秋萬歲所繁昌ひとさし舞ふ目出度やと。三番さの烏帽子を着し袖をかざして。ハ、アおさへて。思ふ敵を取て押さへて。源氏の御代より外へはやらじと思ふと若君を祝ひ參らせとうく東へ御下りおはしませ。扱某は都のやうたい聞つくろひ跡より追付奉らんと勇みに。勇める有様は。只樊噲も斯やらんと恐れぬ。ものこそなかりけれ

源氏烏帽子折

彌平兵衛宗清は、妻の白妙源氏の由縁ある故に、頼朝兄弟の命を助け參らせしが。其身平家の譜代なればなまなかに事むつかし。源平わかち立までは暫く身を退き世上を見んと去年の秋より病氣といひて奉公ひさ。養生の氣晴しとて夫婦諸共京近く。野山廻ればおのづから心浮るゝひやうたんに。酒など入て腰に付観音巡り寺社の縁。花の下陰行暮る其所を其日の極樂と。物にかまはぬ身の樂は命も延る姿なり。かゝる折から十五六なる君達。しげ籠の大口に左折の小結着て。直垂の袖にて顔かくし忍ぶ振にて通りける。夫婦さつと目くばせしつと寄て袖をひかへ。是申。御妾まがふ所はひはず。源氏の大將牛若

殿と見かけたり。某は平家の兵衛宗清申べき仔細あり名乗せ給へと小聲になつていひければ。少人聞も敢す。ア、某こそ牛若よ。定めて我を探すらん今のはのがる所なし。はや首討て清盛に見せ。高名にせよとす。しげにして居られけり。宗清手をうち園生に植ても紅のさすがなる御ふるまひ。全く君を討奉る心ならず。是なる者は我女房白妙と申て御家來藤九郎盛長が妹。其由縁によつて先年御幼少の時分。伏見の里にても御兄弟を見のがし助け奉りし。今とても某世間のごなへもひへば御味方こそ叶はずともなごや討取申べき。心安く落し申さんといへば。少人聞給ひ然らば明て申へし。我牛若にて更になし。烏帽子折の五郎太夫が娘しのゝめと申す女なるが。親にてひ五郎太夫慾に目くれ訴人せしを。澁谷の金王入道土佐坊のはたらきにて。若君も恙なく長田も生捕給ひしを父の太夫が弟妻が爲には伯父坊主。吉峰の雷玄法師重ねて平家へ訴へ。監物太郎頼方が手勢を以て。雷玄法師が加はり東路へ追手をかくるよし。妾は君が一夜の情。我牛若と名乗追手に出合討れなば其隙に若君様一足なりとも落給はん。親伯父の悪心も妾が露の志と語りもあへず泣居たり。宗清夫婦感し入り。其義ならば女房をち此姫と同道にて。随分追付御供せよ。某は爰に殘つて追手の大將監物太郎に出合ひ。長咄を仕かけ邪魔をいれん。其間にはや。落せといひければ。白妙悦び然らば妾も身を扮さんと。夫の羽織に編笠かづさ。しのゝめを先に立て跡を慕ふて追かくる。案の如く追手の大將監物太郎手勢引供し走來る。宗清急度見これ。監物太郎頼方にてはなきか。あはたしき體何處へゆくぞといひかくる。頼方ふり返り。ア宗清か我は今日源の牛若が追手の役を蒙り。是なる訴人は烏帽子屋の五郎太夫が弟雷玄法師。則ち彼が案内にて只今急に追駈る。其方は病氣とてらくををするうらやましと。言捨て駈出るを先待てと押留め。夫は近比たいぎ千萬。さりながら侍は息災にて奉公すること手柄なれ。随分ばつかけ牛若を討留て

御加増に預り給へ幸酒を持あはせられたれば、門出祝はん先一つと腰の瓢箪取り出せば。是は誠に氣が付たり然らばお辭儀申さぬと引受く我も三盃雷玄も三盃御亭主も三盃。合せて三々くどうはお禮申さぬと又驅出るを、はて扱監物香進するは手が悪し。此比久敷會合せすしは積る物語。今少とぞ引留る監物重ねて、時も時折も折大事の追手に行く者に咄せんとは譯もない爰を放せと引放す。はてさうかたういふな新しき咄ありちよつと咄さん聞けといふ。監物すこし腹を立て、泣く子も目あけ咄ごころか。其方がやうな隙ではなし重ねて聞くと逃てゆく。いや咄掛つて話さでは置ぬぞと、ねち合引合と、むれば監物ほうごもてあぐみ。さあちやくくと咄さば咄せと、不肖顔にて聞居たる心意氣こそをかしけれ。宗清どうと座をくみ是は大事の物語。夫なる御坊も軍兵達も聞給へ武士たる者は後學と仔細らしく聲作り。昔々或所に、爺と姥と有けるに、爺は山へ柴刈に姥は川へ洗濯にと聞も果す。エ、爰な者は餘り人をたはげにする。酒に酔たか宗清相手になるな軍兵共急げくと振切て跡をも見ずして走行く。宗清聲をあげ、大事の咄の腰を折る先さきを聞け監物。猿の面は眞赤など笑ひてこそは、三重別れけり御曹子牛若は江州土山まで落延給ふ所へ。白妙しの、め追付て雷玄法師が訴人にて監物太郎追駈申を。宗清道にて長物語を仕出さん。其間に一足もはやくと言ければ、牛若げにもと悦び宿を出はなれ給ひしに、比しも春の雪氷とけて流れて田村川。水嵩増つて波はやく越すべきやうのあらざれば。よし此上は如何せん運は天に有明の月のよすがら爰にとて。田村の宮の拜殿にしばらく休らひおはしける。監物太郎頼方は宗清が長咄、よしなき隙をいれけると足をも付す打ければはや土山に着けるが、田村川の水嵩し此邊にこそ在つらめ。聞さつくつて劫かし捜して討や者共と。十方に入亂れ関の聲をぞ、三重揚にける今は脱れぬ。所ぞ源の牛若丸爰にありと驅出給へば。白妙しの、め諸共に、ゆんでめてに引添ふて

面もふらずはせ向ふ。彼奴は兵衛天狗の弟子殊にかたうど有りけるぞ。あなごつて負傷するなど八十餘人の追手の勢群つて掛りしを三人飛鳥の身も軽く飛こえ。跳越えをどり越え花を亂して、三重戦ひける女わらはと。云ひながら一人當千の剛の者。入かへくと追立つれば、平家の兵斬立られた、かひしらんで見えにけり。雷玄法師たまりかね牛若は兎も角も、親伯父に逆ひたる女めこそ面憎けれ。擲殺してくれんすと大手をひろげて駈廻る。しの、め長刀追取のべ是を坊様衣の手前も有ぞかし一門の悪心を。教化こそせられずとも人の訴人は何事ぞ一子出家すれば九族天に生ると云ふ。御身は引かへ六親を地獄に落す大悪僧ヲ、結構な御出家サア、口惜くば寄て見よと長刀をひらめかせば、雷玄甚だ怒をなし。悪心却て大善根。事も知で出家をもごくおのれこそ罪人よ。さいの河原の石こ詰と神前のくり石を追取ややつぶて打雨や霰と投かくる。しの、め長刀むねになし。飛くる石をはらくはらり。三重、さり拂ひ八方に打拂へば身にはあたらす飛返り。敵の眞向額口鼻筋首筋頭の鉢。さんんに打割れわつといふてぞ逃ちりける。白妙すこしかはらんと逃行く敵を追懸しに。頼方が郎等占部の新七取て返し渡台て切合しが、太刀を捨てむす組む白妙につこと打笑ひ。女と思ひ侮るな盛長が妹宗清が妻なるぞ主有る女に抱付はすこびたる徒者生ては我が道立すといふより早く掻潜り襪取つて跳返し。ひまなく首を討たるはまた、さならぬ早業なり。討殘されたる兵共おめいて懸れば牛若丸。ものくし葉武者共一人も餘さじと。獅子奮迅虎亂入飛鳥の翔の手をくだき隠れ。現れかけろふ稻妻水の月手にもたまらず。三重防る、雷玄頼方左右より隙間なく攻ければ、鳥居のかさ木に飛上りからくと打笑ひ。なふ追手の人々。其方は大勢味方は僅三騎なり。しばし休み申ぞと左り扇でおはしける。頼方あせつてもがけごもすべき様のあらざれば。遠矢に射取と打つがひ。よつ引てはたと射ればそはなる松にひらりと移る。二の矢

を放せば心得たりと元の鳥居に飛もどり、梢の猿の枝うつり振舞ふ蜘蛛の如くなり雷立今は堪かね感僧が  
思案いへば鳥居も松も堀倒さんと土民の家なる鉄おつとり、柱の根際に打立る牛若かさ木に兩足かけ、  
宙に下つて雷立が真向をした、かに切給へば、南無三寶と逃て行く續いて飛をり取て引据え御坊にくど  
い教なれども釋迦に經といふ事あり、生て恥を酒さんより牛若が引導にて、成佛せよと拜打頭よりひ  
つしきまで左手右手へぞ捌けける。大將頼方怒を爲し、女わらはに是程まで切立られし口惜さよ、一騎  
も残らず討死せよか、れやか、れと恥しめられ、むらくと寄せかくる夫ころ望む所とよ、又三人が引  
返し捲り立て、息をも次せず追立れば、四十餘人薙伏せて生残る者までも、半死半生叶はじと田村川  
に飛入、浮ぬ沈みぬ漂ひける。牛若御覽じてお、面白し、人筏ごさんなれと三人手に手を取くみ  
て、流る、武者の頭をふみ、肩を踏へて飛越せ、向ふの岸に駈上り、骨折、御辛勞、關東勢を  
引卒し重ねて一禮申べし。門出よし吉凶よし天氣よし道もよし萬世の中義經が、天下を治ん瑞相と悦  
び、東に下らる、

あそび

君が代は千代に八千代に榮えますとよばた雲や伊豆の國蛭が小鳥におはします右兵衛の佐頼朝は盛長一  
人配所の伽密に平家追討の御企しきりにて、關東の諸大名内々志を通じ参らすれば、やがて武運も  
開くべきつぼめる花の匂ひ有り、然る所に上方より澁谷の金王参上と申ける。頼朝悦び珍しや金王九。  
おことは法體しけるよな。法名は何とか云ふと宣へば、さんい昌俊と申名乗字を其儘に、土佐坊昌俊と  
ついでひ、して上方に別條なきか。九郎は如何にと仰せければ、土佐坊承りさればひ上方は平家の驍奮

十分にて、こぼる、水の源の君御出世を松の葉と、萬民祈り奉る、御舍弟九郎殿も御供致せし所に、幸  
なれば伊勢太神宮へ御参詣有るべきよし、拙者は君への御土産に生香を持參致せしゆゑをんせぬ内に一  
刻も早く御覽に入べき爲、先御先へ下てひと申せば、我君も盛長も、土産の香は何ならんとくく、とぞ  
せめ給ふ。近比輕微の至りながら、のまの内海大網にて取漏したる大悪魚、御賞飯遊ばせよと長田の庄  
司を引出せば、頼朝大きに御悦喜あり父義朝の命を取し、北まぐらの毒の鱈今我爲には目出鯛、釣  
た所は心地よしとごつとごよめさ給ひける。時刻移さず料理せよと御長刀を賜ければ、承ると土佐坊長  
刀取のべこ踊して、首ふつ、と播落し宙に上てちやうご受け、切先に貫き見参に入れ奉り、骸は島の水  
底にふし付にせよとて、下部に下し行はれ御悦びはかぎりなし。此事北條へ聞ければ、時政の北の  
方より女房達を使にて、色々の絹八重がさね御祝儀に進上有、頼朝御覽じ時政夫婦の志返す、も嬉  
しさよと若松摺たる小袖を肩に打かけおはしまし、鏡臺引寄せ我御顔つく、と打まもり、抑某清和天  
皇の臺を出で、六孫王經基より滿仲頼光に相續いて代々天下の權をとる、我其血脈を繼べき人相よのつ  
ねに變り、こんこの生れ有り、双の肩は八幡の八の字兩眼の瞳には月日の光、額の黒痣は星木曜  
星、頭の辻には天照太神五體を守護しおはしまし、一度天下の將軍とあふがるべき相あらはれたり、  
如何にこの給へば土佐坊を始め使の女房若黨等、げにも仰に違はじと一度に頭を傾ける、盛長は  
返答なく事をかしげに顔しかめ、空嘘いたる其風情鏡に映れば頼朝氣色を損じ、後きたなし盛長只今の  
面つきは、全く頼朝を侮つての振舞近比奇怪千萬なり、左程頼みなき頼朝に仕へんより、頼ある人に奉  
公せよ能立と宣へば、盛長涙をばらりと流し、こは口惜き御詮やひ、未頼み有る主君とて御奉公仕る  
を、忠節と思召さる、か、頼なき主君を守立て、忠を勵むこそ臣下の道とば申べけれ然らば君の御心に



浦島年代記

近松全

珠の宮貝の闕、天上の三光に應じ、そよめく衣、綉せる裳、人間の五福を備へ、三萬里の蓬萊指顧の中、凡て兜卒に到るが如く、又邯鄲を夢見るに似たりと謠ひし、水府龍宮の靈徳御外戚に傳へます、海の幸山の幸享次々君や二十一代、安楽天皇のしるしめすヲロシ國を常世と、さかえける、とも御即位の始より花鳥風月の御宴にそみ、歌舞音楽の御遊樂等閑ならぬ御色好、明春御藥かちなるに、女御圓の大臣の娘中宿姫、十五ヶ月の御懷妊御産の氣まします、若し天に背き神に違ふ事ありて、鬼胎妖懷の怪しき誕生あるべきかと、おぼし腦みの御心鬱滞し御足の起居自由ならず、石樟舟の古へも、御身にせまり、手轡を、女孀命婦さし集ひ、殿上の欄より押轢、らせて出御あり、君御冠を脱せ給ひ官女に仰せ、高御座にすゑさせ御身は引換へ、御立烏帽子召替給ふ御有様、女御を始め列座の公卿、庭上の諸武士まであつと驚くばかりなり、中にも妾の臣種、房、卿笏取直し、君御位にありながら烏帽子を召さる、條謂れなし、おり位の後は布衣始めとて、其時烏帽子を召さる、故實申すに及ばぬ處、未だ立太子の御沙汰もなく、如何なる御慮ばしひと謹んで奏せらる、天皇や、御涙ながら朕一天の主として、萬心のまゝなれども任せぬものは病にて、良藥醫術其甲斐なく淺ましや足たゝず、五體不具にて位にある事我日の本に例なし、天照神の照覽も畏ろしく、自位を去るぞとよ、いかに中帯の女御今より朕にかはり、民安全に治めたまへと打しほれ給へば、こは勿體なの詔、數ならぬ自、御寵愛彌増り忝くも女御と召され、御胤の身に宿らせ給へども人の恨みか位の罰か、十月に餘る今日までも御誕生まします、重き我身の物思ひ

御嬰兒様を産むまでは、生死の程も定らず。殊更賤しき臣下の娘。御位を漬さんと思ひも寄らず。御  
 慮を申し替へ給へと。妾詞も美しき。娘に似ざる圓の大臣。ヤア何を申す中帯姫。勅諭を背くといひ  
 父を父とも思はぬ言分。御身内裏へ召されぬ以前。大草香臣といふ者妻にくれよと。餘儀なく所望せし  
 かども。大草香づれに添せて。大臣が身に花咲かぬを合點して詞で蹴飛ばし。天皇へ差上しは斯様の時節  
 を狙ふての事。サア。早う御請。天皇の胤は懐妊。圓が娘位も氏も憚りなし。コレあつといやヤ  
 ン應言へ如何じやくと氣を焦つ。女御は父の直ならぬ意に心を苦めてさし俯向て在します。妾の臣  
 憚らず。君は御惱に御心亂れ。一版一種の御弟親王。泊瀬の王子の御事御失念ひや。兄として其弟を憐れ  
 むが親の子を愛する道に同じ。御國讓は泊瀬の王子外に誰かひはんと詞を放つて申さる。大臣威丈高  
 になり。其泊瀬の王子はこれ何處に。天下を保つ器量は愚か。不智不徳を我と知り。雲井の住居しりこ  
 そばゆく。三年前國遠雲介同然の王子。位に立んとは葵殿の御思案違ひと。打削ればにつここと笑ひ。泊  
 瀬の王子を不徳と見るこそ不徳なれ。御兄弟並びまし。ては。我加擔人の御方よと諂阿る。説臣出で。  
 御兄弟御中不和の基と。末を見開き都を出させ給ひたる御賢徳。吳の泰伯の遺風といはる。王子。尊ね  
 るとめて御國を譲らせ給ひなば萬民其徳に化し。御代長久の基ならんと道を正し理を盡す臣を力。女御  
 ももも泊瀬の皇子へ御位を。捕へ奏せらる。天皇龍顏麗しく貞ある后義ある臣。諫を争で背く  
 べき。泊瀬の王子を位に立てん急ぎ行衛を尋ねよと。新に宣旨下さるれば臣はあつと冠を下げ。假へば  
 皇子遠き海面世離れたる山林に。隠れ忍び給ふとも武士に命じ尊ねんに。何條知れぬ事やいへ。誠  
 を現はす悦喜の顔。色。圓は引替佛頂顔。執權阿閉の郡領諸宗。何かな邪魔と突と出。葵公には似合ぬ。  
 法圖もない奏聞。いかな武士でも當所もない詮議はならず。只歩いても四五年かゝる日本國中。眞なき

人數一人。引捕へ。泊瀬の王子は知らぬかと尋ねるならば。緩りと二十年べんくとした長詮議取置  
 き。女御を位に即け奉るが上分別と。嘲る多言耳に泳えぬ葵の臣の執權。立上廷尉之介鶴國憚らす進み  
 出。ヤア理屈の濟まぬ言分。たとへば君を弑し親を殺す大罪人。逃走り隠るゝとも眞なき人數。當所が  
 ない詮議がならぬと。其むきにして置召るゝか。日月の歩ますして歩むが如く千里萬里も心で歩めば。  
 日本國を駈廻らす共尋ねる手段は其身の器量武門の職。左程不心懸では太刀先の匂味も覺束なし。泊  
 瀬の王子の御迎ひ。鶴國仰を蒙らんと恐れ入てぞ申ける。イヤサ鶴國聞様が悪い。無用の人を尋ねる  
 ゆゑ廻り遠しといふ事。詮議の筋を御邊に負ふか王子の迎ひは此諸宗。だまれ。人の願をかり落し。  
 皇子の御迎ひ俄に望む下心此方合點。味い事させぬ。是非御迎ひは某。イヤお使は諸宗と互に負じと  
 言葉。廷尉之介が弟御藏之介鶴國。眞中へ割て入り。此御使は鶴國殿もならぬ。諸宗は猶ならぬ  
 争ふ迎ひは中から掴む鶴國。サア何奴でも邪魔すれば兄貴と違ふて短氣者。びくともせば手は見せぬ  
 と諸宗が鼻の先。鎧をぬつと突付て庭上に平伏すれば。我慢無法の諸宗も。鶴國が勢ひに押れて詞なか  
 りけり。天皇葵の臣を召され。武士共の争ひも代を思ふゆるぞかし。互に遺恨も残さぬ爲。今度の迎ひ  
 は御藏之介皇子歸洛あるやうに。思案をめぐらし此玉の冠。是を帝位のしるしとして。加冠の儀式宜敷  
 調へ計らはれよと入御ならせ給ひける。車の名のみかはらねと片輪車や足曳の。大和の國の宮にます例  
 を。代々に。三重傳へけり。桃の小路を。櫛笥通り引廻したる御所造り。圓の大臣の車寄せ。敷臺しん  
 でん遠侍。當番の近習外様青侍輩に至るまで。主の威を借る虎の間の。役所の火鉢に高咄。郡領諸宗が  
 父阿閉の府生諸門。腰は撓めを氣は張弓。出仕に怠り梨子打鳥帽子引しめ。大紋の袖若々。心は二十  
 齡は七十古來稀なる堅親仁。何れも御太儀。七ツの時計は打申たが股はまだお下りないか。ヤアあいと

坐に着けば、乾平馬平群隼人、御老人のお勤め御苦勞、餘寒も強ど火鉢愛相に差寄ればイヤ、いやく、いや御無用、極寒の内でも此年迄、炬燵の味も存せぬ祖父め、火の嫌な證據脊に身柱の跡もおりない、十四の時から御前を勤て五十七年、今日の只今まで、噓一ツ致さず、今でも未だ八分の弓は彎き申す、口の怖い荒馬でも、一責では乗伏て綿にする、曲乗でも長馬場でも、若衆に負ねども、内の婆々せが乗せぬには草臥たと大口いふも殊勝なり、還御と呼はり、圓の大臣諸宗召連れ、内に入り悪しき濟ぬ顔、装束の腕捲り指貫引上げ、ごつかと座を組思案の體、阿閉の府生手をつかへ、當今安康天皇には御政となり給ひ、親ら御位を退らせ給ふ由、女御の御懐胎も未だ湯やら水やら知れず、春宮の御沙汰もなし、御位は何方へ御評議如何と伺ひける、エ、親の思ふ程にもない、娘奴は不孝者、正しく御位を譲らんとこの論言、すは時こそと眉を開く所、今女御と呼ばれても臣下の娘、位を嗣は畏れあり、泊瀬の皇子を太子に立てよといけもせぬ賢女だて、親に鼻明したる慾知らずめ、につくしにくしと怒の面色火の如く、目鼻を一つに繋める顔、火鉢の脚に異ならず、府生默念と閉居たりしが、悴諸宗能く聞け、おのれと女御様は御同年なれども、心の違は雪と墨、根性がすはらぬゆる、七十になる諸門隠居もさせぬ不孝者、ア姫君は殿の四十二の二つ子、女子なれば家繁昌と俗説に違はず、御身は御入内后と仰がれ、父君は大納言限りの家筋、大臣に經上り、諸人の尊敬榮耀榮華、海を山になされふとも自由な女御様、元を忘れず、謙り、泊瀬の皇子を御位とは、女義の心でさて、能は御意なされたり、子たる者の龜鑑、おのれが、心の鑑とも思ふべき等、歪んだ心に引較べ、女御を蔑する佛頂類は何事と、叱る我子は餅の方、異見の口は一ツにて聞する耳は二人なり、大臣大きに怒り、ヤア廻遠い老ばれの異見時代に合す、コリヤ郡領、葵の臣が計ひにて、泊瀬の皇子都へ入らば何をしても跡へん、女御の御産を急ぐより

外思案なし、物識の咄に聞き及ぶ、千歳を經る者の生血を取り、孕女に與ふれば其儘平産、殊に女でも男になる幾生男子の妙術、命長きもの鳥類には鶴海には龜、人倫には仙術を行ふ者、當國久米の山中に、仙人ありと昔より言ならはす、平群隼人は彼山に入り仙人を尋ね見よ、乾平馬は浦々里々詮議せよ、千歳を經し鶴は黃鶴とて、毛色悉く黃に變じ、代々經る龜は甲に齡を顯はす、大臣が一生の望み、大事の使はやく、急げ、畏つたと立つ所を、府生留めて先待れよ兩人、順を以て正しきとするは妾婦の道とて、君の辭言を知りながら、御尤もすぐめは女童も同然、悴にあてし御異見、迂遠くは近道のたとへ、諸門若き時より花を好き草木を植るに、花を早く咲せんと若芽の子を殖さんとして、様々の肥料を用ひ、培ひ水を過し明暮れ花壇に氣を焦てば、花も焦ちて不具に咲き、子を殖す事はさておき、親木までせりからして根を絶やす、種樹郭蒙陀が名言は、草木に限らず人の教、女御の御懐胎まつ其如く、陰陽自然の時知らず如何なる良藥、妙術も、草木の肥に等しく害とはなる共、益あるまじ、其上生ある物を助けてこそ、御産の祈とはなるべきに、何ぞや跡方なき虚言を用る物の命を取給は、誕生は愚か女御の御命まで危く、終には大臣の御運もつきん歎はし、老人が一生の諫言御承引下されど、忿つ泣つはらくと忠義に、熱き涙なり、大臣嚇とせき上げ飛蒐つて引伏せ、弱腰五ツ六ツ踏付、我大皇の先を折る塵語に屈せず、隼人は山手平馬は海手、急げ、と追立やり、ヤイ死損ひめ、踏殺すは易けれども、悴諸宗が奉公に免じ命を助くる、重ねて出仕無用身が前へ煩出しすなど驟飛され、烏帽子も落て亂る、白髪は老木の柳、媚々と起上れば、コレサ親仁、此場の命助くるは、諸宗といふ御子息のお蔭、日來理屈張る頑意地の病、御療治なる、お臍のたぐさ、腰骨に堪へたか、御前の執成我等に任せ先づ退出と引立る、腕節しかと取て瓦破と突退け、世を愛し海と、老海老の、腰を助くる腰刀、杖になし

て立上り。譜代の館も今日限り。何面目に老が身の命一ツ名も一ツ。ふた、び出て三ツ輪ぐむ。四ツの翁と身退く心の。内こそ三尊たぐひなき。所の名さへ。世に響く。丹後の國與謝の入江の蟹小舟。習はぬ身にも慣て知る。安康帝の御弟泊瀬の皇子。天の縦せる御容書の道にも暗からず。浮世の富貴は浮べる雲と。都を通れ出で給ひ。大公伯夷の跡を追ひ御身は奴隸の菅蓑や。朝には釣を樂しみ。夕には我友千鳥浦隠れてぞ在します。都を跡に行船の。浦山里を水馴棹。竹の御園の。御行衛尋ねて父の懐をも出るも始め旅始め。頃は船路の。浪荒き二八の月の顔かたち。綾織姫は十六のふり。袖に春風のる。匂も花の御所模様。見る目に蟹と蟹せどもそれ隠れば。荒磯の。岸に近付く船の中女房達口々に。御父葵の臣様の仰とは言ながら。泊瀬の皇子様御迎ひならば。お公家衆か侍衆も歴々あるに。蟹とやらの真似。船漕ぎ魚釣をして仕舞は如何する事。此蟹毛のあられもない腰の廻りのむしや。ア、いやらしと笑へば共に袖覆ひ。ア、不思議はことわり。泊瀬の皇子様は御位の望なく。都の月花振捨て御心直な釣竿に樂み。今の世の賢人と呼ばれ。大體むづかしいお方でない。怒お公家衆のお迎ひでは。唐の大和の引事揃へ言負ては取返されず。御藏之介を連て和女往きやとの父の仰せ。斯した姿も賢國が計ひ。此上にも思案して。都へ手振で往なぬやうに頼むぞやと宣へば。鷲國冠押のけ。櫂の廻らぬ此船頭でも智恵まんくの海上。當が無ふてお供はせぬ。皇子様が八十許な親仁ではあるまいし。血氣盛りの女房珍らしいごう中へ。お姫様の其美しい。お顔の莞爾はや。を見せたらば。いかな泊瀬の山嵐でも轉りとさせ連て歸るは定の物。や返るとは船の忌事。あれ。さても風のよい釣船。十が九つ皇子様拙者は彼方にお見知り。皆京者と覺られまいぞ道々聞た海老釣唄。愛じや。と答隠れ。上臈達が張上て。唄は西國詠節。るんびやらう。りたなごや。髯長なせにせ。はん。もうるごあぐるぞ。もう

えびよあぐるぞ。上ての後にかいらうが。もごるがためのるぞや。ごんぼもつ。はやもつ。つ。い。腹が立ならば親重代の熊手を持って追拂ひめせ。お。それもんに。沖中の釣船の真似をして鐘をびんじやん。とこきあげてめせ。今の事は戯言。歸る戻るの釣唄も君が歸洛の告ならん。皇子は釣のいと賢く。優しき都。上臈の。何故斯る賤の業。誹しさと宣へば。姫は詞の先取られ。都者とは悪い推。御身こそ都雲の上人。何故に海邊のお身。是が不思議とありければ。されば世の人の色を好み酒に心の濁るを知らず。我は澄渡る此海面の松風の。琴の音に眼を覺し戀も色も知らぬぞとよ。さても堅し。松の琴より三味線の。浮世の色に引れてこそは樂みよ。誰ぞお前に惚たなら。ごんご其處等を濁らして戀の波をあげたがよし。人がつけさを望まば鳥渡啜て飲すが可し。何が故にか妹背事お嫌ひぞやとほのめかす。イヤ我とても岩木ならねど。聞けば色に絆されて上たる人も冠。はじき。湯殿の陰の忍逢ひ見付けられて浴衣で振ふもありげなり。世舉て皆濁れり衆人皆酔り。屈原が詞。潔しと思ふ身が。女の曲た釣釣に懸りはせぬと仰せける。綾織姫莞爾と笑ひふなば敵いてハ。ア、かたくるし。女房持たりや去られぬかそれこそ男の權柄。氣に入らずば去つたが可し。親の心の宜い娘は好んでも持しやんせ。よいも悪いも一概に言はるれば腹が立つ。それこそ眞の偏屈原じやと皆々をつと笑ふにぞ。京上臈の口には勝れず漁父が詞も是迄。棹に御手を掛給へば。姫君ひらりと乗移り御手に取付き。つ。ましやんすな泊瀬の皇子様。葵の臣が娘綾織姫と申す者。御兄安康天皇様には御位を退りさせ給ひ。お迎ひに參れとの宣旨につき大膽なをのこ子を。釣にかゝるは逆さま釣らるゝが順道。未だ餌の味も。針の先の細いも太いも知らぬ身の耻を捨て口説に莞爾とも遊ばさず。女を釣がお嫌なら此海へさんと身を投げ。鯛や鱧になつても釣られにや置ぬと抱付薫りに御心ときめき。いや釣

といふは鯛や鱈も。此様な人魚は手捕へが得物ぞと。ひつたり抱付き締合ふて管引「覆ひ入り給ふ」女房達は氣を揉上げ。さつても手ばしかひお働さ。お姫様に疵付。此上に都へ行まいなご御意ならば。跡へも先へも往まいぞや。何をいやる。あゝ取組んでしつぽりと一汗の上では。都は愚か天竺までも御坐れ。ア、しんき。あれ。お船が搖つき出た。見れば目の毒皆おじや。と船底へこそ。三重入にける。爰に同國與謝の郡水の江の浦里に。浦島太郎久壽とて。もとは漁父の業なりしが天性仁愛の心厚く。所の人にも免され刀もさすが筋目よき。妻を迎へて睦じき夫婦の中の小太郎が。誕生日の宮参りまだ若草の懐に産着の紋の縫箔も。萬代祝ふ松と竹。與謝の社の下向道。何と女房。常にお目下さる。皇子様へ立寄。此悦び申上まいか。アア。濱から大勢わめて来る。何事じや此方寄れと立ちやすらへば。浦手の船子數十人聲々に。都からお觸のある大龜を仕てやつた。アア御褒美は望次第。取落し甲に疵付なきい。と荷ひ来る。夫婦立寄り能く見れば甲の紋あざやかに。尾は金糸を亂すが如く。耳ある龜の悲氣に粘る涙ぞ不便なる。喃浦の衆。是はまさしく千年に及ぶ龜。今日は梓が宮参り。生先を祝ふ爲申請て助けたし。地侍の身上過分の價は心に任せず。何れもの骨も偷ます。酒手程はおませう是非。所望と言ひければ。アア千貫とも思ふもの。酒手で呉れい野太い和郎。邪魔めさるなどてんでに龜を昇上る。突退け押退け取て投げ。龜の主は此太郎。寄て怪我まくるなど龜にとつかと腰かくる。ソリヤ大騙詐大盗人打よ敵けも口計り。乾平馬家來引連れどつと來り。アア糟侍の強請者。忝くも當今の女御御懐胎の御藥。其龜の生血を取る早々渡せ。意地張は親子三人。木の空で涼ますと嘴付やうなる大音聲。浦島些ともひるます。助くる程に下されと。禮を以て所望なら了簡して遣もせう。瘦侍と侮り。生血を取る此方へお越せとは法を知らぬ雜言。權威を喰ふ男でなし。騙詐も言はず盗もせぬ。元

是は某が龜。證據は甲に書付あり。文字が讀すは儘かに聞け。元祿天皇十一年秋七月。水の江の住人浦島庄司是を放つ。是又左の方の書付。同じく四十二年春三月。浦島太郎久壽是を放つと朱漆の書付。我も以前は漁を業とし。過つる年此龜を釣得し處に。甲を見れば親庄司が助くるとの書付。幼少にて離れし親の手跡。此龜の我釣にかゝりしは。殺生をやめよとの父の異見と身にこたへ。竿を折り網をすて同じく我も書付し。助けたる龜なれば。親の譲りの證文ある儘持主。天下の裁斷も證文次第。我物を我放すにぐつとも言人はあるまい。親子も三代助くるも是で三度。今日小太郎是を放すと。甲を取てはね返せば寄來る波に打連れ。二三度見返り嬉し氣に藻屑に隠れ沈みけり。アア王命を背く不敵者。逝すな遣らぬと真中に追取巻く。身一ッならぬ久壽切拔んと働けども。十方より打刀拂ひかねて見えたる所に。泊瀬の皇子苦押上げ。年月我にみや仕へ心ざしある浦島夫婦。御藏之介あれ助け頼む。と御説の下。水棹押取り駈上り擲り立打散らし。浦島夫婦を後に圍ひ。勅諭こがしに非道を働く似者奴等謝つて歸ればよし。意地張ば片端に潮水くれんと睨付れば。アア似物とは。天子にかはらぬ圓の大臣の新參乾平馬。狼藉者の加擔人一括めに打殺せ。アア圓の蕪の喧しい。我こそ其の臣の御内御藏之介。主君の姫もろとも泊瀬の皇子のは迎ひ船中にまします。浦島夫婦は皇子の御家來同然。彼奴一人も餘すな太郎と。左右へ別れて確立切立松原さして。三重追まくる。乾平馬。取て返し。泊瀬の皇子を打殺せば龜に劣らぬ高名と。太股波にた。かせ御船を目懸け狙ひ寄る。とつこいやらぬと浦島か妻子を抱きながら。腰だけ海に下り浸る波を踏分け歩みより。こりやさせぬとしがみ付く。アア邪魔な女郎めと振放せば又取付き。浦島の鬢に馴たる女波も藻屑も事どもせず。引留めんとしやくり引く平馬は京者海は不得手。其所の岩角踏外しく。だち。次第にさす潮早潮に揉づ揉れつ。打波の音力聲命かぎりどせ

め合しが、有繁女の腕先の弱る所をすつと引寄せ、龜を助けた返報。水層になれど深海へ撞き打ち込む波の、果敢なき最期を不便なる、驚國浦島遙に見付け駆來れば、一太刀も合さず潮を驟立て逃失せたり。妻子に離れ浦島太郎勇む心の力も落ち、波打際にさうと坐し前後も、分す歎きしが、此身を惜むも小太郎故、妻子に別れ何存命ん、介錯頼む驚國殿と刀取手を儘と捉へ、留めてもといまらず。忝くも泊瀬の皇子、暫し浦島と、姫君諸共御船を出給ひ、歎くはことほり去ながら、我この浦の苦屋住夫婦が情に慰みしに、妻は殺され汝は自害、我一人情々と都へは歸るまじ、命存へ歸洛の供とは思はぬかと、宣ふ後に喃浦島殿太郎殿、小太郎も我身も死はせぬ、水底を潜り助かりしと歩み來るはヤア女房か、是はくくおぶない加減不思議の命、浦島が助かるは皇子の今の一言、妻子は放ちし龜の恩、龜の船を此子が壽命萬々年と悦ぶ際中、討漏されし若黨奴隸皇子遣らぬと群り蒐る、ヤア驚國の驚が羽織同然、サア來い、と引寄せ、六七人左右の脇に伝と引締め、浦島は龜を放す、奴等は圓が泥水喰ふ泥龜共、今日只今驚國放すと、打ち込む音もすつぽんぽん、日本無双三つの絶景、天の橋立縁の橋、姫は妹背の馴合ふくせ戸、與謝にかゝりし浦島が一夜のは宿内外の濱、濱松風も聲添て吾を、壽く太平樂、立上御藏が武勇に治る、波も靜に青海波、千代經る年經る萬代の、龜の背に書く筆の跡傳へて、今に知るとかや

才

餘所にのみ見し白雲の高間山、高嶺天に横はり、刀して削らす高嶺の勢ひ、鑿して穿つ怪巖の形、見れば異山の高根、を傳ひ來て、此葛城の半腹にかゝる雲より其上は、人跡絶て道もなし、かくて阿闍の

那傾諸宗、主君の仰も雲を掴む仙人の住む山もがなと、相傳の家來平群集人一人召具し、天の香具山吉野山かけてぞ通ふ岩橋の、葛城山に着にける、集人付兼ね申し、旦那、日は曇て刻限は知らねども、我腹も七つさがり、先に仙人があるやら無のやら當もなき足費し、麓に一宿明日お尋ねなされぬかと、いふ、頭は日影より遙の西に傾けり、エ、辻占悪い、此葛城は一言主の神の靈地、仙術を學ぶ者此山に入り行へば、忽ち成就日本に山多けれども、心當は爰一つ、ひだるくば木の實でも拾ふて喰へ、汝一人は心元なく某馳付てさへ其無性、ごくに立すと叱られ、仙人は木の實を食する者此山に居るならば、一つも残して置まいと、戯ふれながら打連て茨萱笹押分け、木の根を踏まへ葛に取付き這上り、行手の大木松の荒皮押削り、墨黒に書たる人形見るより諸宗喫驚し、こりや何じや、木樵も通はぬ奥山に不思議、と委く見れば、衣冠束帯の人形、腰より足に大釘を打込、八萬四千餘種の外道、安楽天皇の一身を不具になし、早く帝位を去らしめ給へと、呪の筆跡讀も終らず大きに驚きヤア、此柳にも耕の袴着たる女の人形、中帯の女は平産をどごめ給へと讀もをはらす、さては天皇の御足た、す女御の御産月延しも此祟り、サア仙人は脇へなる天下の大事見付し、何者が何の意趣と、主従顔を見合せて呆れ、果たる計りなり、諸宗心ならず仙人を尋ねるも、殺して血を取り女御に參らせ御懐胎の御子を、是非男子にせんどの爲ばかり、其子を封じられ御産なくては何のへんてつもない事、假令五年が七年でも兎奴捕ゆるまで當山は出まじ、我は彼の岩窟に隠れんず、汝は向ふの繁みに忍び聲を相圖に出合へ、ぬかるな、後れな目を働けど、是も思案の待遠き道を、別れて入にける、瓶には谷澗一滴の水を納め、鼎には青山數邊の雲を直す、曲を得て人見えず、青かりし梢も今は紅の、秋の景色は面白や、我も昔は大草香の巨と呼れ、百敷に冠を並べ袖を列ねし花衣、今は雲井を落葉衣の袖寒く、風新柳の髪は櫛れど

も、手にも取られぬつくも髪おごるの髭。都を去て立歸らぬ。月日も身に積もる。恨をせめて晴さんご立寄る後の人形に打つ。釘は蜷。槌には石。丁々人我に辛ければ。我又人に愛節の。腹に宿る子は産せじ。王位を闇黒我も戀慕の闇より迷ふ嬉しや思ひは晴れたりと跳上り飛上り。悦び勇み立歸る。道の向ふ平群隼人すつくと立ち。鴈元寛げ詰かけたり。はつと驚き立歸る岩陰。諸宗が鳥居立ち。前後を包まれ行衛を包まれ。山姥ならぬ山廻り。通を失ふ仙人。飛ぶ鳥の翅挽れし如くなり。諸宗怒て大音上。王土に住ながら安康天皇を咒阻し。女臣の産を妨ぐる擬者。一寸も動かせしと口にはいへど心には。若し雲に乗ては逃まいかと。眼を配る頬。ヤア左いふ和殿は阿閉の都諸宗なり。我こそ大草香の臣がなれの果と。いふ聲ばかりは彷彿として。憔悴枯槁の木の葉衣。諸宗些とも台點せず。イヤサ仙人に近付は持たないと。太刀捻くつて油断なく。動かば斬らんと詰かくる。草香の臣撞と座し。昔にあらぬ我姿見忘れしは道理。空を翔る翼地を走る獸。戀慕愛執の心有すや況て我が人心。は邊が主人圓の息女。中帯の姫に戀慕し敷通の玉章。書くれて降る涙の雨。積て床の海となり。身も浮くばかり焦れしかごと。假初の返しもなく。媒を得て親大臣に言入れ。願ひ忽ち成就し婚禮の川を待つ嬉しさに。始の辛さも忘られし。思ひ奇らす安康天皇后に召されんとの。勅諭。憎や卑怯や圓の大臣。先約を滅し。中帯姫を天皇に奉る本意なき無念さ口惜さ。恨みの一太刀天皇をや姫をや。大臣にや思ひ知せん。幾度か思ひ遣りしを。不運の我身を。願て人知れず都を立去り。眉輪の翁と名を改め。此葛城の山深く。仙人の跡を尋ね長生不老を求めしに。姫は女臣の位に至り懐胎せしと聞よりも。昔に歸る戀衣二たび。涙絞る兼ね。天皇夫婦を調伏今日百日満願。口惜やおのれらに見付られ。徒らになさん無念やと。いかる詞の内より諸宗目配せ。隼人心得後より眞二つと切かくる。太刀影に閃りと外し。隼人を瓦破と踏伏せ。ヤア愚か

五體は枯木念力は。行力に隨て研す力を見よと。踏付る膽のたばねきやつとばかりを最期にて。山路の露と消てけり。諸宗隙さず無手と抱留め。右手の脇腹左手の脇へ。太刀先朱にくつと指す。うんと伸るを抱縮め。エ、凄じの胴性骨。己れを害すれば女御御産安穩。天皇の御足立ち。天下も立つと指通されて。伸つゝ屈んづ身を悶き。殺さば殺せ思ひ込んだる我一念。天皇の命を取り。女御の懷妊封じ留むる果を見よ。ヤア其願やめよと割ては剣り抜ては切。今こそ息は絶たりと。踏こかせども些ども動かす立すくばり。金輪際よりはへぬきて眼も塞がず睨むが如く。扱氣味悪い死態やと。思へばぞ、神そゝる寒け。忽ち山谷動搖し死骸より赤色の魂顯はれ出。車輪の如く閃いたり。諸宗も我を張て刀を振ても膝顫ひ。歩むとすれば臍がつくり。倒つ轉びつ逃出れば。猶も風荒れ木の葉を振ひ。あはれ草香が露の玉虚空に。轟き。三重音に聞く。丹後の國より飛脚到來し。泊瀬の皇子都入との使。飛鳥の宮にて迎へ御初冠との宣言にて。拜殿に褥を設け御簾几帳立渡し。天皇の御代りには中帯の女御。掌侍典侍の上臈達。葵の臣は引入の大臣。理髮給仕の卿相雲客。賦に列座して。今や。と待受らる。元來皇子は古を好み奢を憎む御本性。位に即くまでは海邊の漁父馬乗物もよしなしと。ごんづ草鞋の旅衣綾織姫御藏之介。浦島太郎が菰包道の荷になる小太郎を。一荷にしたる風呂敷包おしよば。宿の女房も。田舎おぼれて殊勝なり。御藏之介爲國皇子御入と呼はれども。徒跣足の旅體人々思かけもなく。綾織姫心付。是こそそにて渡らせ給へとありければ。父の臣を始めとし百官。はつと拜揖ある。皇子應せず拜殿に入給へば。中帯の女御の御悦びよふぞ。御歸洛。御兄天皇御病身。折しも自ら懷妊を幸に。御位を譲らんと。勅諭。御誕生あるまでは胎内は水の泡。圓の大臣が娘なごが女御に立も憚りに。假にも十善の帝位を即ぐとは天罰も恐るしく。様々辭退し葵の臣の執奏にて。御迎をまゐらせしに願成就。綾織



子は戀をせぬものど何時の世の掟ぞ、親でも子でも惚たが病ひ。母親ごかしいやぞやと。身を打探る、しごけなき。鶯國へす飛上つて引放せば、臣浦島綾織姫を圍ひ奉り、神主の屋に入御なし申せば、ヤア思ひ人放しは遣じと駈出で給ふを上臈達引留むれば、おのれ等がほうかい格氣と取て突退け拂ひ退け、戀人返せ君返せと瑞籬玉垣井垣拜殿、廻廊幣殿神樂殿廻り駈戻り隙を見て組留んと狙寄る鶯國が、目鼻の間をはた、火の出るばかり撲きつけ、神主に駈込み給へば鬼や大蛇は掘めども、女御は掴まぬ鶯國も跡を慕ふて入にけり、女房一人うるうる、興を覺して、さつてもきつしこりや先ア何じや、女御様でない彼りやもうこれ様。剛士の御藏殿を、ばた、と撲いて投た手合ひ、少相撲もなるよいの、先刻にから氣を揉み、峠で飲んだ酒氣がすすりしやんと醒果めた、さらば京酒一つ出かけましたよと引請け、くつ、くつ、くつ、五六杯、ハア、色どいひ香どいひ下地の水から田舎とは違ふた、ま一つ押へて又つ、く、く、く、自身の手短に盃納めて銚子の口から瓶子かたふけ、酌も盡す飲どもかはらぬかはらぬ、く、く、く、ハハ、こりやと、ハハ、ハハ、目が行く目が行くお目が行き、ハハ、ハハ、元は踏蹴、く、く、く、弱り伏したる拜殿に、前後正體なかりけり、女房ども、く、く、く、と夫浦島走り出で、ヤ草臥て休んだか起よ、女御も御所へ還御なり、臣も御藏がお供し只今お歸り、其方も御殿へ召連れられんとてお尋ね、起よ、く、く、く、と揺つても、く、く、く、つても、ハハ、ハハ、熱柿臭い又喰ふたな、うたてやな一滴もならぬ奴いつその程にか底抜け、目がさめると口叩き寝れば三日も夢介、故卿と違ひ都は晴れ何處ぞで夫にも恥與へるは必詰と、撲つ、掴つ、踏でも蹴ても高駈、さて了簡もなき次第やと惘れ果て立たりしが、誰が奉納か神前に陵王の樂の面、屈強の物一度の耻に一代の驕せんと、申し下すも畏れながら一ッは神慮の恵みにて、酒の癖をやめさせ給

へと寝顔に打被せ、紐堅く引締め神を拜して入にけり、日影傾く、西風の身に冷々と酔醒心酔とりと、ヤアこれはさて寝てのけた、日が暮たか真黒なは、目が碌に覺ぬかと顔を撫て、ハ、疎ましや頼も頼も剛張て、撫ても擦つても覺えぬ、悲しや何たる病ぞ洗ふて見んと御手洗の水に映る水鏡、怖怖や情なや鬼になつた、浦島殿もどの顔にして欲い、姫君様王子様わしや鬼になりました鬼じやく、如何なる神の御罰ぞ立ては歎き居ては泣、五體を白洲にぞうと投げ、身を悶ゆれば髪絡け紐も解けて面落たり、嗚嬉しや鬼の皮取れたはと取上見れば舞樂の面、さては酔の中、誰が所為ぞや、是をさへ覺えねば、如何なる淺ましき面目を失ひ、夫婦の愛相も盡つらん、浦島殿にも最う添はれぬ、厭ぬ別れの端となるべき酒と知り、常々ふつと飲まい盃も手に取らじと、思切ても酒の香きけば前後を忘る、遣はそも如何なる我性ぞと、二度歎き悔みしが、樓門の方より四方に目配り来る人は、丹後にて仇を爲せし乾の平馬、今来るは心得ずと拜殿の椽の下身を隠し、てぞ窺ひける程なく平馬、神前をうそくと覗き廻り、袖より小さき相圓の拍子木打鳴す、數に合せてひいふう瑞籬三四と打ば御供殿、木蔭物陰一三三人はらくと集り寄る、平馬一所に招き寄せ、我遙や丹州へ下り主君の仰の龜をも取らず、刺へ手にとりし皇子さへ討漏し、ましまと今日都へ入り何とも一分立難し、去年ら仕合直り女御も還御、煮ても焼ても噛れぬ鶯國奴は、臣が供して鳥井通りをたつた今歸る、跡に残る背らしいは浦島一人、長袖葦皇子を討は蠅を取より易い事、方々忍び入て駈出せ我茲に待受け、一人も餘すまじ、承ると三人が三方に別れ忍び込む、平馬社壇の扉を開き身を密め隠れ入る、内より扉をさす處を、小暗がりより女房出で、どつこいぞこへ扉の懸鐵丁と下せば、内よりゑいゑい、や聲して、推ども押へて動かせず、奥より浦島三人を左右に請切て出れば、喃此方の人せくまい、大將平馬は此社壇に袋の鼠た、捕こと、ヲ、

出来したと三人を三方にばつ詰〜切伏て。平馬を討たん其處退けと駈寄れば。暫く〜いふ事あり。彼奴は當坐の敵でなく、御身の爲には妻の敵小太郎が母の敵と〜いへども浦島香込ます。ヲ、不審尤、始の妻は彼が手にかけて海に沈め、水屑と消し痛はしさ、我小太郎を抱き取り、假に妻と化生し此子に甘露の乳を哺め、今日までは育てしが酒を好む本性に、あらぬ姿を見られしかと、誠を語るも耻しながら龍の都に八千年経る龜なるぞや。御身三代に三度の命助かる報恩契は是まで、サア敵討ち給へとさつと開く御寶殿。神通力に捉はれてよろめき〜。出る敵を取て押へ目には、名残の涙ながら。先妻の恨一刀親子の恨二刀三刀四刀指どほし〜。敵を討しも御身の力、とても事の事に姿を替す子を育て、添ひ果てくれよ。放ちは遣じと縫り付ば形は消え、あらぬ方より又顯はれ、一度我名を現はしては此土にて人間の、交りは叶はず小太郎が子々孫々、壽命は守らんさらばやと、いふ聲々に綾織姫君も驚き出給ひ取付ばはつと消え見せつ。隠れつ御手洗の、池の汀に寄ぞと見せし忽ち、龜の形と現じ甲に戴く。三曲の金色四方に満々たり、龜も悦び含みし潮波の白糸吹出し、流れ漲る瀧の水絶すとうたり、とう〜と齡は萬年保つ壽命の龜のこの〜。此世創り異國は知らず日本に、龍宮城と夫婦の例此浦島と神代の、彦火々出見の古へと二筋かけて釣の縁、見返るも縁見送るも、縁は盡せぬ寄邊の水に、入よと見せし佛は波に、殘して失せにけり

才三

大舜天下を棄るを視る事、敵たる藁香をぬくが如し。唯父母に隨ふて愁を解とかや。泊瀬の皇子即位あり雄略天皇と申し奉り、天のたくみを享けつぎ、四海を撫る功績に靡きのべふす人民や、賢王聖主と仰

げども日月に蝕ある如く、御母中帯の女御姪奔不義の御行跡。上下の嘲り御身にせまり、南殿の御格子深く獄屋を建つ可しとの勅によつて、圓の大臣の執權阿閉の郡領諸宗、葵の臣の御隨身玄上廷尉之介鶴國、空修理の番匠に命じ、檜の柱鐵の貫、七尺四面の獄屋宮殿に取組しは、神代も聞ぬ珍事なり。鶴國諸宗庭上に畏まり、仰を蒙り獄屋は出来ひへども、凡そ科あるものは、高官下官によらず、官位を削り衣冠を削ぎ大理の廳に下し、平人同然に禁獄し、罪の輕重を糺すは武士の存所、不淨穢をもあらためらる、宮中にいふせき獄屋、如何なる重罪の人をや籠置るべき、古今未曾有の勅諭と詞を揃へ申ける。圓の大臣聞も敢へず、汝等が不審は尤や、我とても其通り、當御代になり御前へ出るもたまさか觀慮の程察し難し、葵の臣は綾織姫の御縁、我等とは格別御前退すの御出頭、御内々の、詔定めて御存じあるべしと、仁者を蔑する詞の針少しもおくれず、如何にも稀有の勅諭如何なる事と伺ひしに、神明正統君子國の日本を、畜生國になさんとする惡心の者朕が身近くあり、縲綏にいましめずんば忽ち國のやぶれとなる。此惡人を退けん爲なり、殿上に囚をしつらへとの繪言、圓公さへ御存じなき科人愚蒙の某存すべき様なし、定めて當今の御即位いやがり、底意に謀計ある人はさこそ心なるまじ笑止に存する大臣殿と鸚鵡返しのおて言耳を潰して圓の大臣、ハ、ア科人知れた〜、近年は時ならず大雷鳴り、加茂明神の油断雷の神を入る、爲め殿上の獄屋嬉しや我等がぶす、お底で向後雷の根切晝中に蚊屋も釣まいと、底意の惡を座興になし言えらする油口、廷尉之介えせ笑ひ、内外の政に預る圓公の仰とも覺えず、國家を亂す科人玉座近しとの勅諭に何の不審、其惡人とは大臣の御娘中帯の女御、ヤア女御を科人は推參奴、我娘ながら御入内以來主君と仰ぐ中帯の女御、殊に先帝安康の御胤を御懷胎、當今の爲にお母、其母を獄屋に入れ雄略天皇政道が立つべきか、あづ虫の分際慮外を吐かば躑躅さんとかさにかゝつ

てきめ付くる。イヤ鶴國は不調法。天下の爲には女御でも大臣でも憚らぬが御奉公と。一國に覺て給ひ知らず。異國には漢王の后呂太后。辟陽侯に密通し。一族の奢より漢の代の亂れとなり。其呂太后からつりを取る女御の身持。御親父の目にかゝらぬはすぢがゑくばか。但親子の相談か。牢へ入れる中帝の女御萬に一つ反れたらば。大臣殿が浮雲。是忠臣のさすの神子。占は違はぬと。親子の悪事赤裸大臣はつたと胸に釘。口は閉て目を刺出し。睨めばひるます白睨かへす煩魂。底氣味悪く氣も後れ牢屋を見るもぞ、神立ち。身柱元からしは。瘧病見る如くなり。阿閉の群領膝立直し。舌長し廷尉之介。我君は長袖。下郎の雜言聞捨にし給ふとも此諸宗は得憶えず。サア眞平御免と手を突かずば。御所とはいはず打果すと反を打て詰蒐る。ヲ、サ。雜言と聞く耳には雜言金言と聞く耳には金言。汝が親阿閉の府生諸門。主人を見限り隠居せしとな。合點ゆかずば屋敷へ歸て府生に問へ。ヤア親は親我は我。慮外の舌の根切下げんと突と立てば續いて立ち。兩方抜んとする處葵の臣聲をかけ。玉座近し鶴國しされ。諸宗控へと諸卿口々制止の折節。出御なりと。警蹕の聲。兩家の兩雄畏れて左右に平伏せば。堂上堂下皆々冠を傾けり。天皇南殿に渡御なり。誠に繪に寫し物語に聞しは物の數ならず。いふせき獄屋の形よな。さりながら唐土の聖代にも。固圀と名づけて國を治るそなへとする。されば形は忌はしといへども。善を勧め惡を懲し心の歪を矯正す。政道の實是に優る物あらじ。いで朝廷を覆し天下愁の張本となる大罪人。只今縛め見すべしとの繪言。すは身の上と圓の大臣色青褪め。顛ひく跡じさり。卿相雲客目引き袖引き笑止くしと見る處に。御裝束をかなぐり捨て自ら囚に入御成て。内より扉を引立給へば。はつと驚き百官有司仰天。したるばかりなり。誰かある外より錠を堅めよと御聲の内。大臣はつと胸開け。繪言是非なし錠下さんと突と立を。ア、卒爾千萬と。葵の臣謹んで涙を浮め。普天率土の主

として。斯る淺ましき御有様。漢家本朝に例なし。君は日月獄屋は天の岩戸にて。今日より天下常開。世界の理非もわかれず。下萬民の歎き哀れと思召されずや。惣じて惡人を警むるは。罪の形外に顯はるゝを以て是を制す。御身に見えたる罪もなし御心を穢され。牢を出御下されと詞を盡し奏せらる。いやとよ磨が罪には形なし。心の内の罪なれば磨より外に知る者なし。日外飛鳥の宮にて即位の時。中帝の女御の御姿見初しより。淺ましや勿體なや母たる御身に心を懸。朝政身に染ず思ひに迷ふ戀慕の間。晴すに晴れやらす。此惡念の彌増さばおのれが母犯せる罪。おのれが子犯せる罪。遠會祖の神制に背き。天下男女の道を紊る僻事とは知れざる。思ひ切られぬは神慮の加護にも外れしか。一天四海の上に立つ身。如何なる邪。不義ありてもいましむる人はなし。心に心を制する獄屋。不義不仁の惡人は天子も其科通れずと身を苦しむるも民の爲。蠶といへる蟲を見よ。糸を吐き糸を引き。其身を八重に引覆ひ引包み。巢の中にて空しくなり。其巢を以て億兆の人の肌を暖むる。蠶の蟲すら仁徳あり此獄屋は蠶の巢。蠶の虫は朕が龜鑑。朕は又萬民の龜鑑ぞや。磨が非道を包まん爲。母女御の御方よりの戀なごよしなき事を言ひほぐさば。朕には不孝の名をとらせ汝等は不忠の臣。命は獄屋の牢下し。骸は此處に朽るども。此惡念の晴れざる内囚を出る事あらじと。母女御の惡行を。御身に受し御孝心。皆々退出仕れと牢屋にぞうと御座を占め。思ひ切たる龍眼に。御涙をばらりと包みかねさせ給ひしは。忝しとも哀れども思ひ。遣るさへ畏れあり。人々はつと涙に暮れ。何んと奏せん。胸の戸口も詞の錠もはつたと下す圓の大臣。鬼に瘤を取られし如く寛々として入りければ。始にかはる葵主従打撃みたる有様。那傾いさつてコレサ鶴國。碌な眼も持す。結構な忠臣のさすの神子。また此上に見通し立して。盜賊並に本詰牢を見通すなと瀧口へ出ければ。鶴國無念の顔色。葵の臣は天皇の御孝心肝に泌み。衣紋にかゝる涙の雨。姿

に装を被ぬばかり。しほれて。こそは入り給ふ。斯くと聞より綾織姫。姿くづをれ走り出で。こは勿體  
 なの御有様と。獄屋に縛と絶りつき暫し。泣入り給ひしが。自が初戀は。遙々君を迎ひ舟。丹後の國の  
 浦の波裏なき御心有難く。思ひ初め。お位の後には誰憚らず。明暮れお側を離れまいぞと樂しむし甲斐も  
 なく。下々にもある事か御母女御のほうかい格氣。夜の寢所は思ひも寄らず。お顔を見る事か。同じ  
 御殿にありながら千里萬里も隔てし心。今日やお側へ今宵やお寢間と待暮したるあげくの果。淺ましい  
 是は何事ぞ。高いも低いも女の力は殿御を待み。我子に惚れる母親に御孝行も程がある。ならば母御の  
 悪名をお身に受ふと遊ばしても。御心の涼しきは天が下にかくれがない。はやく出御しますか左も  
 なくば自も。一つ牢屋とばかりにて口説き立て。ぞ泣沈む。天皇は一筋に天地諸神を御拜あり。御母女  
 御の悪心翻し給へと。肝膽碎き御祈誓に。御應へもまします。姫は猶しも。亂る。心さては君にも捨  
 られし。戀の敵は御母のいたづらもの。殺されふが刻れふが存分言んと走り行く妻戸の蔭。御母女御面  
 色變つて立ち給へば。ハア、ハア、冷る處に。何時から其處に御座りましたと膝もわななく頼ひ聲。な  
 んじや母を敵とは。おのれこそ妾が戀の敵よ。子にはれる。徒とは。天皇を何時産んだ母とは假の名。  
 男に惚るは女の情おのれに戀を仕負ふか。サア思ひ切るか切らぬか。ちり、ちり、と寄り給へば。逃ん  
 にも逃られず心を据て綾織姫。エ、聞憎い見苦しい女御様。血を分ねども親子といふ名に恩も有り義理  
 も有る。産落さねば子ではない惚たとは厚皮な。恐ろしやく。天魔の業か狂亂か。先帝安座天皇様は御  
 足の養生。な、く、りの湯へ湯治なされお留守の御所なればとて。儘に御連合のあるは定。假へ親子でな  
 ふても。徒でないか何と不義ではあるまいか。ヤア黙れ。おのれに不義の吟味誰が頼む。生て置かば妾  
 が仇。綾織姫さんと十二重の附紐手繰て駈寄り給へば。彼方へ外し。此方へ潜り。逃るも織姫さま櫻

追ふも色ある梅花の顔緋の袴。踏み綻はし踏みしだき。廊下渡殿追廻し追かくる。天皇あはやと思せご  
 も猶御聲を慎み。不祥は見じと御目を塞ぎおはします。綾織姫は身を遁れんと。欄干閃りと飛下給へば  
 續いて飛び。逃る裳裾は左近の御垣に纏れて惱むを隙さす寄て。首に纏へる紐も危し綾織姫。既に斯よ  
 と見る處に。廷尉之介鶴國一文字に駈来り。綾織姫を引放し。女御を取て引伏せ大音上。大悪不義の母  
 女御戀慕の證據は此鶴國。天皇に御科なし。誰を參つて獄屋を出し奉れと呼はる聲。はつと聞より郡領  
 駈付け。綾織姫を右手に提へ刀を胸に押當て。サア鶴國。女御に刃向ひ奉らば此姫を一刀と人質取て動  
 かさず。鶴國からくんと笑ひ。厭はぬこれ姫君。お命かばへば悪人の女御を逃す。女も男も君の爲  
 世の爲。命を捨るは臣下の道。帝を大事と思召さば此處でお命捨た。ヲ、心得た君が爲。殺さば殺  
 せとびくともせぬけなげさ。それでこそ我主人。サア女御を一えぐりとすはと抜たる氷の刀。天皇御聲  
 高々。先帝の御子胎内にまします。過ちせば朕先づ殺れ死ねべきぞ。放せくと頻の勅諭。さすがの  
 鶴國思案更に決定せず。腕先狂ふ刀がらりと投捨て涙を浮め。御身に替ての御孝心。感じ奉るも畏の至  
 りにひへごも。二年餘り誕生なきは何しに先帝の御子。血塊龜腹などの病。宮中に置ては後の禍。此鶴  
 國が預り命は助くる。君は牢より出御あり。諸人の歎きを晴させ給へと思ひ入て奏すれば。いやとよ汝  
 等が心には。今牢屋に苦しむ此身を。雄略天皇と見るゆゑに母女御を憎むぞや。麻が身に於て牢に入る  
 へさ非道はなし。母の非道を制せん爲。親子は一體母に代る此獄屋。麻が身をすぐに母女御と見よ。母  
 の悪念やまぬ内此母が獄屋を出で。其母の亂行彌増さば。不孝の上の不孝ぞ。身をこらす我心天神地  
 祇も憐みを垂れ給ひ。母善心に立ち返り御産の紐解け世は萬歳と聞くなれば。其時こそ囚を出ん。鶴國  
 が望みに任せ。預る母は母ならず麻とおもふて宮仕へよ。諸宗には又綾織姫と預くるぞ。互の主を取換

て預る處に心を定め、等閑なく勦れど肝にこたゆる詔。古今に秀し賢王なり。二人あつと領事し、コリヤ鶴國、御懷胎の大事の御身屹度預た。獄屋のは御母女御、其雄略天皇を勦れとの繪言、魂に忘れなよ。ヤア御邊が講釋に及ばず勅諭に違背はない。此方の姫君しつかと預れ、ヲ、預つた預けたと今迄互の争ひは、雀の千聲鶴國も、一聲の繪言に別れて、こそは、三重春の雁、花をすつれば、燕見に、来るしはらしや、つばくちも妻ゆゑ焦るに其方は、何と櫛の葉の露より薄きお情や彈すさみ、秘曲を盡す琴の音の、漏て隣の牡丹園、花の主の諸白髮阿閉の府生諸門が、手燭に分くる籬の露、夫婦立ち聞く夜嵐に連てしらべも途絶えける、婆お聞きやれ彼の爪音は、隣屋敷立上廷尉之介が奥書院、生れついで堅い侍、常々物讀の聲弓の弦音、竹刀打の音などは聞ゆれど、遊藝としては聞えぬに、毎日毎夜の琴琵琶、疑ひもなふ預りの中蒂の女御を慰めのため、奇特な武士ではないかいの、あの女御は誰をぬしが主人、葵の臣と中の悪い此方の旦那の娘、分け隔もなふ勦る心底、又一ツには養應の聲が聞えては、手前に預る綾織姫をも馳走して貰ひたいと、恥入す心もあらふ、然れば主人の奉公といひ侍の龜鑑、是れには似ぬ世粹諸宗、預りの綾織姫何と様に當るやら覺束ない、隱居といひ主人に鼻衝たる此諸門、親ながら身を卑下しかまはねば構はせず、屋敷は扉一重心は千里萬里の遠ひ、鶴國への聞えも面目ない我をさみせん耻かしやと、任せざる世を老のくりごと、ア、最うよござるはいの、年寄た親二人、口先でなりとも小優しうものいへば、堪能するぞ知りながら、犬猫を飼ふ様に思ひ居る不孝者、言ふて返る事かいのよしなの氣病、此方の好の花島夜の間にあだに見捨んより、いざとて夫婦打連れて見廻す、花の雨覆ひ宛然難の殿造り、手燭に照す色々は、枝や爛々と咲く中にも、是なふお婆是は去事の取木にて、名も高き屋に、劣らぬ色をそめい山、此方の花壇は三國一富士や、淺間と花の素顔は、くらふれど、白き可は此難

鶴、二葉の松葉姫松紅、花も春夏を隔て、咲くや、清見が關籠が關も開き初め、土地しるくともみかの原、湧て、流る、布引や落ねを餘所に響の灘、空の星さへ此花に愛て向ふが、北斗紅、名残のやそじやよの霜夜は抱て男の袖の内、夕日見返り辰の市、寫し繪たみの天が下、紅白みめを、争ひて富貴の名とる深見草、見れば心の富貴ぞと花に、齡ものばへけり、宿かる蝶の夢覺し立騒ぐ葉隠れ、なふ府生殿、あれ、何やら動めくは、誠に野良猫か野良犬か、憎い奴めと圍引除け、引すり出せば這は如何に、嬾妍たる上臈の口に捻込む手綱の端、後手に縛られ千行の涙目もあかず、傾く顔の白牡丹雨に打れし如くにて、夫婦はつと目を見合せ惘れて詞もなかりしが、ム、御面體見知らねど、諸宗が預りし綾織姫よの隣、隣の鶴國が女御の待遇耳へは入らぬか、義理も情も辨へぬ忤め、ナフおいとしままやと老女の手に、ほごく手綱の引結びやうく緩む手を合せ、云はんとすれどせぐり来る涙は聲に先立て、わつと平伏し給ひける、見る目に堪へかぬ喃府生殿、無法者が彼の仕方ではお命が危ない、何ふぞ思案はあるまいかと、いへば姫君顔を上げ聲を死ねば一思ひ、殺さる、より辛い事、親御に對し言憎けれど、そもある事か自に心を懸け、焦れ死ぬるの懸死ぬるのと繪言のたら、一夜ならずは假寝の情と夜なく、聞へ通ひ、いぢりせりて夜の目もろくに寝させず、數ならねども葵の臣が娘、雄略天皇の玉體に添ふ此身を、思へば口惜く種々に悪口せし、其憎しみとて此有様、慈悲と思ひ夫婦の衆預りの内は此隱居に、園へ置て下されかし、身一生の御恩ぞやと又さめ、と泣き給ふ、エ、人法に背きし忤が噂、聞く耳も穢る、せいもの爲全く教へず指圖は致さぬ、隣は御家來廷尉之介鶴國、何の垣一重なふお婆、越かねまいもの、やうにおりや思はる、なふお婆、無法者が歸らぬ先、早う越ねたらよかりさうなもの、様に、おりや思はる、なふお婆、お婆、を托言に顔で教ゆる目に氣を付け、ア、忤やと領首きく小襖

進松全集

引上げ掻袂み。走り寄ても垣は高し手がりなし。足も心も越えかねて立さまよひしうろく顔。あれお婆あゝの松の木垣打越して。隣へさいた一の枝。天の與への天の浮橋。教ゆるではなけれど越されさふなものの様に。おりや思はるゝなふお婆。お婆の目づがひは。我手引ぞと小枝力に取付き。登れば松の節高く木肌は茨踏付くる。足は白雪淡雪のさはらは消えん危なさま。こらへて顔に蜘蛛の巣や。松葉の針が目を突け。痛さ辛さも思はれずやうく。梢に攀上り。飛下んとせし處に。鶴國が用心に飼置く犬。木の下陰に驅集り猛り嗥んで吼かれば。噛殺さるゝ心地して命限りと取付く松も。搖るゝばかりに身節の顛ひ。危さ怖さ恐ろしたとへん方なかりけり。鶴國が妻の替たゝ事ならじと。枕鉤提げ走り出。犬を知邊に梢をきつと見上げ。さてこそ。何者なれば不敵千萬。玄上廷尉之介が奥書院。家來の若黨中間まで男氣のなほ所と。知て忍ぶが曲者。盜賊ならば世の情命を助け。物をくれて歸さふづ。屋敷に大事の預り人。言譯暗ければすぐに其松に礎。是を見よと突出す鎧の穂先。ナフさいふは鶴國のこもじ。籠か。苦しうない自じや。ヤア姫君様か。エ、御車性な。たとへ繩張一重でも隔を越え。預り人の難儀は思召やられぬか。イヤイヤ人目を忍び逃るでない。府生夫婦の深い情早うおりたい。頼むくと急ぎ給へば。ヤア猶ならぬならぬ。先の人に情あれば。又此方に預かる女御様渡さねば。夫鶴國が義理たゝす。時には互の主と主とを引分けてお預りの勅諭も反古になす。隣同士の義理よりも上を背く恐れ。夫の武士が立つものかこれ申。おいとしながら姫御前は辛抱が第一と。教訓すれば府生聞付け。聲高々と是は。お身年寄ても女は愚痴な。中帯の女御御産の紐さへとくれば。天皇年より御出なさるゝ。一天の君の牢屋の苦患を助け奉れば。此上の忠義もなく外の義理も瓢箪もいらぬ。針程な事も男に知らするによつて姦しい。少々の事は女の心一つで済したら。すみそふなものやうにおり

近松全集

や思はるゝなふお婆。イヤイヤ此方も女覚えがある。垣越にも他人へは見せとむない。聞かせとむない事がある。此方も此陣退たらばよかりそふなものやうに。こちや思はるゝなふ親仁殿。フ、夫もさうじやなふお婆。なふ親仁殿なふお婆と。簀戸押開き入りければ。籠聞き取りア、さふじや。我身ながら氣が狭い。夫にさへ知らせねば何國になりと隠します。サア爰へと差向る肩を踏へてやうくと。を引も庭は。月代の影しるゝと白壁傳ひ。化粧の間にぞ隠しける。阿閉の郡領諸宗主君大臣家の夜詰を引き。宿所に歸り直に隠居の花島。牡丹より芍薬より我戀草の花の紐。解か解ぬか今宵手詰と獨語の覆の影を覗ひても探してもコリヤどうじや。何處へ失せたままんと手綱も解てある。一人手にならぬ事。加擔人がある合點じや。此諸宗が抜らうか。喃府生殿母者人親仁殿。家内に響く大音聲。ハテさて何を喧しい。少々の用ならば年寄た親を起さなくても可い事。フ、睡たい事やと空腔の大欠伸。ア、納め顔見たうない。牡丹島に縛り置た。お預りの綾織姫何處へ逃された。假初ながら一大事真直においやれ。イヤ綾織姫を預りしとやら。耳には聞けごも素より隠居萬事を知らず。見えぬはお主が油断。身は知らぬと入らんとすれば引留め。此花壇へは外の者は入込ぬ。知らぬとはエ、まさしく。此姫が見えねば此諸宗が。腹を切も構はぬか。構はぬ。ム、我子に構はぬからは。其方が今頓死してくだばらふが構はぬぞ。フ、構ふ。此方も構はぬ。面々捌きと取付島なく言放され。ム、よい。證據は松の木行所知れた。踏込で綾織姫を渡さずば其代りに。女御を此方へ奪取といひ捨て。棘まじりの合の高垣。ぐわらりぐと切破り。滅多無心に踏廣げ。押破つて突と潜れば。又吠かゝる犬打切蹴散し飛んで入りにけり。分別なしの狂人め。彼奴が口にも腕にも負て居る鶴國ならす。エ、笑止千萬と見やる隣家の障子の内。騒ぐ人聲詞諍ひ。火影俄にちらめき出で。切合打合ふ太刀音鏗音。竹椽板椽

ぐわつたりひつしり。ばつと散る血は障子に畫く村紅葉。手負は何れと見る内に諸宗が額口、三寸許斬  
 込れ女御を左手に搦込み。鶴國が打太刀を受つ拂ひつ裏手を差して跳出で。切破つたる高垣より牡丹島  
 の小庭まで。互の切先雷火を散して闘ふたり。母走り出で喃危なやと。白刃を潜り女御をもぎ取り駈入  
 れども。府生は騒がず悠然と烟管長閑に吹く烟。おもしろや牡丹花下の睡猫は。其心蝶にあり我は心。  
 牡丹にありと。繰返し打吟し間近く閃く太刀影も。間の錦と目もやらず。女房。簞刀ばつこみ鏑元抜か  
 け。鶴國殿女房が控へた。引包んで討て取るを斬りかけんとする處を。エ、小癩な其處退け女。見苦し  
 い助太刀と叱られて抜もやらず。心計りは鞭撻つ馬詞の手綱に控へられ。進みかねて身をあせる。諸宗  
 大音上。エ、情ない親仁。構はぬといふ我を我に立て。目前我子の討るゝも見捨るか。女に劣た腰拔祖  
 父と。いへども耳の餘所吹く風。親を頼むは後れたかと聲かけられて諸宗。花壇に躓き瓦破と臥すを。  
 疊みかけて左の肩口背旨迄すつばと斬る。斬られながら投る太刀鶴國が太股。五六寸斬込れ膝をついて  
 撓みなく。隙をあらせず花壇の覆追廻し追戻し。血煙飛んで白牡丹皆紅とぞ。三重挑みしが素より鶴  
 國。手利の達者深手の諸宗太刀打ち落され。かつばと臥をたみかけつひに難なく切殺し。死骸に  
 搭と乗懸り胸に刀を押當る。喃々鶴國留めの刀今暫くお控へ。頼み存すると府生が始てかくる聲。奥に  
 は老母の聲高く。ア、府生殿諸門殿比の願。婆が手際でたつた今産せたと呼はる聲。鶴國夫婦大にさ  
 悦び。喃綾織様御誕生姫君様是へ御出でと。呼びく駈寄りさつと明けたる障子の内。老母鉢巻玉襷。  
 兩手は眞赤い血に染りたる左鎌。御子と覺しく小袖に包み抱き出れば。女御苦しき御有様姫君。助け  
 出し参らすれば。左の乳の下掻切られはや御息もたぬに。さしもの鶴國途方に暮れ憫れて詞はな  
 りけり。府生突立ち牡丹一枝押折り小脇に挟みつかくと寄り。ヤイ玄上廷尉之介主君の敵。眞劍に搦

する一枝請取れと。眞額をはた〜。打て色香も散亂たる牡丹投棄て。主君の死骸の前にて本望遂  
 たりと。餘所には知らぬ涙心見えて眼も濡みけり。鶴國一圓心得ず。ヤアお預りの女御を害し。我武士  
 を捨さする老老か狂亂か。所存を聞んサア云へと大きに急たる顔色。ヲ、御不審は至極〜。此仔細知  
 たる者天地の間我等夫婦只二人。一生人に語りしと存せしに。今日只今死を極めたる此府生何をか包み  
 ずさん。主人圓の大臣殿四十一歳の春。北の方御懷妊四十二の二歳子。女子なれば其家榮え。又男子な  
 れば親に祟り命を失ひ。家を滅すといふ俗説に迷ひ。生るゝ子が男子ならば日の目も見せず。害するに  
 定まる故。北の方の物思ひ家來我々の氣遣。女子を生せ給へと神々の祈誓大願。心を碎く其甲斐なく屈  
 竟の男子誕生。ハアツと力も落果しに大願祈願の驗にや。アノ女房同時に女子を誕生す。これ神力の與  
 ふる處と。下女乳母にも知らせず。取換し姫君は彼の中帯の女御元我が娘。我子となりし郡領諸宗は元  
 主人の子。コレ此花檀を見られよ。數多の接木取木をして花を咲するに。假へば白牡丹の臺に紅牡丹の  
 穂を接ぐに。其接穂を育てし養ひ親木の白牡丹は咲かず。元の親木の紅牡丹色香をたがはず咲き出る。  
 人間の養子と花の接木と同じ事。我は接臺諸宗は接穂。養ひめぐみ育て。眞實の親木の花の色にか  
 はらねば。子といふは名ばかりにて其儘もとの主人ぞと。一筋に思ひ込みしより上には親子のふるまひ  
 。心に主人と尊めば斯程の悪人ながら。我手にはかけられぬ。幸と御邊に討せ。死骸へ手向る心ばせの  
 主の敵。大切の武士の面を草花を以てうつたる無禮。嗚無念に思されん。町人同然の隠居の身。接穂に  
 心亂れし花物狂ひの老耄めと。思ひ散して御免あれ。なふ鶴國殿女御は我子賤しき娘。もと茲に咲く紫  
 牡丹の素性顯はれ。不義放埒の根性ゆる十善天子。親ら獄屋の御苦しむも彼が所爲。につくし〜折を  
 窺ひ忍び入り。腹を割き御子さへ安全なれば。娘めは寸断〜と思へども。彼奴を切ては綾織姫を。諸

宗が安穩には置まじと他に日敷を過す所、思はず今日姫君を御邊に渡し、娘を我手へ入る事天の與へかねく夫婦が願成就、婆出來した御子は王子か姫宮か、左鎌の切先御身に怪我はなかつたかと、問ひ詰られて母の親たしなむ涙目に餘り、四十年の女夫の中後にも先にも子といふ者は此娘一人、産落すより人手にかけ一生親と知らせず、終に我子と呼ばねども現在親の手にかゝる、是も何故胎内の子を取出し、天皇様を獄屋より出し奉り、天下の歎をとめんと此頃夫婦言合せ、娘が命にかへく腹の子が、満足な子でもある事か、是見給へと小袖開けば、ひさこの大きき赤きかひこの形各一度にはつとばかり、なふ府生殿此袋子は何の報、思ひ廻せば娘が敵殺す母も亦敵、敵と敵の寄合と諦むれば、可愛ふも不便にも悉しくもなければ、鈍な涙が顔るゝと轉び、伏して泣沈む、歎の聲も親と子の今はの肝にや堪へけん、女御苦しき目に涙、さてはお二人は産の父様母様かひの、疾に知らせて下されぬ、日外飛鳥の宮にて雄略天皇様と親子の儀式、天酌のお盃の時恐ろしげなる老人、影の如く目にちらく口に入るよと覺えしより、氣も浮かりと夢の様に覺えしが、其淺ましい見苦しき袋子の胎内を出るや否や、心さらりと晴やかに體の、はれたる如くぞや、耻しきは綾織様、恐れながら天皇様へ申譯、獄屋を出御なる様に、奏問して給へ鶴國殿登殿、ア、思へば、此年月、親とは知らず輿車の供に連れ、頭を下させ手を突かせ、何うせい斯うせいと娘の口から不孝の科赦して下され父様のふ母様と、本性正しき今はの詞恨みも仇も引かへて、鶴國夫婦綾織姫共に袖をぞ絞らるゝ、母は女御に縫り寄り、扱は今迄の不義放埒心に覺えぬぞや、それなれば咎でない不孝でない、ア、府生殿聞てか憎いとばかり叱らすとも、せめて息のある内に、可愛やと一言聞せて死せて下されと、悔み歎けば齒を喰しばり、エ、侍たる身の假初にも、嗜むべきは偽表裏、四十二の二歳子とてなまなかの忠臣だて、主人へ偽り子を取かへて今の悔

み、下女賤女の懷妊にも産は女の命の境、産前産後の妙薬よ名方よ他人さへ駈廻る、腹を割れて産落す、其割く及物は刀でなく鎌でもなく、我一言の偽りに燒及がついた淺ましやと、覺えずわつと泣入れば、いや最う悔んで下さるな言て返らぬ事ばかり、いつか、産落し乳を上げ、愛らしい顔を見んもの、待焦れしも仇事か、せめて目鼻ばかりでも人の容あるならば、何ばう嬉しがるべきにいとしや父様母様、嘸悲しかろ口惜かるとせきあげ、涙を絞り氣を揉上げ、血顔ひ頻に息弱り今一生の名残の曉、暗む命の燈火は消て果敢なくなりけり、老母是はと取付くを府生引退け、ヤア婆忘れしか日比いひしは愛の事、ム、合點と夫婦立寄り、指違へんとすばと扱たる刀の柄、鶴國あはて駈寄て刀もぎ取りがらりと投げ、ム、心底推量至極せりさりながら御誕生までと勅命にて預りし女御を殺され、其身夫婦も自害せしと、侍の生類下てなんと奏問なるべきぞ、御邊も亦武士の情、有無の宣旨たるまで我に命を預けよといひければ、ム、尤も、聞届けた、サア鶴國、寄て繩かけられよと夫婦一所に手を廻す、イヤイヤ命を預かるまでの事忠といひ勇といひ、義ある諸門夫婦繩のかけやう知らぬ、ホ、ウ愚なり廷尉之介、娘ながら女御の命を取たる科人、繩をかけねば此場で自害狼狽へたるかと睨付る、ハ、アさうじやあやまつたと、懷中の用意の繩夫婦が夫婦揃むる繩、かゝるもかゝるも弓取の、義理の繩に揃められ詞はなくて泣き沈む、見捨て、立も立場なき鶴國夫婦が思はぬ歎、卵生の御子を綾織姫に抱かせて泣く、別れ立ち出る、名残の袖を呼返し命助けの御慈悲は、却つて老の身の、仇なりといふ聲弱る吹き弱る嵐に咽ぶ腰折松、幾霜雪は凌げとも只一時の涙の雨に枯れて、甲斐なき花晶宵まで愛し牡丹花も瞳花の名をかへて、愛さ身が上の朝顔と日影、待つ間ぞあはれなる

第 二

阿閉夫婦が忠節叙威の餘り、雄略天皇獄屋より出御あり賞爵たゞしく、府生諸門舊職に立返れば、圓が惡逆一身に通り、帝都を逃失せ二度び澄る雲井の空。昨日と移り今日も暮れあしたの原の御狩の御遊。嶺には鹿垣谷には列卒繩、狩人の聲鉦太鼓。太平の世に豫て武備を教ゆるいさはしなり、御痛はしや。先帝安康天皇、御足の爲の御湯治も、廻り兼ねる足弱車、小石笹原葦かす列卒の鼓を、跡になして引惱む。一筋細き岨傳ひ仕丁共詞を揃へ、今日の御遊は當今様より、御徒然を慰みの御狩なるに、諸官人の供奉もなく狩屋を忍び出給ひ、人倫絶えし深山の奥何故の御行駕。寂慮如何と奏すれば、安康涙に暮れさせ給ひ、さればとよ。汝等も知る如く、去りし頃中帯の女御敢なき最期の折から、取上し鷹が胤淺ましき袋子とて、大内へも入れず此葛城山に棄たりとや、假へ鬼畜の形にもせよ、血をわけし恩愛子ゆるの間に引れ来る、せめては捨し跡なりとも見まほしく、今日の狩場を此山と望みしも親心、棄たる處は何處ぞやと問ひ給へばさんひ、棄參らせしは此谷なりと答ゆれば、さては日數經りしゆる、畜類鳥類の餌ともなりしか不便やと、猶御心も亂るゝ糸のはらくと御落、涙ぞ道理なる、時に山風颯と吹落ちち梢木の間をさらく、散敷く紅葉葉捲立てく、赤色一團の玉の袋子、谷を降りどころく、風に誘はれ木の葉に包まれ現れ出で、袋に風を入るゝが如く、ふはくひやうくふはくく、見るま程なく二嵩餘りになりたるは、怪しくも亦凄まじし、安康いぶせく思せども猶恩愛の捨難く、あれ見よ未だ生あればころ玉に呼吸の働あり、仕丁參つて袋を開けと宣へば、アイとはいへど恐ろしく、其方往け、我往けと先へは進まず尻込し、覗ひ喰ひの矢先に漏て、爰に落來の猪荒熊、谷を下りに一文字、駈

る拍子行く拍子、牡鹿の角に袋を引懸け、ぐはらりと裂けば此世の風を五體にうけ、ぐつと延びたる男子の姿産髮左右へ亂れ散り、踏張る足は鳥居の柱、惣身は朱塗、陰莖まで唐辛とも謂つべし、各あつと驚く處に、岩を飛越え木の根を跳起え、駈來る荒熊むんずと掴み、七八間ごとと投れば起直り、只一裂と飛蒐る、脱つ潜りつ瓦破と踏退け、枯木を引折り一挫ぎと打かくれば、熊は手を伸べ爪を立て、梢にしつかと搦付き引寄すれば引戻し、互に引張る力足岩を踏缺き小石を蹴立て、ぐわらくぐらくどうくく、谷を吹捲く土烟、仕丁ども心は空遠御くくと勸むれども、玉體騒がす暫しくと宣へば、有繫捨ても歸られず、怖いは十分見たいは半分、サア鬼子と熊との棒捻じや、前代未聞たつた今、今じやくと顔ひ聲、谷には異形のをめぐ聲、右手へ捻れば左手へ捻、争ふ枯木さりくく、中よりさり、と捻切捨、四手搦みにしつかと組しめ、振つ、隙しつ相撲の手合、熊の又股へ片足かけ、搭と引伏せ乗懸れば、四足を張て跳返し上になり下になり、ぐるりくぐるくくと纏れば、赤と黒糸ないませの大綱纏たる如くなり、さしもの猛獸弱りたよよ、月の輪喧と踏付く、四足を取てぐいと引抜き、體を差上げ御坐を目かけ投付る、供奉のしもへ御車捨て四方へばつと逃散れば、玉體に飛蒐り、取て引伏せ踏付しは、勿體なくも痛はし、安康御聲絶えく、如何なる惡縁惡念にて怖ろしき出生ながら、我子と思へばいとほしく、連れ歸らんと思ひしに、親に敵たふ天爵神爵、外道變化の所爲ならずば善心に立返れと、苦しき中にも子と思ふ、御涙せさあへず、鬼子破鐘の様なる大音聲からくと笑ひ、ヤア安康の鮫鱈類、我こそ先年中帯の女御に心を懸し前の名は大草香、仙術外道を行ひ、眉輪の翁といひし者、懸慕の恨に女御の腹を封じ、壁にしたるも我が爲す業、本望遂しと思ひしに又ひや勅諭とて、諸宗が及に罹りし最期の一念、女御が胎内の子の骸を藉り、再び報ふ恨みの出生、眉輪の翁が名をか

たどり、我名も直に肩輪王。爾を始め雄略天皇、日本の人民擧殺し神道の根を絶し、異國の儒道佛道も悉く打破り、三國共に魔界となさん手始め、爾が首第六天の機性と、曳やつと捨切敢なき崩御を是非もなき仕丁の知らせに鶴國鷺國、浦島太郎一散に駈來り、尊骸を見るより、はつと扱つれ切かゝる鷺國押へて、天狗にもあれ鬼にもあれ、小悴一人三人蒐るは大人氣なし。摘み殺してくれんすと、飛で蒐れば眉輪王引外し、弱腰掴んで目より高く、くるくると振廻し、手毬の如く撲付たり。鶴國鷺國さす打つ太刀、きりりと廻りがばと蹴落し、首筋掴んで跳反せば、二三べん宙にて反り搭と落ち、突と入て又打つ太刀、閃りと身をかへ太郎を谷へ蹴落す間に、鶴國鷺國左右の足を儘と取て指上れば、兩手に二人がつべい押へ、ぐつぐつと押付られ、體は土へに込込むばかり、岸を傳ふて駈付る浦島、二人が上に取て打付け、三人重ねし背骨の土地團太踏んで立たりけり。雄略天皇弓と矢番以肩輪王が真只中、目的たがはずひやうを放せば發矢と當る、神力應護の矢先に苦み、踏跟く處を三人隙さす起上り、三刀六刀、九刀や九重の、朝敵外道も御退治あり、御弓矢の威徳を仰ぎさてこそ、雄略天皇と君が、名高き三重

浦島を入れた横

亂れ小柳亂れを柳共に心も亂るゝにそもじ、戀にはのエイソリヤシな、ゆきて、エイくよしな。のゑいくおれを、濱千鳥が寄せ来る、くくく小浪に揺られて揉れてちごるもどる。たごるもん、ちりはになりてきなくようごり、よなくまいかまたのゑいよはん、ははんくくおりくはんくゑいくアゑいけいの海面を、眺めにあかぬ、浦島は、入部の船のらんの梶故郷へ歸る唐衣、錦の袂綾の幕、引汐時に誘はれて、餘所に難波の三つの濱勇み、出るぞ比ひなき實に世の中の、言の葉に浮いつ。

沈みは七度の八つ起にして打出の濱、夜釣の船の浮沈み是や詞の種となる。浪のうねく生茂る、藤江の里の朝風は、焼や藻汐の阿古の浦、烟は空に横折れて、風に宿かるおなみの、尾花かたしき女郎花逢ふ夜の、床に敷波のせ、さをもあとにし、かま路や、徒歩路せねども、眺むれば、白波をむる夕付日、行きかふ舟の、さぬ、くを寄せて縫ふてふ播磨瀧、須磨も、明石もうらくの逢瀬わびしき戀の濱、見渡す内に、漕ぎつれて、はや備前地の影うつす、袖は浮艇の我からに、月を藻にすむ虫明の、瀬戸の、松風、ざんざらめけば、磯の小浪もつれて立つとよ都まで、響き通へる唐琴は、浪のをすげで風や彈らん琴柱に、落る鴈金の影は見れども我思ふ人し、なければ、玉章をかけて傳へん、あてもなし、都に殘す産の子の、それさへ、君に宮仕へ、心にかゝる、事とては今ゆく船の向ふ風、ほかには何も浪の上所を問へば大島の、沖に御船をこぎこめ、錨をおろす山風のかへしを、待ておはします折節此處に焦れ来る、波世めをせる網船の、綱手く、つて留めても、いきたけ知たる漁師一人、腰巻笠に竹の笠、濕る松明振上げく、夜食の肴召さないか、鯛ぞ、鮓ぞ、鱧もある、めばる、く船の内我目を張て見渡せば、船頭舟子と始とし近習外様の侍まで、追風待間の高射、胴の間には宿直の武士、一人か二人か耳語の咄ひそめく計りなり、してやつたりと心に悦び舟をおもてに乗廻し、笠笠脱捨て船屋形に跳入り、ヤ油断なり浦島、圓大臣が成の果能よつく見よ、都を追出され海賊半分の漁師風情になりたるも、雄略天皇を始めおのれ等が世にあるゆゑ、此海上通ると疾くに聞てつけまはし、くたる今日、今宵、日比の恨思ひ知れと呼はつたり、浦島太郎ちつとも騒かず、女御の縁を思召し助けられたる命、根腐て死に來たかと、扱より早く切て蒐る、引外して刀もぎすて、掴みつけば儘と組み、こけつ轉んづ繁がぬ船、汐に誘はれ遙の沖に、流れ流る、汗しみづく、館の高欄踏放し、海にかつばと落入なが

ら、兩方放さず放しめせず。浦島運や強かりけん。指添引抜き圓が只中。割ては剝り扱ては差し。疵の口より入る沙に、うんと叫ぶも聲水ごもり。命の果は白波の死骸は流れて失せにける。浦島一人今更に手に取る棍も權擡も絶え。人氣絶えたる波の底。上らんと思ふ氣も仇波。踏張る足のそこなく。沈まじ浮かんと心に。手繰る思ひは千尋の底深。くこそ。三重入にける。怪しき水路。蘭々たる。そこ白波。打過れば。靈光輝く。浦島夢とも辨へず見上れば。金字を以て大龍王宮と書たるこそ。龍宮城とは知られたり。時に頭に鯛螺。海老鮫蚌。無量の魚鱗。頂き連れたる官人に圍繞せられ。しやかつら龍王通天の絳紗袖の袍。碧玉の圭を正しうして白玉の床に着き。善哉。浦島太郎。魔が秘藏の乙姫。三度命を助けし厚恩報しても猶餘りあり。人間と龍城と其境。隔り通路絶えたれども。御身仁愛の志。深きゆゑ。横死の難を救ひ遙々爰に迎へ。魔が聲がね希人の疑ひを晴すため。契りし日本の姿にてま見えよや乙姫と宣へば。髪も姿も馴染たる飛鳥で別れし妻の姿。我こそは乙姫よ。喃懐しの都人。縁あればこそ今爰に又めぐり逢ふ。嬉しやと互に手を取交し。嬉し涙に附添ふ侍女ども。さては日本の本。聲君様よと瑠璃の臺を設け。天の誓やかうがいの杯。とりとめぐる盃も。和國にためし菊の酒。彭祖が保つ七百歳。それは仙家の菊の滴り。是は所も龍宮城。たぐひも波の底深き。結ぶ契を不思議なる。浦島龍王を揖し。稀代の御禮應遂来いしうの樂み。極りなしと申せども。故郷に残せし一子小太郎。海に入たりと承らば歎き悲まんも不憫の至り。あはれ御恩を以て日本へ御歸した給へと思ひ。こふでぞ望ける。龍王龍顏麗しく愚なり。龍宮城の一時は人界の五十年。爰に來り給ひてより僅の内とは思せども。日本の年月四十餘年過去り。御身の子孫榮ゆる體。日本の有様此處に映し見る。龍宮第一の寶。明王鏡といふ鏡。是を開て見すべしと宣へば。乙姫は浦島の歸國を留むる嬉しさに。開く鏡も下

紐も解て。わりなく

### 鏡の七世の後

斯て浦島。しやかつら龍王の勅に任せ乙姫に誘はれ。莊嚴微妙の廊下を歩み三重の樓門打過れば。地に白銀を敷島や我故郷にありぞとも。いざ白波の其中に七寶七重のくうでん鏡を磨き。瑠璃の瑤瑤珊瑚の華鬘。天仙彩色の錦の外帳さつと開け。黄金の大床波忽ちの臺の上。一由旬の鏡据られたり。是こそ人間世界を映す龍宮第一の明王鏡。見て疑ひを晴れ給へと教の如く立寄れば。明々とある鏡の内。物こそ映り見えけらし。其様日本の家造り。立出る主人の其骨柄。凡の人にはあらざりけり。能々見れば我子の顔。稚妻の。花薄。何時の。間にかは穂に出て。招げと呼べと鏡の影。逢ふとはすれど物言はず。詞なくくゆかしさを。心にとめ目をとめ。行末如何にとなが。めやる。親の譽を子の代まで。吹傳へたる風折鳥帽子花摺。衣襖す。浦島が子の小太郎久行。雄畧天皇の御覺えめでたく。續きて清寧顯宗仁賢。四代の天皇に宮仕へ。我身に積る年月も六十路餘りの春秋を。丹後の國主とほのめきて。妻も子もある幸草の。三葉四葉の殿造り。磨く鏡の其而消えて雪間の梅の花。苔開けば四方の春。これ浦島が孫の代と。檐端に來鳴く鶯のひとくく。の囀りを一と夜くと聞なして。閨の戸出る小娘の。白齒の雪や振袖に梅の香包む年ばひも此秋風を身に入れぬ。人目の關屋小柴垣。打晴れく。の庭の面。空には寒き春風を。肌艶の温かに。抱て寝盛り戀盛り。比翼の鳥の。思ひ羽根。すげて真紅の糸引締て筑波嶺の。峰より。落る。瀧の白玉。一二三。やうもう小羽根。餘所へさる。な。それ。行くな。羽根さへも。心があれば突く手になびく。夏瘦もせず蚊も食はぬ厚き情の。羽子板に。書たえにしの知らまは

し嫁入頭、の女郎花何時しか妹が手枕に、添寝の露の、子持月大人くれたる年の矢の、射るが如くもたつ月日、武烈繼體安閑天皇、宣化の帝四代と過ぎ、鏡に映る稚子は、浦島太郎が孫の子の、曾孫の血筋愛らしく、おしるのや、ちよん、女郎衆かお手にいちやおけいちやさまを、ちやうち、あは、はしりこさり、足の涼い草履買ふて給れ、雪やこんく、霞やこんく、舞ひまひこまめくるりくるりと、稚子の廻る月日も淀みなく、鏡の面清朗たり、乙姫教へていやなふ申、此土に來り給ひてよ、日本の年月は、百八十四歳を経て欽明敏達用明天皇、崇峻推古舒明皇極、此皇極天皇の御代に始て、大化と申す年號おこり、七の帝の代も去りて斯くいふ内にも移る月日、今現はる、は君の御子孫、四代を過し鶴の孫、あれ御覽せとありければ、浦島はつと心付き、見れば鏡の其内に秋吹送る、風の音、稻葉そよ、人音そよぎ、田地持とてのつしりと、身に備りしはうろく頭巾野邊の千草を見る振も、人を使へば銀の齒の、足らぬをせめる鬼薊、扇振上げ打か招くか初尾花、はつと下部の女夫連、小田の早苗の穂に出て、中稻遅稻の翻れ咲き、賤が手業の暇なく、妨干す稻扱ぐ又、妻は粗する、よい世の中の米、俵心やすく抱へて、御藏へるい、何をいふて運ぶよ、抱たら緒たらさ、猶宜る、重なる月日、年暮て鏡の面も亦更まる我世こそ、浦島が爲曾々孫の家に移れば世も既に、孝徳齋明天智天皇、文武持統、文武元明、元正聖武の世もかはり、鏡に映る秋の山紅葉の、錦、木の間に、慕引渡す、野遊の體、戀に意氣地を伊達髪や、寛潤指た長刀對の小性がふれ、紅葉、散た景色はやれさて、外にたぐひもな、酒に亂れの打治れる、日の本、や、大和の、國の名物、お名は何と申すぞ、内裏邊りの機音、高麗も、及ばじ、京、羽二重の御所染、簾屋針妙縫箱、挿櫛の巻繪に亂れみだる、色上戸、君の盃、冷でも、燗でも、さあ注げ、さあ飲め、彼方へはよる、此方へは上

近松全集

近松全集

る、く、色にいでたよ紅葉狩、太山おろしは吹けども、更に身には寒からじ、民にうれひの色もなく、治り願く、御代ぞ目出たき、浦島見遣る氣もそやうに、目撃一しゆんの内にかばかり替る人の浮世、今日の本の御あるじは、何と申す天皇やらん聞まはしと問ひければ、されば孝謙天皇淡路の廢帝、稱徳光仁四代の天子崩御あり、今の世は桓武天皇神武より御代五十代、年號は延暦と改まり、君の子孫も玄孫の世、鏡の影を見たまへとのたまふ聲も、棟高きいづれの、神のやしるぞや、うなばら近くわくざしの、鳥居は波に影見えて、朱の廻廊しんく、神さびわたるをりからに、翁すがたのいざり松、身に寄る鏡や磯の波、みなごとくを出る船やまた入る、船の海の上これ、此の殿島の大明神、神力應護の御願ぞと、も、たびちたび線かへし七たび映る鏡の影、七世の孫の影きえて鏡の面しるじると、浦島太郎ばうせんとあきれ、果たるばかりなり、乙姫重ねて今の翁は君の七世の孫、殿島の神主なりしが、下の禰宜長谷部の國長といふ者、浦島の系圖を盗み朝廷を掠め神職となる、然に今天下大きに早魃し、民は山野に歎き臥し、當今淳和天皇愁ひ給ひ、殿島に行幸なり、あはれ君が七世の翁、昔の神職を勤め給は、忽ち四海を潤し、天下のなげきはあるまじとのたまふ、詞の内より浦島、さては日本帝王の愁、立歸つて其國長とやらんが非道讒言申譯、我子孫を舊の神職にかへし天下の歎き救ひたし、立歸るべき道あらば日本へ戻して、たべと望みける、ア、愚なり、君龍宮へ來り給ひ、七世映りし鏡の影しばしが内と思すとも、雄略天皇の御代よりは、帝王三十二代を過ぎ、三百五十五年の月日、なまなか故郷へ歸らせ給ひ、浦島太郎と宣ふとも七世の孫子を始めとし、誰か誠と思ふべき、留り給へどありければ、龍王遙に御覽あり、歸らんといふ浦島は日本のため子孫の爲、留むるともよもといまらじ、力なし此上は日本のいへつとせん、侍女に仰せて一つの箱浦島が前に据へさせ、そも此箱は玉手箱と名

づけ、内に八千歳の壽命を籠めたり、必ず開く事なけれ、名残借くは思へどもはや立歸れと龍王も、共に絞る、御涙、重き仰せに乙姫も、力なく立別れ又逢ふ事は片男波、箱を抱きて浦島は、日本に歸る雲の波、霞の波を隔てつゝ海まんく立出て、直下と見れども底もなく、邊もしらぬ海中に、行きしも通力歸るも自在、藻に住む虫の我が心ひかる、後髪、乙姫の顔をみるめ和布を掻分け、三歩歩むともなく行くともなく、落着く方を何國とも白波、寄するせさかくる、涙の潮ひつたりと身も濡れ鳥の聲ばかり、昔聞たる覺えにて日本の、地にぞ歸りける

第 八

天の五漠に火帝入れば天下大いに旱魃すといへり、當今淳和天皇明君なりと申せども、天地氣候の不平にや、一天なべて雨降らず、萬民の歎御身に逼り、安藝の國嚴島大明神に行幸あり、聖主自ら雨乞の勅願申を頼もしき、神主權の祝浦島久富、幣帛を捧げ肝膽碎き、祈る折ふし白髮の老翁御垣の下に首を下げ、我等浦島太郎が末孫權の祝久富と申て、當社の神主今久富と名乗るは、長谷部の國長と申て我等の下禰宜、先年我が浦島の系圖を盗み取て參内し、朝廷を言掠め神職を押領し、當社明神の神祕をも知らず、妄りに神につかふ此旨奏問冀ひ奉ると述べければ、久富恟とし、ヤア此久富が鼻の先、久富と名乗て出るは曲者、仕へ奉る神の神祕を知いで神主が勤るものか、忝くも當社明神はしやかつら龍王第三の姫宮、曠昔推古天皇の御宇に、佐伯の倉敷といふ人此浦に遊浪の折節、紅の帆を上たる舟西方より流れ來り、内に一人の美女ありて宜はく、我王法を守るべし、此處に百八十間の廻廊寶殿を營み、嚴島大明神と崇めよとの神勅、推古天皇の御建立、此外に何の神祕があること、掴み附ん頬魂、老人呵々と打笑ひ

「フ、それは竹馬の童も知たる事、御正體は忝くも天照太神の第三の姫宮、表はしやかつら龍王の姫宮と立ること、神祕が中の神祕なれど、言も敢ぬに久富打消し、ヤア秘密といへば何いはふと儘、大街の生賣僧、あれ追拂へ引縛れとせり合ふ所へ、濱邊の方より浦島太郎しばしと聲をかけて走付き、ヤア珍らしい久富、我こそ汝が七世の祖父、浦島太郎久壽よと、老人に縫りつき祖父と名乗るは三十許の若男、七世の孫は七十餘りの敏親仁、若の者酒に酔ふたるかど一度にぞつとぞ笑はる、浦島太郎玉座に對ひ、我は曠昔雄略天皇の御宇に、不思議に龍宮へ入りしかど、一天旱魃の愁をも救ひ、七世の孫が虚名をも申開かん其爲に、立歸つてひと申上れと帝を始め、一坐の公卿顔を眺むるばかりにて、返答する人もなし、浦島太郎言ひしらけ、何を證據に言わけんと、見れども、日本の草木も見忘れて、疑問く便もなく、暫し涙に咽びしが、フツア思付れりなふ方々、此箱は龍王より授かりし玉手箱、八千歳の壽命を封ず、必ず開かず事なかれと、教への詞は重けれども、差當る證據證方なく、只今箱を開くべし一ツの不思議あるならば、我は浦島、此老人は七世の孫、當社の神職御疑ひを晴れ給へ、八大龍王大海神、別してはしやかつら龍王、一ツの験を見せ給へと、蓋を開けば這は如何に、不思議や紫雲棚引き出で、浦島が身にかゝると見ゆし今まで若き色艶も、忽ち姿衰へて身は百歳の老木の柳、おの／＼はつと驚き給ひ、奇異の思ひをなす處に、神職久富俄に顛動狂ひ出で、なふ怖ろしや浦島の系圖を盗み、我久富よと上を欺き神を偽り、人を苦しむ神罰なふ苦しや堪がたやと、目口より血を流し忽ち空くしなるよと見えし、雨雲棚引き降る雨は、山野を濡す玉手箱、開て悦ぶ浦島が、壽命は石より金より堅き楠の大鳥居出現し、かへり申しの神樂の勇め、音も澄渡り、一天四海皆悦びの種となり、續いて五穀成就し、國民豊に治る御代、千代に八千代に八千歳、浦島太郎が壽命の袖身に着ぬ、人こそなかりけれ

# 長町女殿切

例の童の言の葉にいひよる品もよし蘆の、難波の京の物語今の狂歌に取りなせし。京童の口ずさみ落  
 首洛外とりしに、其一節を繪双紙や。下立賣を堀河へ引廻したる角屋敷刀屋石見何某とて諸役御免の  
 受領職。折紙太刀の用迄は所は勿論屋敷方。男たる身の魂の刀脇差。拵請取所と大看板。見世は弟  
 子に打任せ。誰が下人やら頭やら。咄し目貫の性よしもつい焼つけて悪性に。身と研ぎへらす奉公や跡  
 のこじりの帳面の。つばめ合せと親方が鞘鳴するぞ道理なり。主人石見は禪門の白い天窓に黒眼。仕事  
 場を見廻つて。ヤア己が足音聞たやら皆細工に精が出るよ。煙草ばかりが仕事じやないぞ。彼岸過たり  
 やめつきりと日が短かい。夜仕事さしよにも此油の高さでは儲ける程皆戻る。ヤア戻る序に戻橋の鏝は  
 戻つたか。一條のほ所様の菊鏝も。九月の用じや合點か。黒鞘が出来たらば烏丸殿へ渡しておじや。  
 二口屋のはみ出し猪熊の革つか。なせに遅いと毎日二三度使が走る。醒井の親粒もまだ入れてやるまい  
 な。三條小橋の下細工菅浦作りの拵も。五月からの詠へ何として出来ぬぞ。長刀直しを研だらば。辨慶  
 山の町へ持ていけ。兩替町の銀作り御池の町のふち頭。小川通りのせかいらぎ今日明日に持してやれ。  
 さつきにわたせた下の町の酒屋のかみ。入婿が入る引出物にしたいが。娘が望む道具じやと大切先の大刀  
 物。身ばかり買ふて去れたは後家鞘に極つたと。堅い親仁の輕口も刀屋とてや古身なり。重手代の忠二  
 郎旦那の前に帳面控へ。左介喜八は算盤のさやんの九月節句前。算用の高見合してヤア。此半七の大の  
 らめは。帳面も埒明す今朝から爰へ頬出せぬ。何所へうせした又祇園狂か。宮川町か繩手か。朋輩共が知

つておる。穿鑿せいと喚かる。イヤ半七は昨日から頭痛するとして鉢巻で。小座敷に寝て居升る。なんじや頭痛じや。若い身で又しては頭痛のつかへの何のとは皆茶屋酒が過るから。粥でも焚いて喰はしたか。アイ粥の事は扱おきお湯も咽へ通らぬと云ふて。やうくと今朝酒の爛して飲んで見て。どふでも色のない酒は飲まれぬと。苦い顔し乍ら中腕にたつた三杯と。云へば主も興さめて。叱る心も拍子ぬけ笑ひ「暮せし秋の日の。西山近き。染浴衣。愛宕参りに袖を引れた。是も仇なる世の勤め。四條の水に名を流し。身の愛敷を積あげし石懸町の井筒屋の。お花よ盛戀盛り。身を賣品はかはれども。刀屋の半七と深い中ごと正銘の。互の。誠研入れて締た心のもるひねり其柄糸のはつれそめ。我親さめのつれなさを。問ひ談合も中絶し。いと男も親方がより首尾はどふぞと案じはれ。顔の見たさも道瀬なく。駕籠昇雇ふて草鞋かけ。浴衣を假の旅出立。ぼんぼり綿もひねくるしく脊中に敵の寄るべなき。石見の見世へ頼みませふ。ハ、こりや旦那さんでは座りんすか。内方に居さんす半七殿に。一寸逢ひたふ座りんす。親方きよつとし。はていかふりんす」と云ふ女子じや。和女は半七が女房か。ハアつがもない私は大坂者。半七が伯母で座りんす。アレ未りんすじや。ムウ大坂の伯母とは。伽羅細工の甚五郎の内儀か。ア、其伽羅々々。何かのお禮にとふ参る等なれ共。主は細工の人だから貧な世帯の隙無で。今日迄の無沙汰大事の甥が出世の門。祝ひ月を心がけ愛宕かけての登舟。乗り合の窮屈さどろくと寝よとすりや。うしろからせゝるやら前からは毛の生へた大きな足を突出すやら。齒切するやら寝言やら。可笑いことの數々は山崎から連もあり。あがつてお山を一息に嵯峨へ下たりや仕合と。釋迦様の開帳の相伴やらおこいやら。旅籠屋で支度して。直に是へと出次第の口は手管に馴々しく。皆様御免。ア、しんごうと腰かけて。煙管取手も粗略に。皆様半七の朋輩衆か。しんくな仕事で御座りんす。縋子の

肌着に色更しなの。伯母と名乗て刀屋に見するは胡散物なりし。ソレ喜八。伯母が逢に登られたと。半七に知らせてやれ。誰ぞ茶を進せぬか幾人をつても氣が附ぬと。云ふ内に半七はそつと起て障子の隙。覗けば馴染のお花なり。南無三寶扱は内々苦勞にした。慾づらの繼父めが年切増のものがりごと。急々にせがむと見へた。其工面に來たそふな。何にもせよ出過ぎたこと。逢も危なし逢はぬも又。仕舞の附ぬ。我身ぞと。夜着引被り生たる心地はなかりけり。親方は正直一へん半七はなせ出ぬぞ。頭痛でまだ起られぬか。他人では無しなふ伯母は。寢所へいて逢はつしやれ。お山狂ひで酒やら何やら過る故。煩ひ暮して物も喰はぬ少異見して下され。そりやそこへ案内せいと。下地は好に据る膳うまひ首尾とぞなりける。や、時過て是も又愛宕参りの花お札。風敷呂包下人に持せ。刀屋の石見様とはこなたか。大坂甚五郎が女房半七に逢ひたい。伯母が來たとおつしやれて下されと。云ひ入れば家内の上下愕然して。ヤアこりや何じや門にも伯母。内にも伯母。街か狐に極つたぞ。不審がるやら怖がるやら中にも亭主は一理屈。ヤアざはくと。驚い。奥へ聞へりや詮議がならぬ。黙れくと小聲にて。おもての伯母は通らしやれこへくと云はるゝにぞ。綿帽子取てしどやかに。是はまあく結構なるお内方。ついしかは出入りさねば何誰様が誰様やら。コレ其所な前髪殿。盆一枚貸つしやれ。わたしが事なりや心まで奥様へ上げます。ひの上の切荒布花の都へこんな物お耻かしやと差し出す。伯母の年ばい恰好を見れば。ごこりやおもぎしも。半七によく似たり扱は奥なは似せ物めと。思へども念の爲。是はく云はれぬこと。女房共は寺参り戻つたら見せませふ。してつきも鹽もなふ半七に。何用あつて登られたと云へば。伯母は打笑ひ。いや半七にさのみ用もなければ共。旦那様へ少お頼み申す事。つれあひ甚五郎登らるゝ筈なれ共。お屋敷方の用は多し飛脚でも如何とて。扱私に登りしと下人に持せし風呂敷より。棒鞘の一

腰を取出し是は是、信國とや。去る大名の若殿へ蔵屋敷から上らるゝ。大切な荷物大坂にも彼是と、職人衆も多けれど京細工と申甥子が爲、内方へ頼みます。注文は此通。さぞ方々の請取御忙しいは存じながら、どうぞ近々に頼上げます。此次手に半七めが顔も見えぬ。何やかやに登りましたと差出せば。石見は脇指注文見合せ。是は此方の商賣。心得たとすつと立て是伯母は、戀しがらる、甥がさまを見せませよ。暫く其處にと云ひ捨て思ひ掛なき一間の障子。蹴破つてつゝと入る。二人ははつと驚いて。狼狽る胸ぐらを両手に掴んで。ヤイ半七のいきずりめ。よふもく親方を踏附たな。あの女が来た時か。らござりんすが呑込まれぬ。りんすの正體顯れた。お山やら惣嫁やら厚皮類な晝日中。大坂の伯母でいと目利の家へ似せ物を。ぬくく〜と寢所へまで手引させ。主に一杯。おのれめは旨い所を喰ふたな。親代々の刀屋を太鼓持にするのみか。座敷を揚屋に仕くさつたお禮申と突倒し。あさし掃掛取てさんくに打擲く。伯母は此體聞よりもはつと人目の耻かしさ。憎うもあれど甥子が難儀思ひやられて何とかなぬか。私は兎も角も伯母者人を打擲あり。必ず後悔なさるゝなと云はせも果すヤア、盗人猛々敷く其姿になつてさへ。まだ惣嫁めを勞はるか。主の身代空になし天道を掠めをる。ヤイ天罰と云ふもので大坂の伯母が登られた。目の前へ連ていて叩き殺して腹をゐる。サアうせぬかと杖振上げはた〜と打つ音に。伯母は悲しく走りより旦那様暫くと。取附ば振放し絶りつければ突倒し。とかふする間に思案してヤア、こりやお吉か。そなたは此所へごふして来た。コレ申し旦那様。あれは私が妹と云へば旦那は與さめ顔。半七は猶合點せず花はさよる〜狼狽る。袖を控てコリヤ妹。ヤイお吉これ姉じや。姉が顔を見忘れたか狼狽るものと睨つけ。目ませて知らすれば漸々と心附。ハア、ほんに姉様。〜と姉じや

と云ふ聲懐ふ斗なり。伯母は色目を曉られじと。ヤイだいたん者。五條の木賃宿へ行きはせて、姉とへついで來ぬ内へ驅りらしいこと云ふて。來た故にこんなこと旦那様のお山じやと。は覽じたまは尤。今日も愛宕でわたしをお袋とはか云ひませぬ。それも道理じやあの人は腹がはりの兄弟で。十五達ひ半七が爲には伯母なれど。年は甥より二つ下伯母甥のよしみとて。親うするを知らぬ目で。女夫と見るにどがはなしと。非の入りさうな事どもを。いひくるめたる情の程二人はあつと嬉しさも夢に夢見る如くぞや。主の石見まんまとくひ。ム、ウ二人ながら伯母はか。よい年して不調法過まつた免してもらを。伯母と怪我は無つたかと脊中さすれば彼方向く。ヲ、若い人の道理々々。そちらな伯母様頼みます機嫌取て下され。是半七。言分してくれともぢ〜と勝手へ出で。皆の奴等うつかりとなせ茶漬でもして出さぬ。腹の立た揚句じやにけんどんを取に遣れ。マア盃を出して置け。むつかしからふ己は出見世へいてゐるぞ。はれやれ腹の立つ勢ひ口に。伯母を知らいでみしらしたと足早〜にこそ出にけれ。跡見送つて半七は。伯母の前に手をつかへ何も態と申しませぬ。面目ないぞ有難いと胸は二ツに裂ますと。悔み歎けばお花も涙に染々と。わたしは四條石懸町。井筒屋と云ふ茶屋に花とやす勤の者。半七様とは末々まで面倒見あふ契約に。ちといき詰つた愛ふしの談合に。逢ひで叶はぬ事あつて横着な此有様。伯母様なら大事の甥を。酸かすどのお憎しみをこそ許して下さんせ。いとしいが唯因果ぞと共に。かこちて泣きければ。伯母も同じ涙にくれそふ見たく。つれあひは大坂で伽羅屋といへば。町のよい衆屋敷方。人に知られて世のうる無情。此伯母とても知つて居る。色事は若い役此上にどの様な。生る死ぬるの場になりても。厄體もない氣を持つまいぞ。世間多い心中も銀と不孝に名を流し。戀で死ぬるは一人もない。流れの身には取分けて。悲しい事酷いと。そこを死ぬが心中ぞや。眞實男可愛くば五度逢ふものを

三度逢ひ。二度を一度になす時は親方も機嫌よく、戀に身をうつともない。二親もない半七伯母一人、一人、元は知行も取た筋職人の弟子と朽果れど、可愛ひとも不便とも思ふ者は此伯母一人、末かけて頼みます。今日伯母が登らば二人の命は有まいもの、有難や忝なや愛宕参りの一しるし。佛神のお蔭ぞと異見も親は泣寄の、二人が肝にこたへつゝ泣くより外の事ぞなき。伯母は重ねてやれ半七。涙ついでに今一度泣ねばならぬ此脇指。見知てゐるかと差出せば、半七棒鞘の柄引ぬき、中心を見れば信國。真目釘の穴際に風と云ふ字の一字銘。横手を拍て是は扱。我家の重代ぞや親の秘藏が年を経て。廻り來るも不思議なり二度武士に立返る。瑞相なり嬉しやと推戴く脇指を、伯母引とつてからりと投げ、なふ情なのさふらひや。武士になれとて見せはせぬこの脇指故家筋の、かう零落た因縁咄。小耳にも聞きつらん。お花とやらもつながらる人。悲い咄の一通を聞てたも、もど我々は伊勢の龜山者。先祖は猪瀬文平とてあの子が爲には祖父様。お持砲の鐵砲大將百五十石取人。同じ家中に高木宮内とて、八百石取る旗頭互ひに無二の中なりしが、上方のとりうりが此脇指を買りに來て。諸朋輩の附合に祖父さまも望みにて。買求めたい心ざし彼の高木も望をかけ。代物問は三百貫の折紙。心安さの當座の座興。とは云ひながら高木が愈忽。文平お身の身代では高い物じやがお買やるかと。ふつと云しも互の不運。苦笑ひにて一座は濟みその取沙汰の國一杯。いはれぬ猪瀬が齒も立ぬ及物好して高知行の、高木殿と張合て人中で耻辱うけ。あれでも武士かと言囁す。此脇指を買ひては一分立ぬ祖父様の、武器馬具衣裳夜の物まで代なして。三百貫の折紙代一倍まし。二百十兩に買求め直に中心に一字銘。高木に勝との心にて風と云ふ字を彫記し。明れば九月十五日登城の道に待うけ。高木遣ぬと聲をかけ尋常に討果せ。屋敷へ歸つて祖父様は娘子供に暇乞。命に替し此信國必らず人手に渡すなど。お腹へぐつと押立て右の脇まで一筋に。

唯一言の義によつて身上を果されたり。そなたの父様は伯母が爲には兄様。其折しも江戸番直に江戸より浪人あり。永々の憂苦勞悲しい暮しが病となり。いよ／＼つらき其中にも遺言にて此脇指。乞食する迄離すなと藥も飲ず祖父様の、第三年同じ月に病死ぞや。悲しいともつらいとも。情なやお袋も又歎き死。跡に残るは伯母と其方。まだ九ツの頑是なし伯母が心を推量あれ。三年に三人まで同じ月に死ぬること。不思議と思ふ氣が付て及物の相性見る人に。目利して貰ひしに。祖父様父様同じ火性。刀は水の流れ焼以ての外の不吉の脇指。寸は一尺四寸五分。びん尺は災難是を其儘持ならば。三代迄は祟るとある占方に驚いて。捨賣に賣放し廻り廻つて十三年め。お屋敷方より此脇指拵へ仰付られて。孫子の其方の眼にかゝると。はや親方の打擲の難儀に逢ふもこれ不思議。武士美しと思やんな一言の符めより。親祖の命を絶ち子孫まで零落しは。前世の業とは思へども。愚痴な心に淺ましい此脇指がないならばと。科ない及物に恨が残りおつても捨たい氣なれ共。今では大名のお腰の物。家の敵の此脇指。主人の様に撫擦るその時々身過はご。悲しい物はなきぞとよ子にも甥にもた一人。奉公大事に勤めてたも。いとしの身やと掻口説。膝に凭れて泣きければ半七も伏沈み。お花ものかね身の上と語るも聞も主の内。額さ合つ囁きの忍び。涙を哀なる。ヤアうかく話してあれ見世さし時。伯母は直に伏見迄夜中でも舟はある。來年のおはらひには必ず下りや。此脇指の拵。注文の通り随分急いで下してたも。旦那殿内方様へよいやうに頼むぞや。お花女郎にも縁でかな。又頓てやと出ければ。イヤわたしも東。道迄お供致ましよ。ア、折角來て素戻りか。これ半七伯母は粹じや。跡でしつぱりと話しやいの。イヤ／＼別に話す事もござりませぬ。そんなら祝ふて口濡して去しや。イヤ最早お茶も飲ました。ハテ茶ばかりで濟むものか。しんこの様な物なりと茶の子甥の子。のこ／＼振舞や半七と。二人引寄せ寢所の、障子の中に

押入れて。伯母は氣をとり堀河通り。二條通りの高瀬舟直に。大阪へ 三重下りける

中巻

名はかたく。人は和石懸町。前には戀の底深き。淵に愛身をほと町。都の四季の月花を。こゝにといめて通路や。馴染々々の色遊びの。中にお花は忘れても。わすれがたなや刀屋のなかばと深きつま戀に。なつく八丁の糺三味線。心くらべの連引に思ひの色を忍び駒。忍ぶに餘る涙かな。浮氣鳥。そやされて。月夜も闇も此里へ。光満寺と云ふ坊主客。お花に馴し霧のはけきやうとも念佛とも。知らぬが佛の戸帳ぞと井筒が暖簾撞木杖にてひらりと上げ。太郎内にか。四五日お目にぶら下らぬ。エ、珍しいごつち風が吹たぞい。イヤ〜ごつち風でもない今夜はしよさいの無常風沙汰はないと非禮のもどり。ちよつと寄たし心はせく。ごふせふか斯ふ焼香場を。ゆ〜に遣てすて引導も何云ふたやら。不便や今日の日亡者も陸な所へ往くまい。是もお花へ心中と。雪の頬ささ遠慮なく。毘口寄せて頬ずりは。山葵おろしににぬきの玉子いたをな顔の痛やし。お花が浮ぬ顔付に火車も亭主も氣の毒がり。コレお花ごよふの。お寺ならば大黒。茲ではわつさり恵比壽顔して見せまじや。サア笑やいのと迫立れば。ア、太郎おだまり〜。あれは我等に甘へるの。腹立所が猶うまし。か、州二階へ連れておじや。こよひは妓衆の惣揚見事なとか。古手な肴取り置いて蒲焼一種で飲明す。四五本さかせに遣や。南無阿彌陀佛と騒ぎ立て。皆々二階へ上りける。既に傾く宵月の夜も早四ツ半七は。銀の才覺ならず者と。茶屋にはせかれ親方に見限られつ。筒井筒。心の水もかへ乾て流れ歩きにとぼ〜と。格子の蔭に身を潜めお花が便を待ち居たる。こゝに誰とは白髪まじりさんか天窓に無用の提燈。門口にてふつと消し。ハア太郎左衛門様

お宿にか。花めが父西陣の。九兵衛でござるとたつみ上りに言ひければ。亭主夫婦ア親仁來てか。こちへ〜と茶釜の前太郎左衛門顔聲め。此頃段々云ふ通り。其方が娘お花がと。そも〜小めろの時分から手形の表九十年。親方に損もかけず追付年季も明くぞや。なれども勤のならひ小間物屋の煙草屋の。紙屋で呉服屋でひの。すのこんにやくのと借錢が今の金で七八兩。その上親仁も長者ではなし。あの子にかゝる身でないか。がらり甘雨ま一年切まし。居なりに居れば借錢も先其分。賣買高い此節二貫目ぢかい甘雨。其方が手取に温まれば兩爲と思ひ世話やげども。かの柄巻屋の半七と云ふ蟲がさいて。何の彼のと入性根お花が一切呑込ぬ。是からは勝手次第。半七と云ふ職人の弟子こゝらあたりの拂ひさへ尋明す。東ふさがりになつた者。打みしやいでもつふ三文ないは知て居る。あの様なこ〜ごうと腐り合たお花が行末流浪は知れたと。ちいさいからの馴染なれば。よいと聞く様にはござらぬ。ごよそ異見でも召れぬか。壁に馬乗かけては明べき埒も明ぬもの。前びろに手形しやう爲に呼に遣たと語りける。門口には半七聞けば悲しさ無念さの。格子の柱嚙ひしぎ齒をくひしぱり泣居たる。親仁は横手ちやうと打て。扱々苦々しい。親方殿にお世話をかけ不孝者と申さふか。その刀屋め知て居る。ならず者の大將蕪被りの下地。イヤ花めはこれに居る。爰へ來い用が有る。引ずりに往てお客の前で耻か〜さうかと。昔作りのつごど聲お花は人目の耻かしく。アイあの盃藤さんさよさん預かつて下んせと。言すて降る箱梯子。ヤアとつさんか夜更て何しにござんしたと。そばへ寄るを突倒し。ヤイ不孝者。親方殿お話しで一から十迄聞届けた。半七めと云ふ騙めと夫婦にしては。年寄た此親が鼻の下がひあがる。甘雨と云ふ金が天から降るか地から湧か。かたりめが挨拶はらうしやんと切てしまひ。年切増て奉公するか否と言へ分別有り。サア〜ごふじやと腕捲り掴み付べき顔色なり。お花ははつと胸塞り暫し。涙に暮けるが。

なふ父さん。朋輩衆は内證客さん達の手前もあり、さもしいことを言はんする。勤する身の親達はこの口聞いても可愛や親ゆる苦勞をする。定め年も近づく届いた男を見定め。末の片附心がけ身を安樂にして見せいと。云はぬ親は座らぬ。節季々にせびらかし足いで又年を切まし。男に迄添せまいとはあんまり酷ふござんする。ほんの親より繼父は猶大事と嗜み。随分孝行盡せどもいなさん私にみぢんも憐みはござんせぬ。殺しなりと何様なりと。分別次第にさあんせ。半七様と挨拶切り勤はせぬと許りにて。人目も耻ず大聲あげ身を悶。へてぞ泣きわたる。傍若無人の繼父を笑ひ。よふ吐すな。盗人の畫寝も當がある。おのれが母に何の見込はなれども。おのれを賣て喰ふ爲め女夫になつた。今の詞は誰が教へた半七のすりめにならふたか。へりくしやべる頬けた蹴はないて仕舞んど。武者ぶり付を井筒屋夫婦。年の内はこちの物疵付させぬと振放す。思ふ男に添れぬからは殺しや。ヲ、殺しかねふかと。擲合採合大喧嘩破れかぶれと半七。裾ひつからげ井筒屋の庭へつか。柄巻屋の半七と聲をかけ。九兵衛を取て突のけ真中にごつかとすわり。コレ親仁。其方はお花が繼父すにつけ粉につけ憎いのも理り。此半七をすりの騙のがんごうのとは。いつ騙りした盗みした。半七が目には其方の人賣と見たもがりと見た。よし夫は兎も角も。お花は己が女房すべし奉公仕舞ふては。繼父殿でござらふがもがり殿でござらふが。主のある女房分別して物を云へと。せきくる顔の青墨叩き散して詰かくる。ム、ウ刀屋の半七とは其方か。これ顔見よう。はれよい男の。江戸元結にしゆす鬘天窓付は兩替町。内證は付我殿見せかけ力身置てくれ。此年まで敗毒散一服飲ぬ此親仁。ゆすりはたぬア、慮外ながら。親も許さぬ女房とは栗田口へ往きたいか。此娘女房に持ては小判がいるが合點か。小豆粒程な細金さへないさまで。何じやお花を女房じや。いきがたりとは其事。いつそ手をよふ巾着かやじり切れとぞ喚さける。

半七ぐつと焦あげ。ム、ウよふ云ふた小豆粒は持ねども小判と云ふ物持て居る。來年の給分甘兩渡すからはお花は身が女房と。紙入より金廿兩取出し。サア金でした小判と云ふ物近付になつて置けど。めつかうに投付る。ヤイ半七。あの娘はまだ五十年が百年が顔に色氣の有る中は。奉公さして喰ねばならぬ千兩道具の娘を甘兩の目腐金で。女房に持ふやべかこまなるまい何所で盗んでうせたら。後の餘索喧しい。おのれに呉ると投つくる。イヤ金貫はふ好みがない。おのれに呉ると投返し。投つけ打つけ掴みあひお花ははつと泣出す。太郎左衛門つゝ立コレ半七。お花はこちの奉公人親仁とのせりふなら何所ぞ外で仕たがよい。門には大勢人ばかり客の邪魔して貰ふまい。それ男共追出せ心得太兵衛長兵衛五介。ばらくと立かゝり無理無體に引出す。お花は譯も正體も涙乍らに取付を。ごこへくと押分る。親仁を中の關守の雪駄かたしになら草履。足にはたらぬ半七が警をつかんで引れてしは目もあてられぬ次第なりサア親仁も先歸つて諸事談合はあすの事。ハツアそれもそふ然らば明日参りませふ。申までは及ばぬが。花めを敷居より外へ手放して下さるな。ヤイをこな不孝者。おのれ明日來てなんとする待て居れ。エ、ウとせいで張て咽が乾くとごぶりくと熱はなの。茶びん天窓を振立て河原を西へと歸りける斯る哀の最中二階の階子ぐはた。敷から坊主の佛頂顔お花ごに何して居る。さつきの押入の盃はいつの世に戻る事。惣體今夜はうなたが顔浮やせいで酒が呑ぬ氣を替て西石懸の關東屋で騒がふ。太郎山衆貸してたも。ハア残りの子供は西石懸が天竺へも御同道。お花一人は我等が内。手放しては内證に氣遣ありまの。いふなく。皆迄云ふな湯のだんこか。湯治するなら遣以錢見事な事かと金三兩。衣の下より投出せば。是ころほんの忝け有馬の湯のだんこ。やれゆのだんこ。今はありまのゆのだんこしよんがる。西石。懸へと。三重、騒さける同じ所も西側は。祇園丸山前にうけ。芝居の權暗さ夜

も、行かふ人の提燈は月もおろかど照渡り、見おろすく、おろす駕籠からぬつと出た。ほうらく頭巾の醫者殿は、薬師如來の引合せつば屋の客と脈をとる。うれく、花車も亭主も棧で庭掃く人呼に。走る足元おかるじやないか。お玉じやないか。お玉やあひ、はて是から呼で届くものか。わけもないと云はん紋紗の衣着て、ぞめき姿ののら坊主。後姿見た様な。ヲ、夫よあれは悪僧が五人組。萬年寺の同宿忍び戀路の掴みどり。ふかみどりやの小丁稚が。一中節の川風に聲も廣がる扇屋の、仲居のまんが供して通る彼は澤村長十郎。あつたら男が頓て大坂へ下り舟。歌流金子も難波津へ。咲くや此花其花の。噂も戀の種ぞかし。苦のない女郎の仇口を聞くにも増る涙の露。お花は一切氣も浮す四條の河原幾萬人。ぞめきの中に彼の人若やと目をも花色の。ちやうはん頭巾しよんぼりと番屋の蔭にたゝすみしは。儘にろふじやア、ちよつと逢たい。云れいとも山衆の手前。客の手前もはかりかね。床柱に打凭れ念佛申して紛らかす。料理人の傳介盃を下に置き。ヤア花様の念佛で思ひ出した事がある。三味線小歌も古めかし。町方に流行る阿彌陀の光と云ふとして。御一座のよね様方されにても阿彌陀如來に當つた者が。豆腐と酒と買に行く役人。色里に無いづな騒ぎ。花姿様方いかにと云へば。ヲ、是はめづらしい早ふくと紙押廣げ。蜘蛛のす御光延引さいて鏡の高。もみ團は惠方果報後に無理云ふまいぞ。サア今が大事の所と鼠なきしてしめあけに。さよさまごふじや十六文。お仕合。藤さまは三十六文小めらの林は十文。それははまなみさ。波や。しが様たつた二文か。お杉はなんば悲しや己は三百じや。エ、儘上前垂質に置ふ迄。ヲ、云やる迄ない錢がなくなれば布子をばささんしまさん。是も如來ははづれた。サア是からは花様きりくもみ團明さんせ。ア、忙しい何ぞいの。私がやうな因果人がなんの阿彌陀になるものか。これ見さんせと押ひらけば。そりやこそ云はぬかサア花様が阿彌陀じや。名代は叶ひませぬ花姿様

に豆腐買して居乍ら田樂喰ませふ。きつう座敷が洒落て來たサア面白いと笑ふにぞ。お花は何がなかこつげに出たいは心一杯。猶も色目を曉られじとア、迷惑。そんな事に今まで歩いた事なけれども。てんのはのかは往て除ふ。其間に用意しておかんせ。ヲ、用意指子鉢せつかい指子木しやに構へ。待て居ます早ふく。ハテそこらは合點じやと。姿も下女に二世かけし男の爲や徒歩跣足。ついに被なれぬ置き手拭急げばまはる。小襦はらく杉が前垂かり橋を。足もしごろに行過る。半七は番屋の蔭ちらと見るよりコレく。愛に居ると招かれ。ヤアなかばさんかいの。逢ひたかつた抱合とかうは涙ばかりなり。コレ泣て居ては濟ぬと。今宵中に大阪迄退ねばならぬサアおじやと手をひけば。マア待たんせ先刻の小判ごふしての才覚ぞ。詮方なさに恐い事なごさんせぬか。有様云ふて落付せて下んせ。云ふ迄もない事此身になつた半七を粉にはたいも一歩一ツ誰が貸う。先度の脇指三十二兩に賣拂ひ。銘なしの下坂寸も焼もかはらぬを。八兩で買ひ替へ二兩で銘を彫せ。拵へ濟して大坂へ下し。其賣へぎの廿兩たとへ首になるも。もふ取返しのならぬと。此上ながらも罪に遇ば我一人。伯母婿伯母にも難儀をかけすそなたの行末頼むため。心ざすは大坂。誠に和女の繼父が盗人と云ふたも虚でない。我身で身が恐しいと。語ればお花も身をふるはし。サアそんな事であらふと推量にちがはぬ。いとしや私ゆる種々にお身を狂はする。詮議の時は皆私が業にして身を逃れて下さんせ。ハテ罪にあふとも逃るゝとも。分隔はないはいの。はんにもふじや女夫じやもの。又締寄せて泣く中に。跡の二階に花様遅いこりや豆腐に買れてか。迎ひに往けと聲々の南無三寶。見付られては足元暗きいせきの石に踏くじき。長き紅絹裏足纏ひ走るとすれど夜中の太鼓。どんくぐりのづしを出れば建仁寺。だらりが鳴ぞだらつくまいぞ。駕籠よくと呼れども無か開ぬか耳塚の。西に錢座の名のみにて小銭なれば草鞋も。二足を小判一兩

で買ふて。穿く身ぞ、三重哀なり。

おとるををりの

いづくの。憂勤。七枚起請そら誓文。日本國の神さんを欺した罪か欺された。人の恨かねたみぐさ  
 ついに我身の下り舟。乗をくれたる淀堤。淀の河水行く末は。いかなる罪に大坂の。道がごこやら何  
 里やら。身は初雁よ。初霜に。寝亂れ姿忍ばしと前垂。とつて丸ぐけの襪をぢみな抱帯。しやんと結で  
 引締て。歩むと。すれど。行き馴れぬ道はかどらぬ。女旅。これも何ゆる男山。作りし罪は山崎の。麓  
 はあれよあはれげに。いつか都へ歸る山。春は梢に。いろくの。花咲く山にと山巡り。となりは青し  
 夏山の。かしは散るてふ卯の花や山時鳥山あひの。景色の花に顔つくる。笠を傾むけ。山めぐり秋はさ  
 やけき月影の。いたらぬ山は無れども。わけて名高き山うけの月見る方へと。山めぐり扱又冬は。遠山  
 の。雲もてくる雲のあし。賢き雁は南向。北を後に山のこす。山又山や峰白し。雪を誘ふて山めぐり巡  
 りくして山姫の。山衆交りの淨瑠璃も。夕限りの口癖や。今日は姿を町風にやつすとすれど隠れなき帯  
 のひらかた。近くなる。松原過て河邊を見れば。あれくく五ッばかりの子を真中に。乗合舟の女夫  
 ずれ。思ひなき身の高笑ひ。余所のつまごこ浦山し。流れわたりの。情である。網の目にさへ懸風が  
 溜るおぎの。く上風。身に染々とせめて一夜は虚なしにはんの女夫と。いつの世に。いはれつ云はん  
 情なやと抱き締たるそぎ袖も。涙にひたす斗りなり。間夫で逢ふたも一昔。それ覺えてか一昨年の十  
 七日のおぼる月。宵のがさけにはのく二人火燧のじやらくらを情や鳥に起されて。あかぬ別れの朝  
 より。日文ちぶみの付届け。いよしごげんと書たるはほだしの種か。花すくさはんに誓文いとしさに。

幾夜の夢を。結び文。方様まゐる花よりと思ひ。まゐらせむべくの。わけの酒盃色見えて。わきていづ  
 みの思はくは只逢まして。く。又のほ見をまづかしくその言の葉も。昨日といひ今日と暮して飛鳥川  
 流れの里ははるくと跡にながらの。夕あらし。髪のおくれのはらくく。共に亂る。我心曇ある  
 身は恐るしの。お城も近き難波江のよ。し。あし知つてはまる身を。異見は釋迦に京橋の此方の森を隠  
 家と暫く。勢を。三重晴しける

ト三巻

いそぐとすれど。秋の日の短かさあしの難波渦。京橋より暮か。り問と隠れも長町の。伯母の家作常々  
 の咄に大方かぎあて。伽羅細工の甚五郎様は此方かと。くぐりあくれはア、いかにもこれが甚五郎。  
 どれからぞと云ふ伯母の聲。イヤ京の半七下りましたと。お花諸共つゝこ入り。ヤア是はくく珍しい。  
 文の來たは一昨日間もなふ何の用あつて。ヤ連も有るそふなごなたじや是へとあひしらふ。伯母様も久  
 しうござんす。いつぞやお目にかゝつた花と申す者。御無事で目出度御座んすと。腰打かくる二人の體  
 心得がたくや思ひけん。ハアよふこそと斗りにて不思議。さうにぞ見えにける。半七色を覺られじと。  
 お花ことも奉公の年明。和泉の親元へ歸る道幸ひ同道致しました。イヤ先それはそふ。あつらへの脇指  
 先様は侍衆お氣に入たかいらぬか萬一お氣にいらいで。甚五郎殿や伯母様に難儀のかゝる事あらば。其  
 難を私が身に受ふと存じ参つた。其次第が氣遣なごふで御座ると言ひければ。ア、愛人つがもない。  
 細工がお氣に入ぬとて何の此方や其方に難儀がかゝる物ぞいの。其上悦びや一昨日下ると其儘。お屏敷  
 へ持参めされしに。柄まはり縁頭鞘の塗。萬事殊の外御意に入。甚五郎が女房はよい甥を持た仕合者。

後々はお屋敷の御用も仰付られ、出入させとの御念比いよく細工に精出しやと。聞くより二人は手を合せ、エ、有難い忝けな。天道のお助け命拾ふたお花悦びや、嬉しうござる胸の病がすつと下つた。フ、道理々々、武士を相手の商賈大事に思ふ其冥加が。今日又俄にお屋敷から脇指につして。何やら急なる御用とて甚五郎殿を召に來て。晝過から參られ今に於て歸られぬ。定めてお悦びに及渡しの御祝儀。お振舞有るさふな定めし酔て戻られふと。云へば半七色違へ。ム、脇指に就て急用とて又呼に來まし。たかサアお花京から道中云ふ通り。かう有らふと思ひしと我は是に待うけ。甚五郎殿に對面し脇指の御祝儀身に引受て祝ひ。運に依て今夜中にお屋敷へ。召出されふも知れぬこと。そなたは此あたり旅館屋に一宿し。明日はさうく親元へと云ふ聲付もしほくと。そふしては半七が一分は立ねども。ア、なんどせふ暇乞じやと。胸に手を組み俯向て涙を。かくす斗りなり。お花も涙に聲慄ひ。聞えぬ事云ふてくだんする。悦びも悲みも二人が身に引受る。約束じやないかいの。甚五郎殿に逢まして有無の事を聞く迄は。私や爰を動かぬ。伯母様も女子じやが男の一世の大事の時。見捨られふか。コレ半七様。憐いこと云ふお人や。恨み託ちて。泣きければ。二人の顔をつくく見て。其方衆が云ふ事は何の事やら此伯母は。すつきりと合點がいかに。此方のつれあひ甚五郎殿は武士附合して堅い人。半七も侍筋儀強ひ若ひ者と。常々自慢し置しにそれにお山を同道し。初て對面させられふか。一町北はみな宿屋二人ながら早ふ往て。甚五郎殿に逢たれば半七ばかり明日おじや。夫婦にも成果せ首尾よの後はお花とも對面さしよ。今にも歸られ此體見せ。大事の甥をつれあひに見限らするがくちをしい。此世話やむも大切さ。サアはやくと氣をせければ。は憐みの忝けな涙が溢れ有難し。然らば伯母御へ一寸内證申す事有と。にじり寄ればマア待や。歸られふかと思ひあふくすると。庭におりて潜り戸のかけがねをしやんとか

け。サア何事を氣遣はし語りや聞ふと云ふ所へ。甚五郎退だしく門叩いて。いま日が暮て門しめるわけよくと云ふ聲に。そりや情なや歸られた如何せん。借居の路地へも廻されず押入には夜着布團。何所へ隠さんかやはかくる。帷子入て夏越し空長持に秋の鹿。つまもこがれて諸共に押隠すこそ哀なれ。蓋を押へて聲立てまいと欠伸ながら。ア、とろく假寝の。寝耳にけはしの叩きやうと。くやり明れば甚五郎せきにせいたる顔色。血眼になつて駈上り。ヤイ女房共。甥のどのに掛つて此甚五郎が身代破滅。命の大事になつてきた。此脇指折紙付正銘の信國を。今の世の廢物下坂にすりかへ。銘を似せて突つた。先は武家方出入の門。盗人は女房の甥此甚五郎が。存せぬと云ふ言分ならず。京へ詮議に登つては欠落者と町内へ。付届にあふては人中で口利れず。死ぬるより外文珠の智慧にも能はぬと。脇指からりと投出し溜息ついたる斗りなり。伯母ははつと胸塞り。扱は半七が身に覺ある詞のはし。思ひ當つて途方にくれ暫し。返答もせざりしが。半七元より覺悟の前長持の蓋押あげ。いでんとするを睨みつけ。脇指取あげなふ甚五郎殿。わしは女子の物の道理は知らねども。ついて廻る身の因果は。大名高家智者學者も免れず。是は正しく半七めが業なれども。半七がして半七はせぬ心。何を隠さん元彼の信國は。常々語りし我家に三代迄は祟ると云ふ。性にふさはぬ脇指一目で是はと思ひしが。武士の上こそ及物の相性町人職人に成果て。何の咎の有るべき親もない一人の甥。是をつてに一國のお細工の得意つけたさに。私がさもしい心から律義またい半七に。悪根性が付そめ身の大事仕出したも。いさまはつて三代目の手に觸しその祟。知つてゐながら此伯母がをしと仕たる其咎め。因果とはかは思はれぬ。耻かしうござる甚五郎殿。男を養ふ女子も有る。廿年足す連添て何を男の爲もせず。身の難儀をかけるとうらみにあらふ憎からふ。それが悲しい面目なり。許して下され甚五郎殿と。をつとの味にどうと伏し聲

も。惜ます歎きはことわり。過て哀なり。甚五郎も男氣の夫婦の中に何の面目。女房の甥の仕業存せぬと云ふて。此甚五郎が立ものか。見ず知ずにも義理に依て命を捨るは男の役。氣遣するな首切られふが。牢へいらふが。皆我利に引うけ。半七に愛目は見せぬと心は利發に逸れ共。差當つて相手づく思案に暮てぞ見えにける。女房は手を合せ。ア、情の末とて忝けない。侍衆は斯様の事を皆御存じ。脇指のいはれを申し伯母一人の利に落し。こなたにも半七も罪を脱れて下されど。脇指取てするりと抜き。本のは信國是は下坂。作は替れと焼及寸尺一對なれば。一家に祟るは同じと是故に父様が。人を打て其刀でまつ此様に押肌脱。逆手にとつて左の脇ぐつと立てと云ふ詞。直に突たて右へさつと引廻す。是はいかにと甚五郎絶付けば半七夫婦飛で出で。伯母様狂氣か情ない。身に覺ある故に死に來た半七と。脇指に取付を突除て。ヤイたわけ者そちを殺す程ならば。なんの伯母が長口上自害をもする物か。手の悪い事仕たれども欠落して身も隠さず。伯母婿の難儀を思ひ身を捨て來た心。さすが筋目程あつて。せめても是はでかしたな。そちが父御は我兄様。最期の時に預りし甥なれど。着替一ッ帯一筋何を優しき事もなく。預りし甲斐もなかりしに。大事に替る命其方には遣ぬ。皆兄様への奉公ぞや。伯母さへ死ぬれば利は一人に極つて。脇指は上り物外に御詮議は残るまい。又物の祟も三代濟む。行末目出度ふ出世して親祖父の名字を繼や。サア早ふ往や〜と。深手に息もきれ〜の血汐に落る涙の體。花はわつと咽返り半七は猶涙にくれ。伯母伯父は親同前張付にかゝるとて。一寸も退ませぬと。取つけば甚五郎。エ、不合理的な。其方が愛に狼狽て伯母に犬死さするかと。二人を取て突出しかけがねくる〜しつと〜おるせば。なふそんなら退ませふま一度逢せて下されと。夫婦は門に打凭れ壁を揚てぞ泣き居たる。伯母は苦む息づかひ。ナフ甚五郎殿。人立のない前に早ふ死にたい止目は。どこじや〜と問ゆれば。涙なが

ら甚五郎。女なれども武士の切腹止目とは勿體なし。介錯せんと立寄ればいやく。人の切たと我切たは。疵改めに顯れて此方の言分むつかしい。急所を致へて下されと男増りの自害の體。夫はいよく心くれ。愛を〜と我喉笛を。指せは頷き振上る。手も弱りはたと落ちて。太股に突立ると振上れば突外し。肩先がばと突込たり。左手へはづれ右手へはづれ苦しむ顔色。夫は悲しむ南無阿彌陀。南無阿彌陀佛の聲を力に咽のくさりを一刀。うんと許り目もくれなあの薄もみち。夜明の嵐に散失せし慕なき最期ぞ是非なけれ。歎の聲は何事かと向以隣裏借屋。潜戸蹴放し既入て。やれ女の腹切自害よと。組中年寄月行事。町代夜番が棒ちぎり木ばつた〜さばにおく箱の。慕なき命南無阿彌陀南無阿彌陀佛疑ひなき。西方極樂淨瑠璃に語りて哀を留めける

浮世草子

曲輪すまゐるは、時雨の雨よ。ふつふつふられつ。むら／＼さめの、まだひぬ露もまだひぬやよ。ア、  
 霧はふだんの、伽羅をたき、晝にもまさる燈火は、月常住の夜見世かや、朱雀山谷もいかなと。直下に  
 みつのなにはの里こひも、所の氣につれてよるづ手廣き大曲輪。色になげうつ金銀は、土か砂場の西口  
 や思ひはころぶ袖口を、九軒阿波座の野良鳥月夜はなほか闇の夜も、瓢箪町を腰付に異見ふる手の印籠  
 の、底に焚から吸がらの煙に油煙たな引て、霞が關か東口爰ぞ浮世のたての大木戸、あけぬは銀のたが  
 しの關、それつらくおもんみれば、大盡客衆の秋の月は、小判の雲に光り、小傳よびましや長へんじ  
 。驚かすべき夜はもなし、三番太鼓つてんでん。天下は夜なか入つ過。曲輪は戀の晝中や駕籠やろばか  
 りぞ寝聲なり、頭しも初冬亥猪餅小豆織のべんがら縞、羽織の上に手拭おび頭巾鼻まで顔かくし、女郎  
 買ふべき風にもあらずさながら用なき躰にもあらず、ごちらへごうとも片づけて思案に落ぬ風俗、新町  
 橋の橋の上橋辨慶が長刀の、鞘拾ふたる如くにてうろ／＼として立たりしが、ちよこ／＼と立よつて、  
 是駕籠の衆卒爾ながら物問ひませふ。今宵九軒の井筒屋の、客は何處衆の何とした人まだ爰に遊んでか  
 ごとふでござると尋ねける。ア、されば井筒屋のお客は、隠れもない八幡の住人江戸屋の勝二郎殿、替名  
 は鯛様拾萬兩遣ふても、こちごが百錢落いたとも思はぬ程の身代なれども、新七とやらいふ手代かたむ  
 くらにせいとうし、一門衆町所まで頼んで、土藏／＼に封をつけ一分の金も遣はせなだげなご、惣  
 兵衛といふ相手代若い旦那の氣を詰させ、わづらはせてはならぬと新七を退出し、氣儘にぐわんぐわと

遣はせる。鯉が生洲を飛で出て日比馴染の茨木屋の。吾妻をとんと請出し。明日はすくに八幡へ。今宵  
曲輪の名残じやと井筒屋で大ぶるまひ。何じやは知らず井筒屋の庭から門まで長持で通られぬ。今夜の  
物入ざつと積て二百兩扱も金は片いきな有る所には有るものか。私等は夜晝あがいても三百は儲けかね  
るに。よふ飲だとして一步取り。よふ笑ふたとして二歩取り。兩肌脱てこそぐられ鼻の穴へ胡椒入れてく  
じやめして一角。いかな鯉でも餅でも一くらあかふと語りける。新七扱はとうらめしく。腹の立つにも  
主思ひ。ム、それは聞及ふだ富限者すんぞ若い人じやげな。仰山な酒呑と聞たが。今夜も酒であらふの  
ア、くならびもない香拔。親茂庵といふたも命を酒にかへられた。鯉殿の母御せもと爰に勤めた  
人。どちらへ似ても蛇の子孫。それでもよい衆のしるしには萬事に達した。器用人。能の脇師を手いけ  
にして九軒で主の座敷能。じやうじゆ酒で足ひよるつき三番叟も高砂も。皆猩々の亂れかと思ひますと  
ぞ笑ひける。女房お半も手分をして。見外すまいの目もさよる。跡堀邊さまよひ来て。夫を小影へせ  
きばらひ招き寄すれば新七合點。そつと寄れば耳を寄せ。なふ今迄西口につけて居ましたが爰へはまだ  
見えぬかと囁けば。ム、よい。様子は知れたぞ。まだ井筒屋に居らる。げな。程は有るまいぬかりや  
んな人が見れば不審が立つと。一つ所に立もせず橋を越えたり渡つたり。忍びた。すむ女夫の姿夜見世  
もごりが氣を付けて。ヤアこつてりと味な事。妓狂ひよりあの方のみいりがよかるふといふもあり。時分  
から心中の下地か又義太夫が口の端に。新町橋をかさぎの。橋と語りて行く人もたえて。其夜も更に  
けり。なふあれを見や中から提灯引舟交くら。禿がうたふて客送るそりや是に極つた。和女は籠籠に取  
つきやこつちへ任せおかしやんせと。大門際に待かくれば。遣手のつなじや。羅生門あけてたもと云ふ  
。茨木屋の大盡鯉にはあらでさこばの人。すき様明日駕籠の乗頼む合點と。北へ走れば新七夫婦。な

む三枚が見送りて口を。明てぞ憫れたり。それくそこへ又提灯。今度はよもやはまるまいと窺く  
るを手ぐすね引。女房しかとひつとらへ見れば色は眞黒に。横肥つたる菊石頬。道頓堀の佐渡島傳八は  
つとしらけて立退ば。傳八も膽つぶし是は君何し給ふ。人違へとは存すれども色に袖を引れて神ぞ忝な  
ふ思はゆるホ、く。賤も昔は戀を磨き年中曲輪に入びたり。太夫天神に引づり引張れ。それで顔  
が引つた西瓜のやうな顔なれど色は黒質。すんぞ風味のよい男。神ぞ一片振舞たい。ホ、く。笑  
ひて「南へ歸りけりしはらくあつて。井筒屋の能が済だと出入の者。兵法遣ひ座頭茶の湯が古道具屋  
大酒食悦お影を蒙り八十末社。さすがの曲輪駕籠きれて雪駄片足の酔潰れ。はるか跡よりのさく」と  
彼奴は手代の惣兵衛め。同道は佞人組能の師匠の宮川め。京の浪人軍四郎。醫者はすれども本道守らぬ  
目薬師なんぞ。中にも惣兵衛かさこつて。なんぞ何れも旦那のはを御覽じたか。あれみな我等がさす  
る事。兎角此惣兵衛と肌を合せ。羽翼について廻らつしやれ。一期の身代かためて遣ふ。はて旦那の身  
上で一年に。千兩二千兩はつ。おでも有ると旦那を名代に立てはごう包めども自由など。かの新七の  
いきすりめお爲顔で旦那をひづめ。家久しい我等を押退け。一人威勢を振はふと仕居つたを。旦那へ吹  
こみまくし出してのけたが。聞けば大坂に狼狽て。此惣兵衛と公事のみやのと吐すげな。あはれでんぞ  
へ出やれかし五畿内をせいで見しよ。今の間にさささげて心からの非人かたき。うち。ごこそで其邊の  
橋の下新七は居やらぬか。口合悪口潜上はりどつと笑ふて通りけり。新七ごふもこたへられず胸をさ  
すり沈めて見ても。律義一偏に眞直に一筋な若い者。末の事も思はれず切てくれふと飛で出る女房抱つ  
き。是こ。な人。女夫の者が世話やくは勝二郎様へ御意見す為ではないか。あいつ一人切たとてお主  
の爲には何がなる。新七が言譯なく身のあつさに切たと皆手前のふみかぶり。無念を堪えてお爲になり

親旦那様の御恩を、おくる心はないかしの其様に短氣では、わしや心元ないを耻しめとむれば新七。夫も皆合點理が非になるとは知たれども、今の悪口聞ぬか、彼奴が此前親旦那の悪性金を、十四貫目横取して曲事に逢ふ筈を、兎や角己が精力で沙汰なしに事済んだ。其時には命の親と手を合せておがんだ。夫から十年たゝぬ間に少しも爲になりそふな。古い手代をそねみ出し、おそらくすゝしい此新七に無い難つけて暇出させ、旦那の身代空にして今の様な雑言、伸上つた頼見れば火に入る事も思はれぬと涙を流すぞ道理なる。時に揚屋の上する女子下男、門番起いてちと門を頼みます。是は此方の大事のお客で浮世小路迄お歸りじや。きつう酔ふて御座んす故。斷り云ふて内からお駕籠にめさせます。氣を通して下んせと云ふより早く門番。皆迄云ふな合點じやと。齧開いて目を眠るも日頃の金の威光ぞかし。夫婦すはやと橋詰にて、駕籠の後前しつかと捉へ。お駕籠待て下されと引留れば駕籠の者。ヤアこりや狼藉して。息杖の胸打くらふかと。振上る。狼藉は致さぬぞ旦那のお爲に致す事。ぶたばぶて殿かばたけ旦那へ一言やさぬ中は、駕籠をやらぬいやや放せ。いや遣ぬぞねぢあふ勢ひ。駕籠を打明けて野ながらの勝二郎。橋板をころくく川へ落んとする所を。お半ちやつと引起し後を抱へて膝の上。一昨日から酔醒す女郎の小袖を打かけながら。吾も廻らぬ夢半分。太夫爰まで送つてか。エ、かたじゆけなきの八幡酒には酔はぬ。今のは兼平の能の手。木曾殿が泥田へ踏込れた所。未しら雪の薄氷。深田に馬を駈落し。引ごもあがらず打てごも行ぬ望月の。駒の頭も見えはこそ何とならん身の果。いやはお。なんご面白い事かとひよるく正躰なかりけり。旦那様是はごふしたお身持ぞ。お前のお蔭で榮耀する今夜の人も大勢あるに。お駕籠に一人附く者ない。これが江戸屋の勝次郎様のお行儀とはいはれま。我が男の新七にお暇を下され。お出入さへ止められたれど。眞實お爲になる者は。お家で新七はつ

かり。御身上の害をなす惣兵衛めと新七と。思ひ替て下さんすはお馴染とも思はれぬ。其上忘れはなされまい。前方私御奉公致した内。お寝間へ來いのお傍に寝よのど人頼み迄をそばした。わたしは一つも年上なり若いお主をそのかす。熊手よ慈よといはるゝも口惜し。奥様お呼なされるゝ時のもじやくじやも如何と。お暇を乞ひましたれば。心ざしを感じた。去とは女子に奇特者あの新七といふ者は。親茂庵不便をかけ我子の如くせられて。兄同然の新七と夫婦にして。一生見捨ぬお約束。其新七を追出し。敵の様になさるゝは其時から私を。憎さに夫婦にあそばしたか憎まるゝ覺はなれぬも。お心に従はぬ恨をさねであたり杓子であたる御仕方か。但しは今にお心残り格氣故の憎しみか。夫なれば猶汚い氣。何が悪ふて新七が御意見は御意にいらぬぞ。頼もしいないお主様やと涙を。こぼさぬ許りなり。げに酒の醉本性忘れずお半を突退け。因縁咄おきおらふ。新七めが意見聞きたふない。己が親父はな。一年に八千兩九千兩宛。卅年遣はれたれどもついに浮名は立なんだ。こちが身代で五百兩や千兩遣ふたら何じや。ナア慮外ながら。夫を新七めが。遣ひ潰すの身持が悪いのど。一門一家町年寄庄屋まで觸歩いて。藏々に封を附させて阿呆者にしてくれた。忝ないの何じや和女に心が残つて格氣じやあ。おけよ。尤も初は惚て居た。けれども今新七めが喰汚して。裏迄かやして喰さがいたものを此方所望にござらぬ。ア、慮外ながら。新七めが口故に揚屋の届けも無沙汰になり。若い者の一分を捨ふとした此恨はつさせぬ。勘當の上の勘當じや。サア駕籠やれと乗んとするを新七飛出で縋り付。お情ない旦那ごの。何とて左様に邪にお聞きなさるゝぞ。新七が御一分を捨てたとは恨めしい。捨まい爲の御意見金の事は申さぬ。千兩が萬兩でも金程づくのお身につくお慰みがあるにこそ。惣兵衛めが計ひにて。もがりごもをたいこにつけ。十兩の物入を百兩に附たて。九十兩は分取にして阿痴にして笑ひまするが。こなたは御存知ぞ

さらぬか。吾妻殿の身請の金も、私お家にある時分七百兩と申す金惣兵衛に渡した。其上に此度名物の  
 お家の道具。京三界質に置き、二千兩餘の御借金が出来たげな。旦那には借金させ手代の惣兵衛屋敷を  
 求め、お出入の醫者浪人田地買ふたり銀かして、富限になるが御存じないな。御念比の醫者はあれど善  
 悪をかく鼻がさかぬ鼻缺者者が、入残しの目薬でもお目が明ぬかなさげなや。此新七めが親は大和の貧  
 乏人。幼少の時藤田小平次と申した。狂言役者へ奉公やら葎子やらに參つて、女形を致したを親旦那の  
 お蔭で。お家へ參り手代並になされしが、さすが育ちが耻かしい算用算勘存せねば、何を奉公御恩を送  
 らふ様はない。律義を我身の奉公にしてお爲にならふと存する一念。五臟六腑に染込でお主を大事に存  
 じます。茂庵様の御臨終勝が事を頼むぞ。お氣遣ひなされなと請合た。甲斐もなく、かやうにお身を  
 持つづさせ。佛へ言譯なんどせふ。お墓所へ參つても顔ふりて戒名を、ろくに拜みも致されず。涙に沈  
 み居まするわいの夫さへあるに此盆から。お前からの言付か惣兵衛めが私が、若旦那の勘當の者お旦那  
 の墓へは參らすなど。お寺へさつと云付け。さいた花も取捨て手向の水迄打あけて。未來にまします旦那  
 那にさへ疎ませふといふ事か。お爲を思ふ新七が左程お氣にいらぬは。水と火との相性が餘りと云へば  
 曲がない。そふではない若旦那と主の意見の恨泣き。詞を過し推参いふ涙は、主の薬ぞや。勝二郎大酒  
 の上なほく、氣にや觸りけん。ヤア意見いふも所がある。途中に駕籠より引すり下し。耻か、せて意見  
 せよと親者人の遺言か。サア此慮外の言譯があるか聞ふと怒る。是申勝二郎様ひそかに御意見申さ  
 ふも。門爪も踏されず取次申す者はなし。よしお屋敷へ伺候して六尺共が手にかゝり。擲殺されふば殺  
 されふ。主従の氣加は忘れまいと。朔日廿八日には御門に禮して罷歸り。さもなき時にも月の中に二度  
 二度墓所の口まで參り。傳手さへあらば内證から申上んと存すれども。さりと人はつれないもの古の

傍輩も見ぬ顔し。目をかけて引廻した丁稚小者飯焚まで。詞をかける奴等もなく。なじみとて可愛や。  
 白犬が見知て尾を振てしなだれる。犬に劣つた畜生共恨むまいとは存すれども。凡夫心の淺ましき無念  
 でならぬ女房共。エ、口惜い新七殿但し我々解言ならば。親旦那の魂魄冥途から蹴殺いて下されかしと  
 。夫婦は橋の上にひれふして聲を。はかりに歎きはふびん。なりける心なり。醉醒の氣は上るぐつと  
 せいて勝二郎。ヲ、親父までもないこと身が蹴殺いて見せんすと。飛懸つて引伏せ。胴骨をさんぐに  
 踏付る。女房はお情なしと取つけば。其儘おけ。手向ひすな腹の癒る程踏せませ。ヲ、踏いでおこ  
 ふか重ねて斯様な慮外をせば。下々に擲殺さする用心せよ。駕籠もて來いと打乗るも腹立まされ譯もな  
 く。後むくやら前むくやら縦に乗るやら横堀を。急げくと走らせし若氣の程ぞ笑止なる。新七は齒嚙  
 をなしエ、く口惜い無念な。あまさかさの事にも主に踏れて恨はない。傍輩のいひなし故踏れた  
 と思へば。腸がもえかへると。橋板たゞき欄干もにぎり挫ぐばかりにて涙に。眼も眩みしが。よい合點  
 じや思案あると。かけ出るを女房すがつて。思案とはとふぞいの。短氣を出さずと待しやんせと引置れ  
 ばしやまだるい。最前に惣兵衛め斬損なふたも女房故。短氣も短氣もいるとか思案は此胸にある。サア  
 其思案が聞きたいいや是ばかりは儘にして。放せく思案聞ねば放さぬ。くらはするが放さぬかと。男  
 思ひの女房と主思ひの男と。誠餘りて掴みあひ女夫争ひ犬くはぬ。犬の格氣におとされて。辻の番太が  
 夢くらぶはくろふ町をぞ。三重歸りける請出すといふ。其日より衣裳をも皆町風に。縫はりの茨木屋よ  
 り嫁入とて。婿は八幡の岩清水あびせませんと井筒屋の。亭主は送る傍輩の太夫天神饒別を。持せ遣手  
 の杉重に樽の名酒を盛口や。さだの煮賣を見る事も曲輪でならぬたのしめのに。紅葉たけくなべが茶  
 屋ひらかたくすは是も又。吾妻請出す山崎見ゆるそつこで乗物たてにけり。吾妻乗物のすだれをあげ。

是太郎様。最早八幡も近いげな。かねて鯉様道まで迎ひに出やんす筈そこを此方から先越てによつと押かけてはごふござんしよ。八幡太夫様是はずんご洒落ませよ。そんならとんと菅笠で供やら主やらごちやくはおもしろかるく飛びおりて。ア、氣が晴れたわつさりと嬉しやそばで山見たも。勤の皮切こらへた故。うきしほうんだは身のやいと十四の冬より今年迄。夫に染たる風俗はいかな家にも走り出で。お山見じと目をつける上から下る魚荷の戻り。あるきくの高咄し。さてく浮世は知れぬもの。江戸や勝二郎と云ふては石火矢でも崩れまい。長者の家と云ふたれ共。威儀宮も亡び時。一時の間いとしはや彼も言はゞ金故。なまなか持ぬ我等しき寝覺が樂じやといふ跡から。科は何じや知れぬが勝二郎は追放で。八幡はにえるおりや見て來た。百兩や五十兩は彼でも取て退ふか。何のいの編笠さへ被せぬもの。請出された吾妻とやらはごふなる事ぞ可惜物。安分で此方へ貰ひたい。何のかのの悪い沙汰口へ云て通りけり。吾妻ふつと耳に立ち太郎様今のはごふぞいの。いやな沙汰でござんすと氣遣がれば供の下女駕籠の者まで色違へ。辨當もちもくひさげぢうのどにつまりし餡餅の案に相違の顔付なり。井筒屋も氣にかゝれど。氣落させじとこれく粹のやうにもない。あれは人の法界格氣太夫様を見知て。氣遣かけて面白がる嫉で皆云ふ事。ぎえん直しに酒にせふ毛氈しけと勇んで見ても。ごこやら態が明細の底の心はすまざりけり。あれく彼處へ泣きく走つて來る人は。勝二郎様のお草履取佐五介ではないかいのと。いふ所へ佐五介息もされく。なふ太夫様。ひよんな事が出來ました。わたしやなんと致しませよと泣て詞もなかりけり。扱こそ噂に違ひはないちやつと様子を咄してたも。泣て居てすむ事かきつと性根をつきやいのと。叱られて涙をこめ。事の起りは皆惣兵衛め。旦那をいとしく吐いたは己が慾。お金には一門の封が付て自由にならず。結構な茶入懸軸お家の寶黄金の鶏まで。京で質に置

くごて。なんとやらす位高いお公家様の姫君を。勝二郎が嫁に呼ぶ其物入とのいひ立。その公家様のお袖判を偽判し。金の取手はよみ人知らず大内方より詮索。科人は惣兵衛一味のあひずり。十人あまり。粟田口にて獄門にかゝる筈。手代の業とは言ひながら名指所は勝二郎。存せぬとは言譯立す金銀財寶山田島。京大坂方々の家屋敷迄取上られ。着のまゝでの追放何所をしようごに座らふぞ。腹の内から今日迄荒い風にも當らぬお身。さぞや途方があるまいと思へばいとしう存じますと。語れば一度に手を拍てあきれ。はてたる其中に。吾妻一人の物思ひ。兎角私の不仕合と餘の。いはず泣き居たり。井筒屋も溜息つき。お笑止共氣の毒ともいふた許りでせふ様なし。太夫は先づお歸りなされませ。殘金二百兩は八幡の馬おりに請取る筈。惣兵衛とつうく致し茨木屋をば私請合ひ。手形の上で今日お供仕り。斯様の難儀出來の所うか。八幡へ參つても。二百兩の金子誰から請取りやさんやら。お笑止ながら太夫様を茨木屋へ渡しませねば。我等が手形消えませ世間にはつと知らぬ内。はやふお歸りなされるれば私が爲さず。太夫様もお首尾よしサアお歸りといひければ。吾妻わつと泣出し顔をも上ず居たりしが。むげない言分して下さんす歸れなら歸れですむ。歸れば吾妻が首尾よいはさうした吾妻じやないわいな。可愛い男の流浪したのを聞きながら。身の首尾を思ふやうな傾城じやと思ふて下んすは。曲がない情ないくつわの譯が立ぬとて。ふたゝび曲輪へ立歸り身の耻は扱おいて。勝二郎様の耻辱は是が何と雪がれふ。こなさんの請合はわたしに命有る限り。みぢんも難儀はかけますまい。新町ばかりが傾城町でもあらばこそ。京の島原奈良伏見茶屋風呂屋へも身を賣て。見事に譯は立てませふ。世に落やうがごふせふが勝二郎様の女房に。なる程の吾妻じやじめんづくに頼むからは。雫も是に偽ない再び新町の勤をのがれ。勝二郎様の一分立て下さんせ。是手を合せて頼みます。ほんにく此よなご降湧ふ

とは夢にも知らず、伊勢南宮へ太々神樂、愛宕清水住吉様へ金燈籠、八幡様へ萬燈其外神々宮々へ、鳥居立ての何のこて金のいる事厭はずに、神佛への約束も、今では遠へる身となり果て、人間ごしの遠契約はかたりのやうにも思はんしよ。夫が悲しうござんすと歎き佗たる。口説言眞實、見へて哀れなり。揚屋もさすが只者ならずよい。二言とほ意なされな。義理詰になつてきた茨木屋の手前は此太郎が請取た。手形一枚なされいでも今の涙を手形にして、お前を爰で手放します。お身をどこぞへ片附て二百兩お立てなされませ。契約お違へなされても此方からは尋ねませぬ。勿論催促仕らぬ是から互の心底づくこと。切放れたる詞の末それは定か有難い。胸がちつとはひらけたと伏拜みてぞ泣き居たる。時に向ふの堤の上大勢人のわめく音追放人の作法とて八幡くもん所の役人数多。手々に割竹大地を叩き。勝二郎を先にたて兩手を引はり。聲を掛て追拂ふは忌々。しくも三重凄まじうきこと知らぬ。和子様の氣を奪はれ性根をどられ。起つ轉んづ足たす橋本の宿ばづれ。三國境の板橋にこそ着にけれ。あらけなき聲々にてサア此所よりおつはなす。京大坂淀伏見堺をそへて住居叶はず。背くに於ては見逢次第打捨て。何方へも失せをれと口々罵り歸りしは。硫黄が島に捨られし俊寛僧都も斯くやらん。ゆきりの人も目を明て泣すに通る人もなし。役人歸れば駈付てこれ私じや吾妻じや。不慮な難儀が出来ましたさりながら大事ない。命が寶袖乞非人の身となつても。二人一所に居る上は堪能ではあるまいか。くつわへの出入も爰なお人の男氣故。ほ苦勞かけずに埒明く筈様子は靜に物語る。哀しむともなんにもないけくて浮世が面白いと。笑ふて見せて力をつけ涙を隠せば顔をあげ。委しい様子は聞ねども。太夫が殘銀埒あくとはい井筒屋殿の親切。なまなか禮はずさぬ。エ、面目ない此勝二郎は。下人の罰が當つた。大賢人の新七が。意見を用ゐず勘當し。身の仇となる惣兵衛めに誑され新町橋で新七を足にかけて踏だる罰。忽

ちあつて此仕合。身の先行のする事は今生で思ひ切たぞ。先の事は知らねどもまづは此世の暇乞と照ふて損のいかぬ事。何れも去らばと立出る井筒屋袖を引留て何方へお出なさるゝにも當分の出入用。銀の餘り少分ながらは懐中と差出す。手を付け一寸戴いて志は千萬兩。金子は受まい親祖父の貯を。冥加も知らず遺ひ捨て金の罰があつて。金銀に疎まれ手ぶりになつたる我なれば此度きつと身を懲し一錢得難しと云ふとを。我魂に思ひ知らせ貧苦の修行の稽古の爲。金銀とては貰ふまじ去ながら。はつこり煙草煙草入煙管のよけいあるならば。一本所望やたし。ア、お安いと。煙管のうらは細く共。お心を太ふして心中なごあそばすな。いやるがくごい不足なふて死ぬること。ほんの誠の心中なれ。金に詰つて心中する勝二郎でない證據。薬も少々貰ひたい。げに是は尤懐中至寶の一包。薬屋は命堅い石見の様と祝ひければ。遣手の杉が太夫様へ花色縹子の前巾着。人参入れてお餞別仲居の初は延紙二折。ちよつと假寝もあるものとあぢな所へ氣をつくる。駕籠の衆の仲間から。三尺手拭抱帯とて進上す。是はかの五尺いよ此手拭と歌に唄ひし手拭か。是は又加賀菅笠縹をあらくと召ませとよ。げにも誠の志さまが土産の菅笠と。踊にをどりし笠よなふ。それは吾妻の花嫁子。是は吾妻が身請のはて腰をよぢらす供もなき。紋日の夜床。引かへて禿もつかぬ草蒲團。夜見世の太鼓音たえて山崎寺の鐘の聲はやこころ。くんと響けども我迎ひにはいつ來ふぞ。お二人まめで中よふて随分無事では座舟で。迎に参る男山八幡の弓の弦きれず。便を待つぞ待るゝをさらば。くんと泣く聲ばかり。耳に残りておもかげは雲に消えけり

伊勢南宮へ

春の夜の夢、おどろかす。くだかけの、其しだりをのむすば、れ。とくる思ひはいつかはと。いはで心にかこち草。根引にせんといひかはす。身は捨草の捨てもせで。浮名は流れの淀河や。何をたよりに水鳥の。波にゆらるゝ世のならひ。疎きは人の情なり。廣き世界は廣けれを。京や浪花の住居さへ。せき留られし水車月の影さへくるゝと。彼方此方に汲わけられて行けば。丹波路もされば大和行くも。戻るも。二人連女夫鳥の。とぼくゝと。昨日のねやの花紅葉今朝ふる霜にくちをめて。身をこがらしの森の下道。愛しほ踏むもあぢきなきなれし。こきやうの草も木も。今の名残をこめかね。まてゝとなく吉原すゝめよしみの。言の葉に。誑され渡る狐河。あたに暮せし年月の。榮花は夢の盃の。酔醒まくら「それは若草身をうらみ草。なんの和女にあいたではなし飽もあかれもせぬなかの戀と命が。寶寺。むかしの里の。寢覺には伽羅で暖む床の内。起別れゆくあかつきの袖から袖に手をいれて。出口の風の寒からず。今の愛身の旅寢には。じつと寄せたる肌。と肌吹わけて吹く。山おろし。ふもこに立る女郎花りんきしんきとなまめきて。くねる心の男山いとし男をいにしへの。よに引返せ弓八幡。神に暇と伏拜み。東を見れば名にも似す月こそいづれ朝日山。山吹の濱に影見えて。渡つたゝひかる君の渡つた夢の浮橋六十帖を渡りつめ十帖と詠じた。一に一夜のお情の夕顔の若ばへ。二に香たきしめて浮船にかげろふ。紅梅竹川橋姫に手ならひ。我名床しきあづま屋でこれ様の忍び寢世も忍ぶ。人目も忍ぶ。道芝に。駕籠かるすべも白妙の晒はすてう旗の鳥。はんま千鳥の友を呼ぶ我は伴なふ人とても。なき顔かくせ笠取山。隠すとすれご心なや宇治の河霧。たえ。くゝにあらはれ渡る。網代木の河瀬の水に。袖ひぢて。互に影をみつ鏡。やつれさんしたやつれたぞ。はなれゝの。あの雲見れば。明日の別れが思はるゝ。つらき我が身はいろはの文字よゝ。袖に涙のゑひもせず木の葉散りぬる。木幡の里。か

ちて是はと行くとも。はつめい月や一口唄つたひの長細手。つゞり里々山をも。皆近付の山なれどけふの愛身は心から。さぞ見ぬ顔と袖おほひ袂を。おほひ笠おほひ。そらを覆へば冬の日のいと。短かくはや暮て夜は長池の水の泡。水の上よみに我もとてよとみ。息らひ明さるゝ

下之巻

奈良坂や木辻も戀の札所にて。女郎屋揚屋三十三間むかしの京の八重櫻。九重薫るこむらさき。小藤を爰の四天王つゞく勢こそなかりけれ。哀れや吾妻は義理合の金の契約もだされず。此里一番名の高き山城屋といふくつはへ。中年四年二百兩命がらりに身を賣りて。大坂の婿は明たれをまた傾城とならざらし。縦横沙汰を聞ふれて戀の大和の色好み。吉野の花も振り捨る三輪の索麴喰付て。買ふ人除れど賣る日は足らず中にも立田の藤と云ふ。しなだれ男纏ひつき揚屋も諸分吉田屋の。仁三郎を定宿にて二階を一間宛がはれ。命有たけ首尾有たけ金有たけと勤むれば。四天王の名取をも。今の吾妻が下に見て獨り武者とぞ流行ける。藤も在所に稀男吾妻に深く染附の。龍田や沖津白浪の幫間も運ず今日も又。通ひ木辻の吉田屋の。仁三内にか。ヤア妓様達れきゝのお寄合。おてき様の待合我等が座敷へも。ちと貸して下されかしと云へば薰小紫。珍らしい藤様の外の女郎をからんすか。男の心の一筋に。他へふれぬは傍から見ても憎ふない物なれど。こなさんと吾妻様とはあんまりで小腹が立つ。しんきのわく程うらやましい見ぬが増じや。戀のめんめん稼ぎじやとばらゝ立てぞ入りにける。仁三郎いそがしげにしよこゝと立出で。ヤア藤様いつから爰には鎮座。手でもお拍きなされいで夢にもしらがの母者人。藤様のお出じや吾妻様のは氣色も。今日はお心よさそふな。ヤ。醫者の名も喜縁の物。始めは西の京の。道偏

とやす醫者の薬でさうへんに有た所を。昨日から三條の元喜とやす醫者でめつきり元氣が見えました。は祈禱を本院院息才法印を頼みませふ。銚子。くんと手を拍く是はく。吾妻が氣色快いとはあたまで善事聞初めた。さりながらあの病氣は。彼の江戸屋勝二郎が昔を忘れぬ物思ひ。根引に此方へ取たれば氣がかはつて達者になる。そこには氣遣ないこと。是に付ても一刻も早ふ請出したい。四年の年を三年道。以今年所の所を。元銀の二百兩で請出さふと云ふからは親方も不足ない所。エ、親子の衆がぶせいな。餘所へ取られて此藤が一分立す死なねばならず。今日は金を突つけて是非ともわびて貰ふ思案。耳を揃へて懐中した是袖口から手を入れて。虚か誠か見や。ごれく。ホウく。可愛らしい小判女郎。是はきつゝ詮索。扱油断とお恨みなさるれど。前髪もある私が親程な山城屋。算用だてもゆにくし母妙慶をやりまして。割つ碎いついはせてさらりと塚を明け。只今お知らせさんと硯引よせ墨をすり。鹿の巻筆妻戀鹿鹿は春日の藤様め。果報者め金持めあやかり者めと騒ぎける。それは大慶先吾妻に逢いたいよふでたも何所にぞ。いつもの二階に座りますこれ林之介。吾妻様呼びましや。吾妻様太夫様。林之介と呼つても返事もせず。是はごふじや又例の勝二郎といふ淀鯉を。思ひ出して泣てかな。鯉が付て居るそふな鯉なら煎餅まいて見よ。いや手拍子を打て見よ。心得たんくたんくたんんと手を拍てば心浮ねど身の勤悲しい顔を見せまいと。わざとにこくわさくくと二階の口に立つを見て。そりやこそ鯉が現はれた盃をさしみにせふ。爰へちよくと入酒甘いことじやとわめきける。吾妻二階に腰かけて。是は仁三様。たんと口があがつたの。あんまり鯉々いはんすな。鯉も瀧へ登りつめ今ではどふも下はがな。惣じて鯉と云はんすは勝二郎様故かいな。彼様は八幡の人八幡に鯉は有るまいが。合點がいかなど云ひければそれならば今日より。ごんば様とやすうか。妓様にごんばはいかにかアアそれも大事か。か

ごのこんぼと云ふとありそんならいつさう毛ごんば様。追付旦那の引拔ごんば目出度ごんばと座をもてばエ、憎い口やたきごんばに仕たいぞと。二階降るも勇まねごうはべ「ばかりの笑ひ顔云ふて泣くよ。猶つらし。藤もいよく機嫌よく今日は嬉しい事揃へ。第一和女の氣色もよし。仁三親子のはたらしで身請の噂が明たぞ。懐中した金子を里に残いてそなたの身と。兩替して一兩日に吉日極め。龍田へお供仕るサアく二階で酒々。吾妻はこれのお母へ能ふ禮云ふて跡からおじや。仁三此方へと手を引いて奥の。二階へあがりける。吾妻はつとけでんして夢見た様な事どもやな。根引にするの請出すのと。取締もないせんしやうは。十人が十人で思はれたさに云ふと。床で帯さへ解ぬ身によもやと思ひ頼みますと偽はりしを。先は正直悦んではや談合が極まつたか。扱も胸をついたと誰にどふと談合せん。勝様からは便宜もなし。サア今でも出ると云ふ時には。泣き口説ても叶ふまい其際にならぬ先。とんと打明け云ふたれば義理づめにつめられて。思ひ切るゝとも有と階子半分あがりしが。いやくひよつと言出し先に合點ない時は。勝二郎様のお爲まで取返しのならぬと。ア、云ふも厭なり言はねば悪し。つみ深い事ながら今の間にあのお人の。身に妨げも出来よかし。此病が暮れかし。今夜の夜が常闇と明すにあつてくれよかし。身請の時が延したいと各なき天にも難をつけ。歎き恨むる世の愛さ。我身ながらも浅ましやとんと伏して。泣沈む涙も。階子を傳ひけり。通ふ心や格子前耳にこたゆる謠の聲。一度は榮へ。一度は衰ふることわりの誠なりける世のならひ。住所求むとて吾妻の方に吾妻のかたに。吾妻くどうたひ忘れた顔つきで。我名を呼ぶは知た聲と。行燈の影から表を見れば戀し床しの勝二郎。飛びたつ様になつかしさ表には人目あり。夫から廻つてかうくと指で教へて招かれて。こくらがりをばそつと抜け。つくと通ればすがりつきなふよふ来て下んした。逢ひたふてならなんだとしつかと抱しめ泣き

居たり。よい衆の果のさすがにて貧苦を貧苦と思はとこそ。此なりを見てたも。思へばく不費用和女の身を賣する程ならば三百兩もして遣て。うりへぎの百兩も手に持たがよい筈。大坂の親方へ二百兩渡さねば。井筒屋の太郎左衛門と約束の義理が外るゝとて。差も引もなふきつと堅ふ二百兩に賣さいでもだんないこと。此鈍さから此つら。何にも徳はなければ。坂田藤十郎が夕霧をま一度見たいと思ふたが。此紙衣で手夕霧を仕る。太夫又逢ひに来たはいの。サア和女も爰で泣きやと云へば。ア、泣く分は夕霧に負はせまいと泣きければ。男も心しほく。可愛や。く物真似に誠の涙をまぎらかす。奥二階より手をたつき衆。吾妻様呼びまじや。吾妻様。くと呼ぶ聲すそれ人が来るア、しんき。ごこへがなこれ。火燧へ隠れさんせと。蒲團を明れば勝二郎。此夏爰の芝居へ。竹本が弟子が下つて重井筒を語つた。サア是から夕霧代つて重井筒火燧の段。北濱邊のよい衆は火燧に水を入れまする。紙子一枚の我等とてもの事に。火燧になりたいたいと蒲團とつて引被る。仁三郎二階より障子をあけて。サア吾妻様。只今唇を詮索すれば明日は天赦さしゆく日。萬事揃ふた大吉日銀はお身に付けてなり。何に不足ない上は善は急げ明日の朝。目出度ふ曲輪を出します等。その用意なされませ飲ふぞ。大きな物で飲でくれふと障子引立て入にけり。火燧よりむく。起き今のはなんぞ。曲輪を出すと善い悪か氣遣な。聞きたいと氣をせけばサアされば。それ故胸を痛めると。先度の文にも云ふ通り龍田の藤が事の。作病おこしつ振つて見つ色々厭るゝ工面して。退く様に仕掛ても煩惱の犬かして。爰の妙慶挨拶にて請出す談合極まる。聞くから胸が騒ぎ出し今に心が落付ぬ。ごふした物で有らふやら。最早智恵にも能はぬと泣くばかりこそ力なれ。勝二郎も泣き出し。扱もく悪い事も。續けばついくものかな。五年以前に在所を出で無量の愛さにあふたれども。あきらめつ慰めつ心で埒を明けたるが。命かけた和女を人の物

になす悲し。二百兩といふ大敵には。弓鐵砲も叶はぬと齒を咬。しばり歎きしが。左右云ふ間に夜は更るもふ分別は無い所。和女も死にや己も死ふと若い同士は氣をたしなみ。死を先立て涙を隠す歎きの色こそ哀れなれ。吾妻死身と胸を据るこれや勝二郎様死ぬる覺悟に極まらば死なずに免るゝ思案あり。こなさんはまづお歸り内を仕舞て。夜中過ぎ八つの時分に又ござんせ金調へて置ませふ。其金持て丹波へ退き來年私が年前に。迎ひに来て下さんせ心安ふて出らるゝと。早ふ去で下さんせと囁けば勝二郎それは至極の才覺。其金は借か貰ふかごこから出るはて夫は構はんすな悪い様にはしませぬ。はやふいでござんせとせがめば領き悦んで。是ぞほんの丹波越と。不道化云ふて忍び出る。氣の愚さも育から憂事知らぬししかや。吾妻はほんの出來心ふつと云ふたは云ふたれど。是からが大事の思案火燧の櫓を談合柱。おなかの痞たくくと胸におごるをさすりさげ。二階の客を刺殺せば明日の難儀を免るゝ徳。金を取れば勝二郎様のお爲になる是が徳。是程よい事有るものか足元によい思案。こけてあるのが見えなんだ殺して退ふと思ひたち。目の前ばかり背中を知らぬ女の智恵こそ果敢なけれ。夜はなん時ぞ。臺所は。夜中を告る軒もあり更行くまゝに恐氣立。膝の慄ふを踏しめ。梯子の口から覗いて見れば。客は酔て前後も知らず。仁三郎がうはき酒いさ倒れては性根つかす。サア仕濟いた梯子三つ四つ上つて見て。ヤアこりや何で殺さふ刀物が無い。帯を解て締殺そふか。いや緩りとする間はあるまい煙草でふすべ殺さふか。酔て先へ此方が死ふ何としてよかるふぞ。鉄刀でも剃刀でも鐵物がなご。座敷中を差足しうるくうろく尋ね廻り。サ思ひ付たぞ火燧の火箸。火に焼て咽笛をささば刀も同然と。蒲團をあけて手を入れ。熱やくと懐中の。服紗に持添へ陸奥の。から紅の錦木や枝珊瑚珠と焼付たり。嬉しや冷ぬ間にと立上らんとする所へ。仁三郎が母妙慶。吾妻様まだ起てか。によるく來れば肝潰し袖

の影に押かくし、ハアかみ様か。私もはや寝みまする。冷ぬ間にこな様も目の覺ぬ間に暖かに。熱ふし  
て寝やしやんせとうるたへ挨拶あささきなり。妙慶更に氣もつかずお前は果報なよねさまや。曲輪で繁  
昌しつめて間もなふ根引の松様。千年も萬年も藤様との御中さめぬ様に遊ばせ。其いとらしらしいお氣立  
ではさめまい。明日お目にかゝりませふと。辭義をのべて立歸れば火箸は氷と成りてげり。エ、いは  
れぬ長口上やきなほさんど。蒲團あげても火燧も冷たし。エ、阿呆らしいなんばう冷ぬと云やつても。  
炭火までさめきつたと。吹っ煽いづ氣をせく所に。二階より仁三郎醉覺の長あくび。客の脇指持ながら  
目をすり／＼階子をおり。ヤア吾妻様愛にか。扱酔ましたと下に居る。吾妻脇指に心づき。それは藤様  
の腰の物。こなさんも先氣の通らぬ。客の及物預るとは渡並の客のこと。藤様とは女夫になり明日請出さ  
る。今夜となり。心中はせまいしその儘置いていかんせと。云へどもふら／＼居眠りながら。はて一夜で  
もお客の中は弓矢の禮儀はづさぬと。云ふ中に脇指の柄を膝におさへて。いかふ更たにやすまんせと。  
云へども柄には氣もつかず明日見なりませふ。鹽茶を飲で寝てくれふと脇差の。鎧を持って立つ程に柄  
は残れど下は見ず。目はそら靴をぶらさげてぶら／＼勝手へ入にける。ア、有難い神佛のあてがひ  
かと。いたゞき／＼ひつそばめ立て見ても後より。又誰ぞ来る様であふな恐さ右ひだり。足もすはら  
ぬ行燈の我影にびつくりして。わな／＼懐ふ箱階子さし／＼さし／＼鳴る音も。耳にこたへ胸にしみ氣  
を押へ息をのみ。やう／＼惱み登りつき溜息ついたるをんな業。我身ながらも興醒る藤が臥たる北ま  
ら。いとしや利もない人をと怖しながら背中ら。胸先に打跨ぎ切先さし當てうご来る。乗られてふつ  
と目さます。これ／＼聲立まい。此方に恨も罪もない。かりにも惚てくれた人殺したふはないわ  
な。殺さる。此方より殺す我身が悲しいと。涙は及に傳ひしがなふ生て置ては請出して。女夫になるが

情ない私には大事の男がある。その男と縁切れる戀路の仇となる故に。今朝殺す懐中の。小判も貴な男  
に遣りたい殺生の罪盜の罪男に爲につくる心。少しは恨を晴れてたもとまたはらくと泣きければ。得  
心やしたりけん叶はじと思ひけん。目を塞いで返事もせず。サア只今とぐつと刺し止まては手も弱り  
其儘捨てふところの小判を袴の袂に入れ階子下れば後より。掴み立てたるその寒さ。寒風肌も縮み胸  
ぶるひ。半死半生の手負のり返つてうんどいふ。聲に驚き梯子よりばた／＼とどうと落様の隅に屈んでふ  
るひ居る。手負は惱み苦みて。續いて梯子轉落ち呻く聲に妙慶親子。家内の男女我も／＼と駆出／＼。  
ハア南無三寶藤様を切つたは。切り人が有ふと爰彼處尋ね探して縁端に。人こそと引出せば是は／＼。  
吾妻様。それ取放すな縛れ括れと立騒ぐ。いかに切るも私が切る金も私が取たからは。氣遣しやるな  
通はせぬと。尤もきような白状。先々龍田の二門衆兄御の方へ。注進をぬかるなどおひ／＼人を走らせ  
ける。勝二郎は約束の時分過ると紙衣に股引。すぐに丹波の旅立にて來て聞けば。吾妻が客を切たと  
町のもやつさつ／＼と入て。是々亭主。身は江戸屋勝二郎と云ふ吾妻が男。何科なりとも同罪にしてくれ  
と。座敷にどうと座しければ。吾妻は泣て目も明す無分別などをして。思ふが仇となりましてと顔をさ  
げてぞ居たりける。町の役人龍田より走り歸つて。手負の兄御只今はへ出と。いふを見ればいにしへ  
の手代新七。木綿布子も物さびては免あれと座敷に入り。主従顔を見合せ互にはつと驚く中。勝二郎赤  
面し面目なや耻かしや。其方に顔は合されぬと。兩袖を顔にあてうづくま。りてぞ隠れける。新七恨の  
兩眼に涙を浮め大聲あげ。エ、聞へませぬ旦那殿。我等に顔を隠さる。は面目ないか耻しい。エ、其耻  
かしがりが遅かつた。五年以前に新七を耻かしいと思召さば。は身代は潰れませぬ。まつかふ有らふと  
存じた故。様々の強意見。新町橋でお足にかけられ踏れながらも御意見は。親旦那の恩の送りたさ。

女房お半はお身の上を苦に致し、氣病を煩ひ去年の春終に空しうなりました。彼れも元は家來お主を  
 苦にして相果るは、下人たる者の本望いさか悔みも致さばこそ。親旦那のお蔭で少しのものとて家屋敷  
 在所龍田の親共も餓凍への程なれども、否々お主は流浪の身。家來の安樂道ならずと家屋敷田地まで  
 賣代なし。有銀十八貫目此覽の通り我身には碌な布子も着ぬ體ながら、親旦那の十七年忌は内證でお前  
 から遊ばすことなし。恐らく江戸屋の追善と笑はぬ程の法事を致し、出世の願ひの爲京都公家方折々  
 のつけとけ油断もなく、残る金二百兩いとしや吾妻殿。新町の殘金ゆる此所に勤と聞き、は兩人の氣  
 を思ひやり弟の藤五郎が、請出す分で沙汰なしにお二人一所に置ましたらば、貧苦の中のおたのしみ。  
 高いも低いも親たる身の悦びと云ふ子の悦び、お前の機嫌よい顔を、草葉の蔭の親旦那に、見せまし  
 たい心ざし。は奉公の仕納と存じ立たるところに、藤五郎は吾妻殿の手にかゝつて死んだか、でかいだ  
 け。此新七は主の爲心ざしの奉公は仕たれども、一命の奉公は其方に劣つた。兄に優つた忠の者。  
 是々お亭主。只今申す通りに虚言はない。兄が言分ないと云ふ證文を致すからは別條はあるまい。それ  
 とて是非處の作法下手人を取るならば、水いらすに此新七、女房は死ぬる親はなし。一人の弟は相果  
 る雲のうらを尋ねても、お主より外世の中に大事の人はなきものを。隔て、下さる旦那殿恨めしう思ひ  
 ますとごうと伏して、泣きければ、吾妻を始め亭主親子町内近所の者迄も、賊の心を感じつ、皆々涙を  
 流しけり。勝二郎飛で出で、過つた。斯様な身となり果たぬ其方を踏んだ下人の罰と、かねて  
 悔み歎いた藤五郎を弟と、知らいで吾妻が殺したも我ゆえぞ。主故に身上つぶし其體となつたを見て。  
 此勝二郎がいか畜類なればとて、見ても聞てもおろされふか。死ぬるにも死なれぬせず逆の情に其方  
 が、此足にかけ以前そちを踏んだ様に。勝二郎を踏んでくれ一つの罪も免るゝ爲。さりどては新七某を

踏んでたもと。足の下に背中を向け手を合、せて泣きければ、吾妻はすかつて弟御の仇は私。刺殺して  
 下さんせどうも生ては居にくいと。歎き悔む聲や新七は飛びさり、ア、勿體ない冥加ない。新七を思  
 召すが定ならば、は夫婦心をまつたふして出世を見せて下されば、踏殺されても大事ないと。三人顔を  
 差寄せて聲をばかりに泣き居たり、斯る所に八幡の神主の太夫より、は吉左右の早飛脚。いさり切て  
 案内すそりや吉左右とは悦ばしと状箱開くも疾し遅しと封目切つて拜見す。何々江戸屋勝二郎事。家來  
 新七数年の歎き感じ思召され。關白左右の大臣は憐愍によつて、八幡の本地舊の如く返し與へらる。追  
 付歸宅あるべきと。讀みも終らす八拜九拜悦び踊り飛上り。跳上りたる淀鯉の瀧の壺より湧出る、白銀  
 黄金の鶏寶とさきは勝関悦びとさ。五畿内五ヶ國神々に先願。ほごきに 三重「悦びの幣帛をあげ神樂  
 をあげ。まわり治むる八幡山この浪花津の恵方神民安。全こそ目出たけれ

せと丸

諫鼓苦深ふして鳥おどろかず。刑鞭蒲朽て釜空しく去とは。今此時よ秋津君。延喜の帝の徳徳  
 中すもおさく。有がたし。治る國や民草の猶その榮え衰へを。むきに叙覽有るべしとて唐のせい  
 の巡狩になぞらへ。かたの野は野の櫻狩今日の紅葉をりはへて。月卿雲客供奉せしめはや警蹕とよば  
 ふなる。は狩車のいづつをも五つの常の道芝や。惠の露に露きては幸。有こそ目出度けれ。さんやと過  
 てなきさの院賤が門田の八束穂に。かまごの煙ほのく。と戸さぬは代の民百姓。くはんやくの聲うば  
 うのびさんく。然と悦びて。君がは狩を待顔に空飛ぶ鳥もは車に。群り慕ひさへづりしはげに賢王の慈  
 愛。鳥獸にも通じけん民安全のしるしなり。時に行く手の松が根に幼なき者の泣く聲す。藏人を以て召  
 るればまだ乳ばなれぬ捨子なり。主上は涙ぐませ給ひ。我國民を憐みはごくむといへども。子を捨る邪  
 見の者我國に有る事。朕が不徳の誤りと忝なくも龍眼には涙をぞかけ給ふ。然る所へ十八九なる女房あ  
 はたどしく駈來り。ナウ其子返させ給へ返し給へと泣き叫び。まつたく捨子にひはす妻老母を持ちが。  
 今は老木の葉も落て物參らせんやうもなく。乳房をふくめ養ひ。此子が争ひむつかる故しはし外方に  
 すかし置てひ。聊捨は致さぬなり返してたへとぞ泣き居たる。主上は手をはたと打ち。扱は捨子にては  
 なかりしな子にかへて母をいたはる孝行賢女とも云ひつべし。して汝に夫はなきか。さんひ夫は去年の  
 秋霧と消えても残るおもかげの。形見は此子とばかりの涙もいづれ由ありて。目元のくらの爪はづれ育  
 ゆかしき女なり。主上感し思召中納言希世を召れ。窮民を養ふはいにしへの道。彼が老母諸共汝に預け

興ふる條 大内に誘引しよく養ひいたはるべし。ついでにはかゝる豊年の悦び天にうたふる兆ぞや。初菊の宴を催はし紫宸殿にて音楽を奏し、五穀豊饒を祝ふべしと。世に畏る勅仰ぐも。おろか 三萬なりけらし。初霜よ。初霜に。をらばやをらん花の宴。菊見の遊糸竹の。其役々をわかたれし。中にも。當今第四の皇子蟬丸の宮とせしは。天性美男の器量天皇は寵愛淺からず。琵琶に妙を得たまへり。初又琴は蟬丸の北の御方と定めらる。そも姫君は右大辨早廣が妹にて。はや十八の秋風もふさがて通す振袖や。二つちがひの妻琴は似合頃とのしらべかや。月出なば管弦を始むべしとの沙汰にて。衛士は烏帽子を傾けて。月待つ程の篝火はいうに「目出度景色なり。蟬丸は唯一人月や出しとおぼしまの。奥の渡殿見たまへは琴を枕に女の音聲。斯くこそ謡ひ出しけれ。ゆふべくの。わが涙川。もしや逢瀬の浪枕。それを頼みにうき身をおくるえ。此年。月々え。宮驚きば覽あれは北の方にておはします。お傍によりてこれく。今宵の管弦はれがまし。琴を枕に假寝は調子もや狂ひなん。誰か有るそれく」と宣へば。はつとこたへて女房達を枕参らす。北の方つと寄り宮の太刀すはと抜き長枕引よせ二つに丁ど切り給へば。宮は驚きすがり付こはそもいかに狂氣かどあされ。果てぞおはしける。北の方聞き給ひまつたく狂氣にひはす。お主様とみづからは夫婦となりて二年の。幾夜を重ねひへ共。あはぬ縁かや但しはお氣にいらざるか。つひに一夜も肌ふれて枕かはせし事もなし。釋迦でもさうはならぬ物。男持たも名ばかりぞ。益もなき長枕科はなけれ成敗と恨み。わびつゝ泣き給ふ。宮うなづかせ給ひ。ヲ、恨さもあらん云ひ出すべき折もなく今までは打過し。親の命背かれず夫婦とは成つれど。我幼少より出家を望み一生不犯の願を立て。佛に誓言たてし故。是非なき事とあきらめたまへと共に。涙を流さる。北の方涙を止め。ム、扱は左様にひか然らば妾も出家をとげ。此世はわづか永き世の心が誠の

夫婦ぞや。今よりみづからも誓文立て互に心を恥ぢしめて。身を汚さず清淨に目出度發心とげやさん。しかし今宵は誓文がため一世一度の色床は。佛もお氣のとほらめと膝にもたれて宣へばさすが。みだる花すゝき詞に。露をしたはせて。簾中一ふかく入り給ふ月かあらぬか。あかねさす衛士は篝火を焚きさして。さめくどぞ泣き居たる。蟬丸は覽じ。目出度は遊の折から希有の落涙心得がたとし宣へば。烏帽子かなぐり是は覽せなふは見忘れひか。我は一年春日の里にて假寝のお情ひひし。直姫にては座ひ有しあふ瀬の川水の。よごみく。て月かさなり君の皇子を生み参らせ。不思議の事にては父帝様に。老母諸共拾はれひへ共。君の浮名を憚り夫は死せしと偽り。希世の卿に侍かれひが。せめてお妾見まはしく衛士の男に扮装し。逆もいやしき此身にて添ひ奉るは叶はぬと。血判を染て給はりし誓紙も今はよしなしと。只今やさすて與様とはおなかよし野の初櫻。火花も薫れとにはひ炭くべんとせしを引留め。明暮忘る。隙もなく乳人の清貫を尋ねに出し。出家の望と偽り妻の傍にもぬる夜なき。我をばむげに此誓紙灰になせとは曲もなやと。かこち給へば直姫も袂に抱きつくば川。積る戀しさ逢ふ時は。心おくれに胸さはぐそいろふるひの姿なり。こゝに北の方の兄右大辨早廣此體をきつと見て。今宵の衛士は蟬丸密通の女なり。あれ吟味せよ官人舍人我もくど駈出る。聲に恐れて人々は築地がくまに送給ふ。早廣誓紙を拾ひ取り。サア證據は握つた奏聞せんとひしめけば。人目も耻ず北の方ナウはしたなし宮の此名の立つ事ぞ。穩密にしてたべ兄上様と涙にくれてのたまへば。早廣眼に角を立て。エ、言甲斐なし結構だても事による。宮を聲に取こそ一門親類榮花もあれ。兄が鼻迄ひしぐるか夫を寝ざられ口惜ふは思はぬか。これ證據を見よと誓紙を出せば。北の方披見あり宮の下手跡まされなし。くはつと焦立ち顔に血筋は眞紅のあみをばり。髪さかしまに立のぼり。噴毒の身ふるひ齒を鳴しエ、たられし口惜や。

恨めしや妬ましや思ひ知らすやこの恨み、思ひ知らせん思ひしれど、天地を睨む雨眼に血の涙をはら。  
 腹立やとすんぐに食ひ裂して、衛士の焚火はものかはの胸の煙はくるく。狂ひわな、  
 き出給ふは恐ろしくも又、三重あはれなりいでや其頃、蟬丸の乳人左衛門清貫は、直姫を尋ねた  
 め南都を忍び巡りしが、一まづ都に歸るさの長池より日はくれて、物すさまじき宇治橋の宮居にこそは  
 着にけれ、今宵はこれにて明さんと笠を取てむかふを見れば、怪しき妾南無三寶、此社は嫉妬を守る橋  
 姫の、丑の時詣是なんめり、うかひ見ばやと神前の松の、「古木に攀上り身を細めたる、振舞は、さな  
 から梢にさゝがにの、雲の井に、あれたる駒はつなぐとも、ふた道かくる仇人を、思ふはつらし思はぬ  
 も、ア、く、く、く、ものうしの時参り、仇と情と怨念と三の鐵輪に燃る火に、瞋恚の薪こりもなく、煙く  
 らべん夕闇の空も、とやろに浮舟のけうとく立し宮柱、人になつてのつま櫛も、おごるの髪を、七つ八  
 つ夜半の鐘の物すさき、心にこもる願ごとくに、あまのさかてをうつてうけへば、驗あらなんあら、く  
 恐ろしや心の角の枝高き、かげるふの森はのくらし、淺くな明を朝日山、山吹の瀬にかけ見えて、  
 峯の稻妻ちらく、星の光かア、燈火か、あこがれ出る我魂か、實にや外面如菩薩内心如夜叉、假  
 へ其色白くとも、無間の猛火に黒むべく、涙に戀に紅の裙踏しだき聞きより、女心の倉橋山くらく、  
 く、く、く、湧返り、玉ちる川瀬浪の音、梢を渡る小夜嵐ごう、く、く、く、さらく、く、く、く、く、く、く、く、  
 ぐると踏鳴し、世を宇治橋の橋姫の、宮居を拍き祈りしは身の毛もよだつ、ばかりなり清貫今が見始  
 め何とやら氣味悪く、枝に取付き見る所に、又向ふより同じ姿の人影見ゆる、アア是も丑の時、扱たく  
 さんや天狗の所爲か、但し狐やばかしぬと睫毛を濡して居たりけり、二人の女も見交して互にぞつとし  
 たりしが、初の女小聲になり、ナフ和女郎は何人ぞとあればさいふは身は何者ぞ、ア、は身にかはらぬ

妾なれば祈も同じ嫉妬よの、されば我も格氣ごと扱も世の中に性のよき男はなし、さてく、合ふたり叶  
 ふたりいざ立ながら格氣講をはじめ、語てうさを晴さんと先づ傍に立寄れば、清貫恐も打忘れ急な所  
 の格氣講と、をかしさうもたまられすふつと吹出すばかりなり、扱も妾は女院の上わらはばせをどや  
 者なるが、及ばぬ戀とはや乍ら幼き時より蟬丸様に思をかけ、斯くと口説やせしかば一夜は思を晴させ  
 んと堅き約束ひへ共、奥様せいたうつよきにやお約束も夢となり、一人焦れ死なんよりかく祈りやと、  
 云ひもあへぬに初の女我こそ宮の北の方、妾を恨むは僻事ぞ、直姫と云ふいたづら女郎ゆゑみづからも  
 捨られし、憎い奴は直姫と牙を鳴して語らるれば、清貫聞けば餘所ならず肝ぞ、潰して居たりしが、ば  
 せを手につき扱奥様か知らでお恨みやたり、戀の敵は直姫一人いざ打殺し共に本意をとげやさん、ア、  
 尤と神木に立並び、鬼とも蛇ごもなし給へと肝膽くだき釘取出し、これは直姫が兩眼にうつ釘はやつふ  
 れよと丁ご打ち、これ首の骨胸板五體腐れとはたと打ち、四十四本の釘の敷筋骨節々つがひく、打て  
 思ひを晴せよと跳り上り飛び上り、てうくはたく、丁ごうてば、釘目より血ながれてさしもの大木ゆ  
 るぐにぞ、清貫もゆらくとたぐよ舟のごとくなり、餘りゆられて目眩き枝踏はづしをうと落ち、二  
 人は驚き飛で逃るを北の方の小腕とつて立歸れば、その隙にばせをの前行方も知らず逃げ失せけり、清  
 貫今は堪られずこれは臺様、人にこそよればしたなきは振舞、明ぬ先にサアお歸りとやせ共、聞入れず  
 人に知られて此大願、空しかるとも一念は死して報ひを知らせんとも、戀に浮名やたちばなの小鳥がささ  
 は大紅蓮、逆捲く水に飛入て哀れ果敢なくなり給ふ、清貫あはて松明くくと云ふ聲に里人も、松明提  
 灯星のごとく此處かしことぞよめさける、時に小波岸をたゞあら恐ろしや北の方の屍骸むつくと起  
 上り、角は忽ち蛇身と成り、鱗を振ひ炎を降し波を蹴たて、三重捲上り鳥居の笠木をくるくく

るり。くくとひんまどひ。虚空に向つて吐く息はたゞ火の雨の如くなり。人々これに怖ぢ恐れわつと云ふて逃げ散れば大蛇は川瀬に飛入つて生かはり死かはり世々生々に恨を爲さん。あら恨めしや口惜と。云ふ聲ばかり水底のそこ。はかどなく流れゆく。宇治の川霧たえぐに明行く空と消えてんげり。おそろし。凄じ。尤も果敢なし哀なりさて懸路は。切なるおもひぞや

才

爰も懸路に名を立し情の時程近き。木幡の里の片傍に千手太郎忠光と云ふ者あり。元來ゆゝしき弓取なるが今浪人の身ながら。飢す凍えぬ芝の鹿明暮殺生を樂み。尾花朝に弓取り添へ今日も狩場に出でける。深草山のすゝ原より兎一疋追出し弓矢取て打つがひ左手もぢりに放つ矢を。手先さがりに射損じて誰が刈積し稻村に。別刀込めてすばと立ち兎は逃れ失せにけり。弓矢八幡射損せし。いで矢を取らんと稻引退ればこは如何に。廿歳ばかりの殿上人二八餘の上臈の。左の袂に矢を受て涙に萎れお在ます。忠光はつと驚き知らぬ事は是非もなし。見奉ればげしうはあらぬ有様怪しや語りおはしませ。ヲ、我は當今第四の宮蟬丸と云ふ者よ。是なる女は直姫とて踏も慣はぬ若草に。妻もこもれり。追風の追手も急に來るべし。萬事は頼むと宣ひて又は涙にむせ給ふ。ハア叔は蟬丸の宮にてましますか。某は千手太郎忠光とていにしへは駆鞍にも乗し者。殊に某が妹は女院様のお末の奉公仕る。然れば大内所縁と申敷ならぬ某を。かゝる高位の御頼一命も惜からず。父は千手入道とて齡罷り寄つたれども甲斐しき覺の者。一先私宅へは供子細は静に承らん。いささせ給へと云ふ所へ。右大辨早廣兵杖三十三此處彼處と搜し來り。彼こそ蟬丸直姫と搦捕れと喚いてかゝる。忠光面に立塞りこれくくく。扱方々は追

手よな。宮の誤はいざ知らず。某は千手太郎と云ふ者よ。苟くも頼れ參らせしとくく歸れと呼はりけり。早廣大きに怒り。宮は不義の過ゆゑ召捕との勅諭なるか。論言に立つくは扱は己めは朝敵かと云へば。イヤサ朝敵にもせとんてきにもせよ。武士の一言論言より重し。頼まるゝと云ふからは命は君に奉る。くく寄らば蹴殺さんと力足をぞうと踏む。早廣怒つて何の二才奴討取れと。群り掛るを飛退り矢束ねくつるげ矢つぎばや差取り引詰め空矢もなく雨の如くに。三重射かくれば。早廣も適はじと皆ちりくく落失せけり。ヲ、さもさふす是迄。直姫を肩に掛け。宮の御手を引參らせ己が。宿所に。三重歸りける既にその日も。暮過ぎて左衛門の督清貫は。蟬丸落失せ給ふと聞き京近邊を尋ね廻り。木幡の里に着けるが草鞋切れて行暮し。村雨しきる今宵しも宮まします共知らばこそ。千手が門の茅茸に晴間を凌ぎ立れけり。雨に籠れる夜半の鐘霧の絶間をすかし見れば。女姿の振袖もいと忍びたる氣色なり。小影に立退き見給へば。かの女門の扉をせはしげに物申さんとぞ叩きける。千手親子すは追手よとかけ出で。夜中の案内何者と云ふ。ナウさ宜ふは兄上か父上かばせをの前にてひが。朋輩の讒にあひ御所をまされ出でひ。爰開け給へと云ふ聲に母は驚き。扱は我子かなつかしやと開んとすれば父の入道ア、暫く大事は油断より起るぞかし。宮を隠匿奉り。夜中に門を開んこと不覺の至り。是々ばせを子細あつて夜中に門を開く事は叶はず。今宵は夫にて明せ明なば内へ入れんとあれば。こは心得ぬ仰かな如何なる憎みひぞ。是非開てたべ開け給へとかき口説てぞ歎きける。いやく憎みはなけれ共今宵門を開きては親兄が侍立す。子細は明朝語るべしはや夜明まで程もなし。是を片敷明せとて内より小袖を投出せば。ばせをは力なくくもさぬ引。被さふし居たり。清貫はせをと聞からに。彼奴こそかの丑の時詣ごさんなれ。大内の有様尋ねんとそろりくくと傍に寄り。作聲してよしと云へばア、恐と云ひ逃んとす。ア、

是々苦しからず。我は田舎の旅人なるが雨を凌ぎて罷りある。承れば大内方の人様とや。拙者共は田夫野人の遠國者。殿上の交り夢に見た事もひはず。國元の土産に語り聞させ給へどある。ばせを打笑ひ。田舎のお衆は何れも左様に宣へ共さして變りし事もなし。糸竹詩文和歌の道。とりわけ流行はぬれごと。につこと會釋しやける。清貫とばけた顔付にて。エ、野でも山でも廣らば戀の道。定めし上臈様もさう仕た色ひはん。さあ〜聞たし〜と云へば。一樹の宿も他生の縁と包ます語るうたてさよ。耻かし乍らみづからは。禁中一の美男蟬丸様に思ひをかけ。様々心つくし舟引手數多の殿なれど。酒の一夜の玉霞まるび寝んと約束を。よしなき女にさへられつひに思ひの晴間なき。涙の雨に身は朽る。念力岩を貫すとのたとへに偽なきならば。死ぬるとも生るとも此無念は晴すべし。エ面伏せ口惜や。よしなの間はす語りあなかしこ。人にもらし給ひそと又ひせ返りせき上げし袖は。時雨にあらそへり。清貫とつくと聞からになふ恐ろしの一念。つひに蟬丸直姫の仇とならんは必定。如何なる事をか仕出しに命に障あらば後悔に甲斐あらじと。近頃不憫千萬ながら太刀抜ひそめ取つて引寄せ。心元を刺通すナウ悲しや人殺しと。呼はる聲に親子の者門を開き飛び出る。あしかりなんと清貫は篠の小敷に駈入り暫く潜みおはしける。母は絶りて悲しめば入道親子もはいまうし。盗人の所爲なんめり追かけんとはしたりしが。宮の事氣づかはしく立も遣す。居もやらず。蟬丸も直姫もあはて。ふためき給ひける。今を限りのばせをの前宮をつ〜見参らせ。苦しげなる息をつぎ〜、それなるは蟬丸様直姫は前とはは身の事が。怨めしや耻かしや偽り多きは一言。誠と思ひ身を焦し戀に心を悩まして。あらぬ思ひに狂ひしも只。一筋に思ふゆる君が戀路のさはりならば。思ひ切れとは宜はでたばかり殺さん金みか。あまりに酷きは心情の道はさなきもの。ナウ憎ふて人には惚ぬぞや。はかなの戀に朽果ん名こそ惜し

けれ去ながら。我里にお宿を召すも他生の縁。草の蔭にて君がため悪かれとは祈らまじ。詞の由縁と思召なば餘の人千度百度より。君が一度の手向草薺の命は惜からず。ナウ父上様兄上様。宮の事偏に頼み奉る。名残をしの母上様南無阿彌陀佛と云ふ聲も。眠れる花の夕の秋十七才を一期として。つひに果敢なくなりにける親子は夢とも辨へずかり付て泣ければ。蟬丸直姫聲を上げさりとては覺なし。恨を晴よゆるしてくれよ。不憫の者の心やと抱き付絶り伏。泣ご叫べど甲斐ぞなき物の。哀れの限りなり。清貫案に相違して今は堪かね案内し。斯様〜と云ひければ聞き及びし清貫殿か。先此方へとしやうじける。清貫人々に對面し。甲斐〜しくもは隠匿我身にとつて祝着と禮義巨細に相違べ。先以ては息女不慮の最期は愁傷察したり。さりながら此敵は知れず。本望とげさせやさんとあれば忠光悦び。それは何方如何なる者にてみぞ。ヲ、此清貫こそ敵なれ。入道親子仰天し一圓に心得ず。何様仔細ひはん承らんと眉を擧めてゆける。清貫涙をばら〜とこぼし。ありし段々心底を委はしく語り。宮此所にましますとは存せず。は行末の仇と思ひ不憫ながらも討たりし。忠は返つて不忠となり仇は情と成たりし。短慮と云ひ粗忽と云ひ面目もひはず。今は恨みを晴給へと太刀を逆手にすばと抜き。既に自害と見えける時親子左右に取付き。ナウ清貫殿我々も侍なり。一家命を抛つ上はさもしく悔残るべきか。大事を抱へて是しきに死んとは狼狽しか。但しは狂氣かサア死なれば死んで見よ。さま〜有め止むれば。思ひ切たる清貫も理に詰られて死れもせず。生ても居られず殺しもならず。三人目と目を見合せて涙を流すぞ道理なり。はや東雲に及びし時右大辨早廣青侍輩に物の具させ。直姫の老母同く若君春ひ取り。陣頭に引立て千手が屋敷を取圍み。は勘當の蟬丸を隠匿ひし段逆鱗斜ならず。太平の君が世に事を好むは痴漢なり。どう〜蟬丸直姫を渡せ。異儀に及ば。先一番に彼奴らを殺すと刃を胸に差當て。サア返

事は如何と聲々に喚き叫んで呼はりける。忠光親子清貫も、人質に倦み果て左右なく切ても出で難く、いかゞはせんとひしめきて兎角時刻延行けば、緩慢し軍神の手向草。うれ突殺して斬入れど、いたはしや老母二才の若君諸共に、只一太刀に害せしは目も當られぬ次第なり。エ、天道知らずの人畜奴、一人ものがさじと、枕長太刀押取のべ、四十余人を左手にうけ右手に支へて、三重戦ひけり千手太郎が手に掛て十六人留めければ、入道が長刀に八人懸てぞ捨て、ける。残る者も深手を負ひさつと引ては又駆入り、二三度四五度搦立しに千手親子聲を掛け、清貫は在せぬか宮をば供やされよ、跡を搦ふなくと呼はれば、尤清貫宮を負参らせ己が館に落らる、其隙に早廣後の垣を押破り、直姫を引立大地に踏付け拜打に振上る、南無三寶と入道横間に丁ご受け火を散らして斬結ぶ、太郎は父を討せしと討て懸れば入道隔て、父が命を庇ふた姫君を討せなば、七生迄の勘當と云ふ聲に力なく、母と姫とを兩脇に搦込で上の山へと落行さける。入道は面も振す追行く敵を防ぎしが、早廣寄つて打太刀に左手の肩先打込れ、七十一歳春の夜のあへなき夢とぞ消にける。忠光父は如何ぞと取て返してハア、口惜や討せつる目前親の敵ぞと、退く敵を蓋に乗り蜘蛛手に追立て追返し、半時ばかり駆たりしが早廣は行方なし。エ、無念口惜し己れ天地を出ずんば、討て父に手向んと、僅に残る難人共木の葉の嵐磯うつ波、ひらくばつと追散し、父が死骸の薄煙霞の谷へと分入し父父たれば子も子たり、天晴勇やし、頼母し、前代未聞の勇士やと扱は文にも、残しとめつる

才 三

早廣が悪逆ゆる宮は虎口の命まぬがれ清貫が計らひにて中納言希世の館にお在せしが、或時清貫希世

参内あり、初も蟬丸の宮往時卓月の頃方眼病例ならず、唐の大和の薬を以て醫療手を盡しひ共、元來宮の事は美男目出度まし升故、數々の女の思ひ嫉妬の恨みは一身に逼り、醫術の及ぶ所ならず終には兩眼盲させ給ひ、蒼天に月日の光なく開夜に灯火影暗き、盲目の容態力及ばずいと、詞を揃へ奏せらる、天皇はつと氣色變り落涙まじませしが、誠に朕が第四の宮と生れ、十善の位をも知るべき身が、生れもつかぬ盲目と成し事、能く前世の惡業深き故、五體不具にして佛には成難し、況んや此世さへ暗さに迷ふ盲目の、未來の闇も痛はしやとや、は涙に呉れ給ふ、よし、此世にて諸人に耻を慚悔して、業障を果し後世を助くる營み、逢坂山に捨置べしと繪言、あるこそ哀れなれ、兩脚詞を揃へ宣旨にてはひ共、賤山樵さへ不具なる子は愛憐し、況んや一天の若宮を山野に捨させ給はん事、且は仁心薄きに似たりと恐れ入てやさるれば、いやとよ生とし生る物子を憐れまぬはなきものを、況てや我が親心身にも代まく思へども、過去をんくの惡業は十善王位も脱れすと、萬民に知らしめて天下の民を悉く佛の道にいれん事廣大の慈悲ならずや、子の愛憐きは盡せねと國を育む我なれば、國民にはかへ難しかまへて汝ら露ほごもいたはらば却つて仇となるべきぞとく、山に捨置べし、果敢なの浮世や淺ましの人界やと、冠の中子を傾ふけて、は涙せきあへさせ給はねば、八省百官諸共におの、袖をぞ絞らる、清貫希世兩卿も、力なく、退出ある世のなら、はしぞ、三重定めなき

蟬丸の宮へ入道り

結ぶの神も、いつはりや、何時の月日に結び初め、寝初し夜半の夢きゑて、縁さへうすさから衣は痛はしや蟬丸は、何のむくひか浮世のやみ、懸慕の闇のくらかりに、牽出す牛はぎのふかも、は幸の車

引かへて野飼に養す。綱手繩。ほ身に添ふる物とては、げんじやうの琵琶一面。清貫希世は供にては、ほれ。出でさせ給ひけるは有様こそ。哀れなれ秋されば。月。さはり泣き。歎きつる。ひがしの山をこえ行ど。今盲目の御身には。何の光も水鳥の。加茂のかはきし波越えて。ちぎりも末の松坂を。さへばや爰に。粟田口。秋まだ若き。山々に。忍びの初紅葉。誰に若よとかにしき織るらん。をりくに。花鳥風月のたはむれも。ともに散り行く花の山鐘ころ。このほの聞え。心細き時しもあれおのが。夕の床急ぐ妻こひ鳥二つ三つ。なふ四つ五つ五文字は歌の。中山誓願寺。あの神垣の年古し。天のみかごのは廟のよ。左手の山の岡の邊とて手を取て教ゆれば。宮はどかうのこともなく世々の日續の。天津君民を。めぐみのことの葉の。露の流れを汲みながらなり行く。果の浅ましやと。ほ涙せきあへさせ給はねば。清貫希世心なき牛も。尾を伏せ角を伏せ涙を。流す有様に。草木も哀もよほせり。秋の田の。刈穂のはらや風おちて。賤が手枕ねみだれし。紙干す布干すまだ。稻も刈干す。我は秋のかはく間もないそなないそ。澤邊のかはづかゝる。思ひはよもしらじ紫竹交りの鼓のしだ。春のゆかりの咲いた妻。小笹姫笹行く袖に。簑着てかよへ。笠きてまた。通へ涙の筆。雨には。あらでやこれの。きやの。木々の木の葉が。はらり。ほろり。はらり。風は諸葉の宮所。今日を限りとふしをがみ。登り下りの旅人も心々。こよひしも誰がたれと。伏見の山見えてかの黄昏の。さゝめどと今日に浮ぶ種ぞかし。いろぐとすれど。どけしなき牛の玉録をそくとも。心の駒は日に千たび戀しき。方に走り井の。水櫛の齒もよしやよし。何時を頼みにたはつけんわが黒髪のおねかづら。逢坂。山にぞ着給ふ。清貫希世兩卿は宮を木蔭に下し参らせ。旨旨黙止がたく是まで供奉せしめ候へ共。いづくに捨て置申へき。去にても我君は。堯舜のかたの賢王とは申せ共。現在御子を捨給ふ寂慮如何なる事

やらんと。涙にくれて申けり。蟬丸聞召あら愚や人々よ。前世の飛行拙なくて盲目と成し故。されば父帝の御情なきには似たれども。此世にて因果を果し後世を助けん御はかりごと。是こそは親の慈悲すて置歸れと宣へば。二人はいよく涙を流し。この有様にては盗人のおそれあり。御衣を給はつて鏡を参らせ候はん。ム。是は雨による民の野鳥と詠せし鏡か。さん候雨露の爲なれば同く笠をも参らす。是は見候ひ三笠と詠し物よなふ。又此杖は御道知べ。げに。是もつくからに千歳の坂も越えなんど。彼の偏照が詠し杖か。夫は千歳の榮ゆく杖。爰は所も逢坂山。關の藁屋の竹ばしら。かゝる浮世に。あふ坂の。知るも知らぬも是見よや。延喜の王子の成行はて。こはそも如何なる例ぞと。聲を上げて泣き給ふ。宣言なれば人々も。名残の袂ふりきつて涙乍らに歸らる。王子は跡に只一人。琵琶を抱きて竹の杖。伏まるびくさらば。の聲ばかり梢のこだま山彦を。せめてそれかと力草分て。山路に。三重入り給ふ桂はみゆる。三五のくれ名高き月に逢坂の。關の清水と聞えしは江州一の名水なり。されば關寺の稚兒達も。是を佛の閑伽桶やひさくの露の玉襪。月を汲まん秋に澄む清水がもとに出らる。時に柳の木蔭より若き女の走り出で。石を袂に拾ひ入れ南無阿彌陀佛といひ捨て。既に清水に飛入る所を稚兒達引留め。法場第一の靈水にて捨身思ひもよらすとあれば。いやとても存命果ぬ身ぞ。御慈悲に見逃して死なせてたべと振放す是々。左程思ひ詰しには子細こそあらめ。しなによつて兎も角も先鎮りて語られよ平に。と申さる。彼の女顔打赤め耻かしながらみづからは。此山に捨られおはします蟬丸様の思ひ者。直姫と申者なるが御行方の懐しく。是迄さまよひ候へ共御在所も定かならず。人に尋ねて候へば御身も不具を耻らひて。人に面を合せじと山深く入給ひ。今は生死も知らざると聞より浮世の頼みもされ。此清水をば三津瀬川逢瀬を急ぎひぞ。はや死なせたべかしと又さめ。とぞ

泣居たる。稚兒達聞き給ひ扱痛はしや。我々は此關寺の稚兒なるが。山路の行法に在在所は存じたり。餘所ながら見せ申さんさりながら。人音すれば隠逃れ給ふ間必らず聲ばし立て給ふな。只は姿を見るまてならばいで。案内申さんど。夕の雨にさす笠や。空も涙も定めなき山路。三重なるらん。第一第二のけんは噴々として。秋の風松を拂つてそいん落つ。第三第四の宮は。我蟬丸が調べも四の。折からなりける村雨かな。流るゝ水の哀れ世の。そのことわりも目に見ぬ。月の入さも知らざれば。夜盡分ん方もなく谷の鳥閉古鳥。梢を渡るむさびや何を。恨みてましら鳴く。落葉衣に露重く。目になふに肩瘦たり。移れば變る哀れさよればにや。夕日のめぐる方をこそ都の空と招く手にそなたの嵐なつかしく。又森々たる。野分に琵琶を弾じては。過し寢覺の忘られず。鹿の妻戀ふ聲までも。は身の上とあぢきなし。まさきの蔓青葛籠。來る人ありとも知り給はず。横や柏を押分けて。杖が。枝折の。そばつたひ。よるほひ。たごらせ給ひける。姫はあれよと見るからに契りし人か淺ましやと。絶り寄りんとせし所を。稚兒達押へてア、音高し。人音すれば隠逃れ給ふ故物いふ事は叶はずとこそ最前よりやつれ。只音せでとありければ。姫は詮方涙に曇る鏡の影か我戀は。逢とはすれどもいはぬ。一我山梔の色香をも「見ずや」知らずや。淺ましやと聲をも立す忍び音にむせ返りてぞ泣給ふ。宮はかくとも白糸の。琵琶取出し。盤渉をへうでうに調べかへやよや待て。天津雁金。ことづてん。古郷の秋は。如何ならん。我は。深山に住わびて琵琶より外は。友なしと撥をあげ給ひし時。風が持て來る村雨の紅葉遅しと夕時雨。一むらさと降來れば蟬丸琵琶をぬらさじと此所の木の下の彼所の木陰。濡ても寝んと詠せしは。花に戯れし歌のさま我は又。賤の男が。く。擔ぐ補笠脇笠の。雨に木の葉もみだるゝ初時雨彼方へ走り此方へ走りざらりくざらりくざらり。かけりさまよひ身は濡衣。木陰なければ雨も堪らず。一人を見る目

も痛しくすこし小高き崖蔭より。笠をそつと指かくれば。宮は耳をそばだて。不思議や雨は降ながら身に掛らぬは木蔭よな。口惜やいにしへは。一夜泊りし宿までも。錦のしとね。綾の床。垣にきんくわをかけ。戸には水晶をつらねつゝ。戀興しよくしやの玉衣のすさまの風ものどひしにかく。淺ましき苦席。敷くともしかし。世の中よ。思ふ人とし片敷ば。玉の臺も思しき。斯とは知らで直姫が哀れ何とか暮すらん。戀しの昔や忍ばしの直姫やと。盲目の悲しさはそばに有とも知り給はず。獨ごちたき聲を上げ歎き暮はせ給ふにぞ。今は堪かね心消え直姫爰にと云はんとすれど。稚兒達暫と留れば。絶に入り消入り伏轉び身を悶へてぞあてがる。神ならぬ身は是非もなし。や。あつて蟬丸琵琶も撥もからりと捨て。南無三寶叶はぬ事に迷ふたり。逢は別の始獨とさまる道ならず。色も匂ひも一盛り。ア、思ふまじ歎かじと。一首の歌にかくばかりこれや此。行も歸るも別れては。知るも知らぬも逢坂の關。晨に別れ夕暮にあふさか山のたび人のゆきさも夢のすさみぞや。雨降は降れ。風吹は吹け。山の奥こそ住よけれ。エ、浮世の無常今ぞ悟の花開けしと。走り出んと仕給へば。人々岸より飛でおり是直姫よと絶りつく。宮も是はとばかりにて。互に手をととり袖を取り戀し床しの物語。盡せぬ物は涙なり心を思ひ遣れたる。一時に二人の稚兒達詞を揃へ如何蟬丸。は身色を重んじて思ひに絆れ情に沈み。餘多の女を迷はせし。因果の霞心を暗まし盲目となり給へ共。今の悟の詠歌面白く。三十一文字のおもてに旅の姿を聯ね。内には則ち會者定離哀別離苦の理。あふはわかれの始と示し一首に三世を現はせり。神も心をたをやぎて。佛の教に逢坂の。一の關寺の鐘の聲煩悩の夢を覺すや法の聲も靜に先づ初夜の鐘を撞く時は。諸行無常と響くなり。後夜の鐘を撞くときは。是生滅法と響くなり。尋常の響は。生滅を已入相は。寂滅為樂と。響きて菩提の道も暗からず。悟の夜半と明渡る雨眼はくらくとも。汝月明かなり和歌の妙を授け

ん爲「我は人丸」我は赤人二人の魂魄現はれ出で。共に成佛得脱のそつに生れん嬉しきと。言ふ聲ばかりは逢坂山。いふかと思へば逢坂山の杉の嵐に立。紛れてぞ失せにけり。蟬丸あつと感歎ありそれ日の本は神國の。和歌を以て道とせり歌仙の靈魂現はれ出。詞を交す其奇特未だ天道捨給はずと。感涙袖を潤はして扱直姫に逢ふ事も。神の授くる縁ぞと。各々夢かたごられて。猶信心の和歌の道古き例に蹈分て。打つれ山路に歸らるゝ。夫婦不思議の契とて。二度巡り逢坂山の名歌は。今にのこりける

才 四

右大辨早廣は千手入道を討滅し。都の住居もなりがたく遠國にさまよひしが。兎角我身上の敵は蟬丸なり。是非に怨を晴さんと下人等一兩輩召つれ。逢坂山の谷峰を草を分て尋ねれ共。宮の行方は無かりけり後は小關藤の尾や。斯る山家も住めば住む奥の柴人友呼交し。是々逢坂山にて不思議の物を拾ふたり。抑何と云ふ物ぞ。サア推當にいふて見よと琵琶の撥をぞ出しける。山樵共集りて。姿は銀杏の葉の形にて扱も合點ゆかぬもの。是は猿の末廣か。否々天狗の弁ならめとさまよ見立笑ひける。時に向の岡邊より若き樵夫の是を見て。やれ方々夫は此山に捨られ坐せし。蟬丸様の琵琶の撥と云ふ物ぞ。賤しき者の用には立ず我に吳よと云ひければ。ムとして又汝は何にか爲る。様子に依て遣んど云ふ彼男聞も敢ず。ヲ、某はあの滋賀の里に世を通れ住給ふ。伯雅の三位とや人の一僕喜藤太と云ふ柴刈成が。主君伯雅の三位殿は蟬丸様の琵琶の弟子。其由緒にて此間。蟬丸様は夫婦共に旦那が庵に入給へば。捧げや。に是非く所望と云ひければ。扱はさうか持ても用なし勿體なしと。與へて皆々通りけり。早廣篇と聞濟し郎等に目配せ。喜藤太を四方よりばらくと取圍み。是々汝が主人三位の庵に蟬丸のお在るとや。

サア案内して連れて行け。否と云は踏殺さんとかさを掛けてぞ申ける。喜藤太きよつとせしが打領づき。ム、聞えた己奴等は強盗よな。ヤイサおのれ等。氣色すればとて主の家へ盗人の引入がなるものか。下郎と思ひ悔るな四も五も食ふ男でなし。足手息災の内はやく歸れと怒りける。早廣怒つて夫引立て案内させよ。承ると下人共飛懸れば取て投げ。取付けば踏倒し扱とりのべ打てかゝる。早廣も扱合せ二打三打働さしが。山路に馴れたる荒男岩とも谷ともいはせばこそ。猿より軽く駆廻れば。さしもの早廣せんかたなく轉びころんで通落ける。喜藤太も是までと元の所に立歸り。エ、何でもない奴等に逢ひあつたら汗を流せしと。柴に棒さし昇荷ひ。鼻歌詠ひゆうくと滋賀の。里へと。三更歸りける左衛門の督清貫は。宣言とは云ながら幼少より仕へにし。宮を山野に捨參らせあぢきなき世に墨染の。袂にやつし國々を修行念佛他事もなし。去ば故郷忘じ難し宮のの上如何ぞと。都に歸るさになみや滋賀の浦にぞ着給ふ。古き都の所から花散里のわらがこひ。槍垣透垣小やかにいとゆへづける庵あり。立入り見れ共主人はなし持佛の香華細やかに。持經禮讃つくるはず本尊も。むかし覺えたり。如何なる近世者の仕家ぞや。世を厭ふ身は誰とて斯こそあらま欲しけれ。住持の歸さを待受け。一夜語りて通らばやと思ひ椽に腰掛け待居たり。時に佛壇の下より。女の聲にて申々と呼かくる。ハツト驚き見てあれば。忍びやかに戸を開て雪の様な手を出し。やよ是水一つ給べと云ふ。大道心の清貫も是ぞ化性の業ならめと膝わな。くくとふるひしが。エ、不憚や餓鬼道に迷ひし幽靈ごさめり。是ぞ出家の役と觀じ。土器に水を入れ。華經三途餓渴飽満無阿彌陀佛と差出しちやくと手を引き退りしが。又こわく立寄りてそつと覗けば。弓矢八幡あてやかなる女房なり。ム、扱は坊の枕妻よな。いやはや浮世に扱目はなし。誰かは知らねど此庵の滞坊主。所こそあれ佛壇に女寝させてさめごと。思ひまはせばをかしくて獨笑ふて

居たりしが、又聲たて、あら心よや。今一つと差出す清貫をもとけ者。わたもちの梵妻殿ちと拜み奉らんと。其手を取て引出しよく見れば直姫なり。扱はひ身は清貫かなふ姫君かど手を打て互に。呆れおはします。されども清貫不審はれず。何とて爰にはは入と問へば直姫聞給ひ、さればとよ此所は伯雅の三位とて宮の琵琶の弟子なる故。扱妾もるとも是に忍びますと語り給へば。清貫悦び宮は何所に渡らせたもふは目見得いたしたし。ヲ、は出世の祈誓に坂本の山王へ日参あそばし。今日も三位を供にては参詣ひが。追付歸らせ給ふべしと宣ふところへ喜藤太立歸り。清貫をきつと見て。彼奴も盗人の同類か油断はせぬと鎌取直すを。姫君は驚じやれ喜藤太。われは宮の乳人清貫と云ふ人なり。おことは氣ばし違ひたるかと宣へば。ム、扱はそうか免。拙者は山にて強盗に逢ひし故。扱只今の仕合と有し次第を語りける。清貫つくく聞給ひ。いや。是は盗人ならし早廣に疑なし。大勢催はし此處へ押掛んは必定。垣一重の庵室に長袖足弱あやまちあらば後悔せん。いで山王まで姫君をも供し。宮をも誘ひ奉り一先都へ上るべし。それ喜藤太は手を曳け暮ぬ先に夕浪の。鴉の海邊を濱づたひに坂本さしてぞ。三更急ぎける爰に又。千手太郎忠光は父入道を早廣に討せ。其無念はれやらす老たる母を肩に掛け。親の敵早廣を是非一太刀と心がけ。野山におきふしつけ狙ふ所存の。一程こそことわりなれ。時しもわれ滋賀の里にて早廣をつけ出し。サア今ぞ日頃の運試し天の與へあら嬉しやと逸れども。見れば敵は大勢にてむらがり来る。老母を何處に置べきぞ。エ、屈竟の庵室は免といひ捨てつゝ入り。持佛の下段の戸を押開け母を忍ばせ奉り。あら心やすや此上は腕かぎり太刀限りと。身繕ひする所へ早廣主従七人にて。伯雅の三位が庵とはこれならめばつこんで討取れと云ふ程こそあれ。我先にご亂れ入る忠光戸口に立塞がり。千手太郎見忘れたか己れをころ尋ねしに。神佛のわてがひ能も爰へ來りしな。親

の敵覺えたかと無二無三に切て蒐れば。先を取られて動揺しおびえてさつと退きしが。踏止れば打かけ取て返せば切かけ。打かけく息をもつかず。遁る敵におつすが粟津が原へぞ。三更おつかけくるかくとは知らず。伯雅の三位蟬丸の供して。清貫とは道違ひふもとの田面下向道おのが庵に歸りける。蟬丸仰せけるは誠に師弟のちなみとて。此度の忠節淺からずと宣ふにぞ。かゝるは用に立つ事生前の本望。先は姫君さぞ淋しくは心も盡ぬべしと。佛壇の戸を明け手を取て引出せばヤア、は何んじや。七十有餘の老女頭の霜もみつわむ。おひさらばひて出でける三位はつと飛のけば。宮も驚きやれ何事を氣づかはし。さんひ姫君俄に白髪の姥と成給ふ。今の間に年のよるは合點參らす。是は覽せと手を取り肌を撫れば。骨あれて老の波立つ身の皺に瘦せて色香もなかりけり。宮もあきれまじませば。三位いよく當惑し。今朝程宿を出でさまに確姫君を入れおいたと存するが。取違へたか知らぬまでと眉を。繋めて居たりけり。痛はしや蟬丸は涙をばらばら。我がこの姿なる事もあの姫故と樂みに。情も戀もさめ果し天魔の所爲か冥罰か。愁歎こそ道理なれ。老母は聲を聞覚え。顔をも思ひつけ。ナウ宮様か蟬丸様かお懐しや床しやと。紐付けばア、煩さ。ゆるせくと彼方へ逃げ此方へ隠れ百歳に。一歳足らぬ九十九髪もて扱はせ給ひけり。ヲ、は尤く。名をすさすは見忘れひべし。妾こそ君が爲早廣に討れし。千手入道が後家忠光が母にていと件のあらまし語らるれば實に。それよ珍らしや。是はくと手を打て一先不審は晴しかど。直姫の行方なし最前の騒動に。敵や奪ひ取つると未だ氣遣ひ絶えぬ所に。清貫喜藤太姫君を誘引し。宮に出逢ひ奉らぬは道こそ違ひつらめとて。もとの庵へ歸らるればこは清貫か我君か。夫よ彼よと寄集り泣いつ笑ふつ取々に語らひ哄み給ひけり。しかつし所へ千手太郎薄手少々受け乍ら。大汗に成て走せ歸り。人々を見るよりもはつと驚き嬉しさに。左右の言

句も出ばこそ夢かと思ふ氣色なり。各々一度にやれ千手か忠光か。事の首尾は母の物語にて承る。して先敵は討止しか。さんひ敵は大勢とや。長追に力つきひを火水の底もと存せしかど。母が有様氣遣しく無念乍らも打漏し取て返しひ。幸かな此上は。恐れ乍ら母を君に預け參らせ。心身軽くし罷出で敵を討て歸るべし。はやお暇とぞやける清貫聞きもあへず。ヲ、すし勇し。は老母は我や預り。都一條大官に坂上の姫宮とて。蟬丸の姉宮お在ます。君諸共に此方へ伴ひ忍ばせ奉らん。これ此袈裟衣は。某が着用して君に巡り逢ひ奉りし吉左右目出度き三衣なり。貴殿に譲りやべし修行者に様を變へ。狙ひ寄て木望遂げ目出度歸洛せられよと。おのゝ門出祝るればヲ、有難し忝し。此衣を給つて姿は墨に糞すとも。心ばかりは染殘し彌陀の利劍を提げ。たとへは敵翼を生じ。梢をかけり波を潜つて新羅百濟高麗國。支那天竺に至る共乾坤を出ずんば。よしや五年が十年も命終らば一念の。魂残つて木望遂げ目出度歸つて母者人。は笑ひ顔見やさんヲ、は身が笑も見せてたべ。お暇す我君様いとまやて母上様。おのゝには老母が事頼み存するヲ、をさらば。さらばと出で、行く花は三芳野人は武士譽は。雲井にかほりける。

蟬丸

身入

世の中は鬼にも角にも假の宿。傘一本に起伏すも身の程隠す我庵と。墨の袂に墨頭巾經論せうく懐中し。父の敵を狙ひゆく瞋恚に我は迷へども。人を導く六道の。辻談義こそ殊勝なれ。誠に淺ましいかな歎かしか。けふの衆生一生憎悪不斷。煩惱の塵に交はり。朝に怒り夕に悦び。貪瞋痴慢の色香に迷ひかりにも佛法と云ふことを知らぬ。愚なるかな妻子珍寶及王位。臨命從時不隨者とまをして。現世に

て寶の山を築かせ。子孫奴に侍かれ花に詠じ月に嘯ぶ。無上の榮華を極むるといへども。一族絶斷臨終の嵐に貪慾食の火の車。ごうしやうの雲にとどろき誘ひ行くときんば。日頃の下人も従はず金銀衣服も身につけず。無間奈落にまつさかさまに墮る事三つ羽の征矢よりいとやし。財寶は地獄の家産名聞は焦熱のつま木とも譬へたり。扱如何がしておのゝ我等。佛にはなるぞとせば。有難い事の。化成論品に曰く。大通智勝佛十劫坐道場佛法不現前不得成佛道。此文の心は一心の外に佛法なし。一心の外に成佛なし。されば愚痴無智の凡夫。心の外に佛を求め穢土の外に淨土を求め。却て迷の種となす。是を和らげ傳教大師の。は歌に。悟とて外に。求むる。心こそ迷ひ初めける。始なるらん。又天台の釋文にも。法華彌陀眼目の異名とて。釋迦と阿彌陀は例へば目と云ひ眼と云ふが如くにて。一佛異名同一體心の外に來迎なし。坐がら愛も蓮華道場。寝ても佛覺ても佛。立ても佛居ても佛。行住坐臥一心不亂に念佛せば。己身の彌陀唯心の淨。土なれば心外無別法即心成佛。取も直さず居も直さず。十方偏照の光明を放ち。金色の蓮臺に駕せられ一瞬刹那其間に。忽ち安養無垢世界。舞臺快樂の都に至らん何疑の有べきと。四頓八圓流るゝ如く。語り給へば往來は皆々禮して通りけり。右大辨早廣は丹波の方へ落行んど。編笠引こみ。驛馬に乗り白河越に來りしが。傘にや恐れけん早廣が乘たる馬。俄にけしとみ跳上り鞍を放れてどうと落ち。早廣怒て是願人奴。馬上にも用捨せず傘をひらめかし。落馬させつる奇怪と傘取たるを屹と見て。ヤア親の敵早廣か千手太郎知つらんと。傘の轆轤を抜けば長柄に鎗を仕込ふたり。餘さじと飛かゝれば南無三寶と馬引寄せ打乗り。鞭をあてゝ歩ます卑怯者憶病者。かへせと聲を掛け。息をもつがす追駈しはた。韋駄天如くなり。半道ばかり追かけしが馬の足並早廣に。十四五町下り松の木蔭につゝ立ち。又駈出んとしけれども。如何に足立す。野山に伏したる千手太郎二三日五

蟬丸

殺を食せず。のんご湯してよろ／＼と一足もひかればこそ。エ、冥加につきたり口惜しと齒がみを。なして立たる所に。誠に天の與かや死人に供へし。枕付の供物松の下に棄てあり。有難し幸と一口にぐつと喰。一掃ゆつて力足を踏だれば。金剛力士の如くなり。サア千里萬里も一飛と又駈出し。三行行く水のかみや川にて程なく追付き聲を掛。馬の尻がひ鞍壺掛て突ければ。馬は堪へずかつばと伏す早廣下り立心得たりと。太刀を合せて防ぎしが一念の鋒尖岩を劈くいきほひに。左の肋を貫かれ仰氣に返せばつと入り。取て引伏せ馬乗にさうご乗り。親の敵諸人の仇年來の恨思ひ知れと。三刀四刀指貫しエ、鏢しい心地よしと。うれし泣に泣き居たり。先母上に悦ばせ奉らんと。首掻落し鎗に貫き振かたげ。蟬丸のお在ます一條大宮坂上の館へ。飛が如くに急ぎける心の中こそ。三重嬉しけれ案内にも及ばず。千手太郎忠光敵早廣が首取て参りしと大音揚て呼はれば。希世清貫宮は夫婦是は／＼と走り出で。扱もお手柄／＼と勇み悦び給ひけり。此年月の難行又下り松にて餓に及びし時。亡者に供へし供物にて餓を凌ぎし有様つぶさに語り。母にゆて悦ばせんはや／＼達せて給べとせせば。人々は涙ぐみとかうの事も宣はす。こは心得ず如何なる仔細ぞ聞させ給へ。希世涙を止め今更語るも便なきながら。老母の事は甘日程以前より風の心地とひひしを。醫療手を盡せし甲斐もなく。一昨日の暮方に終に果敢なく成給ふ。只今の物語亡者の供物を食せしとは。それこそ老母の供物よと語りもあへぬに忠光は。はつと計りに伏轉び聲も。惜ます泣き居たり。心の中こそ無惨なれいと涙にくれながら。さては亡母の供物にて我渴命を繋ぎ本望を達せしかや。草の蔭まで子と思ふ母の一念通じたる。親子の知遇の有難さよ。かくあるべきとは存せず顔面を拜せんと。勇み歸りし甲斐もなく定めがたなの世の中やと。人目もわかす聲を上げ口説立てぞ泣き居たり。げに道理ことわりやとおの／＼袖をぞ絞らる。や／＼あつて千手太郎ア、

歎くまじやい。親兄弟が命を捨しも君を代に立ん爲。敵を打て以上は只父母が供養には。君は出世の証証こそあらま欲うひと涙を止めゆければ。清貫聞もあへず我々もさは存ずれ共。先々月より直姫は懐妊の萌ひ故。取紛れ延引せし急に奏聞せんと。評議とり／＼なるごころへ姉宮ゆるぎ出で給ひ。千手太郎とは身事か忠義感入てこそいへ。妾は坂上とて蟬丸の姉なるが。因果の不具に髪さかさまに生し故父帝にも嫌はれて。かゝるわびしき住居ながら是は過去の因果なれば祈るべき力なし。又蟬丸の盲目は嫉妬に命を失ひし。北の方の一念現世の報ばかりなり。殊に直姫懐妊とや。かの恨にて生るゝ子も不具ならんは必定。もと北の方に仇もなければ科もなし。安居院の小聖を請じ。宇治川にて七七日魂しづめの法事をなし。彼の亡魂をなだめなば蟬丸の目も開け。直姫の平産も氣質美麗の男子ならんべく／＼と宣へば皆尤と同じつ。小聖には使者あり。都の辰巳思立つ日を吉。日とぞ。三重開闢ある

懐胎ナリ

宇治の網代木。日を重ね。今日満願の大法事。宮は夫婦は願主にて壇の左右に着座ある。大君は幸なりければ。洛中近國かくれなく。信心の参詣は。老若男女貴賤都副袖をつらねておびたし。かくて安居院の小聖は役の行者のあとをつぎ。貽金兩部の峰をわけ七ほうの露を除ひし篠掛に。不浄をへだつる忍辱の袈裟。智行をとらぬ弟子達左手右手に相俱し。壇上に差掛り先づ加持の讃を誦せられける。きん上。再拜。うやまつて申すたすめ。それ無漏無常の法界には。自他の念更になし。悟るときんば十方空。迷ふがゆるるに三界生喜怒。みだりに起つて哀樂。これがために止む事なし。花と見よ雪と見よ。龍田の錦吉野の雲うつ／＼なければ。夢もむすばず。水たま。らねば月もやぐらす。今ひるがへ

す。幣帛に、あじばんふしやうの風を招きて、迷忘の闇をはらさん。そもく行者が修法と云つば。初七日は曼陀羅供。二七日ははふじやうく。三七日には龍女成佛水施餓鬼。四七日は光明供。五七日には妙なれや法華せんばふ六七日は。法よりのしゆり三昧今月。今日七々日の大結願とやには。妊婦安平子安の法。今の法に仇を忘れて應護の皆をめぐらし給へと。懐胎十月の十相を語り「給ふぞ。しゆしやうなる。先づ初月は一氣體中に孕まれ。其形恰も鶏卵の如し。是本來一とくの精水。形に取ては混沌未分。名に取てはたいげんたいの神道にては。國常立の命とや奉り。かんじゆは天の。せいみんを降すと云ふ。佛法にては本宇の毘盧遮那。不動明王の請取給ひて本來の。空の一物是どかや。二月めには陰陽の。二氣相和して一氣と成り。獨鈷の形とわらはる。是をたいしと名付て。形の始りのつぎにて。藥師如來の請取なり。三月めに至ては人倫の本身私なく。始めて一念きさす天竺の釋迦如來は佛といひ。唐土の聖人は。明德と名付。我朝にては神慮と仰ぐ。名づくる所はへだくれと三形一は。やこのくア、このく三鈷の形文殊菩薩の請とりなり。はや四月めは。地水火風の五倫ことくくつらなりて。仁義五常の五鈷の形普賢菩薩の守なり。扱五月に及んで。六根手足をさいしき五體残らず連續す。此時よりその體に守本尊定まりて付添ひ。めぐるはらおびや地藏菩薩の。請取なり。六月になれば好む所。欲する所自然に生じ。母の乳房にくひつきて。親の乳を吸とる事およそ。三石六斗なり。則ち大悲觀世音。是を守らせ給ふとぞ。扱七月に至つては。かたじけなくも佛は三世の因縁壽命を鑑み。扱こそ人間一生にめぐる。因果の。小車の輪の。輪鋒にささみつけ。頭にかづけ給ふとこかや。彌勒菩薩の請取なり。八月めに及んで阿修羅菩薩の守にて。輪鋒變じて胞となり。九月には成長しいねんあるゆゑ法界の。惡魔惡龍毒氣を吹入れ。吹かけ。吹こみ此界に出生せば。己れが魔道へ引入れんと隙間を狙ひ

うかふなり。父母の所行所念に引れ。善をなせば善人。惡をなせば惡人と成り極樂。地獄の境ぞとて。産神を定め置き勢至菩薩の守なり。當る十月は愛染明王。されば六道四生廿五有の其中に。人よりも尊きはなく皆佛生を備へたり。彼も我も一佛一體汝が怨念消除微塵。もとの佛果に至りたまへ。おんあびらうんけんたら。たかまんきうく。によりつりやうと精々をぬきんでし。じゆだらの聲も川風も天にひびき。有難し時に不思議や。神木の松の木の間北の方の幽靈影の如くに現はれ。此は經にひかれて五逆のたつた入才の龍女。共に佛果を受しぞへ恨を晴れて今よりは。五知の佛となるべしと宣ふ聲もかんばしく。如意觀音と現はれ光を。放つて失せ給ふ。此光明に照されて蟬丸のは兩眼。くはつと開けて是はくと宣へば君臣上下おしなべて。悦びさめき給ひけり扱小聖には禮あつく。は夫婦うちつれ還御あるは子孫繁昌國繁昌千秋萬歲萬々歳つさせぬ。やとこそ久しけれ

源氏 大掛拍十幅一對

近松全集

まぐして曰、嘉辰例月悦び極りなし。萬歳千秋たのしみいまだ盡きすと云々。それ蝸牛の角の上に何事かを争ふ。石火の光りのうちに此身を寄す。こゝに源の頼義公は、中國にはびこりし名古屋三河の前忠秀を、事故なく追伐あつて、チロシめでたく凱陣なされしは、いつも變らぬ渡邊源次左衛門武藏、坂田の平太公平卜部の民部季宗、碓井の二郎貞兼平井ひとり武者きよはる。これ五人の者どもが並ばなき勇力ゆゑ。尤もそのちうたいくはたりと重く、恩負なされるれば、五人もいよく忠義を爲し日夜の出仕隙もなく、源氏のほ代のほ繁昌、幾千代かけて萬歳と仰がぬ。者こそ三重なかりけりさて其後に、されば國土の禍は必ずしひより起るとや、其頃の公家大臣何れもばさらを好み、民のつひえも願みずよこしまに驕らるゝを、頼義武將の役なれば深く戒め諫言ありしを、金言耳に逆ふとやいづれも是を惜ほり、禁中に會合して冠を揃へて奏聞ありしは、いにしへ源平兩家相並び、天下に二人の武將いへば菴端正しく取行ひしに、源の頼光より此方只一人の武將ゆゑ。己が心底に任せ振舞ふに據つて、諸武士の怨重り亂げき絶ゆる事ひはず。哀れ何れにても器量の武士を撰み出させられ、今一人の武將を仰付られひて、然べくいと皆一同に奏聞ある。君欲聞まし〜て、諸卿の訴へ實にもその理をなばれりと、暫らく證義まし〜て近江守平の師氏は、文武二道の勇士なれば武將と號して苦しからず、急ぎ召せとの宣旨なり。承りひと勅使を「立させ給ひける。師氏召に應じて參内す。君欲聞まし〜て事の次第を仰付られ。今より後は頼義と兩輪にて、萬事取行ふべしとの宣旨にて、當座にあさひの將軍にぞふせられけ

る。兼てより驕を好む師氏なれば、忝しと領承し、は前を罷立ち我家を差てぞ、三駕歸りける。是は  
 扱置、源の頼義は伯父頼光の忌日とて、五人の殿原召集め、させんのは營みある處へ、内裏より勅使立  
 ち、此度平の師氏を武將に仰付らるゝの間、何事も兩人内談せしめ、計らふべしとの宣旨の趣き一々に  
 述べらるれば、頼義謹んで承り、誠に某一人にては、天下の政道覺束なく存ひへば、内々此方より訴訟  
 申上べき處に、此段委細畏り入ひと、さも鷹揚に勅答あれば、勅使は、内裏に歸らるゝ、其後五人の人  
 々をめぐされ、扱も彼の師氏はくわしく第一の驕り者と聞いてあり、左様なる曲者と相將軍に任ずるこ  
 そ頗る不肖に思ふなり、内々方々も其心得專一なりとの給へば、人々承りは誰にてはひへ共、くわしよ  
 くは相手によりて仕らん、君に對していかでか無禮を申すべき、若し推參仕りてはひは、極るごうにて  
 はんべらんと嘲笑つてぞやける、かくて三日過れ共師氏も來らず使ひを以ても申さねば、頼義仰せける  
 様は、扱こそ事を繕ふ倭人かな、此上は某彼が館へ參り對面し、心底を殘さず萬端示し合すべし、此義  
 いかにとの給へば公平膝立直し、こは口惜しきは誰や、君は先年よりの武將にてはひへば、禮儀を存せ  
 ば彼奴こそ參上すすべきに、君は出であるべきとは何事を仰せられひぞ、只いつまでも彼が參らぬ内は  
 萬のおきてを只今迄の如く、は一人にては政道あるべし、もし彼奴めが異儀に及びやなば、召捕つて  
 參内し事の次第を訴へんに、いかでか仔細のひべきと事もなげにぞ申上る、ヲ、おこごとがや處筋目たり  
 然れども彼の師氏は無體に驕る者なれば、定て某が立越ゆるを態と待つて控ゆるん、左様の曲者と知  
 り乍、劣らし負けじと威勢を争ふは何とやらん大人氣なし、只何となく打越えて對面せんにはしかじ  
 我きたく遅きに於ては方々跡より參られよと宣ひて、時の侍ばかりは供にて綾の小路へ、三駕いそが  
 る、是は扱置き、かくて平の師氏は家の子郎等召集め、某控へて行かざるゆゑ、頼義是へ來ると聞く。

先づ一のゐを呑みてあり、此上は萬うはてに廻し殆んど後れを與ふべし、何れも其旨欲せよと詮議區々  
 なる處へ、頼義出來ましく、かくと仰入れらるれば師氏聞いてそれなたへとやがて、奥に招し入れ  
 、「ヤアよくこそは入ひものかなと色々にもてなし、扱しゆもすへんに及でのち師氏しやく取直し、誠に  
 國土に人多き其中に撰み出され、武將の宣旨蒙ること生前の面目、此極恩何として報じ奉らん、かくや  
 せば何とやらん事を願ふ様にひへ共、あはれ世の不思議も出來いたせかし、一命を戰場になげうつて恐  
 らく深く譽を秋津洲に廣めやさん物をと廣言がましくやけれ、頼義聞召しえ、聞きしに勝るをこの者や  
 、「なほも心を引見んと思召、扱や勇氣にかなふは心底かたんとするに餘りひ、は存じの如く某は、家に  
 傳はる古き臣下どもには後れひひぬ、今程は良き郎等もこれなくひへば、萬審しき事にはんべるなり  
 、「諸事たゞはめぐみに預りやさんと猶慙慙に述べ給へば、師氏この詞にいよく驕りいやましてやす様  
 、「仰せの如くは家には綱金時貞光季武保昌とて、五人相並びありし時は日本に人ありとも思はれず、う  
 らやましくも存せしに、打續いて相果しこと、さこそはいなく思すらん、誠に武士の威光には良き臣下  
 にてひなり、身不肖なれども我に傳はる勇士をばかくの如く持つてひ、いで、見參に入やさんそれぞ  
 れ四天王とやければ、二王を作りそんじたる様なる大のをのて四人、大太刀を横たへ敷座にあまりて直  
 りける、時に師氏やさるゝは、いかに汝等、これに渡らせ給ふは源の頼義公なり、しせんの時は兩さい  
 たるべき間、萬端は下知に反くこと勿れと世にをこがましくぞやける、四人の者ども膝を直して、それ  
 詩歌は公家のもてあそび、弓矢は武士の勵む業にてはひへども、萬人心ざす所薄きゆゑ、當時はいにしへ  
 の如くなる勇力の者曾て承り及ばず、物その數ならねど我々は、數代たゞ弓箭のみ取つて名を高く仕ら  
 んと相守り、幼穉の昔より長年の今に至る迄、晝夜軍議に身を委ねひ、然れども黄石公が子房に授けし

所はいまだ學ひ得ずいへども、伯耆の國の大山にて、愛宕高雄の天狗どもあぐしのたか九に傳へし所の兵法を、型の如く奥儀を極めてひ、明日にても亂敵出來いたしなば、兩將軍のさきがけを我々が承りひはんと、大將を撫上げて傍若無人に見えにけり。賴義聞召しあつばれ尾籠なるていたらくや、かくあるべきと知るならば五人の内一人、召連れ來らんものをと後悔あれどかひぞなき。然る所へ渡邊左衛門たけつなは、足跡よりも参りつ、一間を隔て、控へしが、餘りに聞かね既にししたしがいやく、君の心いかうと思ひ先づ笄をそろりと抜き、さて障子越に君の心後をそつと突いた。賴義心得たぞとのたまふ、イヤたけつな是にひ罷出で申すべきやと云へば、おくとくくと仰せける。畏つてひと障子をさらりと押明け、先づ師氏にしきだいし、某は源家の家臣渡邊左衛門たけつなと申す者にてひ、先程よりの心詞あれにて委しく承り誠に頼もしく存ひ、さりながら君を始め我々に至るまで、何れも若き者ごもにてひへば、しせんの時よろの掛合にも、貴公の政道をも相待たす萬そこつけのみ多くいはん、それを必ず御心にかげられず、おとなしやかに後語を頼み奉る、さて又先程四天王と聞えひしは、これなる人々にて御渡りひな、ヲ、實にも世の常ならぬ器量かな、然しながらそれ四天王とやらんは、あしく修羅道三惡四趣の、惡魔を降服有れいしんを、多聞持國増上、廣目の四天王とすや、そのいふ所を我心底に寫し得て人間はずに及ばず、いかなる鬼神をも取控ぐ勇力なくしては四天王とは申されず、定めて其心得のひべし、構ひて、四天王の名折はし仕給ふな、さりな、がら少覺東なくひと詞を放つて申ければ、四人の者ども忽ち顔色變つて、師氏方をきつと見て膝立直す所へ、は館に残りし四人の人々追々にはせ來り、御歸宅おそなはりひ故御迎ひに參上仕ひ、やあ何事かあるたけつなとす、いや、某が是にある上は何の別儀のあるべきや、誠に是は御長座にてひ急ぎ御立ちなされいへ

いかに四天王へやひ、只今の無禮は免なされいへ、將又これに並び罷在ひは、我々が皆な朋輩にてひやあかた、あれにひは師氏公の心内なる、四天王なれば好く見知り置かれよと申ければ、公平を始め人々罷り出、誠に渡邊が引合せを以て、新四天王の衆中に書面をいだして近頃祝着申してひ、何さま重ねて對顔せしめんと、所存を殘らず廣言し君を守護し五人の者、東西を睨付けあたりを拂つて立ければ、雲霞の如く並み居たる者ごも、りくぎに服し威に恐れ一言出すものもなくなつた、おめくと控へける賴義の威光、五人の者の體たらく天が下に並びなき、勇士の集り是なり只これなるはと扱はぬものこそなかりけり

### 第二

かくて平の師氏は、此度の會合に頗る後を取りし事、其身の非義はかへりみすひたすら胸を焦し、ないく付従ひしたししみし大名に、播磨の前司國頼桃の井の兵庫道清、これ兩人を常々に招き寄せ、心底を殘さずみぎのあらましを語り、賴義滅亡のはかりごと日夜に企むぞ恐るしき、時に師氏申さるは、こゝに屈竟の計略を案じ出したり、先づ播磨の前司は家の子郎等に物の具させ、洛中を駈け廻らせやされよ、然らば卿相雲客驚きて帝へかくと訴へん、其時道清は軍兵を卒し參内あり、源の賴義君を怨みやさんと追付とりかけやひ間、守護のため相勤めいと奏聞あるべし、時に某馳上り、面にしゆうがていを飾り口にするの辨舌とかね、賴義が逆心たるよしを述べし、此手段はせん國のれいがかんがけい王の前にて、らいしをさんせし謀なり、異國の大王だにものせられたりし智略なり、此義いかにとすさる、兩人共に謀を合せ、さて是は廣大なる智略かなかゝる手術なくしては、代々忠の賴義をいかで

たやすく滅しなん。さあらばしたく仕らんと詮義一圖に相極め。めんく我屋に立歸り先づ播磨の前司は。家の子郎等に物具させ教への如く。禁裏近き小路々々をあなたこなたと 三重はせにけり案の如く。公家大臣これは如何なる事やらんと我さきにと參内あり。何とは存せず洛中を鎧武者みちくして。只今事出来る様に見えてひ。其旗の色は皆白旗なりと色を變へて奏聞ある。然る所へ合圖のごとく。桃の井兵庫道清は鎧ひつかけ馳せ來り。さても源氏の大将頼義事の仔細は存せねども。只今押寄せひ間門守護のため。五百餘騎にて參上仕ひ。何れの口にても一方を仰付けられひへと誠しやかに奏聞す。公家大臣聞き給ひ何源の頼義逆心とすか。さては只今の軍兵ども皆白旗をさしければ。これを疑ふ所もなし。いかあらんごのおのく慌て給ひける。然る所へ師氏鷹揚に參内し。さても源の頼義は。此師氏を武將にふせられし事をしゆつくわいに存じ。只今取かけやす由承りひ。誠に某々あん短智の身を持つて。武將の宣旨を蒙り奉る事。有がたしども尊しどもやすに詞もひはず。その恩にはひ前にて生害仕ひべし。此たび頼義が憤憤は皆この師氏が故にてひへば。某相果てすなば君を怨みすまじ。いづれの道にも忠節は同じ事。いでく頼義が憤りを晴し。國土の亂を止めさんと腰の刀に手をかくる人々双より取付いて。先暫々と様々に教訓ある。帝敕聞ましくして忠なるかなや師氏。かほど仁義深き汝を捨て不忠至極の頼義を惠まんや。此上はとかうやすにおよばずいそぎ勅ばつせしむべしと宣旨あるこそ恐なれ師氏は仕濟したりと悦び。は受を申しひ前を立ちさて在京の諸侍。急き禁裏に相詰むべしと。一々に相觸れさせ上を下へぞ 三重かへしける此事なほも。隠れなく源の頼義は此よしを聞召し。五人の人々お前に召され。某に於て不忠不義なることは以て覺えず。然るに勅爵の宣旨を下さるは何事ぞや。定めてこれは師氏が内々の悪心にて。讒言したるに疑ひなし。然るといへども事急なれば言上すべき時刻な

し。さればとて宣旨のせいに向つて一戦はげむ物ならば。いよく不忠の科に落つべし。たゞいさぎよく自害を遂げ怨み死後に報せんと。ははかせに手を掛け給ふひとり武者押留め。こはは詮とも覺えぬ物かな。は腹めさる。物ならば日頃の悪逆あるゆゑに。は生害ありしぞと却つてはあやまりになりやさん。只一先都をひひらきましくして。罪なき旨を五度も三度も稔便に奏聞ある。其上にてもは敕聞くもりあり聞し召分けられすは。其時こそ命かぎりの軍をせば恐らくは日本に。人種は絶えぬべし運命つきはて討死せば。悪心のせつさとなつて午頭馬頭のあほう羅刹を語らひ。二度此土に飛來り思詰めたる一念の。なごかは達せでひべきと理非をたゞして予ける。碓井の二郎聞きもあへすつと出。いかにさよはる都をひらかせ給へとは何事をすぞ。人に讒言しらるへ口惜きに。あまつさへ敵よするを聞きながら。一戦にも及ばず落ん事申す思ひもよらず。敵取かけ來ること幸ひなれ。たちどうでどが限りなれ思ひのまゝに働きて。屍を王城の白骨と曝し。名を後代にとやめんには若じと座敷をきつと見渡せば。卜部の民部聞くよりも。誠に都を落ちさせ給ひなば。科あればころ落ちたれと罪なき上に朝敵のひ名は四海に普くして。あなたこなたと彷徨ひなば生たるかひのひはんや。とかく我々五人が首。洛陽の巷にさらされんに別儀はあらじ。實にや年老ひ給ふとも我々が親共が。五人の内に一人浮世にながらへ在しなば。斯様にはあらじ物を生公家ばらに侮られ。思ひも寄らぬ朝敵となり行くことの口惜やと。怒れる面に涙を浮べ齒がみを。なしてぞ居たりける。時に渡邊つくく打聞いて。ヲ、實にも方々の無念に思ひ給ふ事理せり。さりながら世の中は勘忍の二字に若はなし。何れも怒りをこつくと押鎮め事の道理を聞き給へ。最前ひとり武者の諫言の如く。帝都を稔便に開かせ給はんこそ專一に存ひ。只今君の勅勘は。まごかなる月に雲のかゝるが如く一度は晴でひべきか。然るに一旦の怒りに日頃朝恩を忘れあ

り、天子に對して弓矢は勿體なくも引かれまじ。我々が勇力日本に隠れあらざれば、敵に恐れて逃げたりとはやはか以て譏るまじ。敵の近付かぬ其先に急ぎ出でゆへど、りくぎ發明に述べければひとり武者は勿論。さしも勇みし貞兼季宗も尤なりと理に服す。君も深く感嘆あり此上は武綱が、謀めにまかせやさんと座を立せ給ひければ、何れもついでに立ければ坂田の公平一人は只黙念として座してあり。四人の者ども立よりて、やあ詮議極り君も座を立せ給ふか。は分は仕度をいたされぬかとす。公平聞いて、何落るに仕度の入るべきや。たゞ足の早きこそ逃る仕度の第一なり。かねて面々の存知の如く、それがしは生れついたらる早走り、せめて敵の旗色なりとも一目見て、跡よりやがて追付きやさん。もし其内に堀溝へ落入つて死するものならば、はて是ぞ今生の限りと思はれよ。苦り切つてゆければ人々聞いて、ヲ、さあよの例を思はずに、日本のせいを引受け、思ひのまゝに軍せんこと誰か嫌ひのあるべきや。然れども君のほためを皆これ思ふ故により、實の山に入ながら何れも空しく落行に、御分一人残さんや早さく〜と申ければ、聞かぬ顔してはたらかず武綱これを見て、あれ又公平の例の我儘が出てある。それ寄つて引立てよと申す公平聞いて腹を立て、ヲ、某が我儘にまかせて、師氏めをどつぐに切つて捨つるならば是程には餘もならじ。めん〜の分別立て故斯様にはしなしてあり。父公時が遺言にも、駈けよとは示しぬれども逃げよと教へし事はなし。君のほ勘當蒙ることも師氏めが生き首を、手に握らざるうちは弓矢八幡大菩薩、まつたく以ておつまじき。所詮時うつればまたるきに、かれが館に駈入つて首を提げて歸らんと、一文字に飛んで出るは物に狂ふかさりとては、ひらに〜と取付けば、イヤ退け離せ〜とくるへども無儀に引立て落にける彼の、公平がていたら〜とへに天魔やくじんの、暴れたる風情もかくやらんとみな恐れぬ。ものこそなかりけれ

第五

御大將頼義公は、詮義一圓に相極めおの〜装束仕給へり。君御冠を取らせ給ひ中のでいに御出あり、高き處へ冠を供へ、あゝ定めなき世の中や、人ひと盛り花一時、ふちが瀬となる事共はかへす〜も無念なり。我ひとせ將軍に任せられ、此冠を給はりし其時は、欲慮又なふありしものをいつしか今日は引替て、勅勘を蒙り頼み少なき人外かな。もしも天のしやうりに叶ひ又もや再び歸洛して、冠を着せんことやあらんと世に委々と宣へば、鬼をあざむく人々も、君の御姿を見奉りて、至極の涙にむせびけり。すでに早や八聲の鶏も告げれば君仰せけるやうは、とても穩便に落行く上は諸人に物を思はせて何かせん。いざ立出ん方々と御大將頼義公は、らんでんぐさりの御させなが着込になされ、ひげ切ひざ丸を十文字に横たへ御出あれば、五人の者ども皆物の具を着込めにして續いて御供申ける。さて譜代の士六十五騎御跡をぞ守護しける。其外のもの共には皆御いとま給はりこゝろ〜に忍びけり。さればにや公平は帝都を無礙に開くこと無念更に晴れ行かず。いかにもして時刻を移し天明け行かば敵が追かくべし。然らば思ひのまゝに軍せんとやがて立より、君によしなき問はず物語を申かけあなたこなたとする程に、いまだ都を離れぬその先に夜はほの〜とぞ明けにける。五更の天もひらくれば、頼義北陸道へ没落のよし隠れなければ、師氏聞いて餘すな打つてといふまゝに、かねてしるせし着到の勢都合その勢六萬餘騎、嫡子権の大夫師秀に四天王を相添へ跡を求めて追かけしが、長坂の邊にて追付き聞の聲をぞ三重あげにける聞の聲も、静まれば大將駒一陣に乗出し、いかに頼義十善の君に敵をなし何處へとて逃るべき。なご王城の土とならざる不覺さよ。かく申すそれがしは一天の武將。朝日の將軍平の師氏が嫡

子權の大夫師秀なり。従ふ勢は六萬餘騎、鑓を振り、張良が勇をなすともかなふまじ。速に生害を達すべしとかうしやうに罵つたり。五人の者ども聞くよりも。何權の太夫師秀六萬餘騎の大將とや、ヲ神妙々々さり乍。とても事の事に師氏に對面せぬこそほいなければ。そも主君頼義公無實の勅勘を盡らせ給へども。たゞ臣たる道をおもんばかり穩便に帝都を開かせ給ふを。方々は逃ると思ひ追かけぬるこそ優しけれ。今は都を離れたれ憚るべき處もなし。こなたは僅か七十餘騎六萬餘騎の軍勢には。たいようすべきにあらねども矢竹心や武士の屬む所存を現はさんと。多勢が中へ割て入り火花を散らして三重たかひけるさる程に。源氏方の諸侍一命を忠義に替へ攻め戦ふとはいへども。敵大勢にてありければあなたこなたへ駈け立てられ散々になつてぞ討たれる。今ははや例の五人の者どもと大將と主従六騎になりけり。頼義は覽じて如何に方々屬みも今はこれ迄なり。それ弓取の年來日頃に譽を取ても。最期あしければ人の譏りまぬかれず。とても此いくさかなふべきとは思はれず。卑しきやつばらが矢先にかゝり名を後代に失ふな。主従今生の限りも是までぞ死出の山路に相待つぞ。つゞけや〜とひはかせに手をかけ給ふ。人々あはてふためき押留め。エ、こは淺ましき風情や。先年は伯父頼光遠州濱松の合戦に。敵六萬餘騎にて扣へしを我々が親共が。たゞ四人にて打破りしこと。せんげんけつせんと耳に残つていさぎよし。幸ひ此たびも六萬餘騎殊に味方は五人なり。親共が若盛りに劣るや優るや一戦の働きを御覽あつて其後。御自害まし〜てお恐れながら冥途の證據に。御立なされ下されいへと。さて渡邊と公平は二陣に入替らんと君を守護して控ゆれば。のこる三人の者どもは獲物々々を引さげて。吉川武田小林が二萬餘騎にて支へたる。真中へ一文字に割つて入り命を。限りに 三重、さりみだすすさまじかりける。次第なり日本名譽の勇士ども。今を最期と屬みをいたす戦ひに誰か面を合すべき。

ゆん手もめ手も只人塚をぞ築きにける。残りし者どもを東西へおつ散し。ありし所へ立歸りあら淺まし敵の風情やとひし〜と打寄りて。さて眞先は保昌が一子平井ひとり武者さよはる。その次は季武が嫡子卜部の民部季宗。殿は貞光が嫡男確井の二郎貞兼なり。日本が動くとも我々を討たん事は叶ふまじ。謂んやかりむしやの。五萬や六萬は秋風の露を拂ふにことならず。我と思はん者あらば組んで勝負を決せよと。聲々に罵しつて勢ひかゝつて引返す。武綱公平二陣は受取つたりと入かはる。寄手の大將權の太夫これを見て。ヤア四天王はなきか彼れ打取れと下知すれば。承りいと四人の者ども一様に。黒皮緘の鎧を着あたりをはらつて見えにけり。さて銘々に聲を上げ。只今罷出たる我々を敵ながらも其名ゆかしく思ふらん。先づ一番に讃岐國の住人大木戸の八郎國俊。二番には伊豫の國吉見の庄司が三男吉見の二郎盛時。三番は三村の官領悪五郎教定。四番には土佐の國の住人にゆうせん九郎行治。何れもは一國が内にては鬼神の如く云はれたりし我々なるが。今は平家の勇士となり譽を四海に現すゆゑ。其名を四天王と號すなり。源氏方に五人の稀者と聞え渡りし殿原に。内々見參の願ひへども折を得ざれば打過る所に。只今敵味方と隔りたうじやう場の對面喜悅まことに堪へ難し。此上は御首を給はるか。又我々が首を進上いたすか。有無の勝負こゝにありかにか〜と呼はりける。武綱聞いてヲ、互ひに所存は同じ事なり。とかく先づ切先を合せ。其後萬端申承らんと。する〜と立よれば大木戸の八郎もつてひらいて打ちけるを。ちやうど受けて引外し打ちければ。眉間二つに打割れて夜景の露とぞ消えにける。二番目につゞく吉見の二郎。ア、斬つたりと齒がみをなして切つてかゝるを。公平つゞと出ではつしと合せ。横手切に薙ぎければ。腰のつがひを切りはなされ二つになつてぞ伏しにける。跡につゞく悪五郎とゆうせんは。無念と一度にばつと駈寄るを。こなたも二人掛合ひおしならべて引組み取つて伏せ。あ

つばれ手弱き四天王かな。やれ、おのれらが分として四天王と名乗ることひやうり第一の山だちかな。いで、暇を取らせんと一々首を打落し。もはや敵はこれまでぞと嘲笑つて立ちければ。權の大夫これを見て今は早かなはじと、駒引返し落行くを隙をあらせず追かけて。馬の上より首打落し。其馬に君をやがて乗せ奉り北國さしてぞ急がる。五人の者が有様はたもんぢこくぞうしやうかうもくの。其再誕にてこれあらん。あつばれ眞の四天王やとて感せぬ。者こそなかりけれ

笄

伊豫の守頼義は五人の者が働きゆる。多勢の圍を打破り。北陸道へぞひらかる。こゝろの「うちこそ無念なれ。大將何ぞか思しけん。馬上にてはもうらんせしめていと悪し」と。御馬よりも下りさせ給ひ。ヤア生あるものは同じこと畜類とはいひなから。我にゑんごう深きにや是迄はおくりである。今は故郷へ歸られやと手づから手綱を結びかけ。帝都の方へ引向け給へば。馬もこゝろがあればにや跡ふりかへり。二聲三聲いばひつゝ都の方へぞ駈せにける。其時武綱やす様。これよりは難所數多ひに。何とて御馬には召されずひやと申上れば。頼義聞召し。それいにしへの名將は。軍勢兵糧を使はされば其身も食せず。士卒が雨にうたれるれば。大將も帷幕を外しどもに濡ると記したり。ましてやかたははそれがしが一命に代り。かやうに先途を見とくくるに我一人馬に乗り。心易くあるべきは仁義の道にも外れたり。せめては我も方々と。一所に伴なひ運びつゝ。こゝろざしを報せんと御袂を絞らせ給ひける。人々承りてさて。忝なき御誼や。異國は知らず本朝には。かゝる名將末代とてもあるべきや。とても主君と頼む上げかゝる君に仕へてころ。弓矢取る身の本意たれ思へば我々果報の者。これにつけても罪なく

して。朝敵のほ名を取らせ給ふことかへすくも口惜やと。樊噲うねむ人々もどうざい。くれてぞ泣き居たる。中にも坂田の公平は怒れる聲をさしあげて。それ日本は神國たり。正直の頭に宿り給ふ佛神はあらざるや。何とて是非をことわり給はぬぞ。たとへ日月は隔たるどもにくしと思ふ師氏めを。安穩に置かばこそと拳を握り牙を噛み。五人目と目を見合せてはら。泣いてぞ居たりける。頼義は覽じて。ヤアさのみにな嘆きそ方々よ。只何事も前世のさう。身にあやまりのあらざれば。終にはなごか正直の花も梢に咲かざらん。誠に世になき主をみつがんと。こゝろを盡し身を碎く。めんが情の程いつの世にかはうせんと。忝なくもはは大將。双眼にほなみだを浮べ給ひける。げに主従の禮儀のほどよその袖まで濡れぬべし。かくてはややう。急がせ給へば程もな。若狭の小浪に着かせ給ふ。それより碓井の二郎をほつかひにて。邊見の判官唯光を頼ませたまひ事の次第を仰せつかはさるれば。承りてそれより邊見が館に立入り案内乞ふて内に入り。判官に對面し件のあらまし述べければ。唯光聞きもあへず。こはそも夢か現かと。烏帽子直垂引繕ひに迎ひに罷出。君をほ供仕り館の内へ招き奉り。某かくては上は何事も心易かるべきと。ひとへに無二の氣色にてかつがう。申すぞ頼もしき。いたはしや人々は盛りもなくて讒の罪。思ひもよらすこもりるの月も影をや濁すらん。かくて日數をくくるまの。めぐりく。て今は早や秋もなかはにはやなりぬ。哀れなるかな頼義公。帝都の空を思召し出されて。いかに面々今宵は八月十五夜の。名にあふ月の影なれど我等が。曇りは見えわかず。さればにや。先の世に。いかなる種を蒔き置きて。榮華の花も咲かずして。かゝる浮身となりぬるよと涙ながらに宣へば。渡邊見參らせ。實にや天子の恩はご有がたき物はなし。君しんきやうのれいを重んじ給はずは。天下に五人の稀者と名にしおふたる我々が。ゆひかひなきやつばらにせばめられ。やみくといかで都を落ち申さ

ん。只ごにもかくにも。定まるごうごはひながら罪なき配所の住居。思へば口惜やと涙は更に  
 ぐいまらす。頼義は涙を押へさせ給ひ。いかに方々。此上は先づ是に立忍び帝都の容體うかふべし。  
 それまでは五分等もしばらく心を晴されよとの証なり。その時判官申すやう。誠に以てかゝる鄙の住  
 居申上ぐべき興もなし。さりながら師氏に退治あらん事。時刻到來た。今の事なるべし。此上は何  
 事も心に任かせられ。ひゆうの營みあそばされひなの徒然に晴しなされるべし。幸ひそれがしが家に  
 傳へし。名筆の懸繪をまた待ちて。今日の雨中のつれづれ興に乗じて。懸け奉るべきやと申上れば  
 頼義聞召し。ヲ、心底の程近頃以て祝着せり。時刻うつさず早やとくくど証あれば。かしこまつ  
 ては前を罷りたち。十藏に入つて取出し一々。次第に三響かけにけり。

衆おそろ

こころも言葉も。およばれず。かくて其後頼義公。さらば一見いたさんと。五人の人々諸共に。立寄り  
 これを見給へば。見事の次第や。まづ一番に懸けたるは梁の武帝の筆にて。出山の釋迦の像  
 をぞかけにける。此は佛とすはしやうばん大王のひ子悉多太子とせしが。十九にては出家ありたん  
 ごくせんに分入つて。阿羅や仙人にみやづかへ。なつみ水汲み焚木こり。難行苦行功積り。三十歳にて  
 びしやうたう。四十九年の説法は。一切衆生我が如く。一佛浄土たるべしとの法の。力にひかれつ。  
 十悪五逆の人間。非情草木に至るまで。悉皆成佛せん事は何疑ひのあるべきと。かたじけなくも大  
 將。たなこころを合せ給へば。知るも知らぬも一同に。皆々手をこそ。合せけれ。第二番の懸物はしん  
 のわうるんが筆の跡に。龍門の瀧の流れを鯉の登る勢ひなり。そもく。此瀧とすは其高さ八十丈。

みなぎり落る岩波をたま。登り得たるうろくづは忽ちに龍と化して。天上するが故によつて。龍門  
 の瀧とは名付けたりされば戰場に先をかけ。名をはん天に上る者は。ひとへに此鯉の瀧となれるが如く  
 なれば。やあ心掛けの侍は。取分け。此繪を賞観あるべしとの事なり。第三番には瀧の夜の雨。遠  
 寺の鐘のはのぼのと夕日映らふ浦里に。舟漕ぎかへる折節に。平沙に落る雁金のあるかなきかの有様は  
 。聞きしに優る八景の。筆をつくして見えにけり。第四ばんに懸けたるは。小野の小町がいたづらに。  
 身は白歳の姥となり。破れ鏡に破れ笠。うきふししげき吳竹の。杖にすがりて。よろくど立出で見れ  
 ばあふ坂の。せきの清水にかけうつる老の姿は淺ましや。かの深草の少將の。雨の降る夜も降らぬ夜も  
 。風の吹く日も吹かぬ日も。人目忍ぶの通ひ路に。心を盡し身を碎き。思ひに消えし其むくひ。哀れげ  
 にいにしへは。花の姿と云はれし身のいつの間にかは引替へて。あるにもあらぬ衰への。盛者必衰のこ  
 とはたゞ目の。前とぞ見えにける。さて又五ばんにはかの唐土に名を得たるはしがむめを懸けにける  
 。春待かねて咲く花の。香ひに移る。鶯はをり知り。顔の風情なり。六ばんには我朝の其昔。延喜の帝  
 のほ時に。上手のほまれ隠れなき。巨勢近江がかきたりし。あさは水のかさつばた花むらさきのいろ  
 にめて。顔世花とぞ名付けたる。かげにねふれる鶯鶯のはねくとを打ちかはし。深き契りや交すら  
 ん。さて七番には秋の花野の。草づくし桔梗かるかや。女郎花露おも。けなる萩が花。思ひ増穂のいと  
 すすきたれをさしてかまね。くらん。ゆめの浮世は朝顔の日かげまつまの一さかり。實に人間の榮花ま  
 で。思ひ知らる。仇し野のくすの。うらかせ身にしてみて。かほりゆかしき藤袴つりさせよと啼蟲の。  
 聲もあるかど疑かはれあかぬ風情をつくしたり。さて八番の懸物は。かの假名を書く筆のあとにふじの  
 子たかねの。ひとかすみ雲より上を。見あぐれば。鹿の子まだらに降る雪の。時をも知らぬ面影は。三

國一の名山やと云はれしもことわりなり。麓は田子の浦波や。打出で見れば三保が崎松のむら立はるばると。みどりの空もひとつにて清見がせき明がたに。おきつがはらの群千鳥おのが友をやさそふらん。沙風松風ふきそひて冬の景色は物淋し。九ばんめの懸繪には。竹の林に住む虎の。吹きくる風は勇みをなし。身ふるひしたる有様はげにいさぎよき筆勢なり。さて十番には是も又。我朝の書かきにて。ちねたのつねのりと云ひし人。忝けなくも勅命にて筆を初めしと承はる蓬萊の鳥のかたちなり瑠璃の砂のその上に。群居て遊ぶ友鶴は。汀の龜にたはぶれて。千代萬代の姫小松。よはひや君にゆづるらん四海波風納りて。枝をならさぬ松が枝の。久しきためし是なるはと。いよく興をもよほさるさて。納まる筆こそめでたけれ

若我々兄弟

戦國策に曰く。大山は土壤を譲らず。故に積て高き事をなし。河海は細き流れを撰ばず。故に積つて深きをなせり。人の君としては能くもろくをしりぞけず。故に其徳を。末葉に照す松竹や鶴が岡の氏の子の。武家繁昌の開關たる。ヲシシ「頼朝の威勢ぞ。比ひなき。既に平氏の逆徒沈つて。建久元年菊月吉日は嫡子頼家朝臣。は先祖の例にまかせ。鶴が岡の拜殿にて。十一歳の初元結。鐘初めのは祝儀定り。右大將殿梅に着座し給へば。和田の義盛調度掛千葉の介は轡の役。土肥遠平團扇持朝比奈はは籠。あまのおもてに節遠き。塗籠の平根の廿四立。森の如くに負なして優々と着座する。結城七郎は旗の役人。八幡殿より傳はつたる源氏の白旗。錦の袋に籠めながら首にかけて伺候する。具足親は北條四郎時政。緋緞の錦げを總角高に着せ参らせ。は先に立ければ後見は秩父の重忠。同く工藤左衛門の尉祐經。左右を守護し奉り。は本社を武道をはつて樓門より廻廊を。振舞ひあゆみは親子の禮儀正しく。昆布搦栗打。三種三献納つて。床几に着せ給ひしは。實に梅檀は二葉ぞとあつと。感ずる計りなり。頼朝は威の餘り。如何に重忠祐經。向後兩人を頼家が部屋住の執權をたのみなり。行跡に心を付け諫言して傳立よ。は誰あれば重忠祐經畏て了承ある。伺候の人々目をあはせ秩父殿は左もありなん。無智無學の祐經を若君の後見は。心元なし氣遣はしと思はぬ方こそなかりけれ。重忠謹んで。夫れ古を以て鑑とすれば興替を知り。人を以て鑑とすれば得失を明らむと。貞觀政要にあらはしむ。されば十善の天子四海を治めたまふにも。紫宸殿に賢聖の障子と名づけ。古の賢人忠臣の姿を繪に書き給ふとや。それを學んで

昔より、武勇に名高き弓取の容を畫て若君の。は部屋にをしは身を修め、人を教ゆる鑑に備へ申さんと  
 言上あれば頼朝公和田北條一同に。是は尤も申されたり。さても頼朝の重忠やおのゝつと賞め  
 給ふ。時に祐經劣らじと罷出で。これは重忠殿一段の物好き。それに就き昔より申ならはし候は。白さ  
 鹿七疋の毛を合せて。結ふたる筆にて繪を畫くに鳥を畫けば鳥の聲。人を畫けば人の聲いたる如く物  
 を申すと承はる。彼の筆を結はせて畫かせられ。繪人形が物申さば此上の慰みははじといかめしう  
 こそ申けれ。重忠聞給ひ。工藤殿の仰せの通り。繪に畫きたる人の物を申さば。は慰みには然るべく  
 もみはん。去年ら某が申すは。全くは慰みの爲ならず。は教訓の便に仕らんと存じ。君子は怪きを見ず  
 といへり。は慰み一遍ならば無用の事になされよと。挨拶あれば祐經イヤ是れ重忠殿。某が申上るもは  
 慰みばかりでなし。或はは先祖頼光。は伯父義經なんどの容を彼の筆にて畫さなば。大江山鬼神退治  
 八島壇の浦などの戦を。ありと語り給は。是ぞ若君の。後學教訓の第一と申もの。それに何ぞや人  
 の詞を聞入もなく頭から打消して。善事申すを猜まる。は畢竟お爲を知らぬ人。假へ契暗張良を畫き  
 たりとも。物を言はずは墨繪の山水同然。それこそ眞の慰み一遍。入らぬこと無用と氣色損じて言ひ  
 ければ。朝比奈三郎突と出で。エ、聞情の祐經。秩父殿は何人ぞ。年嵩といひ學者といひ。天下の大老  
 たるは方と。相役に仰付らるゝを辭退せぬさへ奇怪なるに。其尖聲は何事だ。繪に畫く人の物言ふこと  
 異國上代は知らず。日本人代に聞及ばず。たごへ物を言ふにもせよ。若君のは部屋に掛並べたる古の  
 武士共が夜查口を叩いて喚くならば。あたり邊が喧しく。は所中に一人も寝る者はあるまじい。其上白  
 さ鹿七疋の毛を以て。筆に爲とは何の書に誰がいひけるぞ。出所も知れぬ京童の俗談。は前にて言ふ事  
 かどからとぞ笑ひける。祐經得も味えずコリヤ朝比奈。忝くも某は幼少の時。平家の大将小松殿に

奉公しは前にて聞きたる咄。日本の聖人といはれ今の世になき名將たる。小松殿さへ非を入れ給はぬこ  
 とぞ。田夫文旨の和主等が嘲るは何事ぞ。もう一言いふて見よと。さしみかれば朝比奈つかくど寄  
 りはつたと睨め。ヤイ愚人め。其聖人名將といはれし平家の小松が。源氏方に陥されしは如何に。第一  
 當家の敵たる。平家を賞るはさては汝平家に志あるよな。末々源氏の仇ならんは必定。次でに仕舞ふ  
 て埒明けんぞ。飛で蒐ると人々引どめ。鎮まりませくは前なるは義秀と。いふ聲々に朝比奈も胸を擦  
 つて跪坐く。頼朝少も動じたまはず。面々が争ひ皆頼家がせいじんを重んじ。忠を功に存する故ひが言  
 へば思はぬぞ。互ひに遺恨あるべからず。然れば重忠教への如く頼家が部屋障子の古。武功の勇士の  
 繪圖諸大名に申付。一人より一枚づゝ持参あるべし。但祐經が方より出す繪は。其方が申せし筆にて畫  
 せ。物を言せて見すべきなり。そもく今日の壽の事調ひしも君臣の。翼並ぶる鶴が岡眼申て歸らんと  
 賽の神樂の鈴。大鼓の聲や鼓の音千々の。秋こそ三重久しけれ去程に。工藤左衛門祐經は民俗の世話  
 を誠と思ひ。は前にて言募り是非に白き鹿を取り。物の試しにして見んと。嫡子犬坊丸に近江八幡を相  
 副へ。星月夜の紅葉のかけまぶささ。せて山々の。狩人を集め狩けれども白き鹿こそなかりけれ。然る  
 處へ桐が谷の懸丸といふ狩人。未だ乳ばなれぬ春子の白鹿生捕て。四足を擲げ犬坊が假舎に馳参じ。こ  
 れは白鹿。先づ子を一疋捕て。定て此親鹿残る子ども白うこそみらめ。某名譽の鹿笛持ていへ  
 ば。随分寄せて残らず捕て。は機嫌に入れ申さんとぞ申ける。犬坊悦び。出来いたく。惣じて白き  
 鹿は稀なるもの。たまくとあつても智慧を備へ。人の手に捕るゝ事ではなしといふが。其方が持たる名  
 譽の笛とは。如何した笛を見たしとあれば。イヤ形は常のしゝ笛にてひが。去る物識の教へにて。美人  
 と呼るゝ女の履ける足駄にて。作れる笛には秋の鹿必ず寄ると申されしゆる。京鎌倉は申すに及ばず。

眉目美といふほどの、女中の足駄をいくらともなく需出し、笛に作つて吹きひへをも、いつかなく寄る事ではひはず、皆打割て捨けるが此處に大磯の虎と申して、流行傾城のひを若やと存じ、彼の虎が履たる古足駄を貰ひ寄せ、笛に作つて吹きひへば申し、虎は美人の正真にや、其笛の音を聞くほどの、鹿さへ寄來る色の道、人の迷ふは道理と思召せと語りける。犬坊咄に聞入て、鹿の事は兎も角も、京鎌倉の美しい女房の足駄で寄らぬ小男鹿さへ、虎とやらんが足駄の笛に、心なき秋鹿さへ憧れ寄る。虎は美人に極つたり、一目見たや懐しやと、大人ぐれたる戀心物思ひ顔もいさ過たり、近江八幡教訓しハテわけもない。假令は其虎は前公家天上人の娘にもせよ、當代祐經公の嫡子、犬坊様の戀給はんは何條事かひべき、殊更流れの君傾城、聞けば曾我の十郎と深き情、外の客をせくと聞くあはれかな十郎が、せいて見よ留て見よ、一步小判で賣つくるに手に入れぬ事あり、大殿の仰の鹿を七疋捕おふせて、其悦びに若旦那の供し、女郎狂ひの口あけに旦那へは虎我やも、虎はならずと豹なりともコリヤ狩人、そらにも北向き一つは近江八幡が請込だ、先づ笛吹て鹿を狩れ、承ると吹立て猶山、深く三葉狩衣、裾野の眞萩、踏分て、足駄の笛に寄る鹿の、子を失ひて尋ねて、啼くはあはれやな、親鹿は番魚れて我子は、何と櫛の葉の、露より脆きうき涙、草隠れ薄が下角掉立て見送れば、捕れし鹿の子は千筋の繩に翫られ、命待間と見もやらず、番の鹿は四足を折り平伏歎くを哀れなる、實にや白鹿は禮を具へ智惠深く、散敷く紅葉を被くとせしが忽ち、千草の花の掴み染め袖の模様と大磯の、虎が仕出のつふ島田右八文字の玉鉾や、顔も其儘虎は前、背姿を誰が見ても、化けたる人とはよも知らじ、近江八幡狩舎より差覗さ、コト若旦那人言は、目代置け、今申したる大磯の虎あれ、と教ゆれば、犬坊心浮されてさ、美しい傾城、近江八幡彼れ一つ買ふてくれ、先づ呼べよといひければ兩人も氣を取られ、コレ虎と

の、終に一座はいたさねともは顔は見知り申した、珍しい處の來臨コレ、是なるは我々が旦那、かねてはこを聞及ばれ戀焦れ坐成さる、親旦那の手前を憚り廓の供は叶はぬ事、幸ひ此假屋を揚屋と名付、未だうら若き大盡殿、草の枕で梓に仕込で貰ひたしこれへ、とそりける、虎莞爾と會釋して、今日は廓の紅葉見にて、一家残らず彼の麓に野遊びいたせし折から、可愛らしい笛の音に誘はれ浮やと参りたり、何方か知らぬ許さんせと、怖す憶せず犬坊が膝に靠れて座しにけり、然る處へ曾我の十郎祐成は、和田殿よりの歸るさ此所を通られしが、心得ぬ庵に木瓜の幕、誰成らんと木隠れより、覗いて見れば虎御前犬坊が膝に靠れ、近江八幡睦しげにのさばる體、すは八幡踏込で詮議をせんと飛び出し、が、イヤ待て此處は大事の處、鎮めて跡先親はんと身を打、潜め目守り居る、虎は外へは、目も觸らず翫められたる鹿の子を、悲げに打眺め、申皆様、彼の鹿は何の用に翫め給ふといふ、各口を揃へコレ、あれについても貴様の手柄、あれは身が履たる足駄にて、作つた笛に寄たる鹿、心なき小男鹿さへそ様に心ひかざる、況てや人の迷ふは道理、若旦那の氣に入れば後は廓を掴み出し、大名のは莖となるは契約に鳥渡彼の、幕の内へいざ、と手を捉れば、情なくも恕放し涙を流し、道こそなけれ思ひ入る山の奥にて鳴く鹿を、妻が足駄の笛故に、彼の如く翫められ左こそ恨みん不便さよ、彼の母鹿や父鹿の尋ぬまどひて子を思ふ、心の闇はなふ人間よりも優りなん、雄鹿の角の束の間も、離れず柄し下紅葉、かつ散る山の夕時雨濡てや一人鳴鹿の、心を哀れと思召し命を助け彼の鹿を、みづからに下されなば其お禮には皆様に、此身をまかせお心にしたがひ申すべし、平に助けて給はれと手を合せてぞ泣居たる、各感してハテさて傾城には奇特千萬、慈悲深い人君の意なら如何なりと、繩寸々に切はごければ、ナフ可愛のものやと抱きつ、子鹿は母の懐に顔さし入れて乳を尋ね、人こそ知らね親と子の悦

涙哀れなり。サア鹿をやつたからは約束の通り。以後のしるしの新枕幕の内へと手をとれば。鹿へも  
 なく振はなち鹿垣ひらりと飛越た。祐成誠の虎と思ひテ、出来いたく可き善根。鹿を放してサア来い  
 と立去らんとせし處へ。犬坊主従下人原貫戸押開き群り出で。ヤアおのれは曾我の十郎よな。虎は豫  
 々交誼ある中言合せて呑はせたり。此方へ渡せ渡さずば。鹿の代りにおのれをと兩人兩手を儘と捉る  
 祐成此處は一期の大事兄弟年來狙ひたる。親の敵は討もせずて却て敵に討るゝよなりよし夫とても何と  
 せん虎と一所に殺されては。女のゑに祐成が不覺の死を遂げつると。言れんことの無念と思ひ聲を立て  
 〇これ〇〇虎御前此處は某斬抜けん。足手纏ひぞ落よ〇〇呼はれば。鹿は悦び子を抱きとある茂みに  
 隠れける。ヤレ不敵なり祐成。斯ふ兩手を捕られ斬抜んとや。彼奴は父の左衛門殿を親の敵。鎌倉殿は  
 祖父の敵と狙ふ由。搦めては前へ引けやとて太刀も刀も望取て細よ細よ牢與よと。麓の里へ人走らせ上  
 を下へと返しける。覺悟を極めし祐成も母の事箱王が事。人の誹身の因果思返せば口措く。眼を塞で  
 心中に。南無伊豆箱根二所の神。同く湯本の大權現生國もりとの大明神。在柄の天神香取鹿島武甕槌  
 〇愛感應護の御手を伸べ感應納受の毗をめぐらし。星は土曜しやうさいばしん守本尊普賢菩薩。寶威徳  
 上王佛の御國を出。六牙の白象に鞭撻て今祐成が五體に入り。如世尊勅當具奉行の誓ひをば過たす。日  
 頃信じ奉るてうはつたごの法華經力。一の巻は一心に入替り二三の巻は兩の腕。第四五の巻六の巻五  
 藏六腑の力となり。七の巻は利劍と變じ八の巻の五ばんせんじん。つばさ七ふんの力勇を與へて加護し  
 給へやと。ゑいやつこ言ふて振解けば兩手を捕たる武士共。羽うつよりも輕々とはるかか谷へぞ投げら  
 れける。無刀の腕立無益なりと逸散に逃げ出れば。すは餘すなど山々の獵師狩人列卒のもの。取巻ては  
 取外し峰へ上り谷に入り。くるとりと追廻すは危うかりける。三軍次第なり祐成手酷く追詰られ逃

第二

る處のあらざれば。一村繁る松林の中に生出し大木を。傳ひく。攀上り枝差交す葉隠の。繁みに凝と取  
 付て。身を隠してぞ居たりける。犬坊を始め。近江八幡今迄眼に遮りしが。俄に見えぬは合點ゆかす。  
 二林の梢に上りつらん槍先を揃へ突て見よと。ばらばらと立寄る處へ不思議や麓の方よりも。祐成是に  
 叩へたりと討て出るを能見れば。我身に些とも違はぬもの敵は是を見るよりも。ヤア此處にこそありつ  
 れど。討てかれば下なる祐成飛ぶ跳つ二丈三丈飛越え。駆起え飛上り近江八幡犬坊が。持たる太刀は  
 らりくと蹴落せば。鞘を持って討悪るひらりと潜つて打落し。搔潜ては打落し飛鳥の如く駆たつれば。  
 さしもの大勢力なく主を忘れ下人を捨て。峰を越え谷を分け皆散々に逃てけり。下なる十郎婿しげに。  
 見送りく身振せしが則ち白き小男鹿と。なるよと見れば同じく雌鹿は子を連れて。祐成の隠れ居る松  
 に向ひて前腰折り。首を垂れて有難しと言ふばかりに謝儀をなし。猶悦びの諸聲に。鳴音も遠き奥山の  
 霧に。紛れて入にけり。祐成松より飛で下り夢の覺たる如くにて。全く我方にあらす神明佛陀の冥威ぞ  
 と。望取れたる太刀刀押取て脇挟み。同じく敵の奴原が打落されたる打物を。取ては指し。腰に餘れ  
 ば引束ね。槍長刀も一束に絡めて左右に搔挟み。思ひも寄らぬ徳付て貧しき曾我の十郎が。直垂衣袋は  
 持ねども太刀刀の長者となる。先づ箱王に裾分せん。嬉し目出たし悦ばしと天を。禮し地を拜し。迷ひ  
 を照す星月夜。暮ぬ間に故郷へかいる。くと呼ぶ鹿の。聲も遙の山彦につれて。曾我へぞ歸りける

去はに立行年も長月や閏加はる祝ひ月。菊重の祝儀に擬らへ曾我兄弟の姉娘を。二の宮太郎に嫁せ祝  
 言の首尾整へども。聲は大名舅は浪人人の用の響應も。そくはぬ聲入舅入今日こそ五日歸とて。聲の二

の宮氣を張て、金物すくめの乗物に鎌倉やうの八人肩、大總の袂箱繪の長刀、徒歩の下女は衣被ぎ供乗物空燻に、霧のしめりも打拂ひ曾我の館に着にけり、輿を輿に昇入るれど大勢の男女の供、腰懸休まん軒もなく佇み居れば女房達、これくお供の衆、輿様は今宵は此方にお泊り、明日は早々に迎ひと言捨、輿に入にけり、供の下部口さがなく、嫁は前のお里歸り何でも酒に食酔、引出物は少ふても百宛は腰についたものと思ふたにエ、さんすいな五日歸り、こちらの旦那も異な物好き、降る程ある大名の娘御は呼びもせず、身代すつきり祐成の姉を呼ぶは何たる因果、ヤイサ角内彌之介、空ッ腹にてがいに目が眩さうな、早く歸つて二合半の、氣付をばうん飲むべいと吐き、歸りける、輿は少し隔れども漏て聞ゆる下々の、悪口を開よりも母上涙を流し、彼聞給へ口惜や、河津殿の世なりせば二の宮程の小名を、中々聲には取まじまに貧しき日蔭の親兄弟、下部共にも侮らる、嘸や身も聲殿の、一門衆の交際にも、肩身すぼりて口惜からん無念、さよとぞ泣き給ふ、姫も涙に暮ながら實に貧福は前世の業、氏も筋目も我夫の一門一家に劣らじと、心強く存すれ共此處に一ツの難儀ひ、其故は明後日妻をば、一門衆への對面とて廣めの酒宴座座、所々の慣ひとて嫁の衣裳を掛並べ、客人達に見せ申す由承りひへ共、衣裳數なきみづからは何を飾りて見せ申さんと、嫁入してより此事が心に通り夜が寝られず、如何計らひ申へき、口惜さよとありければ、母聞も敢へ給はず、さればこそ、みづからも其事如何と案せしに、祐成がいふやうは女の衣裳は幾枚でも、二日や三日は借出し耻をかくして間に合せんと、請合つるはと宜ふ處へ、祐成は鬼王團三郎に長櫃昇せ立歸り、ヤア姉御前お歸りか、承れば嫁廣めの慣ひにて、衣裳を飾るといへども買需めん手術もなく、幸ひ某大磁粧坂に親しき者のひゆる、彼を頼んで遊君共の衣裳を借調へてひ、惣じて廓は借上處、何が方々の大名より我劣らじと手を盡し、縫箔鹿の子物好の思

ひく、の仕出し染、適何處に飾りても誰に見せても耻しからぬ、未だばかりと新しく手も通さぬ小袖の襟數、五十餘重借出してひ、これくお心安かれと、葛籠長櫃昇入れすれば母は大に悦び給ひ、マ、嬉しや、野にも山にも親しき人は持べきもの、なふ祐成、おとが常々大磁通ひ、善らぬ事と思ふより男をたらず傾城め、憎やくと思ひしが、今又姉が一代に一度の晴を繕ふ事も、廓のお蔭、有難のお傾城、さまくくやと悦びて既に、用意を、三重、せられけり、其日になれば、二の宮の館には奥様廣めの一門振舞、新造の白書院松と竹との繪障子を、皆開放す北蔭の細殿に衣桁を並べ、色々の小袖の數裏を吹せて掛置けば、庭の千草に映り合ひ誰脱掛し秋の野の、花摺衣露照て、月をも袖に宿しけり、二の宮させる大名なれど三浦伊東の門葉なれば、工藤祐經を上客にて數多の一門、所領の高下に隨つて次第、く座に着けば、祐成親子は勝手方好き序とて舅入り、一所に荷負ふ木瓜の紋の直垂時めきて、大君來ませ婿にせん三國一とぞ誦ひける、祐經目ばやさをのこにてかけ並べたる小袖を見れば、唐綾唐綾相練衣、摺繪ひた縫結華麗を盡せしは、曾我の手業にかなはぬ事不思議さよと見廻せば、諸大名の定紋あり、ム、是は大磁粧坂の傾城どもへ、諸大名より贈りたる小袖を借出し我々に、一杯食せし類憎さ何でも困らせ耻搔せんと思ひ、なふ殿達あれ見給へ、さて結構なる衣裳ども、某程の大名でも、まんざら新しく彼の通りには仕憎事、曾我兄弟の身代にて、大儀をせられた奇特な事と思ひしに、一々紋の違ひ様又行丈も揃はぬは、エ、出來た、貧乏人の更衣冬のを夏に置換て、七月限に遺水の流れを買ふて仕立物、上は例發に化せども中は狐の綿の雪、古手といふ物見て置て下女やはしたの仕着には、曾我を頼んで買給へ、是は出來たと打笑へば一座もさすが祐經が、威勢に巻れ苦笑ひに、これは尤々と一度に此とぞ哄動ける、祐成豫て思置たる事なれや、するくと座敷に出で、世に無しもの、某が姉の

嫁入。手道具衣裳に至るまで。人がましくは有ねども。二の宮殿を聲がねとは身に取ての譽と存じ。馬鞍迄も代なして小袖に綴らせひへども。物縫ひととも無さまに彼方此方の針手を頼み。心々に仕立しゆる襪の高低袂の廣狹。行の長さも短さもしるもさるの東あし衣。あしともいへよしもいへ身はは勘氣の日蔭者。定紋の木瓜は天下の聞え憚りあり。憚りながら鎌倉の大名高家のは果報を。姉が子孫にあやからせんと。寫し染たる紋處。

小袖のつづ

くぎぬき松かはさむらさう。此木むらさうとすは。三浦の平六兵衛義村の紋なり。石疊は信濃國の住人ねんの太夫大彌太。開き扇はあさりの與市舞鶴は茨左衛門。庵の下に雌龍雄龍の二ツ頭の如意寶珠を。守り遊びて雲を招くや天の。帝の末葉の雲竹の下の孫八左衛門。いたらがひは岩永黨。網の手は須貝黨。大洲ながしは安田の三郎春の山邊の鷹染。弓張月をかな紋に。透し鹿子の亂れ星。千葉殿の紋ぞかし。女忌ひてふ高尾山如何に妻戀ふ小男鹿の。踏分て鳴くむら。紅葉の紅葉小笠は名古屋の紋。圓扇は兒玉黨。腰から下を吉岡の。裾黒に鱗形北條の紋ぞや。風折烏帽子立烏帽子大一大萬大吉。白一文字黒一文字山の内の紋處。さて十文字は隼人の薩男の便ぎくやとて。船漕めぐる島津の紋巡り。く行水。月をも共に汲入て。篋に流す水車。是こそはまの。龍王の末孫佐藤一家の。紋と知らる。竹笠は名も高橋の紋所。龜甲輪違花朝。三本傘雪折竹。竹に雀は陸奥の。五十四ぐんのそらまんごころ伊達といふより伊達染に。二ツ瓶子かはさ三ツ瓶子は宇佐美の左衛門。左巴右巴小山の判官宇都宮。鱒矢は伊勢のみやがた佐々木の紋は四目結。島山はこもんむらさう武田の家の紋所。幸菱の幸ひを子孫

に受て悪魔を攘ふ。桑の弓取よもぎの矢筈は榎原一黨。此人々のは果報に曾我兄弟があやかつて。年来日ごろの憂もつらさもた。一筋に。思ひこんだる思ひの思ひはらして思ひ出と。思ふ思ひは春駒のいさみに。いさむ矢竹心も待てしはし。時こそあらめと心の駒を引きしめ。ひ。か。へ留むるつなぎ馬は相馬殿。筑紫に菊水四國にたつ波中國に揚羽の蝶。牡丹梅鉢おもだめ橋さくらばな。大小名の家の紋まなび寫すもおそれあり。はばかりありや免あれとおめす。そらすいひ立つれば。一座の人々祐成がこさばの花にうつろひて。さても目出たしヲウめでたしとまたさか。づきをぞはじめける。祐成かねて領内の。土民をかたらひこのまぎれに祐成を。打殺す手筈を取り野山育ちの荒百姓。數十人用意して此處彼處に忍び居る。斯くとも知らで館には其日もやう。へいしよくの。後段の吸物はや盃も満潮の。歸りを急ぐ時しもあれ表の門を打越して。何處ともなく手比の石を二ツ三ツ。續け打にばらりと打つ。是は如何にと立騒げば後の築土長塚より。ばらり。と打程に銚子島葦屏風襖を打破り。少々人をも過たんとせし程に。二の宮の太郎大音上げ。町人民家の嫁取にこそ石を打法はあれ。弓矢取の婚禮殊に祝言の夜半過て。今宵石打つ狼藉者何様會我が某に。意恨ありと覺えたり。一人も餘さじと。股立褰げ押取刀で出んとするを祐成絶つて。ア。短慮千萬。下々童の腕てんがう取上て言ふ事ならず。鏡り給へといふ處へあをめのくり石飛來り。祐成が烏帽子の招をはたと打て落す。南無三寶と振返れば續いて打つ。彼方へ外し此方にすまひ。除ても。隙間なく只祐成が眞向を。狙ひて打とを見てげり。主の二の宮家來の上下表へは氣も注す。祐成を圍ふばかりにて周章狼狽立騒ぐ。後には門を押し破り大男二三人。頬を包みて大石をゑい。と昇來り。祐成を目懸打付んとせし處へ。十六七の小冠者中門を飛越え走入り。大石昇たる男子輩兩手に抱て取て引伏せ。三人持の盤石を輕々とひんだかへ。彼奴等

が背骨に撞と置き、動かまい。ヤア祐経殿珍らしや。悴の時分お目にかゝりひへば定て見忘れ給ふらん。某は故河津が乙息子。祐成が弟箱王丸と申て、箱根山に罷在るすんご優しい華者な兒。姉が祝言に付大勢の人入込むよし。兄祐成が身に取て少と用心致すわけある故。心元なく餘所ながら屋敷の廻に徘徊仕る所に、案の條祝言の石打にことよせ。一人の兄を打殺さんといたすを見ては居られず。お座敷で尾籠な姿で推参いたす。慮外は童の事なれば其處は免。さて祐経殿にも恨みあり。是程取巻き打つ礫。お供の衆にも仰せ付られ追拂ふても給はるべきに。祐成が打殺さるゝを面白さうに見物あるは。さては人を殺すがお好さうな。いで打殺して見せ申さんと。大の男を敷きながら。石の上をゑいやうんと踏付れば。三人ともに目を見詰り鼻より血流れて。死生も知らずなるを見て。外に屈みし暴れ者。ばつと逃て行く處をあたりの石ごも押取。雨の如くに打かくれば肩間を破られて伏すもあり。脛骨打砕かれはふく。皆々逃失せける。以前の大石引かへ。祐経殿に引出物致さんと。走り寄れば祐経ア、是を箱王丸と見せられ。全く祐成殿を打せたくはなれども。姉の祝儀を祝ふてと存する故。必ず某如才はなし。ハテさて成人めされて方までつきたるよ。頼朝公へ申上は奉公に出したらば。天晴は用に立て後々立身見え申す。は前は我等に任せと言はせも果す。エ、工面をかし食ふ箱王でなし。石を打つが祝儀ならば透も祝儀を祝はんと。跳り上りて投付る祐経も叶はじと。引外して逃て行くヤア己れ通さじと。又押取て追かくるを殘る人々祐成二の宮。ヤレ暫くと緋り留るを振放ち。駈出く怒りをなせば母上戸外に走り出で。コリヤ餓鬼め。兄が詞を聞入れず。物に狂ふか留れとの母の一言身にしみて。鬼神の様なる箱王も石を彼處へ瓦破と投げ。此方や何んにもわるい事は仕もせぬにと袂を嚙てぞ居たりける。母泣叫び聲を上げ。エ、是非もなや一門衆にも馴れ馴染。人々の取合せにて兄祐成を世に立んと。恨

ある祐経にさへ追従する我々が。心ざしをも無下にしてやゝもすれば山を出。大名衆へ狼藉するは母や兄が此首に。繩かけんと所為かや。掴ても叩いても性も徳もなきゆゑに。山へ上れば學問せず悪さはかりの昂するは。如何なる佛罰神罰ぞ。母は精も氣根もなし七生までの勘當ぞ。母が勘當ゆるされたくば法師になつて衣を着よ。さうなさうな勘當と。言捨て奥に入りたまふは苦々。しくも哀れなり。箱王勃然と立上り。腹立や情なや。母上の仰ををむき飛ぶはねつの力わざ。武藝兵法たしなむも彼の祐経めを討ん爲なるに。出来したりとも仰なく勘當とは何事ぞや。情なや口惜や。この勘當も誰ゆるなれば皆祐経めから起ること。とても勘當うくるからは母も兄も怖からず。おのれ祐経め打殺さんと。大石取て胸挟み。跳り出るを祐成二の宮姉の姫。取付く引留め。コリヤ親の勘當蒙て敵を討ても討たに立す。天にも地にも憎まれて。侍には申に及ばず。人間外れの畜生となるが合點かと。口々に言聞すれば箱王は。何と勘當受たる身は侍にてもひはぬか。さても無念や口惜やと。持たる石を瓦破と捨て足摺。してぞ泣居たる。姉は様々慰めて今より心を癒し。學問して出家とならば姉も兄も伯父様も。宜に言成しは勘當の許の使を上すべし。一先箱根へ歸れとて團三郎に手を引せ。やうく謀め引立れば。敵を討ぬ無念さ。母の不興の悲しさの數々還る稚心の。別てうれとも夕暮の雨や。さめく泣入く起つ。轉びつ立歸る實に。梅檀は二葉より芳しといふ故事も。曾我兄弟の身の上知られく。て生先の頼もし。かりける次第なり

第三

心を神ぞ白真弓。く。矢立の杉に祈らん。抑相州矢立の杉といつば。八幡宮の神木。其昔平の權守の

夷狄征伐の出陣に上差の、鎧を奉つて合戦の、勝負を試みしより以來、思ひくの願ひによつて、男の爲なる、弓矢の道、女の業の似氣なくも、大磯の虎御前流れの身には品々の、思ひの數や重藤の、枝珊瑚樹にて十束挿たる揚弓、變斑の野鷹の矢髪の鬚目に挿しこぼし、杉の樹蔭に行めば粧坂の少將として、是も名におふ遊君の何か心に願ひの種、蒔繪の揚弓鶴鷄の羽にてはいだる矢、髪の鬚目に挿したるは人眞似なりと人や見ん、虎少將にいふやうは、誠に御身もみづからも女に似合ぬ大膽さよ、さあこれこそは矢立の杉、斯様に伴ひ來るからは此方の願ひも明さんに、和女の心の願ひ事包す語り給へといへば、少將打笑ひ、我々が願ひとして懸路ならで餘の事に願ふとはいはず、和女様のも定めて同じ懸ならん、先々語り給へといふ虎は少時打萎れ、問はれて猶もいへばえの涙先立ちみぞや、誰ありて此勤面白ふてはいたさねども、取分き今の妾こそ、愛身が中の愛身なれ、朋輩衆は多けれどもを様ならで語らぬは、十郎様の仕事よ、戀し懐しいとし可愛はまへての事、今斯く世間に言ひ立てられ浮名に沈む水底の、皆身のひしとは知りながら猶しも戀に我がはりて、天晴我殿は人の下には付けまいものと、心ばかりは勇めども、浪人の淺ましき氏素性なら器量なら、ならぶ方なき侍を埋木となす無下なさまよ、それにつき鎌倉殿の若君、頼家公には譽ある兵の姿を畫いて、は殿の障子に建らるゝと聞しより、あはれ祐成様に親の敵を易々と討せ、天が下に名を上げつはもの揃への障子の繪の、數に入れてたび給へと矢立の杉に揚弓の、矢は細くとも懸路に太き女心の我念力を、神ならば神天も知れ推量あれとぞ語らるゝ、少將聞もあへず實に道理さりながら、そなた様の物思ひは思ふ人を持つての上、まだみづからはそれとは違ひ、或は大名有徳人、空の客のみ多くして今日が日までみづからが、命を捨て名をすて、身を任せんと思ふ程の男を未だ見届けず、祐成様との挨拶を見聞につけて羨しく、せめて此浮身となりし思ひ

出に、丁度祐成様の風俗して、身は貧でも日蔭でも何にも構はず兎に角に、心意氣のいとしらし。氣の眞直な男あらば、身も心も擲つて可愛がりたき願ひにて、神に捧ぐる揚弓の矢立の杉も杉ならば、婦や餘所に漏聞かん、包みたまへや、我事とても、漏すな語らじ人や見らんいささらばと、互の狙ひ深翠杉の梢を日常にして、少時たもつて放つ矢が、一二の枝にはたゞと根矢の立たる如くなり、所願成就有難しと、杉の下枝に額を伏せ禮拜悦び限りなし、斯る處へ鬼王草鞋に高股引、息をはかりに走り行く、虎御前引き留め、これ鬼王殿、驚忙しき體心元なし何事ぞやとありければ、さんい此頃二の宮殿の地方にて、敵祐経箱王殿に出合ひ、耻辱を取りしを遺恨にや鎌倉殿へ訴へ、後々君の仇とさへし程に頼朝公の証にて、箱王に出家させよ異議に及ばず擲めて出せと、別當への使則ち祐経承つて、あれ〜早一里後まで來りしを、某駆脱け箱王殿を、何方へも落し申さん其爲に、箱根へ急ぎひと言捨て走り出けるを、なふ心元なやシテ祐成様には氣遣もおはせぬか、暫といへども聞入れずこれなふ〜といふ内に、祐経が鎧印はや程近く見え廊の首尾も如何と虎少將連て里にぞ、三馬歸らるゝ、東路や、其里人に事問へば、大磯山下粧坂三筋の町の遊興所、照降なしの月花と、三千の粉黛は、雪も紅葉も及びなく、在鎌倉の諸大名非番の休息に、金を礫玉は石酒は泉と酌流し、歡樂華麗を盡しけり、今度鎌倉の頼家公、鎧始めの祝儀とて千葉上總土肥佐々木、彼方の振舞此方の饗應、則ち今日は和田北條兩亭主、若殿原を慰めん竹取の長が許、三箇所の遊君を殘らず密て夜明しの、茶の湯亂舞の亂れ酒老も若さも隔てなく、解る心の奥座敷に又、盃ぞ、三重始りける、其中に、少將は、矢立の杉の利生にて、一座の中に我頼ひ、殿は授かる事もやと、對ふ鏡は、湯化粧に、まだ浴上りの顔はめく、汗の額や眉垂るゝ、剃刀の刃も妬まし、斯る處へ箱王丸、案内もなく走り込み少將の袖の下に、顔差入れて

小聲になり、暫く影を隠してたべ。平更頼み存すると、手を合せてぞ屈み居る。少將も肝潰れ、ハテ奉爾千萬。さりながら言甲斐なき我々を頼むとあれば退れはせじ。そもされば何の科にてかく逃隠れ給ふとあれば。ア、音高し全く科は致さず親兄弟が出家になれと寺へ上せ置たれども、元來武士なり望もあり。生殺き坊主になることなんばう悲しく寺を逃出し處に。師の坊より追手厳しく寄る方なし。偏に頼み奉る拜むくと泣き居たる。ムウげにも様子を聞くからにしはらしやいとほしや。妾圍へは出家に致すまじ。され共此處は傾城町と申て諸萬人の立合。わるかうの寄合素振を見せても如何なり。ハア何とせん何とがな。エ、げに好き思案のみぞや。先前髪を落し元服させ男となし。初元結の小紫客の由縁と言なして。何時までも圍はんまだうら若き若草の。若衆盛のは前髪。嗚や惜しうも思さんなれども。みづから落して參らせん此思案は如何といへば。ア、煩さの前髪や。寺に居れば小僧共がせびらかし。里へ下れば子供等が瓜の皮は嫌かど。雜言いふが奇怪にて厭果たる此前髪。惜い事はちつともなしサア〜早う落してたべと。湯の盤に手を差入れ自ら揉で押對ふ。少將は剃刀のたつきも知らぬは方に。是もは縁と萬代を深く剃込む額角。新月代の淺翠翡翠の縷子髪蟬折の。優に威のある美男せきかたぐい色めく元服なり。振袖にては適はじと虎御前より預りし。祐成の小袖取り出し先づ假にとて着せられた。行丈合てのつしりと。千騎萬騎が大将とも見かはす許りになりてけり。箱王袖の紋を見付け。これは庵に木瓜何者の衣裳にて此紋を付たるぞ。エ、必定工藤祐經めが遊興に來て脱置しか。あら忌々しぬがんとすればア、暫く。これはわらはが朋輩。虎御前といふ女郎の深き殿は。曾我の十郎祐成殿と申すお方の小袖といへば。ム、なに十郎殿のお小袖とや。さては兄上も此處へ通ひ給ふかや。我こそ弟の箱王丸若此姿見付けられ。元服いたせしと母上に告給は。猶々勘當深かるべしなふ恐るしや悲し

やと。袖にて額を押隠し如何はせんと泣きわたり。少將は横手をうち。さては祐成様のは舍弟とや。お心やすかれみづからが虎御前を頼み。兄は様へ言直し。母は様の勘當も。思案こそあるべけれ。如何し九事にかおの様を。鳥渡見るよりのとしようて末の事まで苦になるは。我は惚たと思はねと底の心が惚たげな。今よりは我殿はコレ。夫婦じやが合點かやいの〜と抱付く。元服しても氣は童箱王わなく懐ひ出し。エ、さもしい事はつかりと。小指を口に差俯伏塵にいるはを書わたり。其幼兒なが猶愛し。なふ是妻を持っては誰が見ても。出家にせんとは得言はぬぞや。但し出家に成たればどうなりともとおとされて。耻しげにも閨の戸を。明て入るさの箱王が心の「中こそおきなけれ。かくて奥の座敷より。虎を召せ共風の心地と出合す。然らば少將お酌に參れと再三度の呼使。色品かへて召るれども今宵願ひの新枕。明日の命も知らぬ身が離ればやらじと胸をする。此頃續く酒をいたみ。枕上らすひへば今宵の坐敷はは免あれと。障子越にぞ言返す使は奥に走り入り。有の儘にや言ひたりけん朝比奈三郎飛で出で。閨の襖戸に突立て無興にひ少將との。年寄れし北條殿父義盛なんぞが。和女郎の色に愛て召るゝにてもあらばこそ。若侍へのは待遣一つは又。方々に花を持せて懸望あるに。如何に酒を痛むとて死ぬる程の事ではあらし。酒が嫌なら盛るまじき。氣色悪くは義秀が抱てなりとも背負てなりとも。是非には供仕らん。案内なしに女郎衆の閨を明るも無骨なり。但しお床へ推參しては脈伺ひまうさんかお返事いかゞと申しける。其内に火を消打し箱王は。女の衣裳を打掛障子明て立出れば。少將はつけ解して。朝比奈様とひ故是まで出てひへ共。一足も引れねば恐れながら負ふてたべと。言せも果す朝比奈突と寄て。唐糸ぐゝみの八重織に繁縫縫ふたる打帯の。厚さは板の如くなるを二重ながら無手と取り。小首を入れて磨げんと引き上げるに上らばこそ。ヤア女郎は肥り肉重きは誰か思ひ人假令千引の石なりとも引ば磨げと戯

れて、捲ぐるに猶上らず。こは如何に。淺く思ひし朝比奈もあさしくは侮られず、力を入れて引上る。猶も動かぬ鋼鐵の、金輪際よりはへぬきし大盤石の如くなり。生得彼は大力にて我を欺くは坐んなれ。假へば異國の石龍夫人我朝の板額女の、力もよしや義秀が母の力を手覺の、左巴が子なるぞや引に留らば留つて見よ。二重の打帯捻切るか我腕骨を抜る、か。力自慢の女郎の柳の腰を締切るか。三ツに一ツは定のものよど如獅子王の金剛力、項羽が山を劈き門を破る焚燬も、鬼神ならぬ人の業も何事かあるべきと。兩手をかけてゑいと引く箱王も朝比奈に、一世一度の力試し引ども押すともよもや搦がじ。よもや抜けじの要石大地を奈落へ踏抜と。膝は古木の力瘤留らんとこそ踏しめけれ。兩方兩輪の強力にて谷に年經る楠が、天狗倒しの山風に枝を鳴せる其響さ。さる〜〜と引き出せばさり〜〜と捻戻す。道ては控へ引ては緩め息をもつが捻合しは、阿波の鳴門の満潮を乗伏て漕ぐ帆掛船風に揉る、如くなり。引も引たり堪えも堪えた終に互の勝負なく、腰帶二ツにふつ〜とされ。兩方尻居に控々どはづみを打て居りしは、六しゆ震動斯くやらん長さ八間幅二間の、松の桁椽釘離れ礎土にぞにえこみける。此音に和田北條若侍、燈火挑げ走り出で。こは如何に何者なるぞ。名乗れ〜と口々にこそ仰せけれ。さんひ某は河津の三郎が二男箱王丸。出家を嫌ひ山を下り不慮の仕合は免われと。始め終りを語りければ和田北條横手を拍ち。ム、扱は聞及ぶ箱王かや。天晴器量や頼もしや。父に劣らぬ武士いで時政が。烏帽子子に致さんと一字を譲りて今日よりは、曾我の五郎時宗と名乗せよ。然れば近日鎌倉には兵揃への繪合せあり。は分等も譽を取り後々は繪合の數にも入らば、御機嫌伺ひ兄弟の御勘氣申開くべし。用事あらば此面々秩父殿は勿論。扱其外の人々は一門とても當代は、心をおけや置く霜の夜明の登城さらばとて。立ち出で給へば時宗は頭を地に付け一禮し。世に捨られたる我々に。深き情のほ詞忘れ難

し謝し難しと。又悦びの涙ながら送りて。こそは 三馬出でにけれ。

はつとて

いでそよ君が、さほしの。文武に富る鎌倉の頼家の御曹子は。鳳閣の賢聖の障子をまなび名に高き。古今の勇士を繪に寫し、武藝の鑑照せとて。丹青筆を盡しけり。さて其後頼家公重忠の案内にて、近習の侍召具し。一々次第に御覽ある。先づ左の障子には景行天皇の王子、日本武尊を、第一にこそか、れけれ。そも〜。此日本武と申すは身長の長一丈。力強くて鼎をあぐ十六歳にて八十の武といふ夷の西海の波に斬沈め東路過て武蔵野や。我ぞ能れる若草に。敵の大勢火を放つ。時に尊のほこしの。忽ちひとり脱出て。燃え来るほのは刈萱の、草薙の寶劍の威勢はげしき太刀風や。膽吹山の惡鬼を滅し。今の世迄も白鳥の明神と崇め奉る。されば日本第一の。武者なりといふ心によつて日本武尊とも。又小碓の尊とも仰ぎてしるし召るべし。さてその次に書れるは。平城天皇の御宇にありし。坂上田村麿。勇力といひ神力の念彼觀音の力によつて。譽れ古今に鳴渡る。鈴鹿の鬼神退治の時、雲を攀たる旗の上。千手觀音。光を放つて千々の、矢先に掛巻も。畏き御代の固めとなる。然れば弓矢取る人は。信心こそはあらまほし。此方を見れば直垂に。弓矢を帯し龍を踏む。姿は是ぞ音に聞く。田原藤太秀郷平親王將門が。おのが一人の身を分くる。七ツの影もさすが又。此秀郷の智慧の矢にこめかみよりぞ射られる。田原藤太が謀略にてと。その時のことわざの持囃草生茂る。三上山の百足を滅し。其名は高く立波の。わたつみやこの龍宮界より。聲に取すまいた。三國一の。勇士なり。第四番には餘吾將軍。平惟茂戸隠山の下紅葉。色に引れて梓弓矢竹心をくみて知る。所は山路の菊の酒何かは苦しがるべき。一樹の緑の

假枕。夢とも分ぬ鬼女の形。鬼一口と蒐りしを正八幡の應護の利劍。斬拂ひ給へば劍に恐れて巖へ上るを引下し刺貫し忽ち鬼神をしたがへ給ふ。威勢の程ぞ恐ろしき。恐るべきは武士の。色の道この致ぞや。其次は忝くも。は先祖頼光八幡殿。悪源木義平是等は武功数知らず。御記録に明白たり。中に鎮西八郎神變奇代の弓取にて。弓勢てつと岩を貫き。數百人取乗たる大船の船をとつて。覆へず大力量に。人間の所爲ならぬ鬼が島へ押渡り。きややうをしたがへ奴となし新羅。百濟高麗唐土に跨つて。威を振ひ給ひし故今の世までも異國には。此姿を繪にとりめ門戸にかくれば其不思議。あつき悪病攘ふとや日本の。鎧道大臣とも謂つべし武將なり。次は伯父九郎判官。是こそ摩利支尊天の。和光を塵にまじはりてならはず聞かず學ばねど。生れながら武勇の達人。一張の弓の勢ひは。半月胸の前に懸り。三尺の劍の光は秋の霜。腰の間に横へたり。これに續いて武藏坊佐藤兄弟勇士の。中にも弟の忠信が。君の姓名賜つて。真先かくる花戰吉野の山の白雪も。血汐に染て紅の赤地の錦の直垂は。我こそ九郎義經と空腹切りし忠功は。一重ならぬ二重の塔。眞一文字に蹴破つて。月の都に行く雲の。追手の軍兵引受て。枕の碁盤振上げく四鳥にかけて追廻れば。さしにも勇む六波羅勢先手も後手も打亂れ。命を生ん駄目もなく。腰殺にぞなりてける。さてこそ碁盤忠信と比なき名を殘しける。次は澁谷の金王丸。木曾の義仲能登守鬼の腕を斬る跡は。渡邊の綱ひ。天狗を組んで伏せたるは坂田の公平。同じく保昌季武貞光ひかしを今に見る如く。又今の世のするの世のかけみになれとみかきなば。弓矢の道はつさせじと四べん八おん讀む如く。世におもしろき武藝の教訓頼家公を始めとしおのく。あつとぞ感じける。お次に居たりし朝比奈に突と出。これくは前に工藤祐経はおはせぬか。日外鶴が岡の拜殿にて貴殿の上られしは。白き鹿の命毛を筆に作て繪をかけば。其繪則ち物言ふ由。何と其繪は出來やさぬか。

但例の千みつか如何に〜と言ければ。祐経聞て如何にも出來仕り。則ち河津侯野が相撲を屏風の繪に書せしへごも。相撲の姿は裸體なれば坐敷へは尾籠にひ。的場のあづちに立させて。物言せし覺に入んそれ〜と。豫て用意の若黨共屏風の場に引立る。繪を見れば河津の三郎大地に瓦破と投付られ。侯野は勝て大手を上げ河津を下に踏付る。頼家は驚じ聞及ぶ此相撲は。正しう河津が勝たるゆゑ今に傳へて。河津掛といふ相撲の手ありと小姓共の語りしに。是は侯野が勝たる體心得難しと仰せければ。不思議や繪に書く侯野の五郎。坂東聲を高々と。ユハ情なきは詠やひ。其時の相撲には正しう某勝てひ。然れども人心續け勝を遺恨にや。河津が勝と言慣はし冥途の障となりひ。其上河津が悴共。勿體なくも我君を伊東の敵と狙ひひ。はやく〜彼等が首を召され。某が名の敵君の敵滅し給へ。何と河津侯りか返答あらば若君のほ前にて。ゆせ〜と呼はれども河津が繪には詞もなし。人々奇異の思をなし。是は不思議と計りにて呆れ。果てぞ見えにける。朝比奈庭に飛で下り。ユレ寫繪の侯野殿。終には目に憑らねども聞た様なる聲にてある。近くへ寄て見參と突と寄て屏風を取れば。工藤が下人八幡三郎あづちを掘て屈み居る。朝比奈隙さず突と寄り首筋掴んで引出し。ユレ祐経。侯野が魂何者と思へば。は邊の家來八幡三郎。ユレ侯野が魂殿。河津に勝つ程ならば此朝比奈にも勝給はん。いざは坐れ參ると前はるつかんで指上げ。二三べん持てまわり古郷へ歸れといひさまに。的場のあづちへがつばと投れば。はふ〜逃てはひ入りしを笑はぬ者こそなかりけれ。朝比奈呵々と笑ひ。相撲がつくれば行司が出て轉ぶとす。祐経殿サア坐れと双肌脱で立かれば。イヤ先重ねて〜と遠侍に逃出る。おのれ度々許し置き性懲もなき大悪人。打殺さんと飛で蒐るを各取付き押留め。は前なるは朝比奈若君のほ慰み。斯様の事もあるが可し平に〜と靜むれば。力及ばず立歸り何處ぞで祐経朝比奈が。番ひし詞反故にせぬと牙

を嚙で拳を握り、地團太踏で退出す祐經が逃足、朝比奈がいさみの體格別、さうの心々を見る人、聞く人おしなべて我身を嗜む手本なり

第四

時しも比は建久四年、五月中旬の富士の雪、五月雨雲に降ませて、鹿の子斑や群山の裾野の鹿の星月夜、鎌倉殿の遊狩の遊、實に比類なき事かな、東八箇國の兵共、皆供に参るなれば、定て敵の祐經も、供中事あらじ、假令討つまでの事は夏野の鹿なりとも、狙ひて見ばやとますらをの、狩人に紛れ打出る人知れぬ大内山の山守も、木隠れてそれと見えす梓弓、矢頭にならば鹿よりも、祐經を射とめて名を富士の根に上げばやと、思ひ立ぬる狩衣、例へば君の答め、よしそれとも數ならぬ、身には中々、恐れなし君に恐れは、なけれども、親の不興は三惡道、八逆五逆に優るとかや、母に反し時宗が父の敵を討たりとも、誠の孝行ならずとや、今日は是非和田秩父北條殿に打歎き、勘當の詔言を頼む詞のあいその種、庭の草花刈持たす鎌倉方の人達を、忍ぶとすれば信夫摺色も替らぬ直垂に、相も替らぬ鬼王兄弟、包ひ甲斐なき笠の端も心「がらにや傾けり向ふの岡の、松蔭より藤も断れて物寂たる女與物近付に、興添の下女を見れば、曾我にまします母上の御與なり、一先五郎忍べとて刈捨てたりし麥藁取被せ、上には菅笠打懸け弓横へて鳥威しの、案山子になつて鬼王團三郎前に塞りつくばひ居る、母祐成を見給ひて興立させ出給ひ、珍らしや十郎、此四五日は音信も聞ざるゆゑ、二の宮へ人を遣つれど彼の方へも見えざる由、何處にかおはせしぞ十郎承り、さんひ鎌倉殿富士の遊狩近々にて、前代未聞と承り、若きものは末代の物語に見物いたしたき望みにて、和田殿へ頼みに参り思はず返

留仕ひ、シテ母上様には何方へ越ひやらん、若し遠駆にもひは、鬼王か團三郎か、なご召連させ給ひもせで、抑何方への渡りとあれば、母聞給ひ餘り嬉しき事ありて、三河國蓬萊寺峰の薬師へ参るなり、其故は河津殿と胎内にて別れ、忌の中に生れたるは身達が弟を、越後國くがみの寺へ遣せし禪師坊といふ法師、今歳既に十九歳學問成就し、峯の薬師にて新談議とて始めて説法する間、聽問に参れとの文を見るより嬉しくて、只今参詣するぞとよ、は身も信心の人を勧め誘ひ連、必ず参詣させて給へ、昨日今日迄此母が乳房を哺へし稚き者が成人して、談議を説き衆生を教化するかと思へば、妻が嬉しき推量あれ、是に付ても五郎めが人らしくば、疾に出家し兄弟共に名僧となり、一門の菩提を助くべきに、同じ子といひながら禪師坊は佛、五郎めは地獄界他人の心の違ふは道理、エ、思へば憎や、恨めしや、ヤア、南無三寶、一大事の談議参りに五郎めが事を思出し、胸を燃せし勿體なや、とは言ながら憎しと思へば猶忘れぬ、親の心をそは知らぬは淺まし根性やと聲を上げて泣給へば、五郎も笠の影ながらむせか、へりたる計りなり、折悪ければ祐成も、押して申さん首尾もなく、差俯伏して居られしが、母上重ねてなふ祐成、見れば鬼王團三郎に色よき草花を持されたり、一本所望し佛へ捧げ参らせたと仰せければ、祐成これは幸ひござんひ、此花は庭前に置き、一結びに父生靈又一結びは、母上へ奉らん爲持せひ、御氣に入し珍重さよと團三郎に持せたる、五郎が花を参らすれば母は悦びつくくご打眺め、扱やは身は奇時にも浪人の身の事繁きに、草花を植て亡き父や、母に見せん心底嬉しさよ、誠や花は其主の心の色に咲くとかや、和殿の心優しきゆゑ花も一入色深し、エ、さて五郎めは放逸邪慳の奴なれば、花も紅葉も差別なく斯様の事も知らぬゆゑ、一事が萬事に涉り不孝なるも道理ぞやと又さめ、ふくと泣給ふ、祐成折こを能けれと思ひ、最前より申上度ひへども、は機嫌を計ひかね差扣へひ、今は何をか隠

し申さん。鬼王に持せしは、某が植たる花。又只今差上ひは、母上の悲愍みに目にかけてくれよと申て、五郎が園に植置しを言傳越てい、は手に觸しと申なばさぞ有難く存すべしと。いひもはてぬに母上持たる花を投棄て、なに五郎めが花なりとや汚らはしや勿體なや。ニ、祐成誠五郎めが母が心を慰めんと思ふならば、親の教訓聞入て禪師坊と同じ様に、出家になつて見せてこそ吉野初瀬の花よりも、それに優たる慰みあらふか。大なれ小なれは身は會我の世繼なり。禪師は出家成就する身の片付かぬは五郎め一人。殊に鎌倉より搦來れ討取れとの。取沙汰を聞く度に母が膽を消す事は、日には百度千度ぞや。されども心を取直し、女でこそあれ和比前といふ侍の母たる妻が、御當せずはせぬがよし一度思切たる子を、言出すも輪回ぞと押へつゝ思ひ苦しむ胸の内、花で心を慰めとや、譬は優曇華鬘陀羅華。七重寶珠の花とても子に迷ふ目には見えぬぞとよ。時宗が花ならば手にも取らじ目にも見じ。況てや佛に捧げても何の功德のあるべきぞと。聲を上て歎かるれば時宗悲しき遣方なく、隠れし我身も打忘れ轉び伏てぞ。泣居たる。祐成鬼王兄弟も、彼方此方を感じやり不覺の涙を流せしが、祐成なまなか言出し悔むに詮方あらざれば、は物詣と申殊に弟禪師坊が、新談議といへばは心の障なく先は參詣いへし。祐成も信心の聽問衆を誘引して、聽て參詣仕らんとやうく賺し乗物に、助け乗すれば仕丁共泣くく速めて別れる。五郎簀笠かなぐり捨て、大音上てなふ母上様く、尤一旦は心を反さしは我過り。そも左れば左程まで餘り情なきは心。我等も同じ子と生れ、祐成殿や禪師坊に、何か替りひべき五郎が植たる花までに、は憎しみのひかよし捨させ給ふとも、一度は手に觸れたれば又は顔を拜する迄の。我樂みの花形見是なりと、肌に付身に添へて、人目も分ず大聲上げ身を悶。えて歎きしは目もあて、られぬ次第なり。祐成猶も教訓し、今更悔みて益もなし。禪師坊が法談こそ幸の時節なれ、某も參るべし虎少

將にも參詣せさせ。説法の法文に就て因果の道理に引かけ、達て訴訟申すべし。は分も聽衆に打粉れ。時分よければ罷出で直に歎きを申て見よ。いざとてすぐに兄弟は蓬萊。寺へぞ 三更急がる、

さうおのり

佛も元は、凡夫にて、彼の耶輪陀羅女の妹背の中、寝る夜のさまも、悋氣のしなも、今の衆生にかはらめや。是を見彼を聞く時は、戀と菩提と引分て、道は二筋なきものを、は法の爲よ君が爲、行かば千里も、物かはと、虎少將は聞の戸の白むまかせに起出で、見れば夜深き富士の雪、山の小嶺行く雲は、眉の黒みのくろくくと、片割月を挿櫛と、たしなみ強き空の色空にも戀は有明の、戀海の四わうとらり天、夫婦枕の山天の、契は、抱き合ふと聞く兜卒天には手を取り交し、らくへんげ天の戀衣、つまどつまどが忍ぶ夜は、互ににつと打笑ひ笑るを戀のしるしとは、それが好いやら悪いやら、人界よりは、知らねども、これで堪能するとかや、たけ、自在天の妹背には、顔と顔を、見るばかり、これを並べて言種の、四王どうりは形を交へ、やまはだき、とよりらくをみたけはあひみると、聞けども迷ふ人心、愛し殿ほど、伽羅の香は、幾夜とめ、てもとめ厭かぬ鳴の、羽根がき百羽がき、鳴立澤はさはなく、初音が原の明方は人の上さへ歎かる、今やいづくのきぬくの、別れの明神伏拜み、かいつくばへば夏草に、蟲はたぐ、蟬の、脛より股につがもなや、はつと驚き拜みさし、拂ふもすその浦風の憎やしんきや吹返し、吹上の濱六本松、番の鶴の入替り立替り、又は翼を打かけ、寄せかけふはと投かけ打被せて未だ集籠の雛鶴を、育て、千代の、友鶴と、行衛知らする嬉しさは今日の前の蓬萊山、頼むは寺も蓬萊寺そも彼の、蓬萊寺と申すは一歳源氏のは曹司、世の浮節に身を捨て、吉次が馬追冠者として、東に下

り給ひしを試しに、ひげや梓弓、矢矧の夢の覺やらで、峰の薬師に、墨染の、數多の年をかぞへ來て扱も、久しの、れいせいや、十五夜は前の墓所、戀の名高く耀きて空に、清見が關なれや三保の松原さんさらめけば、袖のうら波、浪の綾織る綿打つ糸引く、浪のかのこや油井神原や、浮鳥が原、見渡せば、昔を今に、翻す其白旗と白鷺の、たゞ一のしに我夫も、何時か世に立て世の人に、曾我は山家の山がつなれど、今は名取じやヤッコリヤ〜、お國取じや、しやんと褒たらア、ア吉原や、あさ江の水鶏よもすがら、叩かば叩けた〜くとも、待人二人持ぬ身は、泊り〜も帯とかず丸袷の夢を結びつ〜、賤機山や吉田の宿矢矧の橋の橋柱、立止り〜、皆まち、合せて 三重おはしける

斯て御寺には河津の末子禪師坊、當寺において新談議愛らしや殊勝やと、近郷の尼禪門群集をなして參詣す、母は宵より通夜念佛明れば祐成鬼王兄弟參詣し、法談の發願を今や「〜」と待ち居たり、暫くあつて禪師坊、侍者に持せし〜はちう箱三世の佛に三禮し、高坐上り香華をさ〜げ、法華經の二の巻を、訓讀有こそ殊勝なれ、妙法蓮華經譬喻品第三、抑此經は東西わかぬ嬰兒を、親の慈悲にておほしたてめぐしひたして人となす、其道理を其如く教主釋尊親となり、苦界の我等は子となりて導れ奉る、今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子、長者窮子の譬として世に有難き御經なり、然るに愚僧が亡き父は、河津三郎祐重とて古今無双の武士の、運盡き弓の流矢に狩場の霜と消失せたり、其時母が胎内に取殘されしなでし子の、露の恵に人となり今日の説法勤むるも、皆これ親子の恩澤を報恩謝徳の爲なれば、は回向頼み存するご涙に絞る墨の袖、老母祐成鬼王兄弟むつとばかりに泣入れば、參詣貴賤の老若も皆々、袖をぞ濡しける、斯る處に虎御前群集の中を押分出、恐れなからみづからは祐成様のは情に、大磯の虎とや流れの女、現世こそは苦あらめ未來はせめてじやうなるの、しやうな和修と思召お袈裟に召され罪

を助けてたび給へと、上着を高坐に打掛て手を合せてぞ泣き居たる、せんじ虎を一目見て惚れ〜となり目を細め、ム、聞及びし虎御前、我本國の果迄も三國無双の美人ぞと、繪に書き唄に謡へとも賊の妻は今見初め、此坊主めが迷ひの種十年餘りの學問を、君が姿に投棄て未來は地獄も極樂も、さいたら息へ遣ふともお心一ツの情ぞと、手に縫付く有様は、興醒てこそ見ぬにけり、さすがの虎も詞なく顔赤め手をもぎ放し、退んとすれば猶扣へ、法師は元來木の端と思悔り給ふかや、情なやつれなやな柿本の僧正は、殺生偷盜妄語飲酒邪淫の五戒を破り、深くぞ思ひ染殿の后を戀し例しもあり、法師が否なら此頭、半年待てば鳥羽玉の、髪は銀杏か立てかけかお好き次第の還俗と、猶舌たるく縛るれば滿坐の貴賤の參詣は、天魔の所爲か亂心かと吐き笑ふぞ淺ましき、母妹えかね走り出で淺ましや勿體なや、おのれが兄の五郎めが勘當はしつれども、それは法師にならぬさき、おのれは正しく髪を剃り三儀五戒を授りて、今日新談議の高坐の上色に溺れて還俗とは、五郎に優る大悪人一門眷族目の前に、地獄へ落よと言事かと、怒り口説て泣き給へど、耳にも更に聞入れず、ヲ、それは愚事、佛の道を背くからは親子の道は何共ない、戀の道こそ大事なれと虎御前にひし〜と、附載るれば祐成も呆れ果、の見る目の無念さに、拳を握り胸を焼き男泣にぞ泣き居たる、鬼王と團三郎目配しつ〜と寄り、禪師坊が兩手を取り取つて引伏せはつたと睨み、是さ大罪人の墮獄人、此袈裟衣は伊達に着るか化粧に着るか、假へ心に思へばとて諸萬人の參詣の中、虎御前は何人ぞいはは身が瘦なり、瘦水に溺る〜とも、手を取て上ぬとは外典の戒め況んや内典佛經には、生々世々手無き者に生る〜といへり、我等が爲には主君といひ佛の眞似する身なれども、人間道にはづれしは主でもなし僧でもなし、エ、淺まし口惜しよしなき處へ参り合ひ、は先祖代々子孫まで面目を失ひし、腹立や無念や何としてかは腹を癒ん、主でもなし下人

でなきしるしを見よといふまゝに。踏つけく踏伏て。下人に踏れ口惜くば。心を直し給はれとかつば  
 と轉び泣き居たる。フ、踏ば踏め撲ば撲て。出家にはならぬぞと袈裟も衣も脱棄て、虎にひつしと寄  
 添て離れ難なき風情なり。母上涙の下よりもア、あぢなき浮世かな。男子は三人持たれども五郎めは  
 勘當する。弟の法師があるからは兄十郎が力ぞと。頼もしく寵愛せし彼奴が心の入替り。彼の心底にな  
 る上は五郎は遙の善人ぞや。可愛や何處にさまよひしや。呼返してたべ祐成勘當を許さうナフ。時宗を  
 尋ね出してたべと叫び。もがきて口説る。心がけたる時宗群集の中を押分けかきわけ。時宗はひな  
 ふ母上様と立出づれば。ヤン箱王か珍らしや勘當ゆるす此方寄れと。抱き絶りて泣き給へば祐成主従虎  
 少將。さても目出たし嬉しやと。皆一同に諸聲の悦び涙はせきあへず。やゝあつて禪師坊涙を抑へ。如  
 何に母上兄上。又けもん衆の人々も嗚をしづめて聞給へ。愚僧が兄弟四人あり姉二の宮は姫は前。五郎  
 殿は勘當某は出家の身。兄十郎殿只一人大事の敵持たる身が。若も病死や怪我過ち反討にも逢ひ給は  
 誰か世を立て本望遂げ河津の家を繼ぐべきぞ。何卒して五郎殿の勘當は免あらせたく。様々に分別し  
 て心に思はぬ悪行を。つくりては目にかけて故某に愛想盡き。五郎殿の勘當忽ち免有しぞや。親の  
 爲兄の爲我身の浮名は厭はねども。昔が今に至るまで佛の衣服を身に纏ひ。衆生濟度の高座の上女の手  
 を取り戯れし。破戒の爵の恐ろしさよ。去ながらたとへ奈落に沈まば沈め。親子の和睦のほ有様見れば  
 浮世の思ひ出なり。若しも時宗の勘當は免ならずば某も。生存らへん心にあらず死出の山路の旅装束  
 コレ其證據と押肌脱ば。下には大乘經帷子。彌陀の妙號掛たる様時宗も祐成も。母諸共に絶付き一目  
 も知りぬ兄弟を。さばかり思ひ頼母しやいとほしの者の心やと。親子四人の人々は聲を計りに口説立  
 泣より。外の事ぞなき。鬼王團三郎頭を地に付け。其は心と露存せず譜代の主君を下人の身の。土足に

第八

かけしその天罰報する所ひはず。せめての事の罪滅し我等が眉間を足にかけられ。冥加を助け給はれ  
 と。様々、嘆き詫びければ。否々それも義によつて時にあたれば親をうち。主を打し例もある其上我は  
 出家の身。何か心にかゝるべき其代りには兎に角に。兄々達へ忠孝を盡してくれよと宣へば。鬼王も團  
 三郎も何か心の残るべき。冥加に餘るは詞と猶や感涙せさあへず。かくて祐成時宗は此悦びのついでぞ  
 と。富士の狩の供の暇して立出れば。母は最期の門出とも白綾の小袖取出し。今度の狩は晴が  
 まし是を着しては供せよ。狩場は猪論ある者を朋輩達と口論すな。反矢にあたるな過ちせず追つけ目出  
 たく立歸れ。さらばくと宣へば兄弟小袖を肩にかけ。母の衣を賜る事奨諭が母衣の因縁敵を討ん瑞相  
 と。思へば是れぞ親子の別れ。未來は一蓮托生と。胸に涙を包みながら上には千秋萬歳樂。此處はは寺  
 も蓬萊寺は狩の富士は蓬萊山。齡は盡じと押返し。母を祝ひて兄弟は暇申してそれよりも直に。狩  
 場に出でにけり

明王の仙獵には百姓車馬の聲を聞き。羽旄の美を見て皆欣々然として悦べる色ありとは。今此時をや申  
 べき富士の狩の日限極り。諸國の武士も豫てより假屋を構へ參集す。京鎌倉の諸商人これ商賣の時  
 節ぞと。酒屋魚屋はいふに及ばず。餅賣餠賣の類我劣らじと店を張る。詠の講釋辻放下。舞まひ讀賣さ  
 まんに。神事の市場に異ならず。其中に浪人と覺しきもの。編笠引こみ柿表紙の假名本披げ。これは  
 先年討れし河津三郎が一代記を。京都にて書物に作り曾我物語と申て。河津が最期より其子十郎五郎が  
 淺ましき。流浪の體までを悉しく記し慰みに讀み申す。一錢づゝのは合力頼み上るといひければ。往

來の上下立ちかゝり所望く讀せける。去程に河津が其日の装束。秋の野に摺盡したる間々にひき  
 がきたる直垂に、斑の行腰裾たぶやかに穿なし鶴の本白に矧たる。白拵への矢筈高に負なし柳柳桐の  
 弓の真中取。萌黄の裏付たる竹笠麻に吹そらせ。さび月毛の馬の尾鬣厭まで縮みたるに、梨地に巻きた  
 る白覆輪の鞍。連騎鞍の山吹色なるをかけ。合櫛に紺の手綱入れてぞ乗たりける。馬も聞ふる名馬主  
 も屈強の馬乘にて。伏木悪所の嫌ひなくさしくれてこそ歩ませけれ。一のまぶしを遣過し。二のまぶし  
 の八幡の三郎元來騒がぬ男にて。まぶしの前を三段ばかり弓手の方へ遣過し。大の尖矢差つがひよつ引  
 しばしかためてひよぶ放つ。思ひも寄らで通りける河津が乗たる鞍の背の山形が刺り。行腰の着際を  
 ば前へつと射通しける。河津も弓矢打番ひ馬の鼻を引返し。四方を屹度見廻しひかんく。放さんと  
 二三度四五度しけれども。大事の痛手に性根亂れ弓手の蹠蹠放し。馬より下へ真逆様に控さ落ち。卅二  
 歳を一期として奥野の露と消えにける。是迄が河津が最期の段。是より先は子供の十郎五郎が世に零落  
 れ流浪して。立寄る方も夏衣淺ましき身の有様を。お望み次第に讀み立る。一錢づゝの合方頼み入る  
 どぞ申ける。折しも鬼王團三郎蓬萊寺より歸るさに。立留つてこれを聞き兩人はつとどうなづき合。コ  
 く。お手前は辨舌といひ好いかつはこにて。淺ましき生活を召さる。は笑止千萬。様子を聞て爲に成  
 り申さん。いざ先づ是れへと片蔭に打招げば。忝なしと小腰を屈め立寄る處を兩人胸倉しつかど取り。  
 まづおのれは何者なれば。河津殿のことを具に知り。剩へ兄弟の殿ばらの世に零落給ふ有様まで誰が  
 頼んで觸れ歩く。真直に吐せと太刀に手をかけひひければ。彼の男聞も敢ず。いやく御不審なさる。  
 者にてなし。某はナ。曾我兄弟の母が河津と馴れぬ其始。京の者に相馴て産捨たる倅。京の小二郎と申  
 者。五郎十郎とは胤替りの兄弟なるが。本の父は名も知らず母が方へ貢を頼めば。家貧なりとて返事も

せず。商せんにも資本はなし。鎌倉方の大名へ奉公をかせげども。は勘氣の曾我が兄弟なれば其事もか  
 なはぬゆる。所詮曾我が身の上を悪様にいひなし。某は兄弟と一味せぬ心底を世間に知らせ。何卒して  
 工藤左衛門祐經殿へ。奉公かせがん志若しよきついでもひは。は執持頼みひといはせも果てずア。音  
 高しく。さては聞き及ぶ京の小二郎殿座ゆり。我々は殿ばらに召使はる。鬼王團三郎と申す者。さ  
 ては兄弟の人々も。此度の狩場にて是非において祐經を討取。花々敷討死せんとは覺悟極りひへば。  
 我々とても其の心。此度曾我一家に連る者。女は知らず男たる者は名を富士の嶺の雲に上げ。命を裾野  
 の露にかけ生残る者一人もひはず。參あふこそ幸なれば兄弟の助太刀遊ばし。ともにはまれを取り給へ  
 ヲ、目出たし。いざは供申さんといへば小二郎とかうの返事もなく。わちくさふるひ出し膝もす  
 はらぬ有様なり。鬼王兄弟與を覺し。斯程目出たき仕事を。後れ給ふは何事ぞ。但一家の敵を討て。討  
 死するを目出たうは思さぬか。小二郎願ひく。いやはや左のみ死ぬる事を目出たいとも云はれぬと。  
 ぐどく云ひて埒あかす猶々願ひ怖れける。鬼王兄弟目配し。さては必定同心はあるまじさか。返辭  
 によつては主とは言はせし是迄なりサア。一味せうかせまいかと突放し押取込め。否と云は。切付けん  
 氣色を見せて責かけたり。小二郎遁れぬ處と思ひかい潜て飛退さ。ヤイ愚なり汝等。世になき曾我と一  
 味して。飯へ本望逢たりとも行末何の樂あらん。同じ手間には祐經に一味して反討にしてくれん。侍だ  
 てする祐成時宗道に背く某と。果報を以後に見て悔めと言捨て一散に。駈出してぞ逃げたりける。鬼王  
 兄弟齒嚙をなし。エ、無用の詞た。かひより討てすてざる悔しさよ。まづ此事を兄弟に疾く知らせ申  
 たし。今日は狩場の名残とて大磯へお出とや。一先急げと夕葉山その日の。くるわの。三馬宵月夜。曾  
 より闇に。引籠り。待て暮せご其人の。そよとばかりの音信も。はや九ツの。鐘が鳴る。扱は思はぬ

障あり、今宵の逢瀬はヤンサテ、かなはぬな、かなひし。後の、浮名ぞや、寧ろかなはぬ、上からは、人目も耻も厭はじと、虎少將は大門の土橋の柳糸たれて、くるや〜と一筋に、精もつかさず待程の戀には「氣根も強かりし、祐成や時宗は比狩の日取近く付程、浮世の別れも近付は心静に豫てより、暇の名残惜まんと兄弟今はさしあひも、かまはぬ月に編笠が能く似たそれと走り寄り、何とて今宵は逢かりしぞ、時宗様の比勘當許され給ふお悦び、直に其日と思ひしに今日まで音信ないさへあるに、勿體らしい悪い風其過意に今宵はな、酒を盛て〜盛殺す、言ひ置く事があるならば今言ふて置かんせと、何心なき戯言も物が言はせて哀れなり、兄弟忍び涙ながら、ヲ、今宵は酒を飲死に、此世の縁こそ淺くとも未來は一つ杯で、四人一所の長酒盛必ず違へな違へじと、餘所に言なす暇乞、胸に涙を押しかくし奥の、二階へ、三重通りける、夜も更行て、人は皆鼠衣の出家一人、花の帽子を眉深く引被ぎ、虎少將殿の禿衆にちと逢たしとぞ申ける、應と立ち出で誰様じやエ、いや苦しからず、祐成時宗殿へ申てたも、愚僧は京の小二郎と申者、あぢきなき世を捨道心の身と罷成り、餘り比懐しく尋ね参りてひ、密に比目に憑りたしと傳へてたべと言入る、禿ども走り入り斯と告れば兄弟は、ヤアそれこそ我々嵐異りの兄弟、懐しや〜それ先是へと虎少將、二階に残し兄弟はやがて「座敷に立出でて、小聲になつてなふ小二郎殿とは比身の事か、これこそ祐成時宗よ比懐しやとばかりにて、互に袖を取交し、暫く涙を流しける、や、あつて小二郎誠や方々は、祐成を討ん心ざしと承る、孝の道弓矢の道尤もかうこそあるべけれ、頼母しさよ〜かなはぬまでも某も、助太刀討て方々の前途を見たくひへども、幼少より出家して五戒を有ちひへば、殺生罪を重んじて助太刀こそえ討すとも、何にても一廉の比用あらば承はらん、對面こそ初めなれ同腹の兄弟ぞ、心を指さ給ふなど、しみ〜と語り泣ければ、祐成時宗涙にくれ、野にも山に

も欲きは兄弟、親は泣寄と世話にいふも道理ぞや、仰の如く今度の比狩に祐成を、討て無念を晴さんと  
思ひ定めひへども、日本一の祐成を討て我々存命へん様もなし、兄弟といひ法師の比身後世をとふての  
こし置く、母の歎きを諫めてたべ、虎少將は女なれば此事深く包みひ、彼等が事をも偏に頼み参らせひ  
如何に時宗、とても事の事に故郷への遺書、又は遺物の品々をも、こと傳うさん尤と料紙「硯を取寄せ  
て、燈火微かに揺立て硯の海にする墨も、涙ぞ落て薄き濃き筆の立とぞ哀れなる、十郎は兎もすれば、  
虎が情を返し書、五郎が筆のすさみには、箱根の別當の比事、さて其外は、何れも同じ文章にて、取  
き五郎が悦びは、母の不興を許され父母孝養の弓馬の道、龍門原上の土に骨は埋むとも、名をば埋まじ  
南無阿彌陀佛、五ツや三ツの時よりも、十八年の春秋の思ひは二人にとりめたり、建久四年五月間、天  
は暗しといひながら思ひは晴る今宵の空、祐成判、時宗判と書留め筆を、捨てぞ泣居たる、猶しも遺物  
ぞ哀れなる肌守は母比前、弓と鞆は曾我殿へ、鞭と珠は二の宮殿、鞍と笠は鬼王や團三郎に取らす  
なり、鬘の髪は虎少將夜半のさやめに燻しめし、とめ木の蕪薄くとも烟は末に靡き合ふ、二世の紀念と  
見せてたべ、綴子三本紅絹五疋、綿の代まで相副て、和田殿より賜りしを、鴛鴦にやりて我々が、客の  
邪魔して憎まれし、仇を思にてほうじんの、念佛せよとのかたみなり、碁盤人形指人形二人の禿が欲が  
りし、思ひ出せし折々は此人形の袖絞る、露の底にや兄弟の亡骸のおはすらん、彼の藤澤になく雁もや  
よや、哀れを知るならば、冥途に通ふ一言を傳へてくれの鉦打鳴し、念佛回向頼むぞや、巻繪の香匣繼  
三味線引舟こがれ行く末の、遺物と歎く投頭巾鼻紙袋煙草入おろせ、出口の誰々へ、煙草は涙に濕ると  
も、涙の烟咽ぶまで形身に見よとばかりにてくさき、歎きておはしける、小二郎仕済したりと思ひ、ヲ  
後の事は心安く思召せ、明朝参つて遺物の品々請取うさん、今宵は是に比泊りひへ、兄弟の名残も暫

なれば明日は染々と終日語り参らせんと上には涙を翻しながら、下心には今宵の中近江八幡を引入れて、討せんものと案内見済し別れて「こそは歸りけれ暫くありて、鬼王兄弟尋ね來り、ちと急に目にかゝりたしとぞやける。兄弟驚き、心もとなし何事ぞやと仰せければ、さんひ京の小二郎が心變りの次第。語りもあへぬに祐成時宗、いやとよ彼は出家せしとて只今は來りしを、誠と思ひやみ」と返せしこそ無念なれ、しやつめ追駈首檢切んと。時宗飛で出る處を鬼王兄弟押留め、大事の前の小事とは此事、彼は我々に任せひて、兄弟は此處に靜に休息遊ばせ、追付小二郎が首取て、血祭に供へやさんと又引返し出にける。然る處へ誰とは知らず下部共、葛籠を荷擔ひこりや、亭主、我々は去お大名の中間なるが、旦那明日此處にて遊君を集め、酒宴あらんとのは事、され共廊の寢道具は如何とて、則ち夜着蒲團を持參する請取置れよと昇入るれば、長夫婦畏りそれくお座敷の大床へと、昇上さすれば中間共さらばと言てぞ歸りける。祐成見給ひわれ見よ五郎、明なば大名の來らん參會もむづかし、夜明ぬ先に歸るべし疾々休息せられよとあれば、尤ひはやしづまりひへと、祐成は園の間時宗は小座敷に、思ひくりに別れ臥す虎少將の名残の床、盡ぬ契の其中にも今度富士野のは狩場にて、敵にあふての嬉しさ如何あらん兎やあらんと、思ひ込だる一念の、根氣疲れてうつゝなくとろり「く」と寝入ける夢中の魂、假初の狩裝束や五月闇、心の開も晴れ渡る松明振立て兄弟は、見上ぐる床の掛繪の富士屏風襖の薄原、砂子の露を押分けて宵の葛籠は祐成が、寝たる姿と夢心地兄弟枕に立かゝる、三千年の園の桃盲龜の浮木にあふ心地、年來心に埋木の優曇華の花咲けりと、松明投げすて太刀を抜き敵の胸に差當て、莞爾と笑ふて立たりし心の内こそ嬉しけれ、いや待て時宗、斯まで心を盡せし敵殺させて討は殘念なりと、大音上げて如何に祐成、赤澤山にて討れたる河津の三郎が二人の子、曾我の十郎祐成同く五郎

時宗、大事の敵を持たながら、寛々と臥は油断なり、起合やつと呼ばれば心得たりと起上るを、祐成は一の太刀弓手の肩より肋下りに切り付る、二の太刀は時宗馬手の肩より乳の下まで、かけすたまらず斬落し、積る恨みを思ひしれ岩も拳も通れくと斬伏せて、曾我兄弟の者共こそ日本無双の祐成を、討取たりと呼ばればすはや夜討と松明の、光に消し狩場の様夢は、其儘覺にけり、障子しきねの家鳴の音長一家目を覺し、驚き騒ぎ座敷を見れば宵の葛籠を斬散し、血流れ朱になつてけり、こは如何にといふ處に祐成時宗起上り、見れば面々枕の刀血に染りしを抜持たり、是は不思議と走り出で葛籠引開け見てあれば、宵に來れる京の小二郎、づたくに斬られ伏したりしは不思議なりける次第なり、時も遠へず鬼王兄弟近江八幡を擲捕り、廊の邊りに忍びしを召捕つて候と、兄弟の前に引据ゆる、扱は疑ふ處もなく小二郎が引手にて、我等を討せん謀畧同じ刀にて討取れと、二人が首を打落し、今宵の夢のまつ其如く本望遂ん端相、是ぞ佛神感應の孝行、正路のしるしなり、嬉れしめでたし萬歳樂、萬々歳と悦びの名を富士の嶺に上げにけり

大磯虎推拍活

父子兄弟の間は善を責す、善を責る時んば離る、離る時んば不祥これより大なるはなし、然れば九郎判官義經、讒者の爲にさすらへ、秀衡入道没して後、其子錦戸高館に於て義經を討ち取る由、照井金澤兩使を以て鎌倉に訴ふれば、鳥山の重忠梶原源太景季、頼朝卿の命に任じ、大手の芝生に出向ひ法に従ひ對面す、照井の太郎金澤九郎ことばを揃へ、主人錦戸高館の軍に打勝ち、判官殿の首ならびに辨慶其外宗徒の首數以上九つ、持せ献ずるの所は披露仰ぎ奉るとつゝしんでやけり、景季聞も敢ず神妙の扱義經は頼朝公に弓を擲き、天の責まぬがれず討れ給ひしよな、是も源氏長久の瑞相上にも喜悅いべし、よろしく披露致さん誰かある、首受取れと立所を重忠ア、しばし梶原殿、惣じて大將分の首實驗には故實あり、況んや舎弟の首おるそかには勿體なし、其上日本無雙の人々が讒言の冤に沈み、恨み有る此首疎忽に披露なりがたし、傳へ聞く眉間尺は劔をふきしたためしもあり、きつと念を入れらるべしと義經の首に一禮し、口押われば一通の書簡をぞ啣まれける、扱こそと披露あるに身身に科なき條々自筆にくわしくかゝれたり、重忠涙に讀もやらず、いたはしさよばかりにて、落涙袖に餘りけり、梶原聲にかきをたて、エ、不覺なり重忠、鬼神なりとも討れて二十日に及ぶ首な用心のみはん、無益の沙汰な致されど突立つ處に、辨慶が首眼を開き景季を睨みつけ、最期にや啣みけん大根の雁股口よりくわつとふきかくる、景季が烏帽子の雛形つきとほし、後の松に鐵白く裏をかゝせて立たりし、一念の恐ろしさ上下、ひそめき怖れける、景季おどろきいや何事も重忠は差配くど、聲を慄はしやけり重

忠をかしくおぼしなから、首をも改め請取てさて錦戸の恩賞は、追て仰せ渡さるべしおのゝは休息あれど、兩使にも挨拶しすぐに登城せられける。智慧の種ある島山おおくふかくこそ 三馬聞えければ國法よんごころあらす由井が濱に獄門の木にかけさらし。かさねて實驗せらるべしと則ち重忠おふせを蒙り、首櫃に入れ持せ由井の「濱邊に、いでその頭は、文治五年五月下旬岡の山畑雨はれて、敵々しける初粟に斬ふる駒をひき留め、あら不思議や、此方の粟は種もなきに、諸鳥むれるて餌をついばむ、あれなる粟は穂に出づれど鳥の一羽も着ざるは、粟の茂蔭にかくれし者の有り見えたり、あれ詮議せよ承はると、馬廻りの若侍、わけいり捜せばは如何に、二十許の女房太刀わさばさみ大口着て、弓矢手挟みしよんばりと笠もしごろに傾けり、重忠馬より飛びおりて、いして如何なれば女の身が、男にいでたち弓矢を持しは何事ぞ、真直に申せとあれば、此女懸する色も涙ぐみ、我は九郎判官殿浮世の中の思ひ川、これも流れにあだなみのしづかとは妾をや、義経さまに別れしより、餘は身に添ひながら、帶うちとけて二人寐を、いつ扱夢に三吉野を、立出で是まで参りしにさる人の物語に、義経殿は奥州高館にて討れさせ給ひ、今日重忠は首を預り獄門の木にかくると、由井が濱邊にかばねはさらせは邊を遠矢に射て落し、は首級を奪はんためかくは假粧忍びしが、命強き重忠殿口惜きは判官殿の運の程、果敢なきは女の身せめての情に亡人の、は首を一目見せて其後はみづからが、命は入ぬとばかりにて、めんどぞ泣居たる、や、重忠も涙ぐみ、ヲ、道理、いたはし、は恩深き侍さへ頼朝の、は前を憐かり用ふ人もあらざるに、女性の身を捨て此體は、妹眷の中の殊勝さよ、いで、は首見せやさんと、櫃より取出せば、静前後もわかまへず、是は、と走りより抱きつき縫りつき、消入り泣入り身をもたへ五體を、投て歎きける、重忠を始め心なき、むくつけ奴下やまで袂を、絞らぬ人はなし、重忠重ねて近

比見る目も痛はしや、他人の千部萬部より懸し床しのは身のとふらひ亡者も悦び給ふべし、重忠がはからひにて其は首をまゐらせん、よく、吊以給へとあれば辭はなく、手を合せ、情ある重忠殿や然らばは首中うけ、我手にふれて煙ともなしやさん、他目もあればは暇と袖には首目になみだ、共に包みて立歸る心の、中こそ 三馬、哀なれげにや上智と、下愚とはうつらう島山の重忠は、明德天然あきらかにて風情餘つて武名高し、されは義経のは首然るべく取繕ひ一段高く、おのゝ紋紗の羅布を四方にはりてこれを覆ひ、色々の造花に掛香をつゝみ首のめぐりをかこひけり、往來の行人も威儀をたゞして見物す、既に今日獄門の首實驗あるべしと、頼朝假屋に入りたまへば左右の帯刀前後の武士、鑓の役人調度掛、有職のめん、およそ源平藤橘の吉例をひかれ、江間の小四郎奏者の役島山の重忠を、おぎなひてこそ披露あれ、

首級見檢

先づ正中に見給ふは、反逆の大将は舍弟九郎義経、其身は清和の臺をいで、平家を西海のなみにきりしづめ、抽賞行はるべきの所に、御くわはうの花かれて業因の霜におそろへ給ふ、しかし弓箭どるものは末代の鑑、弓馬のてはん此、大将にすぐべからずと、言上すれば頼朝もさすが骨肉同胞のほわはれみよそにもれ、双眼に涙を浮べ給ふぞ道理なる、次に見えしは色黒き、法師の首をこくもんに、かくれはあらじ武藏坊、ヲ、比叡山の西塔にて、天台四観の旨を開き一念三千の、氣をあらはして、三千人の敵の首、敷度のいくさに討取て、忍辱慈悲の衣川、立往生に立波は功德池の、池よりながれる水の龜井六郎重清、同じく舎兄鈴木の三郎重家、熊野權現第一の臣、野見の大臣の末葉、色白く柔和にて

心は樊噲張良がいさみ。今度の軍に兄弟が手に討れし者は、照井が弟高野の四郎九田の藤次、麥野の五郎ことさら能き太刀佩たるにや。芝田の四郎といつし者。辨慶が長刀を、冠の板にてうけ流し、駈てどほるを龜井の六郎、飛ちがへて横になく。芝田が腰を車切かけず、たまらず切て放せば、腰より上げと落とすは馬に乗しとかや。其外百餘騎切おはせ、今は是までいくさばしつ、其處で腹切れ龜井とて鈴木は生年三十三、龜井は二十六歳のあしたの風に夢やぶる。浮世の睡りのさめて歸らぬあはれさよ。歸らぬと武士の、名は有明の月の輪や熊井太郎源八兵衛。是もゆゝしき功の者と上見ぬ驚の劣らめや。片岡の八郎が首なりとこそ申けれ、九番に梟しは誰ぞともいざや白髮に白髪、老たる首はいづれぞや。是は義經の御乳人權の頭兼房。むそじのゆうへふく嵐枯木の力月弓の、老武者ながら譽あり、そうじて此君弱冠のむかしより、軍術、劍術、妙ありて士卒をなづけ給ふ事、仁愛深くましませば従ふ者は下郎まで。心がうにて別心なし奇妙、じざいの名將なれども天魔のしやうけ武功に誇り、不覺のほ最期せんかたなしされども恩愛連枝の中、源氏長久武家繁昌守りの神といははれ給へど、ことばをならへ語らるれば君も感涙まし、御座をたせ給ひける、伺候の大名耳をそばだてあつと、感じておはします時に梶原が郎黨番場の忠太國久、静御前を搦めとり、大汗になつてはせさんじ。此女義經の首を持ち土中にいたさんとせし處を搦め参つてい。きつと御詮議へと首もるごもに差上れば、一座の諸武士目と目を見合せとかうの、詞もなかりけり、景季進み出で我家來程ありけるよ、いしくも仕るものかな。さりながら合點ゆかすなふ重忠殿、貴殿あづかりにて此獄門にかけられしに静が持しは心得ず、但し義經は胸は一つに首二つの、生れぞこなひなりけるか詮議あれとぞ答めける。重忠應せず、能き所の御不審、義經まことの御首は某が静に與へ、此獄門は木にて作らせいと、云ひも敢ぬに梶原此首はにせも

四

のとや。一大事を致されし義經一味の逆心のがれはあらじ。いづれも油断あるべからずと眼をくばれば満座の大名、げにもつとも身づくろふ重忠かんらくと笑ひ、ヲ、ことごとくしなふ梶原、合點ゆかすばかりたつて聞せん、そも判官殿は頼朝公現在の御舎弟、ことに忠孝他にこえ君は愛者ふかけれども、天下の法はもだし難く獄門に梟らるゝ、獄門にもしなくあり知らずばよく覺えられよ。盜賊國賊等の首は面をさらしさふらひの首は名を晒さんが爲、源の義經と札を打てさらさんに、たとへば繪に書き木にざさむとも、三國に一人の判官殿何かうるんなるべきぞ、弓矢の達人古今の名將、源氏の冥加を尊み静にあたへて葬禮させしこと、末世につたへ頼朝公をほむるともそしりはせじ、その上我君只今實験の上とかうの詮議もなかりしは、君も其心入と相見えたり、此上にも重忠があやまりならば、すみやかに腹切んは介錯は梶原殿、さあ返答はいかゞと太刀に手をかけのたまへば、景季道理にことばなくア、重忠殿には似合す知慮千萬、先づ一旦申て見た計りは尤く、然らば首は兎も角も、其しづかこそ義經のおもひ人それまづ牢におしこめよ、うけたまはると引立つる重忠しばしとありけれども聞ぬ顔にて引く處に、秩父の家人本田の次郎末座よりおどり出で、番場の忠太が髻を執てあふのけに引倒し、おのれ動かば捻殺さんと源太がそばにむんすとすはり、是景季殿、静を搦めおけとは何事ぞ、元來静は白拍子身を賣る遊女の事なれば、義經に限らず契りし者は多かるべし、敵の買ふたる遊女とて穿鑿せば平家西國へ下りし時、江口神崎室頼なんどにてあるひは五夜三夜、ないし半年一年なれし遊女ことごとくは捕へぬぞ、エ、ことをかきし智恵無ども、科なき者も敵のゆかりと搦めとらば、水入すの兄御頼朝公をも搦むべきか、さあ静は本田が助けたり々つともいはは捻殺し、判官殿に手向んと膝の上ののりか、る、舟の荒きに梶原が、梶も取られずわぢく、わなくふるひく、ろろりくと立ければ本田とつ

五

と打笑ひ。重忠の御供し静御前の縛をとぎ。先に立て歸りしが梶原をおどさんと。又立歸り後より。わんといへばかつばと伏し。わつといへばごうと倒れ若黨共に手をひかれはよく宿所に歸りけるをかし。氣味よし心地よし。いよよかりし振舞やと人々。ごよめき立たまふ。

野二

事おさまつて世の中も。しづか御前は本田の次郎が介抱にて。重忠の北の方に預けいたわり給ひしが。爰に静の弟磯野四郎とて十九歳。此事聞つけ姉の迎ひに下りけり。静北の方の御前に弟をつれいで。此度自ら重忠様の御陰にて命をたすかり。其上しなぐのお世話すれがたなふひなり。もはや浮世もしづまれば都に上り。判官殿の御骨をいかなる寺へもおさめまゐらせ。妻も御菩提をといたくひ。折柄弟が迎ひに参りしこそさいはひなれ。御厚恩は生々世々忘れずせ。自らも墨の衣に身を染て。又も修行にくだりなば命の内に今一たび。御見参に入すさんはやお暇とありければ。北の方聞たまひ。いつまでも留申したうひへ共。故郷もさぞなゆかしからん。此上は兎も角もと旅のいとなみねんごろに。見立給へば静姉弟今の別も恨めしく。たがひにふみのおとづれを。松のとぼその明方に都の。空へと 三尊上らるゝ

ふりうり

丸寝する。かやの釣手に風絶て。夢もわが名も。しづかなる。しのめ深くながむれば。月はひがしの山の。端にもと見し影は。かはらねど。我ぞむかしの我ならぬ。女の身こそ果敢なれば。おとに見

のてす星月夜。星さへ戀があればこそ。年に一度のたのしみに。幾百代をかあだねせば。なふうきせごらへやあまの川。雲より雲に。横たはり。上なき思ひ在原の。中將なりしまめ男かのこ班と。詠じけん富士の。けじりも靡かばなびけ。我思ひには。及ぶまいぞやそよさら。甲斐の根風し一騒ぎ。田子のうらわの夕潮に波のうねくしげれば。釣せで歸るあま小舟。よせよく引寄よまた締よせて。昔人は思ひくの磯枕。ア、くうつゝいにも。別れし人にたよりあらば。我のみ胸をくるはすと。しごも涙の一筆をふみに。書くべき。神奈川や。悲しはづかしなつかしと。ことは多くて少なきは。たびの姿の信濃坂。白旗の宮ふしおがみ。源きよき谷川や。いちこの墓をしたひくる。岩はれ水を。せき。かけて賤がかさだに雨をいそげば樹々の。こすえを。そめわけに。淺黄小紋の帷子山。夜半の衣とかしはばし。鴨立澤に日は暮れてしばしやすめん。足柄山。關路の。犬も關守も我などがめそ。まちつまたる。人も持ぬにいなへや。しなへ藤枝の藤の。下風かせにもつる。黒髪のといて結べき友。もなし。うれたき道もいとせめて。すゑの世契れわが中に。比翼の鳥のはつねが原はや秋。ちかく。野はなまめきて蘭も。紐とく藤ばかま。桔梗がめめば。すゝきがまねくちよいと招く。氏はなけれど。しら露の玉の輿にや女郎花。我はさわへの眞菰草よしといはれふ。身でもないよの。君がお召の馬の秣にかれ。枯野のうづらの。友を呼ぶ。よぶ方いづこ。鳥の葉のつたなき。身にも宇津の山。はそ道なれご一筋の。心の戀に引當てしばしつらざる。わすれぐさ。忘れもやらぬ。おもかげは身に添ながら目に見えず。姿さかりもいたづらに誰にか見せてつくらんと櫛笄は取らねども。さすがに残す髪かたち。島田の。しゆくにぞ着きたまふ時しも水無月十日あまり草もゆるがすあつさ日なれば。弟の四郎くわくらんと云ふ病にて。にはかに五體を惱まし手足も冷て目を見つめ既に。今はと見えにける。静おごろき手足

を袖に押入れあたゝめたまへどしるしなし。げに思ひ付たりと守袋より薬包を取出し。是は一とせ義經大内より拜受有し奇妙奇態の御薬。只一粒残りたり水にては悪かりなん湯をもとめて用ふべしとそはなる庵に立寄り湯一つ所望とあれば。内より六十餘の老女立いで。なに旅人のくわくらんとや。薬のお湯はやすき事それにつき。妻が夫は小柴の郡司とて浪人者。夫婦かけひかひ田畑をつくりひが。夫の郡司先程畑より大霰亂におかされ頼難なふ見え。老人といひ妻がかなしさいか致さん。若し御薬のよけいあらばお慈悲に與へたべかしと手を合せてぞ歎きける。静ふびんにおぼせども病人は二人薬とは只一粒。返答に詮方なく弟の枕に立寄。くだんの次第を語り是とも見捨がたし。一粒の薬を御身二つにかみわりて半分彼に與へよとのたまへば。四郎頭を擧げ愚なり姉上様。小粒の丸薬二つに割て用ひなば。薬力五體に渡るべからず拙者は若き者といひ。殊に生死はさだまる事定業さへ來らずば本復致しひべし。たどひ死しても只一人彼者は老人とや。其上夫婦只二人夫が死してひは。老たる女よも命はひまじ。然れば二人死するに似たり老人を尊むは天の道と承はる。先其者に御與へひへといさぐるし氣にいひければ。ヲ、しほらしや其心佛神もあはれみたまひ。薬なくとも御身が病は本復せん頼母しう思へとて。庵に入て以前のお人はお薬と有ければ。女房悦びこれ郡司殿。旅人の結構なお薬を下された信を取てのみたまへと静も共にかいしやくし。口に入るれば妙なるかな。五體九ぢまら温まり心地すしくなりける。郡司悦びさてく命のおや扱おつれ様の御病氣はいか。此方へ入りて御養生遊ばせと三人つれておもてに出で引おこせば南無三寶。はや息絶えてことされたり是は夢かやまことかと。静は死骸に抱きつき聲も。惜ます泣きたまふ。夫婦も驚き呼びたすけ様々看病しけれども。つひに其甲斐なかりけり定め難なき人間の。露の命ぞ力なき。郡司夫婦涙を流し。同じ病氣同じ薬それがしにはさくな

から。かやうの體こそ心得ね何事も定まる業と諦め給へ。旅人は何國の何人。此上は某隨分御恩を報じ申べしと。ねんごろに云ひければしはし涙を押とめ。語るに就ても便なけれども。妻は判官殿に仕にし静とやす者。是は弟磯野四郎うさせをのがれ都へ上りひが。何をか隠し申べき彼には薬を用ひず。其故は薬は只一粒ならではなかりしを。は身達に望まれしにもだしがたくは思へども。病者は二人薬は一粒せんかたなきに一粒を。二つに割んと言ければなふ弟ながら恥かしき心底。老人と云ひ頼むとあるに我身をいたはる法やある。残らず與へ給ふべしとかへつて姉をはぢしめし。其一言が暇乞ひ其後は姉が顔。二目とも見せずさかりに足らぬ若者を先立て。自身永らへ何かせん定業ならば我がはらん非業ならばよみがへれと。口説立てく人目も。分かす泣給ふ目もあて。られぬ次第なり。郡司涙をばらくと流し。アツアしなしたり。全く某めが命に代り給ふ有難さよ。腹掻やぶり死出三途の供と存ずれども。必竟死しては爲にも無益のこと。それがし年はよつたれども倅に小柴の掃部勝重とて。都伏見の中納言殿に公家奉公してまかり在る。一事の力ともなりやさん其上此一在所。某かくこやなば馬與人夫滞ふらす。いづくへも送り参らせ何事もお心の本意をとげさせ奉らん。先は死骸を葬らんとおのが「庵にかさいれけりかゝる所に。番場の忠太國久は梶原が領分掛川の宿へ所用あつて下りしが。大井川の水高しと島田の宿へ歸りけるにはかに夕立しきりなれば忠太は馬上に傘ささせ。下人等雨をふせがんと郡司が庵にこみ入る處を郡司おもてに立塞がり。雨宿りお宿やたうひへども。只今家内に死人あり他へは越ひへと云ば是非に入んとせりあふたり。郡司聲をあげ是々馬上へやひ。右の仕合にひへば家内取みだしひ。は家來衆へ仰せつけられよと段々断りいひけれ共忠太ちつとも聞入す。我を誰かと思ふ梶原源太景季が家臣番場の忠太國久と云ものよ。死人あらば死骸を外へ引出し宿をせよとぞやける。静

忠太を一目見て、なふあれこそは、自を搦め捕たる嗚呼の者、あら怖やと逃出で給ふ忠太きつと見、それ静は参なれ討取れと馬より下りごつといふて駆込む處を郡司棒を押取のべ、ム、梶原が家來のげぢやそな、讒言云ひて世を渡ると侍の法は違ふべし、老人と思ひ負傷するな手並を見せんとをどり出れば、をちちの荒土民例の梶原他領へ入てかさつをさせば、一在所の名折れど山刀抜つれて、十餘人の百姓等三十五人にかげ合せおめき叫んで、三重防ぎけるさすが土民の事と云ひ大勢に切立られ、さつと引たる其際に忠太垣を破り、静の帯を引掴み宙に引提送て行く、郡司是を見南無三寶と掘切ひらりと飛越え隙間なく打掛れば、片手打にふせぎかね静を放せば、女房駈付肩に打かけ甲斐なく敷も落行ける、郡司今は心やすし思ふまゝに軍せんと、長刀取延べさし加ざし西より東へ割て通り、かゝれば進み進めば引、有かと思へば脱つくりつ、見えつ、隠れつまされあらはれ、秘術を盡してたゝかひしは飛鳥の所爲とぞ、三重見えにけるされども軍は、仕づかれたり老武者のかなしさは、次第に腕弱りはて忠太が重ねて打太刀を、二刀受はつし深手を負ふてよろばふ所をつゝと入て乗かゝり、むな元を刺通せば南無阿彌陀佛とばかりにて、六十八歳短夜のあへなき眠をあらはれる、忠太悦びホ、老爺殿、以前棒を振れしが今は命を棒に振る、さあ此上は静を追駈討留よと郎等共を五手にわけ、此處の田の畦彼處の畔わけいり駈出で捜せどもはや行方はなツかりけり、ヲ、よかんなり、女ばかり討分は、手の内目の前今の事一先休息せよとて、あたりの在家に込入て亂酒亂暴放逸無慘、たぐひ稀なる悪黨やと憎まぬ、者こそなかりけれ

第三

古郷へは錦を着て歸るといへる本文あり、今身の上にかへて乾かぬ袖は椎柴の、小柴掃部勝重は若年のむかしより、父郡司が家を出て都伏見の中納言實基卿にみやつかへ、今年既に二十八武藝は父祖の家業をついで、和歌の道文の道有職等にもくらからず、一器量有る男子なれども父の郡司浪人の後、何時本領にかへり花開くる運も来らねば、公家奉公に足やすめ天の時節を待つをりから、父の郡司は島田の宿にて、梶原が郎無に討れしと聞よりも、親の敵を狙はんと中納言家に暇や、枯野に残るは、ぞ原、老木の蔭のなつかしく島田の宿にぞ下りける、母はおもてに走りいでやれ掃部の助か、めづらしのわが子やと抱きついで泣たまふ、掃部も涙に聲いですや、むせ、返り泣居たり、母上涙をこいめ十五六年見ぬ中、器量骨柄よき侍やよき男や、父郡司殿ましまさばいくばく悦び給はん、母ばかりに逢ふ事はおことも本意なく思ふらめ、目付鼻筋父上にさもにたり、なつかしや戀しやと又さめ、ふと泣たまふ、共に涙はこぼるれど母に力をつげんと思ひ、ア、不覺のは落涙父上はな、静御前のため武士の義を立て討れ給へば、是侍たる身は後代の譽くやむべき道ならず、とかく某其忠太めを討取り、父の安執わが身の本望、末世までも親子の名あげんと存じ罷りくだりひ、なげく所にいはずとさま、教訓ありければ、歎きに沈む母上もヲ、父上の子にてある、頼母しの心やとよるこび給ふぞ道理なる、掃部重ねて我幼少にて奉公に出でし時、よし姫とやて五歳の妹ひひし、其後父よりのは文に縁付られしと承る、女ながらも一人の妹しらせぬもいか、婿は何とや何方にいと云へば、母はしばらく赤面し、まことに親子の中ながら問れて今の耻かしや、は身が妹はの、縁に付しといひやりしは偽りよ、浪人の朝夕にせまり道ならずとは思ひながら、なふ子を捨る敷はあれど身を捨る敷はなし、大磯の長がもとへ若界十年足掛二十年と定め、娘分の傾城に賣り渡し、父や妾が命をば其價にてつなぎしぞ、今の名は虎とかや親

ながら水くさく恨しう思ふらん。是も貧より起りし事せまじきものは浪人と語りも敢ず泣給ふ。掃部はつと思ひしが母に氣を落させじと。ヲ、浪人の有るならひよるしく計らひゆさんと恨を隠して居たりけり。静奥より立出て聞及びたる掃部殿か。もとこれ我より起りし事女なりとも自も。助太刀打たふひとあれば志祝着せり。さりながら老たる母を預けやはばくだいの思ならめと。互の詞こまやかに。首途の盃もりかはし又立。別れ三重出でにける。大幣の引手数多のうきよしや。なさせ賣里秋たけて。ころしも九月十三夜。月の名残の紋日ぞと。思はぬ人にも大磯の長者が門の夕色。其かす々々の遊君の朝な。夕なに色そめかはる。心のもみぢしげれと思ひ。くの忍ぶ山。たが編笠の黄昏に。禿は戀のつばみかや。ちらとさやく詞の花。心とまる景色なり。掃部の助勝重は驛路の駒にむち打て大磯に着けるが。大門より見渡せば戀商人のわけ里や。ゆきの女郎色つくす松に。端唄のしらべては風も。調子やかへぬらん。さぞやあの中にわが妹も有つらん。あれかこれかと涙ぐみ馬かたを近づけ。それがしは此里に一宿して慰まん。然るべき揚屋あらは案内せよとありければ馬かた悦び。いはひく。恵比壽の長とてお心やすき宿ありと。内にかけり長にかくとさやけば。夫婦悦び旅の大盡様かそれお迎ひと判間には。伽羅の傳吉下男前後をかこみ。やれお洗足お行水。おつれのないはわたまからしつぼり分の粹様ぞ。中二階の紙屑とれ先此方へともてなしける。夫婦持て出でお望みはひはぬか。今日は名におふ紋日にて至盛の女郎様にお暇は一人もひはず。柏屋の紅井様大文のわがてう様。川崎の大内様越後屋の喜様。此里の四天王今朝よりこれにひ入り貰ふてなりとも見ませふか。先かりまして立んとすれば掃部の助否。ひとの戀を奪ふとやら貰ふと云も氣の毒。此所にて聞及びし虎御前と云ふ女郎を呼ぶことはなるまいかとあれば。ア、まことに虎様はお暇ならん。ヤアさりながら此君

は深き男のひて。浮名廓にかくれなく外の邪魔とて内よりかたぐ堰ければ。女郎もすねたまひ今日のやうな大紋日も。内に格子の柱をかぞへ浮舟にておはします。外に戀ある女郎は一座もをかしからずとやせば。エ、亭主素人かな其戀しりが忝なし。少と身共等がしこなし見よはやく呼べとありければ。げに面白しそれ虎様生捕と。使が走れば禿が来りごつこいそりや間がぬける。是女郎様狩衣お腰をちよつと掛帯と。軽口もんさく花も咲心浮る。三重夕暮はあはれも増して。虎御前。系圖ある身も親兄弟の爲に沈み。し飛。鳥川。夜なくかはる。夢はいつはり。誠のうつし身にこたへ。つとめの外の戀衣ばつと立つ名におのづから。外の枕は袖に成り。一夜は呼べと二夜と呼ぶ客も。流れの。身はつらや心に染ぬ涙をもさあらぬ。體におしつみ宿の「座敷の」上座にぞなをらる。あるじ夫婦花珍らしきほ出で先あれへは通り。月を眺めと言ければ。すつと通つて立ながら。ほんにまるとい月の星様はひとりもなにと。詞あごなくいひすて。男見ぬ目のすんとせし。掃部つくく見るからにをさなく別れつる。風俗はのこらねまこと父母のおもさしにさもにたり。疑ひもなく我妹ふびんの者の有様や。口惜の身の果やと思へば苦しく胸痛く。思はず涙を流しける。亭主一座の氣をとりて。座敷淋しくいへばお盃は我等より。今宵の月に酒のむこと野暮とてな厭ひ給ひそと。すんとさせば虎も少し受流し掃部にこそは献にけれ。掃部盃取上げてうと受はうけたれども。これ兄妹の盃と知るか不憫さよと。思へば氣も消え目もくれて不覺の。涙を流しける。人々これはと怪しめば涙を押へ。ヲ、不審尤も世の中は是非もなし。承れば虎殿は深き戀の有と聞く。今宵のほ出でお心にそむまじきに。つとめは任せぬ身のならひうきふしなりといとしばく。しきりに涙がこぼる。他事になしてぞやける。詞に虎もはれと。まことに世の人は善悪の惡口に返りて浮名の種となり。は方様のやうに情らしいはひはず。せつなき戀